
大体三匹ぐらいが斬る!!

山田もとじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大体三匹ぐらいが斬る！！

【Nコード】

N5178L

【作者名】

山田もとじ

【あらすじ】

世界中に魔界への穴が開いてしまった現代に近い近未来を舞台に、暴走する天然ボケ、迷いのあるツッコミ、ゆるぎない自己中の三匹が、ぐだぐだ感満載、時々シリアスで送るファンタジーSF。

※PG12程度の内容が含まれます。

一話 鯖丸

騒音はとうに止んでいた。

暗闇の中で、子供は体を締め浅くゆっくりと呼吸した。

まるで、空気が無くなってしまふのを恐れる様に。

足音が近付いて来た。

何人もの、低重力に慣れていない人間の耳障りな足音。

子供は飛び起きて、闇の中で正確にエアロックの解除キーを押した。

スーツの腰に付いたハーネスを、壁のハンドルに固定し、空気が吸い出される時の耐衝撃姿勢を取った。

キーの隣で、赤いLEDがアラームと共に点滅した。

エアロックの解除はキャンセルされ、ドアが乱暴に開いた。

「ガキが1人だ」

吐き捨てる様な口調だった。

「俺たちを宇宙に放り出そうとしやがった」

恐ろしくて相手をまともに見られなかった。体がかくかく震えた。エアロックから引きずり出され、住み慣れたコロニーの中に戻された。

でも、見慣れた光景も、見慣れた人達も、そこには無かった。

人も物も破壊されて、無造作に折り重なっていた。

重装スーツごと廊下を引きずられながら、ああ、地球人は力持ちだなあ…と思った。

それより現実に近い事を考えたら、脳が壊れそうだった。

レスキューに救助されるまで、それから数日の記憶は今も無い。

NMCという会社の中四国支所は、小汚い雑居ビルの二階にあった。

Mがマジックの頭文字だという事は容易に想像が付いたが、Nが何の略なのかは分からなかった。CはたぶんカンパニーのCだろう。正規の旅行会社や貿易会社に取り扱わない様な雑事を生業にしているというウワサは聞いていた。

いわゆる魔界の便利屋だ。

どれくらい昔に魔界がこちら側へ開いたのか、正確な年代は、今も特定されていない。

おそらく二百年以上前だろうと言うのが、現在支持されている説だ。

今現在、魔界は地球上に1368箇所、月面に4箇所、その他の宇宙空間に12箇所確認されている。

もちろん数字は毎年変わる。

魔界というのは、異空間とこの世界が接触した場所に開く穴で、穴の周囲は向こう側の世界の法則が浸食し、こちら側の物理法則が少しねじ曲げられる。

穴の周囲では、ハイテク機器と呼ばれる物の大半が作動せず、光学装置も働かない。

人やその他の生き物が持つ概念が強くなり、肉体の変形や、魔法と呼べる様な力を発動する。

そんな危険な場所でのバイトに応募したのは、単に、ものつすぐおおく時給が高かったからだ。

特待生なので学費は免除されていた。

しかし、特待生なので、特待してくれている部活には、絶対参加しなければならない。

毎回全国大会まで行くので、その間に生活費を稼ぐ為のバイトは、休みが多くてクビになった。

唯一、事情を分かって親身になってくれていた全国チェーンの井物屋が、ある種の井に入れる動物の伝染病が元で潰れて以来、三度

のメシもまともに食べられない状況だった。

大体二食、そこで食っていたのだ。

家賃も払えず、ワンゲルの部室でシュラフにくるまって、何代前かの部長が置いて行った骨董品のブラウン管テレビを見つつ寝る毎日だ。

もちろんワンゲル：ワンダーフォーゲル部の部員ではない。

こういう体育会系のくせに文系くさい部には、特待生など居ない。この部に所属している友人に甘えただけだ。

実際には剣道部だった。

NMCのウェブサイトでは、とにかく能力さえ高ければ、高給優遇勤務時間も考慮すると書いてあった。

この場合の能力というのは、たぶん魔力の事だが、自分が魔法使いに適しているかどうか、今の所全く分からなかった。

中四国支所の所長は、眼鏡をかけた中年の女だった。

ボリュームの多い髪を、肩の後ろで太く短い三つ編みにして垂らしている。

「武藤玲司くん…」

履歴書の名前を読み上げた。

「学生さん…保護者の方は、居ないのね」

「居ないとマズイですか？」

事務所は、机とロッカーと荷物がごろごろしている場所だった。

病院と悪徳金融業者しか使わない様な、味も素っ気もない衝立で入り口近くを区切って、粗大ゴミ置き場から拾って来た様な応接セットを置いている。その、粗大ゴミに腰掛けて、武藤玲司は聞き返した。

「ううん、聞いてみただけ」

所長は投げやりに言って、肩をすくめた。

「面接。誰か空いてる？」

「あ、俺入ります」

衝立の陰から、ぬっと犬が出て来た。

と思ったのは一瞬で、コーヒーを飲みながら出て来たのは、犬系のハイブリットだった。

地方都市でも割とハイブリットは居るが、こんなに原型に近い個体は珍しかった。

がっちりした背の高い体に、犬っぽい頭部が乗っている。

体は、見える範囲では毛皮に覆われていた。

「お願い」

所長の仕事は、そこで済んでしまったらしかった。

「じゃあ面接行くけど、二十時間くらい空いてる？」

二時間と聞き間違えたのだろうかと思った。

「二十時間ですか？」

「うん、明日の朝くらいまで」

特に問題はなかったが、二十時間も何されるんだろうと不安になった。高給優遇の四文字で不安を打ち消した。

「はい、全然大丈夫です」

心にもない事を元氣よく言い切った。

犬っぽい男は、コーヒーをすすりながら、所長から受け取った履歴書と目の前の少年を見比べた。

「ええと…武藤君、大学生なんだ」

高校生かと思った…という言葉は飲み込んだらしかった。

「これから魔界に入る。面接のついでにちょっとした仕事を手伝ってもらいます。採用してもしなくても、今日の分のバイト代は出るから、ま、気楽にやってみてください。あ、僕はこういう者です」
名刺を渡された。

ジョナサン・T・ウィンチェスター

と、カタカナで書いてあった。肩書きは課長になっている。

これだけ原型に近いハイブリットだと、元々の人種は分らない。というか、些細な問題に思えるが、彼のしゃべる日本語には、全く訛りがなかった。名刺がカタカナ表記というのも謎だ。大体、何課

の課長なんだ。

突っ込みどころが多過ぎる。

黙って名刺を受け取った。

「じゃあ、移動するから付いて来て」

ロッカーからダッフルバッグを取り出して肩にかけ、ウインチェスター課長はドアを開けた。

武藤玲司は、おそろおそろ後に続いた。

魔界のゲートまでは、車で一時間程かかった。

途中の道筋で、昼時になったので定食屋に入った。

長距離トラックの運転手が利用する様な店で、何でも遠慮せずにご飯を注文して、自由に取るシステムになっている棚から、どんどんおかずを取って並べてくれた。

しばらく、まともな物を食べていないので、涙が出る程有難かった。

「で、名前何にする？」

突然聞かれて、武藤玲司はむせた。

「え：僕の名前は武藤玲司ですけど」

「俺の名前はジョン太」

ウインチェスター課長は、ハシを握ったまま真顔で言った。

「向こうに入ったら、絶対本当の名前で呼ぶな。魔力が高くて熟練度も高い奴なら、相手の本名を知っただけで殺せる」

むせそうになった。

魔界が治外法権で、中には物騒な場所もあるとは聞いていたが、生死に関わる様な話をされるとは思わなかった。

喉に入れた米粒が、胃まで落ちて行かない。

「あと、仕事中はタメ口な。上司とか年上とか、気にしないでいいから」

「はい、わかりま…」

怖い目で睨まれた。

コンビニや外食チェーンとは全然違う、とんでもない職場に応募してしまったのだと遅蒔きながら気が付いた。

でも、雇ってもらえれば時給は高い。ごはんだってこんなに食べさせてくれる。

武藤玲司は、意を決した。

しばらくうつむき、手元の皿を見つめた。

「分かった、ジョン太」

半分食べ終わった鯖のみそ煮から目を離し、顔を上げた。

喉に引っかかったごはんを、きっちり飲み込んでから言った。

「俺の名前は鯖丸。今後ともよろしく」

どっかのゲームに出てくる悪魔みたいな自己紹介を、ジョン太は苦笑いしながら聞いて、うなずいた。

ゆっくりメシを食った上に、コンビニで買い物なんかしていたので、ゲートに着いた頃には三時を過ぎていた。

おにぎりとうーロン茶とまるまるバナナを買ってもらったので、

武藤玲司：鯖丸はゴキゲンだった。

ジョン太は、可哀相な子供を見る目で、鯖丸をちらりと見た。

「あのさ…普段、ごはんとか、ちゃんと食べてる？」

「まあ、それなりに。パンの耳とか、農学部の畑からこっそりもらって来たキュウリとか」

しょっぱい話だ。こいつが採用になったら、とりあえず焼き肉でもおごってやろう。

舗装が無くなった道をしばらく進んで、車は止まった。

前方には、踏切と大差ないゲートが見える。

魔界の周囲は、申し訳程度にてっぺんに有刺鉄線を巻いたフェンスで仕切られていた。

フェンスがあるのは、道が通っているゲートの周囲だけで、あとは草木が茂るに任せている事、実際のゲート…というか境界は、も

う少し内側にある事、こんなゲートが、この魔界だけで東西南北に四カ所ある事、ゲートを通るには許可証が必要だという事。

どれも、事前に知っていた。

遊び半分で魔界に不法侵入している、いわゆる『プレイヤー』は、知り合いの学生にも何人か居た。

用心棒として一緒に来ないかと誘われた事もあったが、バレた時のダメージ（学費免除の打ち切りや、わずかながらだが受けている奨学金の停止など）は、報酬より大きかった。

魔界に入るのは、初めてだ。

ジョン太は、何枚かの書類を、ゲートの横に居る係員に差し出して、サインを貰っていた。

遮断機が上がり、車が走り出してから、ジョン太は言った。

「紙の書類じゃないと、ダメなんだ。魔界で正常に働く機械は、少ないからな」

ケータイを取り出して、メールを打ち始めた。

「ケータイ使えるの、ここまでだから、今の内に外と連絡取っとけよ。朝イチの講義があったら、代返頼むとか……さ」

「大丈夫です。どうせ皆、俺のケータイ止められてるの知ってるし」
ちらりと見たジョン太の打っているメールの文末が「愛してるよ、ハニー」とかいう、月並みな英文だったのは、見なかった事にした。
まあ、見なかった事になっているだろう。

余程の運が悪い劣性遺伝を抱えてなければ、ハイブリットの方が普通の人間より身体能力は高い。

自分が見えるかどうかぎりぎりの物は、普通の人間には見えないと判断するだろう。

ケータイも使えないのかよ……という、同情的な視線が帰ってきた。

境界は、目に見えた。

特に色や形がある訳ではない。

それでも、壁があるのが分かって、車が無造作に進み始めたので、

鯖丸は「あっ」と、声を上げた。

ジョン太はちらりとそれを確認してから、ハンドルを切った。ゲートと境界の間の土地には、いくつかの建物が無造作に配置されていて、たいがいは何かの会社名が表示されていた。

NMCと壁に書かれた倉庫に、車は横付けして止まった。

セキュリティーは高そうだが、電子機器は全く使っていない。職人芸な鍵が差し込まれ、シャッターが開いた。

照明は、呆れた事に白熱灯で、しかも手動スイッチだった。

倉庫の奥に歩いて行って、持ってきたダッフルバックの中身を出し、ジョン太は着替え始めた。

一分もしない内に、ハイブリットという以外は普通のサラリーマンの様な身形が、西部劇のガンマンに豹変した。

左右のガンベルトにねじ込まれている拳銃は、本物なのだろうか。プレイヤーの知り合いから聞いた話が本当なら、銃も本物のはずだった。

魔界では、外側の法律は機能しないし、それ以上に、外側のテクノロジーも機能しない。

素人でもある程度当てられる光学式の銃は、全く作動しない。

反動が大きくて、命中させるのが難しい火薬式の銃しか使えない上に、レーザーサイトも、自動照準機も、役に立たないのだ。

剣道の有段者だというだけで、鯖丸がプレイヤーの用心棒に誘われたのは、魔界では銃と刀が互角に戦えるからだった。

自分の身形を整えてから、ジョン太は鯖丸を振り返った。

「えーと、特に戦ってもらう予定とかないんだけど、用心の為に一応何か持つといってもらえる？」

倉庫の中には、色々な武器や備品があったが、銃が自分に扱えるとは思われなかった。

仮にも銃的な物を使ったのは、ゲーセンでゾンビを撃った時くらいだ。

「あの…竹刀とか」

自分が一番使い慣れている武器を口に出したが、ジョン太の本物っぽい拳銃を見て、もう少し破壊力のある物に言い直した。

「木刀とか…」

「ああ、観光地の焼き印とか入ってるやつ」

ジョン太は笑ってうなずいた。

倉庫の奥にある箱を開けて、何か長い物を取り出した。

鯖丸は、木刀を受け取ろうと、倉庫の奥に入った。

何だか分からないが、凶悪な匂いがした。

手の中に放り込まれた木刀は、絶対に木材の重量ではなかった。

「木刀はないけど、日本刀的なやつならあるから」

目の不自由なおっさんが、こんなのを振り回している時代劇を、見た記憶があった。

躊躇していると、気に入らないと勘違いしたジョン太が、別の刀を出して来た。

さっきの仕込み杖よりも、更に圧倒的にずしりと重かった。

黒光りする鞘、がちりした鍔、使い込まれた柄。

そっと、10センチ程鞘から抜いてみた刀身は、思ったより分厚くて、にぶく光っていた。

人をぶった斬る為の、バリバリの実用品だ。

剣道部の監督に、自宅で試し切りをさせてもらった事があったが、これに比べたら監督の刀は装飾品だった。

「お、目が高いね。それ、良い刀だよ」

横合いからジョン太が言った。

「所長が現場にいた頃使ってたやつだけど、日本刀ちゃんと扱える奴は少ないし、今は誰も使ってない。」

「ええっ、あのおばちゃんが？」

無愛想で地味な感じで、デスクワーク以外の事をしていた様には見えなかった。

「うん…本人の前でそういう風に呼ばない様にな。あの人、ああ見えてすごく怖いんだ」

ジョン太は二メートル近い長身で、骨格も筋肉もがっちりしていた。

原型に近いハイブリットなので、はっきりした年齢は分からないが、自分よりはだいぶ年上で、この仕事にはそれなりのキャリアもありそうだ。

それが怖いというのだから、本当に怖いだろう。

鯖丸はがくがくとうなずいた。

「それ、採用が決まったら、お前の専用にしちまってもいいよ。とりあえず、そのヒモ外すか？」

刀には、忍者の様に背中に下げる為のストラップが付いていた。普通の紐ではなく、肩に当たる部分は、ハニカム構造でメッシュの、幅があるベルトになっている。

下げてみると、少し短かったが、上下の紐で調節出来る様になっていた。

思ったより具合が良い。

昔のお侍と違って、着物も着ていないし、帯も巻いてない。ベルトもしていないし、肩から下げる方が合理的に思われた。

きっと所長もそう思っていたのだろう。

「いえ…このままで」

鯖丸は言った。

「採用になるかどうかは、自信ないけど」

ジョン太は、倉庫の一番奥にあるデスクの引き出しからファイルを取り出して開いた。

ここでは絶対口に出して呼ぶなど言われた本名を、日付と時刻の次書き込んで、その後に関文で三行程走り書きした。

拳銃二丁の型番と、弾丸の数だと分かった。クイックローダーという文字も見えた。

もちろん、クイックローダーが何なのか、鯖丸は知らなかった。「お前も書いて。名前の次に、改行してその刀の名称と管理番号」

番号は、鞘に小さなシールが貼ってあった。

刀の銘柄が分からなくて、あちこちひっくり返していたら、横からジョン太が言った。

「正国って書いとけ」

「本物なんですか」

敬語になってしまったが、ジョン太は特に注意しなかった。

「いや：レプリカだろ。戦国時代の実用刀が、こんないい状態で残ってたなら、うちの会社で買える訳ないし」

それはそうだ。

俗に同田貫というやつで、子連れ狼の拝一刀も愛用していたので有名だ。まあ、実在の人物じゃないけど。

名前を書き込んで、ファイルを閉じた。

「じゃあ行くか。仕事は、家出娘の回収。依頼者は父親。写真はこれ。顔、憶えて」

美人ではないが、それなりに魅力的で、何より特徴のある顔立ちの娘だったので、すぐに憶えられた。

写真はその場に置かれた。

持って行かないらしい。持っていたら何か不都合があるのかも知れない。

「名前は三田村朔美、十七才。以前から家出を繰り返していたが、一月前不正なルートでここに入った事が確認されている。

ドラッグの常習者が仲間に居て、本人もその可能性が高い。麻薬の：」

そこでジョン太は、少し変な表情をして、言葉を切った。

拳銃も扱える様だし、この人は麻薬常習者に何らかの思い入れがある、元警官とかだろうか：と、鯖丸は思った。

全然違うと知ったのは、もっと後からだった。

「中毒者は、普通の状態より魔力が高くなる傾向がある」

精神が病んだ者や、性癖がねじ曲がった者の方が、魔力が高い傾向にあるという事実は、一般にも知られていた。

逆に、あまりにも心が健全な者は、魔界に入ると正気を保てないという俗説もあった。

鯖丸がこの仕事に応募した、収入の高さ以外の理由は、それだった。

たぶん、ジョン太には普通の貧乏学生に見えるはずだけど：そうだと願いたいけど。

自分より病んでいる奴は、今まで見かけなかった。

もしかしたら、割と魔力とか言うやつが高い可能性があるんじゃないだろうか。

「確保は俺がやるし、こいつの匂いも憶えてる。犬の半分くらいの嗅覚はあるし、捜し出すのも困難じゃない」

もちろん、むつかしい仕事だったら、バイトの面接なんかには使われないだろう。

「ただ、俺は全く魔法が使えないんだ」

少し驚いた。

魔力の高い低いや、技の熟練度の差はあったが、魔界に入ればたいていの人間は、軽微な魔法くらい使えたからだ。

ごくまれに、魔力が異常に低い人間も居ると聞いていた。

別に、魔界以外では何の不自由もないし、魔界では自分が使えない代わりに魔法があまり効かないというメリットもある。

「俺が気が付いてないのに、明らかにおかしいと思った状況になったら報せてくれ。それがお前の仕事だ」

鯖丸は、うん、分かったとうなずいた。

魔界は思ったより広がった。

直径は十キロ近くで、半島の突端に位置している為、三割程は海が占めていたが、それでもかなりの面積がある。

魔界が出現するまでは港町だった場所は、今でも都市として機能していた。

周囲には、昔ののどかな田園風景と、山野が広がっていた。

もっと恐ろしい場所を想像していた鯖丸は、拍子抜けした。

唯一怖かったのは、ジョン太が何のためらいもなく境界に車ごと突っ込んだ時だった。

慣れているとかではなく、明らかに境界が見えていないらしい。ゆるいゼリーの中を通る様な抵抗感があって、周囲の空間にモアレがかかるのが見えた。

「人によっては、けっこう綺麗だとか言うんだけどね」

自分では見えないのを残念がっている口調で言って、車のオーディオに、見た事のない四角いプラスチックを差し込んだ。

昔のハードロックが、爆音で流れ始めた。鯖丸は耳を塞いだ。

「KISSのデトロイトロックシティ。デジタルリマスターじゃないでレコード音源なんだぜ、いいだろ」

何が良いのか全然分からない。ただ、カセットテープというのを生まれて初めて見た。骨董品だ。

そう言えば魔界では光学ディスクは再生出来ないと聞いた事があった。

夕暮れが近付いていたが、空はまだ青く、空気は爽やかだった。

魔界が出現するまでは、国道として使われていた昔のアスファルト道路を、車は疾走した。

路面はぼこぼこに荒れていたが、まだまだ現役の道として機能していて、良く分からない動物が引く荷車を追い越した。

魔法で変形された動物や、勝手に自分で変化した生き物は沢山居るとジョン太は説明した。

暗くなる前に、街の手前に着いた。

車をその辺の藪に無造作に突っ込んで隠し、二人は魔界のメインストリートに入った。

電気ではない灯りが点っていた。

明らかに人ではない外見の者も混じった人混みを、ジョン太は迷わず歩いていた。

獣人もかなり居る。

ハイブリットではなく、魔法整形者だ。普通に見える人間も、もちろん外観をいじっている可能性はあった。

「魔力がすごく高い奴は、意識しなくてもここに入っただけで外見変わる事もあるし：な」

ジョン太は説明した。

鯖丸は、自分の外観を、見える範囲で点検した。いつも通りだ。すぐく魔力が高い可能性は、少なくとも減少したが、内心ほっとしてもいた。

自分が抱えている心的トラブルが、外見に反映した姿は、見たくなかったし、見せたくもなかった。

ジョン太は、見た目は怖い、いい人に思われた。

こういう人には、特に見せたくない。

街並みは、徐々にメインストリートから離れて、いかがわしい雰囲気になって来た。

建物の角ごとに立っている、けばい化粧の女達が何か分からない程には、子供ではない。外でもこういう所は、けっこうやばい場所だ。

女達の何人かは知り合いらしく、向こうからジョン太の名前を呼んで来た。

「なにー、その子新しい相棒？」

三人組の女が声をかけて来た。

それぞれ、違う動物の皮で出来たコートを着て、それに似合った外観に、自分を変えている。

「かわいいー」

「ねえ、時間あったら、遊んでく？」

「悪いけど、今日は時間ねえんだ」

ジョン太は断った。

「一月前、ここに来た外界の女を捜してる。たぶんジャンキーで、プレイヤーと連んでる奴」

女達はくすくす笑った。

多いもんね、そんな奴…というささやきが聞こえた。

「カシマの店に行ってみたら？ 一月前に新入りが来てるし」

三人は、手を取り合って更に笑った。

「それで相棒にデジタルジャンキー連れて来たのお。ウケるう」

「おねーさん達、デジタルよりもっといいドラッグ、紹介するよお」

「一晩中、勃ちっぱなしだよお」

ジョン太は、怖い目で三人を睨んだ。

中の一人が小さい声でごめんと行って、三人は街角で通常業務に戻った。

ジョン太、ドラッグには厳しいんだったよ、忘れてたけど…という会話が聞こえた。

ジョン太は振り返って、自分の首筋を手の平で押さえた鯖丸が、後ずさるのを見た。

「いや…別に」

ジョン太は声をかけたが、鯖丸はもう一步下がった。

「あの…こういうの、最初に言っとかないのは…でも…」

家出娘を捜しに来たのに、もうちょっとでこいつが人混みの中に逃げそうだ。

でも、気持ちは分からないでもない。

似合いもしないくせに、中途半端に肩まで髪を伸ばしているのも、時々不思議な動作をするのも、理由は見当が付いていたが、気が付かないふりをしていた。異端なのはけっこう辛い事だ。良く知っている。

「そのプラグいいよな。俺も着けたかったんだけど」

鯖丸は、えっ？ という顔で止まった。

「ハイブリットの身体改造は、普通人よりむつかしくてさ」

何で、採用も決まってるじゃないバイト候補にそんな話までしてしまうのか、自分でも不思議だったが、ジョン太は言った。

「船外作業用重装宇宙服のジャックインプラグだろ。知ってるよ、

上に居た事あるし」

安堵のため息に似た物と一緒に、鯖丸は肩を落とした。

着ぐるみのロボットと呼べそうな重装宇宙服を的確に操作する為に、脳と宇宙服を直結するインターフェイス埋め込み手術は、地球外の住人の間では、めずらしくはなかった。

信じられない程良く鍛えているが、鯖丸の動作や身体的特徴は、明らかに低重力で生まれ育った物だった。

成長期が終わる前に地球に戻ったとしても、大変な治療とリハビリが必要だったはずだ。

更にたちが悪い事に、宇宙服のインターフェイスと、ある種の性的な電腦ソフトやデジタルドラッグに接続する為のソケットは、素人には見分けが付かなかった。

のんきなガキに見えるが、そうとうひどい目に遭って来ているはずだ。

「そんな事…」

「詮索されたくないなら、聞かないさ。俺だって、話したくない事は山程あるし」

鯖丸は、少し黙り込んでから言った。

「ジョン太は、良い人だね」

ジョン太の毛皮の表面が、ぶわっと逆立ってから、元に戻った。喜んでいいのか嫌がっているのかさえも、全然分からなかった。

カシマの店は、奥まった場所にあった。

崩れかけた昔の雑居ビルを骨組みに、迷路の様に建て増しと補強が繰り返された薄暗い建物が並んでいる。

さっきの街角が、上品に見える様な場所だ。

こんな所には、外からの観光客は絶対来ない。

魔界で暮らしている地元の人間だって来ないだろう。

複雑な階段を登って、ドアを開けると、煙草の煙と、煙草じゃない何かの煙と、その他何だか分からない匂いが一気に流れ出して来

た。

鯖丸は少しむせたが、ジョン太は平気な顔でずかずかと店の奥へ入って行った。

絶対、自分より嗅覚が鋭いはずなのに、平気なんだろうか…。

案内されたテーブル席に、頭と背中に羽毛の生えた男が注文を取りに来た。

「梅昆布茶」

ジョン太は真顔で言い切った。

「ねえよ、そんなもん。ミルクでも飲んどくか、ああ」

ジョン太が言ったのに、鯖丸の方にヤンキー風のメンチを切っている。

「何でもいいや、それとビール」

あつという間にテトラパックの牛乳と缶ビールが二人の前に置かれた。

鯖丸が手を伸ばす前に、ジョン太はテトラパックを手に取り、ストローをぶっさしてちゅるちゅるすすった。

「お前は飲んでいいぞ」

ジョン太は小声で言った。

「一応あと何ヶ月かは未成年なんだけどなあ…」

もちろん建前だ。ただ酒ならいくらでも飲める。

牛乳もビールも、外のスーパーで普通に見る品物だった。

「誰か指名ある？」

羽の生えたヤンキーがたずねた。

「えーと、名前は聞いてないんだけど」

ジョン太は少し考えるふりをした。

「一ヶ月くらい前に来た娘で、なんかこう、ぽっちゃりしてて鼻が上向きで、髪の毛がくるくるつとした…」

更に付け加えた。

「指名するって、約束しちゃったんだけど…いいかな」

ヤンキーはうなずいて、店の奥に声をかけた。

「おい、さっちゃん、御指名だよ」

はい…と、奥から声が聞こえた。

「ここって、キャバクラ的なあれですか」

ジョン太は、首を横に振った。

「それ、キャバクラ関係者が聞いたら泣くぞ。もっとひどい所だよ」
奥から女が出て来た。

片手を上げて「はい」と挨拶して笑ったが、明らかに足元がよろよろだ。

写真で見た女の面影はあった。たぶん、本人だろう。

全然ぼっちゃりしていない。

やせこけて、暗がりでも老け込んで見えた。

「指名、ありがと。すぐ、奥行くう？どっちが指名してくれたの？
それとも二人で？」

ジョン太は急に、体一つ分空けていた鯖丸の隣ににじり寄って座り直し、手を握った。

「実は俺ら、関西の方の穴でパートナーやってたんだけど、何か煮詰まっちゃって」

プレイヤーや、その他頻繁に魔界に出入りする外の人間は、魔界を俗語で『穴』と呼ぶ。

本当に最深部には穴があるのだが、観光や一時滞在の仕事で立ち寄る人間は、そういう呼び方をしない。

「何か新しい展開が必要かな…って」

「ああ、分かる分かる。それで、どっちかとしてるとこ、見せたらいいの？それとも二人で？」

「ううん、俺らがしてるってこ、見てくれ。そんで、こいつがええ感じになって来たら、お前も参加して欲しいんだけど」

「わあ、面白そう」

明らかに、何かの薬品臭い息を吐きながら、女は言った。

そうか、いやに時給が高いと思ったけど、そういう事か…。どうしよう…ジョン太は嫌いじゃないけど。

店の奥にあるドアをくぐりながら、ぐるぐると考えを巡らせていた鯖丸は、ふいに肘で小突かれた。

「おい」

耳元に、ジョン太の鼻面が寄せられた。

本物の犬と同じで、少し湿っていてくすぐったい。

「廊下の突き当たりに、扉が見えるな」

鯖丸はうなずいた。

「あれ破って外へ出たら、一気に車まで走る。遅れずに付いて来い」
良かった、お芝居なんだ。まあ、そりゃそうだ。でも、びっくりした。

色々な考えがぐるぐる回っていたので、気が付くのが一瞬遅れた。
本来女が案内するはずだった部屋：廊下に面したいくつかの扉の一つが、開いていた。

ほんの数センチだった。

魔界の外だったら、絶対に気が付かないはずだった。

ドアの内側から、何かがドーム状にぐわっと漏れ出していた。

歪んだ空気が、濃厚な香りと、微細だがしつこい振動と、奇妙な感覚を垂れ流している。

二歩進んだ時、腐った様な生暖かい風が、ほんの少し吹いた。

体中が嫌な予感で堅くなって、鯖丸は止まった。

「ジョン太…」

ジョン太は、こちらを向いた。

この異変を、絶対に関知していないと確信した。

「何か、変だ」

「そうか」

ジョン太の反応は、異常に早かった。

答え終わった時にはもう、クツションを扱うより軽々と女を自分の肩に担ぎ上げ走り出し、同時に拳銃を抜きながら振り返り、鯖丸の目線の先にあるドアに、続け様に三発撃ち込んだ。

非常口と書いた、くさりかけたプラスチック片がぶら下がったド

アが蹴り破られるまで、一秒もかからなかった。

呆然としていた鯖丸は、背後からの圧迫感が更に大きくなり、我に返った。

ジョン太の後を追って、非常口の外へ駆け出した。

「あ…」

非常口だから当然あるはずの非常階段が無かった。足が空中を泳いだ。

「うわ、バカ、お前」

不思議な事にジョン太は普通に十メートルくらい下の地面に立っていて、鯖丸を受け止めようと女を下に降ろして両手を差し出した。いくら屈強な大男でも、それは無理だろう。

鯖丸だって、東洋人としては背が高い部類に入る。それなりに筋肉も付いているので、見た目より体重もある。

しかし、ジョン太の顔は、明らかにそれが出来ると確信している風だった。

力を抜いてそのまま落ちろという風な事を、早口の英語で叫び始めるのが分かった。

でも、セリフが終わる頃には、地面に落ちているだろう。

鯖丸が生まれ育った低重力環境では、十メートルの落下くらい、何でもなかった。だから不思議と、恐怖感は無かった。

でも、1Gで落ちたら、死ぬんだろうか、怪我で済むんだろうか。体がふわりと浮いている自由落下の状態は、心地よかった。

そして、落下の為に周囲を吹きすさんでいた空気の流れが、ふいに止まった。

ジョン太はあんぐりと口を開けて、自分の目の高さに浮かんでいる鯖丸を見た。

いや…何か紙の様に軽い物を受け止めた感触はあった。

重さがほとんど無い。手を放すと、ふわりと宙に浮いた。

「ジョン太」

浮いたまま、鯖丸は言った。

「さっちゃんが逃げる」

「ああ」

ふらふらと立ち去りかけていた女を、ジョン太はがちり捕まえ直した。

鯖丸は周囲の状態を一瞥し、くるりと体をひねって、地面に足を着けた。

宇宙空間で働いている地球生まれの人間なら、泣いて悔しがる様な動きだった。

地面に足が届いた瞬間、重力が戻ったらしく、鯖丸は不快そうに顔をしかめた。

「お客さああん」

ふいに、上空から声がした。

「お店の娘を勝手に連れ出されちゃ、困るんですけどお」

「あつ、まー君」

女は、ジョン太に担がれたまま、手を振った。

さっき部屋から漏れ出していた変な空気は、こいつだという事はすぐ分かった。

あの変な空気と振動が、男の周りを取り巻いていたからだ。

「返してもらえますかねえ」

ジョン太は迷わず発砲したが、弾丸は男の体までは届かなかった。

「ちっ、思ったより魔力高いな。ショットガンにすれば良かった」

言いながら、反対側のガンベルトから一回り大きい銃を引き抜き、撃ち込んだ。

どうしてそんな物が見えるのか分からなかったが、三発撃ち出された弾丸が、全く同じ軌跡を描き、男の周囲に回らされた空間に次々と衝突するのが分かった。

一発目ははじき返されたが、二発目は確実に空間をえぐり、三発目が男の肩を打ち抜いた。

「くそっ、てめえ。魔力低いくせに、上手い事使いやがって」

男は、肩を押さえて怒鳴った。

「魔法じゃなくて名人芸なんだけどなあ…」

しゃべりながらばらばらと葉莢を地面に落とし、クイックローダーが空になった一丁目の銃に、一瞬で六連発リボルバーの弾丸を装填した。

ああ、そうやって使うのかと鯖丸は納得した。

最近リボルバーの拳銃なんて、アクション映画でもほとんど見ない。

「一応説明するけど、この女の両親から搜索願が出てる。お前、外へ出たら1ダースくらいの罪状突きつけられて逮捕されるぞ」

「違うの、まー君は悪くないのお。あたしが勝手に好きになったのお」

「うわああ、こいつバカだ」

心底嫌そうにジョン太はぼやいた。

「よし、安全確保」

女のみぞおちに軽く拳をたたき込んで気絶させた。

「わあ、ジョン太鬼畜」

鯖丸はつぶやいた。

「うん、俺でもそれはしないな」

まー君にまで非難された。

ジョン太は平気だった。心が強いタイプだ。

「逃げるぞ」

走り出そうとした二人の前に、爆風が襲いかかった。

まー君は、ゆっくりと空中を下りてきた。

いつの間にか囲まれていた。

三人くらい居る。

いつの間にかと思ったのは自分だけらしく、ジョン太は周囲の気配に神経を張り巡らせて対応していた。

この人は一体何なのだろうと思った。

そして、自分はなぜ、あんな事が出来たのだとも思った。

「こいつら、どうします」

三人はまー君の手下らしい。それぞれ、怖い形に自分を整形している。

まー君が一番普通だった。

細身の体にだらりとした服を着て、シルバーのアクセサリーを二つ三つ付けて、顎にだけ短くひげを生やしている。すごく良く居るタイプだ。

「殺っちゃっていいよ。女は殺すな」

「捜査官だったら、後で面倒な事にならないか？」

鬼に似ている男が言った。

「別にいいだろ。たぶん民間だし」

まー君は、くると鯖丸の方を向いた。

「こいつからやろう。魔力が高くて、面倒くさそうだから」
片手を上げて、口の中でぼそぼそと何か呪文の様なものをつぶやいた。

空気が振動し始めた。

嫌な音を立てて、周囲の空間がぐしゃりと歪んだ。

重い。

がくりと膝が下がった。刀が肩に食い込んだ。動けない。

落ち着け。地球に来た頃はこんなだったろ。がんばれば動けるはずだ。

歯を食いしばって体を伸ばす間もなく、見えない手がずしりと重みを増した。

重力に引っ張られているのではない、上から押さえつけられているのだ。

鱗のある男が、アーミーナイフを持って、近付いて来た。

不自然な姿勢で、頭の上にナイフをかざして、こちらを狙っている。

たぶん、この魔法が効いている範囲内は、何もかも重くなるのだ。正面から刺しても当たらないのだろう。

一撃目は、自分から倒れれば避けられる。でも、その後は…起き

上がれないまま、やられ放題だ。

「くそっ」

鯖丸の周囲で、空気が渦を巻いた。

見えない空間が、少し震えた。

「こいつ、押し返すぞ。早く…」

まー君が叫んだ。

鱗男がナイフを振り下ろした。

次の瞬間、普通につかつか歩み寄ったジョン太が、鱗男をぶん殴った。

喉の奥から変な音を出しながら、鱗男はぐるんと一回転して地面に叩き付けられ、ワンバウンドして倒れた。

今まで大人しくしていた猫に似た男が、跳躍して襲いかかった。破壊力のありそうな太くて長い、湾曲した爪が空を切った。

ジョン太は、猫男を見もしないで、後ろ回し蹴りを繰り返した。

猫男はぎゃっと叫んで五メートルほど吹っ飛んだ。

鯖丸とまー君は、立場は違うが同じ様な表情で、ぽかんと口を開けた。

しかし、ジョン太が無造作に魔法空間に片手を突っ込み、鯖丸のズボンを腰の所で掴むのを見て、顔色を変えた。

「待て、それは無理。絶対無理だから」

まー君が止めた。

ジョン太は、鯖丸を少し引っ張ってから、ちよっただけ表情を変えた。

それから、少し腰を落とし「ふん」とか声をかけて鯖丸を空間から引きずり出した。

「すごいな、お前」

明らかに、軽く引っ張り出せると信じていた口調で、ジョン太はまー君に言った。

「どっちがだ」

さっちゃんを担いだまま、鯖丸を片手でぶら下げて持っているジ

ヨン太に、まー君は怒鳴った。

「そいつが俺の境界内で、何百キロあったと思ってるんだ」

「二百五十キロくらいだろ」

ジョン太は割合的確な数字を言った。

「オジサンはねえ、お仕事でここに来てる訳なの。お前らみたいなガキといい勝負してる様じゃ、そもそも仕事にならないだろ」

振り返って、にやりと笑った。

「大体、こんなチンケな仕事で、残業なんか出来るか。もう帰る。

邪魔したら殺すぞ」

何も挑発しなくてもいいのに：と、ぶら下げられたまま鯖丸は思った。

俺の方が戦力の要だと思って狙われたのが、気に障ったんだろうか。

狙われない方がいいに決まってるのに、そうだとしたら、割と大げな人だ。

まー君は、しばらくの間、黙って立っていた。

「もういい」

うつむいたまま、つぶやいた。

「お前、そいつを押さえてれば、攻撃出来ないと思ってんだろ。もういいよ、女なんて、他にも居るからな」

まー君の体の周囲に、あの、変な空間が無数に浮かんだ。

一つ一つは小さい。

しかし、性質は同じで、震えながら命令を待っている。

「ダメだまー君。無茶するな」

止めに入った鬼に似た男は、一にらみされて後ろに下がった。

「行け」

合図と共に小さな空間が無数に襲いかかった。

ジョン太は待ってはいなかった。

二人の人間を抱えたまま、横っ飛びに吹っ飛んで攻撃をかわした。空気の固まりが、派手な音を立てて地面や壁をえぐった。

二度目もかわせた。たぶん、避けられるから舐めた態度を取れるのだろう。

わざとまー君を怒らせている様にも見える。

「ジョン太…」

ぶら下げられたまま、鯖丸は言った。

「降ろして。俺持ってたら、銃が使えない」

怒らせた方が、攻撃が的確でなくなる。そういう事かも知れない。確かに、安全に逃げ切る自信はあるのだろうか…。

ジョン太は、ちらりとこつちを見た。

「それと、あれ、俺にも出来るかも」

まー君の方を指さした。

「そうか」

ジョン太は、物陰で止まって、鯖丸を降ろした。

次の瞬間にはもう、空いた腕に銃を持っていた。

「無理はするなよ」

心配そうな表情で言った。

今まで、あまり心配してくれる人は居ない人生だったので、何だか嬉しくなった。

「一応、保険は入ってるけど、ただの面接だからな。怪我をした時の保証限度額は…」

ややこしい事を言い始めたので、嬉しさは急激に冷めた。

「やってみる」

まー君の居る方を、物陰から確認して、刀を抜いた。

鯖丸の周囲で、足元から頭の先まで、空気の流れが螺旋を描いた。刀の切っ先に集める方法が分からない。

まー君が、空間を撃ち出していた時の空気の流れを思い描いた。

「ええと、こうやって…」

周囲を渦巻いていた空気が、めちゃくちゃな乱気流になって、しかしじわじわと刀身に集まっていた。

さすがにジョン太にも見えるらしく、さっちゃんを背後にかばっ

て、少し後ずさった。

「ちょっと待て」

さっちゃんを地面に寝かせて、両手に銃を持った。

「そのまま表に出たらヤバイ。援護するから、俺が撃ったら…」

「大丈夫」

乱気流に振り回されていた両手が、ぴたりと止まっていた。

「ここからいける」

上段に構えた剣を、一拍置いて振り下ろした。

さすがに剣道をやっているだけあって、綺麗な型だ。

繰り出された空気は、螺旋を描きながら曲線に飛んだ。

銃を構え飛び出すと、後ろに吹き飛ばされるまー君と鬼が見えた。動いてはいるが、しばらく起き上がって来ないだろう。

「よし、今の内に逃げよう」

ジョン太はさっちゃんを拾い上げた。

鯖丸は、背中から降ろした鞆に、もたもたした動作で刀を収めてから、うなずいた。

帰り道では二人とも無言だった。

ジョン太は何か考え込んでいる様子で、鯖丸は、自分がでしゃばった真似をし過ぎて、結局二人を危険な目に遭わせたのかも知れないと、延々と後悔していた。

意識を取り戻したさっちゃんだけが、後部シートに括り付けられたまま、文句を言い続けていた。

「まー君に何かあったら、あんた達許さないからね。まー君はいっぱい仲間が居るんだから。あんた達なんかもう、魔界で大きな顔して歩けないよ。ぼこぼこにされるんだから。殺されるかもね。まー君は…」

「ああ、もう一回殴って黙らせてえ」

ハンドルに頭を押しつけて、ジョン太はうなった。

ジョン太の機嫌が悪い理由が、さっちゃんらしい事に、鯖丸は気

が付いた。

「よし、こいつ殴ろう」

本気らしく、道端に車を止めた。

「ダメだジョン太。一応お客さんの子供なのに」

何で、バイトどころか面接段階の自分が止める側なんだろうと、
鯖丸はぼんやり思った。

「それに、本当に子供だし」

「あんただってガキじゃん。偉そうに」

自由になる足で、シートの背もたれをがつつ蹴って来た。

「俺は、もうすぐ二十歳だ。子供じゃない」

「えっ、そんな顔でまー君より年上？うそっ。大体何？そのだっさい服。オタクだろお前。童顔の上に童貞だな、キモっ、死ね」

「この服はね、フリマで上下たった三百円という、すばらしいコストパフォーマンスを秘めているんだよ」

鯖丸は説明した。

襟ぐりがわかめの様によれよになったTシャツと、ブランドの不明な、ビンテージではなく、ただ単にマジで使い古されただけのジーンズだが、三百円は確かに画期的だ。

持ち主的には、捨てたかった品に違いない。

「ジョン太」

鯖丸は、にっこり笑った。

出会って以来、一番いい笑顔だ。

「こいつ、記憶がなくなるくらい殴ろう。そして、オヤジには、まー君がやったって報告しよう」

「待て、お前、温厚な青少年じゃなかったのか。何が気に障ったんだ。童顔か、オタクか、童貞か」

「ぎゃははは。バカ二人が仲間割れかよ。ウケる」

笑い転げていたさっちゃんは、突然泣きわめき始めた。

「いやだ、家に帰るのいやだ。まー君と一緒にの方がずっといいよ。帰るの嫌だー、嫌だよう」

ジョン太は、肩をすくめて車をスタートさせた。

「帰る所があるくせに、贅沢言うなよ」

鯖丸は小さい声でつぶやいた。

そんなこんながあったくせに、帰って来たのはきっかり二十時間以内だった。

会社の倉庫に武器や備品を返却し、ファイルに時刻とサインを入れて、ゲートに向かって走った。

刀と違ってジョン太の銃には消耗品が含まれている為、減った分の数量を申請して、新しく在庫を増やしてもらう手続きが必要だった。

ゲートからさっちゃんを連れ出す時にも、一連の手続きが必要だった。

お前にも、後で憶えてもらうからと、ジョン太は言った。

「はい」

それは、採用という事なんだろうか。

来た時と同じ定食屋で、朝飯を食った。

メニューは朝食向けの物に変わっていたが、ごはんはお代わり自由と書いてあったので、三杯食った。

さっちゃんは、すっかり大人しくなって、借りてきた猫の様に黙って座っていたが、何も食べなかった。

お茶だけをごくごく飲んでいた。

トイレに行くと言って、席を外した時に、ジョン太が話した。

「あの娘はたぶん、帰ったら麻薬中毒患者の更正施設に入れられる。たいがい立直れるよ」

鯖丸は、眉をひそめた。

「いちいち気にしたらしんどいぞ。これからもある事だし」

話しながら、メシを食いながら、片手でメールを打っていたジョン太は、顔を上げた。

「今、所長から連絡が入った。お前、合格だ」

箸を置いて、右手を差し出した。

「よろしくな」

「はい」

これで学校を辞めなくて済む。

毎日ご飯も食べられるし、お金が貯まったら、部屋を借りて普通に暮らせる。

鯖丸は涙ぐんだ。

突然、トイレの方からおばちゃんのひゃあっという悲鳴が聞こえた。

「女の子が窓に挟まってるよ」

「さっちゃん？」

鯖丸とジョン太は、顔を見合わせた。

「窓から逃げようとしたの？」

鯖丸は聞いた。

「だろうけど、ここの便所は、子供でも出られないくらい、窓が小さいんだ」

知っていたから、一人でトイレに行かせたらしい。

「ただ、女子トイレに入るのは、厳しいよなあ」

「うん」

二人は、顔を見合わせた。

「こういうのは、バイトの仕事だな。武藤君、後よろしく」

「新人のバイトには手に余る仕事ですね。課長にお任せします」

二人はにらみ合った。

程なくさっちゃんは、先ほどのおばちゃんに手を引かれて、めそめそしながら戻って来た。

「あんた達ひどいね」

見知らぬおばちゃんは、二人に言った。

バイトだからと軽く考えていたが、その後の手続きは割とややこしかった。

山の様な契約書と保険の利用規約に目を通し、サインし、魔界へのパスをもらった。

自動車の普通免許と、自動二輪の免許を取る様に所長に命じられ、教習所へ通い始めた。

単なるバイトなのに、会社持ちで免許を取れるのは有難かったが、お金が貯まったら取りたかったオートマ限定免許ではなく、今時マニアしか欲しがらないマニュアル免許なのは良かった。

車やバイクの好きな者なら楽しいだろうが、どちらも特に興味はなかったからだ。

魔力の測定のために、仕事でもないのに一日魔界に呼び出されたのが、一番堪えた。

測定自体はそれほど苦痛でもなかったのだが、検査官が途中から顔色を変えて、外へ出て行き、また戻って来る事を繰り返し始めた。自分の魔力が異様に高い事を報され、ここまで魔力の高い人間は、測定された時点で公的機関に登録されると言われた。

嫌な感じだったが、付き添ってくれたジョン太は、心配するなど肩をたたいた。

「別に、魔界で重大な犯罪でも犯さない限り、勲章みたいなもんだ。もらっとけ」

「Aクラス以上は、誰でも登録されるんだよ」

検査官は説明した。

「君の様なSランクは、多くない。国内では二十人以下だ」

熟練度が上がったら、政府公認魔導士になる事も考えてみてくれと言って、検査官は去った。

そんな将来設計は、予定外だった。

その後、さっちゃんとう会う事は、二度と無かった。

意外な事に、まー君とはすぐに再会した。

面接の時にもらったバイト代で、何か美味しい物を食べようと、コンビニへ行ったのだ。

「ああ、コンビニ弁当を食べられる幸せ……」

幸せのレベルが低過ぎて涙を誘うが、本人は気が付いていない。
デザートにぷっちゃんプリンまで買い込んで、ご満悦だった鯖丸は、
店員の声ではつとまった。

「お弁当、温めますかぁー」

目の前に、まー君が居た。

魔界に居た時より、ずっと幼く見えるが、まー君だった。たぶん、
さっちゃんと同じ年か、少し若いくらいだろう。

「はい、お願いします」

他の手下達と違って、魔法で外見をいじっていないと思っていた
が、この子なりに虚勢を張っていたんだなぁ……と、何となく思った。
レンジから出した弁当を袋に詰めて差し出したまー君は、鯖丸を
見てちよつと息をのんだ。

「お前……」

「やあ」

軽く片手を上げた。

「何だそれ。魔界出てそのまんまかよ。魔力高いくせに」

「あれが初めてだから、勝手が分からなくて」

金を払いながら、鯖丸は言った。

「あ、プリンのスプーンもください。住所不定学生だから、俺。食
器持ってないの」

まー君は、肩を震わせて少し笑った。

「こんな天然に負けたのかよ」

スプーンを差し出して言った。

「ありがとうございます。四百八十五円です」

額と腕に、青黒い痣が出来ていた。

大した怪我ではなさそうなので、ほっとした。

「朔美はどうしてるか、お前知ってるか」

尋ねられて、鯖丸は少し迷った。言うなと言われていたからだ。

「西の方の病院に居る。それ以上は言えない」

「そうか」

まー君は、ため息をついてから、顔を上げた。

「お前の首のプラグ、かっこいいぜ。魔界に居る時は、見せびらかして歩きな」

鯖丸は、首筋を手で押さえてから、ちょっと考えてうなずいた。

「うん、今度からそうするよ」

ありがとうございますー、と言って、まー君は頭を下げた。

コンビニの店主らしい男が「増田君にも真面目そうな友達が居るんだねえ」と言っているのが聞こえた。

マニュアル免許も取れて、煩雑な手続きも終わって、次の仕事に呼び出された時には、面接から一月近く経っていた。

同じ刀を使っていた所長が見立ててくれたので、鯖丸はずいぶんましな身形になっていた。

シャツもズボンも、頑丈で伸縮性があってすぐ乾く、高性能な物に替わっていた。

ジャケットも中々いい物らしく、あんまり私用に使わない様にと、念を押された。

久しぶりに訪れた支所は、最初に来た時と同じだった。

ごちゃごちゃしていて、何人かは机に向かっているが、空いたデスクの方が多い。魔界に『営業』に出ているのだ。

もう昼近かったが、おはようございますと挨拶して入った鯖丸は、奥の机に近寄った。

「おはようございます、ウィンチェスター課長」

鼻面に眼鏡を乗せ、首を突き出した悪い姿勢でノートパソコンに向かっていたジョン太は、少ししてから返事をした。

「ああ、おはよう」

顔を上げ、鯖丸の方を見たジョン太は、少し驚いた顔をした。

鯖丸は、中途半端に長かった髪を、ばっさり切っていた。

服も新しくなっているし、首のプラグは丸見えだが、ずいぶんこ

ざっぱりした姿になっている。

「お、いいじゃん。さっぱりして」

鯖丸は、少し照れた様子で頭をかいた。

「散髪代ができたから…」

長髪のままでもう少しお洒落な感じにも出来ただろうに、勇気あるなあこいつ…と思った。

他に何か言おうと思ったが、結局ジョン太は「そうか」とだけ言っ
て、二三度キーをたたいてから、パソコンを畳んだ。

「じゃ、行こうか、武藤君」

「はい」

鯖丸は、元気な声で答えた。

二話 ジョン太（前編）

白い部屋の中央を、数人の人間が囲んでいた。

医者が一人で、看護師が一人。残りは軍人で、軍服をきっちり着込んだ、将校クラスの間人も混じっている。

人の輪の中に、車イスに乗った男が居た。

拘束衣を着せられ、うつろな目で皆を見上げている。

普通の人ではなくハイブリットだ。

原型に近いタイプで、元々は毛皮に覆われていたはずの皮膚は、まばらな毛が生えただけでむき出しになっている。

「君は良くやってくれた、ウィンチェスター中尉」

将校は、静かな声で言った。

優しい口調だった。およそ、軍人が下の階級の者に話しかける調子ではない。

子供に言い聞かせようとしている様にも聞こえた。

「誰も君を責めてはいない」

隣の女性士官が、やはり静かな口調で話した。

刺激するのを恐れている様にも聞こえる。

「子供の両親は、あなたを告訴しないとっています。あれは事故だったと…」

男の顔に、ゆっくりと表情らしき物が浮かんだ。

拘束衣に包まれていても分かる程痩せこけた体が、かすかに震えた。

「あの事故は公表されない。君は研究者コロニーを救った英雄だ。回復したら、二階級特進で復帰出来る。

残念だが、もし退役したいなら、傷痍軍人としてそれなりの補償を…」

「うるせえ、黙れ」

吠える様な声で、男は怒鳴った。拘束衣に包まれた体を、渾身の

力を込めてよじった。

痩せ細った体からは信じられない力で、拘束衣の頑丈な革ベルトが二つ、はじけ飛んだ。

「吉村君」

医者が、隣の看護師に目配せした。

「はい」

女の看護師は、車イスの男に近寄り、首筋にハンドガン型の注射器を押し当てた。

軽い音と共に、薬液が注入された。

男は止まらなかった。

「子供が死んだんだぞ。俺が殺したんだ。無かった事にするのか」

「不幸な事故だ」

将校は言った。

男は、叫び声を上げた。暴れながら拘束衣を引き千切り、車イスと一緒に床に倒れた。

人々は、一様に一步、後ずさった。

「今の薬は効かないのか」

将校は、医師にたずねた。

「その内効きます。今、これ以上強い薬品は使えません」

医師は、眉間にしわ寄せせて、将校に責める様な視線を向けた。

「もっと回復してから、話し合う訳にはいかないんですか」

「私もそうしたいが……」

将校は、ため息をついた。

「いや：そうだな。話し合いが出来る状態ではない。上にはそう報告する」

男は、倒れたまま床の上で身をよじった。

「まだ七歳の子供だ。何でだよ。何で俺を庇う」

叫び声は、すすり泣きに変わっていた。

「もう無理だ。殺してくれ。誰か俺を殺してくれよ」

泣き声はやがて静かになり、男は床に横たわった。

鯖丸は、新しく借りたアパートの一室で、バイトの呼び出しメールを受け取った。

六畳一間、風呂無し、便所共同で築四十年の木造アパートだったが、住む場所が出来ただけで有難かった。

半年以上、住所不定学生としてワンゲルの部室で暮らしていたので、とうとう周囲には部員だと思われてしまった。

ついに本物の部員として、試合にまで出される始末だったが、本来所属している剣道部の主将は、黙認してくれた。

親兄弟も親戚も居なくて、学費はともかく生活費は誰にも頼れない事は、部の人間は皆知っていた。

住所不定なのに学校に居られたのは、ワンゲルのおかげだ。

ただ、山登りにも試合がある事は驚いていた。

ワンゲルとの兼部は、足腰の鍛錬になるだろうと言われた。

低重力の地球外コロニーで育って、筋力や骨格の強さにコンプレックスのある鯖丸には、重力に逆らうスポーツは、割と心地良かったので、続ける事にした。

もちろん、優先順位としては、学業、剣道、バイト、ワンゲルだ。

そんな、順位では三位のバイトだが、実際の生活では、一番重要だった。

時給がすごく高いので、月に二、三度仕事を受ければ、それでどうにかやって行けたのだ。

ただ、一回というのが何日かに及ぶ事は良くあって、その度に講義を受けられない理由を説明したり、代返を頼んだり、レポートを提出したり、様々な苦労はあった。

屋根のある場所で暮らせて、ご飯も食べられるのだから、文句は

言えない。

メールは、上司で相棒のジョン太からで、明日から十日くらい来られないかという内容だった。

冬休みなので、日程は空いている。

早速、明日から入れるというメールを送り返した。

約束の時間は、めずらしく早朝だった。

もちろん、社員のジョン太は、毎朝会社に出勤し、現場以外のデスクワークもこなしていたが、バイトの鯖丸が係わるのは、現場だけだった。

たいがいは、昼頃からの行動が多い。

会社に寄らないで直に出るから、家まで来て欲しいと書いてあった。

『朝飯は、家で食ってけ』

ジョン太は、魅力的な提案をした。

ジョン太の住所は、鯖丸の住んでいるぼろアパートの残った旧市街より、幾分現場の魔界に近かった。

中心街に近く、そこそのマンションや住宅が集まっている場所だ。

『行きます。朝イチで行きます』

鯖丸は、張り切ってメールを送り返した。

始発電車も、まだ動いていなかった。

地方都市の交通網は、現在でもそんなに整備されているとは言えない。

タダメシを食う為なら、どんな努力もいとわない鯖丸は、トレーニングがてら走って行く事にした。どうせたったの四キロだ。

ジョン太の家は、中心街のマンションで、新しい建物ではないが洒落た作りになっていた。

呼び鈴を押すと、早朝なのにジョン太はすぐ出た。

小脇に泣き叫ぶ幼児を抱えて、その口に歯ブラシを突っ込んでい
る。

「おう、良く来たな」

言うなり幼児を押しつけられた。

「悪いけどそいつの歯、磨いという。すぐメシにするから」

さっさと奥に引っ込んでしまった。

泣き叫ぶ幼児を抱えたまま、おろおろしていると、反対側のドア
から、子供が出て来た。

小学校低学年くらいの男の子で、ハーフの様な顔立ちをしていて、
髪も少し茶色っぽい。すごく可愛い子供だ。

ただ、目鼻立ちや耳の形が少し普通の人とは違うので、ハイブリ
ットだという事が分かった。

たいていのハイブリットは、この子の様な外見だ。普通の人間と
見分けが付かない者も多い。

戦後の混乱期に混血が進んでしまったので、原型に近いジョン太
の様なハイブリットの方がめずらしいのだ。

子供は、しばらく不思議そうな顔で鯖丸を見てから、何かを思い
出したらしかった。

「あ、今日家で朝ご飯を食べて行く武藤君だね」
タメ口だ。

「僕、吉村拓真。桜下小学校二年四組」

「西瀬戸大理工学部二年の武藤玲司です」

小学生のどうでもいい自己紹介に付き合う鯖丸だった。

その間も幼児は泣き続けている。

吉村拓真は、手を伸ばして幼児を抱き下ろした。

「この子は美織。三歳。椿幼稚園うさぎ組」

どうしても所属を明らかにしたいらしいが、どうでもいいので名
前と年齢だけ記憶に留める事にした。

「父さんが、武藤君はけっこういい子だって言ってたけど、思った
より大人なんだね」

「まあ、君の父さんよりは子供なんだけど」

やっぱりジョン太の子供らしい。名字が違う理由は、何だか聞き辛かったが、拓真は美織の手を引っ張って洗面所に連れて行きながら、どんな家庭の事情を暴露してくれた。

「父さんて、ちょっと変でしょ？見た目じゃなくて、中身も」

「うーん、まあ、いい人だけど、変と言えば変かな」

あいまいに返事をした。

自分が子供だった頃を除けば、子供と接した事も無いので、どう反応すればいいのか分からない。

「日本では、母さんの姓を使った方がめんどくさくないから、吉村なんだ、僕達。

何かこだわりなさ過ぎだよねえ。近所のおばちゃんに、リコンしてるのとか聞かれて、困るし」

「お母さんとは、一緒に住んでるの？」

変な心配が心を過ぎったので、聞いてみた。

「当たり前じゃん。今日は夜勤明けだけど、もうすぐ帰って来るよ」
何だかすれ違いが多くて大変そうだ。

バイトの自分でも、魔界に潜りっぱなしの日が続くと、携帯も使えなくて、けっこう友達付き合いに支障を来す。

夫婦だったら、もっと大変そうだ。

洗面所へ行くと、美織は自主的に歯を磨き始めた。

磨き残しを手伝って、口をゆすがせた頃、ジョン太がメシが出来たぞと、呼びに来た。

ああ、こういうのが、普通の家庭なんだろうか、…と、鯖丸は思った。

両親の夫婦仲は良かった。かなり良好だった。

大規模ステーション建設の為に設置された技術者のコロニーで、皆忙しかったから、地球上の家庭とはかけ離れていたが、それでも愛情はたっぷり注がれて育った。

変な宗教観を持ったテロ組織に全滅させられなければ、今頃は軌

道上で両親の仕事を手伝っていたはずだ。

ただ、地球に来てから、普通の家庭には接してないので、今ひとつ普通が分からない。

俺はこの先、普通の家庭を持てるんだろうかな…と、鯖丸は考えた。

二三秒考えて、少し絶望した。

鯖丸の絶望をよそに、朝食はものすごく美味しかった。

ジョン太は、いわゆる『料理の上手い男』だった。

単に上手いだけでなく、後片付けもきちんとして出来る万能タイプだ。更に、家事全般そつなくこなせるらしかった。

奥さんの顔を見てみたかったが、時間が来たので、家を出る事にした。

エレベーターの前に立った時、ドアが開いて、疲れた顔をした女が出て来た。

ジョン太と目が合うと、太い首に抱きついた。

ジョン太は、誰はばかり事なく女と長い時間キスしてから、鯖丸の方を向いた。

「みっちゃん…ええと、嫁の吉村美津子。こいつ、鯖丸な」

「あの…サバです」

うろたえた挨拶しか出来ない。

「ああ、武藤君。もっと子供かと思ってた」

反応が息子の拓真と同じだ。

「今度十日くらいかかるんだ」

ジョン太は説明していた。

「うん、いいけど帰る時は、連絡してね」

二人はもう一回抱き合ったので、鯖丸は身のやり場が無くて、先にエレベーターに乗った。

強引に閉じようとしているエレベーターのボタンを押しながら待っていたら、みっちゃんがこつちを向いた。

「ごめんね。この人と付き合うの、大変でしょ」

別に全然大変じゃない。むしろ楽な方だ。

「大丈夫です」

がつつり強気で答えた。

ゲートまでは鯖丸がハンドルを握った。

免許を取って数ヶ月しか経たないのに、鯖丸の運転技術は、若葉マークの付いたマニュアルの四駆を、コンビニのおにぎりの包みを解体しながら転がせる程上達していた。

「まだ食うのかよ」

付き合いで買ったカフェラテをストローで吸いながら、ジョン太は呆れた感じで言った。

さつき自宅で、炊飯器が空になるまでメシを食っていた奴の所行ではない。

更に、おやつのもるまるバナナの袋まで、開け始めた。

まあ、食べ盛りだからなあ…と、ジョン太は思った。

少し前に二十歳になったばかりだし、けっこう本気で剣道をやっている様子だし、男の方が成長期が終わるのが遅いから、まだ少し背が伸びるかも知れないし。

昔の自分がどんなだったか、明確に思い出せなくなっているのが少しショックだったが、大体こんな風だった気もする。

すっかり、中年のおっさんになってしまった。

今の方が幸せなので、特に不満な訳ではないが…。

「鯖丸。お前、動物は好きか？」

仕事の話を始めた。

鯖丸は、まるまるバナナをくわえたまま、困惑した顔でこちらを見た。

犬っぽい外見のハイブリットに聞かれたら、どういう内容の話が始まるか、判断出来ないのだろう。

「いえ、特に好きとか嫌いとかは…。動物に触った事も、あんまり

ないので」

地球外のコロニーで生まれ育ったら、大体そんなものだろう。ペットや食料で飼われる動物も宇宙には居るが、低重力のマイナーコロニーでは、どちらも贅沢だ。

「実は、今度の仕事は動物相手なんだけど」

ジョン太は説明した。

「たぶん、殺す事になると思う」

鯖丸は、少しの間考え込んだ。

「調査に三日間かける猶予があるから、無理そうだったら、外から応援呼んで、交代するけど」

今まで入ったバイトや外部からの応援で、どうしても生き物を殺せない人間が何人か居た。

別に、ベジタリアンでもないくせに、動物は殺せない。

鯖丸はそういうタイプには見えなかったが、単純に動物と接する機会が全くなくて、普通に怖いという可能性は高かった。

「医学部のラットは、触った事あるけど」

ちよつと遠い目になった。

「あんまり美味しくない」

「食ったのかよ。それ絶対、何かの実験で病气持ってるだろ」

驚いたので、お笑い芸人の様に突っ込んでしまった。

「だって、農学部の手は、でかくて手に負えなかったんだもん」

鯖丸は、恐ろしい事を言い始めた。

頼むから、こっそり盗って来るのは野菜だけにしてくれ。

「今度の対象は、食えないぞ」

「ええ、何で食えない奴を殺すの？」

本気で不思議そうな顔をしている。

まあ、宇宙では生き物を無駄に殺す余裕はない。

「そいつは食えないが、人間をもう、十人以上食ってる。被害者十三人の内、八人が外からの観光客。二人は地元の農家。残りは、駆除を依頼された魔界育ちの魔法使いだ」

魔界で生まれ育った人間は、魔力の高い低いはあるが、魔法の熟練度は外の人間に比べれば格段に高い。

魔導変化した生物相手に、戦いを挑むならともかく、逃げ切れな

いで殺されるというのは異常事態だ。
更に、魔界生まれで魔界育ちの、魔法を生業にしている人間が殺されている。尋常の強さではない。

「俺たち二人でやれるの」

鯖丸は不安そうな顔をした。

「まあ、無理だな」

ジョン太はあっさり言った。

「調査が一通り終わったら、外に戻って応援を呼ぶ事になると思うよ。久し振りに所長が暴れる所を見れるかも」

鯖丸は、自分が使っている刀の、前の持ち主の事を考えた。

もっさりした感じの、眼鏡をかけた中年の女。皆が所長と呼んでいるので、未だに名前も知らない。

昔、ジョン太と組んでいたという話は、聞いた事があった。

どんな風だったのか想像しようとしたが、出来なかった。複雑な気分だ。

鯖丸は、黙り込んだまま手続きを済ませ、いつものゲートを通過した。

会社の倉庫で、ジョン太が持ち出そうとしている武器を見て、鯖丸は顔色を変えた。

いつもの、32口径と44口径の拳銃はともかく、ショットガン、マシンガン、アサルトライフル、ロケットランチャー、手榴弾。兵器には詳しくないので、何だか分からない物もある。

どこぞの小隊相手に一人で戦争する様な勢いだ。

どの武器も外界で使える最新兵器ではないので、金属製だ。この重量を持ち運べるつもりなんだろうか…。

鯖丸は改めて、今回の仕事が今までとは違うのだと実感した。

それしか扱えないからだ、いつもの刀一本だけの自分が、頼りなく思える。

「俺の装備は、いつも通りでいいのかな？」

おずおずと聞くと、ジョン太は「ああ」とうなずいて、薄いベストを出して来た。

「これ、着とけ。念の為だから」

「何？」

薄くて軽い、明らかに布ではない。

「防刃ベスト」

ジョン太は答えた。

鯖丸はジャケットを脱いで、急いでベストを着込んだ。

魔界では、GPSが使えない。

昔からある磁石のコンパスも、時々動作がおかしくなる。

鯖丸に運転を任せたジョン太は、紙の地図を開いて周囲の地形を確認しながら、行き先を指示した。

山間部に入り、崩れかけた山道を何とか通り抜けて、目的地に着いたのは昼前だった。

十数軒が寄り集まった集落が見えた。

周囲には、田畑の中に民家が点在している。

人工的な環境で育った鯖丸でさえ、ちょっと心を動かされる様な、外の世界にはもう残っていない里山の風景だ。

指示されて民家の庭に車を駐めると、ジョン太は車を降りて深呼吸し「ああ、空気が美味しい」と言った。

乗って来た車の排ガスが、まだ辺りに漂っている。

嗅覚が鋭いと自称する割に、雑な男だ。

民家の軒先から、老人が近付いて来た。

ジョン太とは知り合いらしく、親しげに挨拶を交わしてから、鯖丸の方を向いた。

「ああ、こいつは新しい相棒の…」

「鯖丸です」

軽く頭を下げた。

「松吉だ。よろしく」

意外に若々しい口調だった。

魔界の人間は、外と違ってアンチエイジング治療を受けられない。魔法でどうにか出来るとも聞いていたが、個人差もあるだろうし、この人は見た目より若いのかも知れない。

「この辺で仕事する時は、いつも世話になってるんだ」

ジョン太の説明を、松吉が補足した。

「普段は副業で民宿をやってるんだけどね」

懐から、リーフレットを取り出して差し出した。

『豊かな自然と懐かしい風景の中で過ごす、魔界のスローライフ。縄手山観光協会』とか書いてあった。

「あれが出てから、観光客も引き上げちまって。まあ、よろしく頼むよ」

着いて来いと　いう風に、家の中に入ったので、二人は後に続いた。

広い土間のある古い民家は、暖房がある訳でもないのに、意外に暖かった。

奥の部屋には、何人かの男達が集まっていて、囲炉裏を囲んで話し合っていた。

「外の人達が来たよ」

松吉が声をかけると、皆が振り向いた。

「おお、ジョン太なら腕は確かだな」

何度か来ていて、顔見知りらしい。

「何だ、今度の相棒は随分若いね。大丈夫かい」

「ああ、こいつこう見えて、歌次さんより魔力高いから」

おお…というどよめきが起こったので、鯖丸は所在なげに頭をかいた。

「で、その歌次さんは？」

皆が空けてくれた場所に座って、鯖丸にも隣に座る様合図してから、ジョン太は聞いた。

皆は一瞬黙り込んだので、何となく事情が分かった。

「そうか：殺された魔法使いは、歌次さんだったのか」

「街から来た魔法使いと一緒に、山に入ったんだが：」
全員、帰って来なかったのだ。

「どんな奴なんだ」

ジョン太は身を乗り出してたずねた。

鯖丸は、囲炉裏にかかった鍋から、具の多い煮込みうどんを注いでもらって、順調に食べ始めていた。

「わからねえな。見た奴は皆死んでるから」

少し頭の薄い男が、うなった。

歌次と仲の良かった作造だ。

「たぶん、かまいたちのかい奴だと思うんだが」

松吉の妻だという女が、一升瓶を持って台所から上がって来た。

皆に渡す前に、片手で持って、少し力を込めているのが分かった。
酒は瓶ごと全部、熱燗になっていた。

「雑な事すんなよ、お前。こんなに飲まねえだろ、昼間から」

松吉は文句を言った。

「お客さんも居るだろ」

女は言って、土間になった昔風の台所に戻って行った。

「ジョン太は飲まねえって、何回言っても憶えてくれないんだ」

松吉はため息をついた。

「ああ、こいつにやってくれ。ガキみたいに見えるけどもう二十歳だし」

鯖丸に酒は押しつけて、ジョン太は話を続けた。

「鳴き声とか、通り道とか、何か見た奴は居ないか？匂いとか」

「あんたみたいに、鼻が利く訳じゃないし」

中では、比較的若い男が、言った。

「雁元の所の娘が、栗の収穫に行って、あれの通った後と糞を見つけてる。後は…」

「ますみちゃんが食われた観光客を見つけたんだが…」
隣に座った中年の男が、辛そうな口調で言った。

「あんなひどい死体を、いくつも見たんだ。怯えちまって、まだ口も利けない」

「ますみちゃんは、十二才の子供なんだ」

若い男が、事情が分からない鯖丸に説明してくれた。

無心にうどんを食っていた鯖丸は、手を止めた。

「今日は、村の中で話を聞いて回るよ」

ジョン太は言った。

「明日、山に入って実物を見て来る。たぶん、Aランクの魔法使いを一人ずつ入れた、三人編成のチームが二つでやる事になると思う」
おお…という歓声が上がった。

「こいつはランクSだが、経験が浅いからA扱いという事で…」

鯖丸の肩をたたくと、皆が注視した。

「そりゃ、すごいな」

「俺とこいつと、あと、バラクーダが入る。もう一チームは関西本社から助っ人が来る事になってる」

どんな話なのか、鯖丸には理解出来なかったが、村の人々の顔は明るくなった。

「どうせ観光会社三社合同出資だ。高い仕事だから、皆、必要経費はどんどん上げてくれよ」

「おー」

盛り上がっている。

盛り上がり我便乗して、どんどんメシを食いながら酒を飲んでいた鯖丸は、そろそろいいかげんにしろとジョン太に怒られた。

「出掛けるぞ。話を聞いて回らないと」

「はい」

椀の底に残った白菜を吸い込んで、ごちそうさま…と手を合わせ

てから、鯖丸は後ろに置いてあつた刀を掴んで、後に続いた。

生姜も入った汁物を食つたので、暖かくはなっていたが、顔色一つ変わっていないし、足取りも全く普通だ。

皆で回し飲みしたとはいえ、そこそこの量は酒も飲んでいるはずだった。

「いやー、今まで居なかったタイプだな、あれ」

松吉は、面白そうに言った。

雁元の娘はともかく、ますみちゃんは何も話してくれなかった。部屋の隅に座り込んで、両親にさえ口も利けない状態になっていた。

これは無理だな…と、ジョン太は思った。

帰って、明日の準備をしようと言ったが、鯖丸は思う所があつたらしく、靴を脱いでますみちゃんの座っている部屋の隅まで上がり込んだ。

何をするつもりなのかと思ったが、本人も良く分からないらしく、少女の前に座って、しばらく黙り込んでいた。

少女が、鯖丸を見上げた。

暗い目だった。

目が合った瞬間、鯖丸は膝に置いた両手をぎゅっと握って、ひどく辛そうな顔をした。

「何か見た？」

低い声で聞いた。

少女の顔に、少し表情が表れた。

「見たんだ」

少女は、首を横に振った。

「死体を見たくらいで、そんなにならないよね」

いや…気の弱い子ならなるだろうとジョン太は思ったが、何年か前に仕事でここへ来た時、もっと小さかったますみちゃんが、捕まえた蛇をぶんぶん振り回して、男の子をびびらせていたのを見た記

憶があった。

特に大人しい子供ではない。

「殺される所を見たから、怖くて辛いんだろ」

少女は震え始めた。

「忘れた方が楽だけど：ずっと忘れてたら、もっと酷い事になるよ」
泣いている。理由は分からなかったが、ますみちゃんから何か聞
けそうな気がして、ジョン太は見守る事にした。

鯖丸はしばらく俯いて泣いていたが、顔を上げて手の甲で顔をこ
しごし擦った。

「思い出せるうちに思い出そう。俺みたいになつたらダメだ」
少女は少しの間固まった。それから、長い悲鳴をあげた。

松吉の家で、畳の部屋に布団を敷いてもらって、その晩は眠った。
ますみちゃんの話は、結局聞けなかった。

ますみちゃんの両親は、二人を追い出して、二度と来るなと言っ
た。

鯖丸は眠れない様子だった。

「気にするな」

ジョン太は一応なぐさめた。鯖丸はため息をついた。

「俺の両親は、あの子と同じくらいの頃に死んだんだ」

今まで、自分の身の上について、鯖丸は全然話さなかった。

地球外の低重力環境で育っていて、子供の頃から電脳接続の高性
能プラグを装着しているくらいだから、月の様な宇宙の都会ではな
く、人手の足りない小規模なマイナーコロニーの生まれだろうとは
想像が付いていた。

「聖地の上にコロニーが浮いてるのが許せないとか、寝言を言っ
てるテロリストに襲われて殺された」

何も言えなかったので、ジョン太は黙って聞いた。

親兄弟が居なくて、一人で生活しているのには、事情があるのだ
ろうとは思っていたが、本人が話すまで、聞かないでおこうと思っ

ていたのだ。

こいつの年齢と、宗教系のテロリストというだけで、何処で起こった何の事件かはつきり分かった。

きつい。

報道された内容だけで、充分ひどい事件だったが、昔の知り合いからもっと酷い詳細を聞かされていた。

「その前後に何があったか、全然思い出せない」

細い声で、辛そうな口調だった。

「たぶん、コロニーを襲った一ダースくらいの奴らに犯されたはずなんだけど…」

勇気が要る告白だ。ジョン太は無言で聞続けた。

「レスキューが来た時には、生きているのは俺だけで、襲って来た奴らも、皆死んでた」

何があったのか、想像は付いた。鯖丸は、魔法が使えなくても、素の戦闘力はかなり高い。

もし、重装宇宙服を装備していたら、生まれた時から宇宙に居る子供相手に、かなう地球人は少ないはずだ。

本人もきつと、何があったか記憶はなくても自覚しているのだろう。

「高校を卒業する少し前まで、解離性同一性障害の治療を受けてた。ごめん、病歴があったら採用されれないと思って」

ジョン太は考え込んだ。

何となく、そんな感じの事情があるのではないかと思ってはいた。何でもない普通の青年にしては、魔力が高すぎるからだ。

心が病んでいる者の方が、一般的に魔力は高い。

「気にするな。こんな仕事してる奴は、皆病気だよ」

暗い天井を見上げながら、ジョン太は言った。

「ジョン太は違うでしょ。魔法使えないし」

「そうでもないさ」

何でもないと思える様になっていたはずなのに、言ったとたん胸

が痛んだ。

あれから十数年過ぎている。立ち直る猶予は鯖丸よりずっと長いし、一人ではなかった。

俺は弱虫だな…と思った。

「俺は子供の頃、宇宙飛行士になりたかったんだ」

ジョン太は告白した。

「でも、こんな外見だから、結局軍人として宇宙に出る事になって」
ジョン太が、戦闘用ハイブリットの先祖返りだという事は、一緒に仕事を始めてから少しして知った。

もちろん、法律上は普通の人間と同等だが、人の感情までは、法は支配出来ない。

「木星戦争で、研究者コロニーの守備に着いてた」

「うん、俺も知ってる。あれ、ジョン太だったんだ」

宇宙で生活している人間にとっては、地球人以上に有名な事件だ。当時の鯖丸は、まだ子供だったはずだ。拓真と同じくらいの…。
それから、死んだあの子供と。

「たった一小隊で、研究者のコロニーを守ったんだ。教科書にも載ってる」

「出来る訳ねえだろ、そんな事」

ジョン太は、吐き捨てる様に言った。

「守れてねえ。何十人も死んだ。そんな連中を銃で脅して、寝ないで戦える薬を処方させたんだよ」

確か、国連軍が支援に来るまで一ヶ月近くかかっていたはずだった。

寝ないで戦える薬が何なのか、鯖丸は知っていた。
事情があって多少薬物の知識があったのだ。

きつと、アップー系のドラッグだ。それも、たちの悪いやつ。

一ヶ月も使い続けていたら、普通は死ぬ。

小隊の何人くらい生き残ったのか、怖くて聞けない。

「あの頃は、皆と一緒に死ねば良かったと、ずっと思ってたよ」

「そんな事言わないでよ。ジョン太の部隊は、研究者コロニーを救った英雄だって…」

「あの後、手の付けられない麻薬中毒になって、コロニーの子供を殺した事件は、オフレコになっているからな」

ジョン太は言った、辛そうな声だった。

「俺みたいなタイプのハイブリットは、錯乱して暴れ出したら、普通の人間には止められないんだ」

鯖丸は黙り込んだ。

ジョン太は、非難でもいいから、宇宙育ちのこの子供に、何か言っ
て欲しいと思った。

自分が殺した、あの子供の代わりに。

しかし鯖丸は、少しため息をついて、言った。

「でも、そんなの…誰も責められないよ」

「ああ、誰も責めなかったよ」

だから今、こんな事になっている。きっと、自業自得だ。

寝返りを打って鯖丸に背を向けた。

「悪かったな、変な話聞かせて」

「ううん、別に」

他に、どう言っていいいか、分からない。

「済まん、少し泣く。聞かなかった事にしてくれ」

別にいいじゃん、そんな事…と思ったが、声を殺して泣いている
ジョン太には言えなかった。

辛かったら普通に泣けばいいのに。

翌朝、鯖丸が目を覚まして庭に出ると、ジョン太は何事もなかった
様な感じで歯を磨いていた。

柿の木の下に、湧き水を引いてある桶があって、柄杓が乗せてあ
る。

おはようと言ってから、水を一杯飲んだ。すごく美味しい。

ジョン太は、口をゆすぎ終わってから「ああ、おはよう」と言っ

た。

「俺、歯ブラシ持って来てない」

鯖丸が言うと、ジョン太は庭の隅を指さした。

「風呂の横に洗面所があるから、そこに置いてあるやつ使いな」

そう言えば民宿だと言っていた。

古い作りの農家らしく、風呂場も便所も、家の外と中どちらからも出入り出来る様になっていた。

薄暗い洗面所に入って、ジョン太が外で歯を磨いていた理由が何となく分かった。雰囲気は暗い上に、灯りがない。

固形の石けんとカミソリも置いてあったので、石けんを顔に塗り付けてからカミソリを手にとった。

見慣れた安全カミソリとは全く違うタイプの、刃物としか表現のしようがない代物だ。ヒゲを剃るよりえんぴつを削る方が向いている。

「無理」

諦めて顔だけ洗った。

歯磨きは外でしようと表へ出ると、ジョン太はもう、車から武器を積み降ろして、出発の準備を始めていた。

「早いね」

少し驚いて言った。

「明るい内に済ませたいからな。早く支度しろ」

鯖丸は、大急ぎで雑に歯を磨いてから、部屋に駆け戻った。

松吉の奥さんが用意してくれたおにぎりを食いながら、二人は山に入った。

日帰りだから、食料と水くらいで、大した物は持っていない。テントもシュラフも無くて、すごく楽だ。

ジョン太は、いつもの拳銃は一丁だけ残して、後は短機関銃とアサルトライフルを持っていた。

さすがに、持って来た武器を全部携行してはいない。

それでも相当な重量になっているはずだった。

「何か一個持とうか？荷物スカスカだし」

ジョン太は振り返ると、何だか小馬鹿にした感じでふっと笑った。
「別に。遅れずに付いて来ればそれでいいよ」

特にペースも上げないで、普通にそのまま歩き続けた。

道が無くなっても、傾斜が見上げる程急になっても、普通に黙々と歩き続けた。

しまった。この人時々、すごく大人げないんだった。

鯖丸は、四本足の変な生き物になって、よろよると急斜面を登り始めてから三十分近く経って、やっと泣きを入れた。

「すみません、自分、生意気でした。もうかんべんしてください」
ジョン太は立ち止まって、こちらを見た。悔しい事に息も乱してない。

「荷物持つてあげようか？サバちゃん」

すぐくええ顔でにつこり笑われたので、ちよつと殴りたくなった。

そこで休憩になった。

鯖丸はその場に倒れて二三分死んだ。

「お前、ワンゲルじゃなかったっけ」

ジョン太は不思議そうに聞いた。

「ワンゲルって、五十キロの荷物を担いで山道を走り登ったり、食料も水も持たないで、目的地までの到達時間を競ったりするんじゃないの？」

「どこの世界の軍事演習だ、それ」

鯖丸はうなった。

「部員が足りないから、人数あわせで居るだけだよ、俺は」
お金が無くて前のアパートを追い出された時、寝泊まりさせてくれた恩もある。

とりあえず、シユラフで寝る事にかけては、上級者だ。

「うん。俺もまさか付いて来れるとは思わなくて…」

ジョン太は、あさつての方を向いてぼつりと言った。

こんなGPSもコンパスも効かない山で、付いて行けなかったらどうなると思っているんだ、この人は。

「でも、距離は稼げたから、時間に余裕があるな」

太陽を見上げて、そんな事を言っている。

昼用に渡されたおにぎりを食いながら、地面に地図を広げた。

「はぐれた時の用心に、現在地は憶えてくれ。今はここだ」

鯖丸は、自分の地図を出して、急いで印を付けた。

驚いた事に、かなりの距離を登って来ている。

「この先は、武器だけ持って行こう。身軽な方がいい。相手がかまいたちだったら、動きが速いからな」

「かまいたちって、どんな動物だっけ」

鯖丸は、真顔で聞いた。

「お前、理科の成績、悪かっただろ」

ジョン太は、呆れて言った。

「失礼だな。理数系だぞ、俺」

鯖丸は反論した。

小学生理科の話をしているんだが…と、ジョン太は思った。

「かまいたちなんて動物は居ないよ。イタチ科の動物が魔導変化した奴が、かまいたちだ」

本来のかまいたちの説明は、面倒なので端折った。たぶん、妖怪図鑑に載っている類の生き物だ。

「いたち…」

鯖丸は考え込んだ。

大した事は考えていないのは、すぐに分かった。

「後ろ足で立ち上がって、かわいいポーズをする…」

「それ、レッサーパンダだから」

動物に対する鯖丸の知識には、一切期待しない事にした。

「まあ、いつも通り、俺には分からない魔力の流れがあったら、教えてくれればいいよ」

なぜか具がタコ焼きの、変なおにぎりを食っていた鯖丸は、まっすぐ上を指さした。

「じゃあ、あっち」

地図の上では分水嶺と水神の祠がある場所で、ジョン太が目指していたのと、大体同じ方向だった。

最後にかまいたちが出た栗畑から、ずっと臭いを追って来ていたのだ。

ちょっと嫌な予感がした。

追って来たかまいたちとは、別の個体の臭いがしたからだ。

鯖丸が指さしているのは、追って来たかまいたちの痕跡から少しずれた、別の個体の臭いがする方向だった。

「二匹居ると思う」

ジョン太は深刻な顔で言ったが、鯖丸は何の感想もない様子だった。

人工的な空間で育った人間に、野生動物の恐ろしさを説明しても無駄だ。

「二匹同時に出くわしたらやばい。東の斜面から回り込もう」

「うん」

一応、緊迫した事態なのは分かっているらしく、足音を潜めて後から付いて来る。

祠のある谷すじから、風が吹き上げて来た。

鯖丸は、顔をしかめた。

「獣臭い」

ジョン太は自分の二の腕をちょっと嗅いでみてから、ああ…という顔をして、谷すじを見下ろした。

今まで臭いを追って来ていたから分からなかったが、普通の人間にも嗅ぎ分けられるくらい、近付いたのだ。

黄色っぽい長い生き物が、のんびり寝そべっているのが見えた。

「わあ、フェレットだ」

鯖丸は小声で言った。

いや…、あれはイタチ…と言おうとして、ジョン太も少し考え込んだ。

「フレットだな、あれ」

野生化したペットが魔界に入り込んだのだろう。元々イタチ科の動物だし、かまいたちになる可能性はある。

愛玩動物だと思って見ると、けっこう可愛い。

ただ、この距離からかわいく見えるという事は、大きさは大体四メートル。きつと、熊より強いだろう。

イタチ科の動物は、猫科や蛇科と同じくらい魔力が高い。

おそらく魔法も使うはずだ。

「やばいな。もう一匹を確認したら、すぐ戻ろう」

その時、風向きが変わった。

異様な雰囲気を感じて鯖丸が横を向くと、ジョン太の全身の毛が逆立っていた。

そっと視線の先を見ると、起き上がったフレットと目が合っていた。

風向きが変わって臭いを悟られたとか、そう言う事は後になって知った。

首筋を掴んで引き倒されたギリギリ上を、パンという乾いた音と共に衝撃波が走り抜けた。

草刈り機で雑草を刈り取る様に切り倒された広葉樹が、ばらばらと降りかかった。

「逃げろ!!」

斜面を転がる様に、二人は走った。

背後から何度も、衝撃波が襲いかかった。

木の根に足を取られて転んだ時に、かまいたちが背中と尾の間に真空を作って、空気の鎌を撃ち出しているのが見えた。

一度撃つと、次までにタメの時間が出る。

その間にジョン太が、フルオートで短機関銃の弾をばらまいて、

弾幕を作った。

鯖丸は刀を抜いて、ベテランの魔法使いでも無理なくらい短時間で、魔力をためて撃ち出した。

かまいたちは、木々をへし折りながら後ろへ吹っ飛んだ。

「ダメだ、死んでない」

「逃げられればいい」

走り出した二人の前に、もう一回り大きな影が躍り出た。

吹き飛ばされた仲間を踊り越えて、巨体からは信じられないスピードで、弓なりに長い体を曲げて着地した。

もう一匹のかまいたちだった。

ジョン太は相変わらず、脊髄反射としか思えない速度で銃弾を撃ち込んだが、かまいたちは止まらなかった。

さっきの奴より、鎌を作る時間が異常に短い。

鯖丸がパニックを起こさないで対応したのには驚いた。

手に持った刀を盾にして、衝撃波を斜めに受け流そうとしたのだ。避けられないなら、それ以上の事は出来ない。

ただ、相手が強すぎた。

日本刀にしてはごつい刀身は、斜めから力を受けたのに、簡単にへし折れた。

折れた刀を握った腕が、ぼとりと地面に落ちた。

腕を切り落とされた鯖丸は、そのまま吹き飛ばされ、木の幹に叩き付けられて止まった。

さすがのジョン太も、一瞬、固まった。

しかし、この程度でうろたえる程、やわな男ではなかった。

ありったけりの銃弾をかまいたちに撃ち込んでから、鯖丸の本体と腕を拾い上げ、人間には不可能な速さで斜面を走り下りた。

かまいたちの気配が消えるまで、走り続けた。

「起きろ、このバカ」

ぶん殴られて目が覚めた。

まだ山の中に居て、目の前でジョン太が何か怒鳴っていた。体中が痛い。

特に右手と胸の辺りが痛い。

ジョン太の白っぽい毛皮が、べったり血で汚れている。

わぁ、大変だ。ジョン太すごい怪我じゃないか。

周囲を見回して、最後に自分の状態を確認した鯖丸は、ちょっとの間呼吸が止まった。

どこをどう見ても、自分の右手が肘の少し上から無かった。

着ていたジャケットも、そこからすっぱり切れていて、服の上から何かを巻いて止血したらしかったが、血に染まっていて何で巻いているのか判別も付かない。

ショックを受けたと自分で自覚する前に、悲鳴を上げていた。

「まあ落ち着け」

冷静な口調で、ジョン太は言った。

「だって、無いもん。手が」

震えながら声を出すのにも、努力が要った。

「あるよ、ほら」

見覚えのある腕が差し出された。

こんな角度から見た事はないが、どう見ても自分の手だ。

ただ、自分の体に付いてない時点で、あると言えるのだろうか。

「いいか、時間がない」

ジョン太は、真剣な顔で言った。

「お前が気絶してる間に、だいぶ時間が経った。早くくつつけろ」

「ええ？」

何を言われているのか、分からなかった。

そんなの、冷却保存して外科医に付けてもらわないといけないんじゃない……。

考えてから鯖丸は、やっと自分がどこに居るか思い出した。

魔界で、しかも山の中だ。

「先月研修で、怪我の治し方は教わっただろ」

まあ、切り傷とかは……。絶対無理だろ、これ。

「お前くらい魔力が高ければ、理屈では楽勝だ」

ジョン太は無謀な事を言った。

「俺は魔法が使えないんだぞ。自分でやれ。腕が無くなってもいいのか？」

それは困る。

「このままだったら、死ぬかな、俺」

鯖丸は聞いた。

「別に死なねえよ。片手が無くなるだけだ」

まあ、義手を付ければ普通に生活出来るだろう。ただ、それだと剣道が続いても障害者スポーツという別のジャンルになる。

きっと、学費免除の特典は打ち切られるだろう。魔力は高いから、今の仕事は続けられるだろうが、学校を辞めてしまったら、今まで将来の目標の為にしてきた苦勞が……。

「早くしろや、おい。これ取ったら血がどばーっと出るから、さっさとくっつけないと、出血多量で本気で死ぬぞ」

ジョン太は、止血してある紐の結び目に手をかけた。

「待って、今、走馬燈回してるから」

「死ぬ予定もないのに回すな」

もう一回殴られた。

「分かった。やるよ」

紐を解くと、本当に血が噴き出して、見ているだけでくらくらして来た。

切り落とされた右手を押しつけられた。

覚悟していた何倍も痛い。

目を閉じて、叫び声を上げた。

研修で教わった、元通りに戻るイメージを、必死で反芻した。

「よし」

ふいに、肩を抱かれた。

「良くやった、偉いぞ」

目を開けると、見慣れた腕が見慣れた場所にあった。

つなぎ目が酷い傷跡になっているが、腕がない事に比べたら、全然ましだ。

「たぶん肋骨も折れてる。内臓も傷んでるかも知れん。早く戻って、治してもらおう。自分で出来る分は回復しとけ。後が楽だから」

防刃ベストがぐちゃぐちゃになっているのを、鯖丸は愕然として見下ろした。

これが無かったら、胴体まで真っ二つになっていたかも知れない。急に全身が震えだした。

さすがに軍人上がりだけあって、ジョン太の応急処置は早くて適切だった。

体中が痛くて辛いと言ったら、ちよつと驚くくらいの量の鎮痛剤を、砕いて水と一緒に飲まされた。

背負われて山道を下り始めたら、涙が止まらなくなった。

「ごめん。俺、重いよね」

「軽い。全然軽い。あんな食ってて何でこんな軽いんだ」

本気なのか強がりなのか、全然分らないが、少なくとも自分は軽くない。

「いつも迷惑かけてるし。今日だって、転ばなかったら……」

「お前は良くやってるよ。大した経験もないのに」

それ程軽くない自分を背負っているのに、下りの山道で、ジョン太の足取りは全然乱れなかった。すごく安心だ。

「今日は俺の見込みが甘かったただけだ。お前のせいじゃない」

体中が痛いのに、眠くなって来た。

普通なら、こんな状態では眠れない。

薬のせいかも知れなかったが、もう、そんな事を考えるのもしんどかった。

目を閉じると、急激に意識が無くなった。

運び込まれた場所は、村の医者だという男の家で、鯖丸の腕を一

目見るなり「うわ、ぶっさいくに繋げやがって。下手くそめ」と、文句を言った。

「そう言うなよ、こいつ、魔法使い出してから四ヶ月しか経ってないんだ。怪我の治療は、これが初めてだし」

「うわー、無茶するなあ。そんな奴が自分でやったのかよ。わし、そういうバカ大好き」

「元通りにしてくれ」

ジョン太は言った。

「できるよ、もちろん」

医者は、軽く言った。

「何ヶ月くらいで…？」

「…二日で」

寝ていたと思った鯖丸本人が、弱々しく言った。

「出来るか。いくらバカ相手でも」

医者は、偉そうに腕組みして断言した。

それからちよっと考えて聞き返した。

「元通り動けば、傷跡は残っていないのか？」

「見た目はどうでもいいです」

「待て」

ジョン太は、一応止めた。

「こいつは、外でスポーツ競技の剣道をやってる。勝てなくなったら今後の生活に多大な不都合があるはずだ。」

精密な動作を、怪我をする前と一切変わらずに出来る様、きっちり時間をかけて治してくれ」

「お前、一昨年わしがやった治療に、不満がある様子だな」

鯖丸の腕を触って診ながら、医者は言った。

「当たり前だ。あれから照準が0.02ミリも左斜め上48度にずれて、元に戻すのにどれくらい苦労したと思うんだ」

一般人には分からない微細なレベルで、本気で怒っている。

「お前は魔力が低いから、魔法も効きにくいんだよ。こいつと同じ

怪我をしてたら、お前だったら元通りにするのは無理だね。

むしろ、お前なんかを回復させたわしの腕を賞賛して欲しい」

「外に帰ってから、病院に行けば良かったよ、普通に」

「何だとー」

言い争いながらも、服を脱がせて体中を点検し、手を触れて魔力を送り込む。

何だか少し楽になって来た。

「ところで、何で二日？」

医者は聞いた。

「外から応援が来るまでに治したいから」

「お前、まだあれとやる気なのかよ」

ジョン太は呆れた。

もうこの仕事は辞めると言い始める事を、半ば覚悟していたのだ。

「当たり前だ。負けたままじゃ帰れない」

ガキっぽいし、すぐ泣く割には根性あるなあこいつ…と思った。

「二日じゃ無理。今現在、外に出たら死ぬくらいの怪我なんだぞ、お前」

医者は容赦なく言った。

「その腕な…ここに居ればくっついてるけど、魔界を出たら、ぼとって落ちる。外れるね、絶対」

鯖丸の顔が、引きつった。

「完全に治すのは、一ヶ月くらい必要なんだ。外に出ないで、こっちで普通に動けるくらいなら、一週間コースで」

「じゃあ、それで」

「やめとけよ。新陳代謝を加速されたら、すっげえ痛いぞ」

明らかに嫌な過去のあるらしいジョン太は止めた。

どれくらい時間が経ったのか、全く分からない。

障子越しに見える光は夕方の物だか、朝方の物だか、一日経ったのか、半日経ったのか、それとも何日も経ったのか、見当が付かな

い。

あの、ノリの軽い医者が、何度か魔法を使った治療を繰り返していたのは、かすかに記憶があった。

相変わらず全身が痛い。

呼吸が楽なので、折れていた肋骨は繋がったらしい。

自分の吐く息が熱い。

熱があるかも知れない。

目が覚めたのは、美味しそうな匂いがしたからだ。

首を捻ると、枕元に、焼き魚と野菜の煮物と味噌汁と、茶碗に山盛りのごはんがあった。

「おお、目を覚ました」

見覚えのある医者が、楽しそうに言っていた。

「すごいな、こいつ」

そりゃあ、ご飯が出来ていたら、起きるでしょう…と、鯖丸は、まだ朦朧としている意識の中で思った。

「お腹空いた」

かすれていたが、声は出た。

「そうか。じゃあ、起きて食え。もりもり食え」

「うん」

起き上がるのに、大変な苦労が要った。

「あ…ご飯の前にトイレ」

「ああ、廊下の突き当たりだから」

医者は言った。

「はい」

よろよろするが、どうにか壁にもたれて歩けた。

用を足して戻る途中で、相変わらずジョン太と医者が口論しているのが聞こえた。

自分は一体、一日寝ていたのか、数時間寝ていたのか、分からないくなった。

とりあえず、寝ていた部屋に戻って、医者に報告した。

「先生、血尿出た」

「そうか、まあ、色々ぶつけたしな」

「うん、大丈夫だと思う」

今までにも、防具無しで木刀で打ち合った時に、そんな事はあった。何でそういう無茶をしたのかは、もう記憶がないが。

「食って寝ろ。よく寝たら早く治るからな」

「うん」

右手で箸を持とうとしたが、上手く動かない。

仕方がないので、左手に持ち替えて、不器用に魚をむしった。

「食わせてやれよ、怪我人なんだから」

横合いからジョン太が文句を言って来た。

「うるせえ。お前は大体、相棒を甘やかし過ぎだ。こいつが見た目通りのガキだと本気で思ってるのかよ」

医者が文句を言っている。

相変わらず体中痛いのが、ジョン太に文句を言えるのは所長くらいだと思っていたので、けっこう面白い。

「お前よりよっぽどタフだよ。悔しかったら、魔法使える様になれ、バカ犬が」

ジョン太が魔法使えないのは、魔力が低いせいだと思っていたが、医者は違う考えの様に思えた。

しかし、バカ犬は暴言だ。

「あの…」

鯖丸は、魚をむしり終わってから、言った。

「スプーンか何かください」

「よく食えるな、お前。大体、一人で便所に行けるとは思わなかったし」

医者は、呆れた顔をした。

「寝てた方が良かったの？俺」

むっとして鯖丸は聞いた。起き上がるのにも、多大な苦勞が要ったのだ。

「いや、好きな様に活動してくれ。出来る範囲で」

「じゃあ、出来る範囲で」

医者 of 頭頂部の毛を、かまいたちの技で水平に削ってから、メシを食って寝た。体調は悪かったが、割と熟睡出来た。

「じゃあ、俺は一旦帰るから」

ジョン太が言うと、鯖丸は泣きそうな顔をした。

調査にかける予定だった、三日目の朝が来ていた。

「増援を呼ぶ事になるから、一日や二日じゃ、戻れないと思う。たぶん、仕事の日程も延長される」

ちよつと表情が明るくなった。

本気でもう一度かまいたちとやり合うつもりらしい。

「大人しく養生してろよ」

「うん、分かった」

神妙な顔でうなずいてから、ごそごそ起き出そうとした。

「何だ、寝てろよ」

「ケータイ」

部屋の隅に置いてある、ぼろぼろになった服を指さした。

ジャケットのポケットに、電源を切った携帯が入っていた。

「外に出たら、連絡入れて欲しいんだけど。山本と迫田と溝呂木先生」

最近の携帯は丈夫なので、電源は普通に入った。もちろん圏外だが。

「分かった。お土産買って来るけど、何がいい？」

「まるまるバナナと、ぷっちんメガプリン」

コンビニで買える物しか思い付かないのが、気の毒だ。世の中には、もっと美味しい菓子は山程あるのに。

「うん、買って来てやるよ。それと…」

廊下をどすどす歩く足音がする。

「お前に、愉快的髪型にされたハザマ先生は、大変怒っておられる」

朝だ！起きろ病人ども：と、怒鳴っている声が聞こえた。どういう医者だ。

「俺が戻るまで、無事で居てくれよ」

「ええっ」

障子戸がすぱーんと開き、頭頂部だけ水平にカットされた変な髪型の医者が、会心の笑みで仁王立ちになっていた。

「おはよう、鯖丸君。ステキなりハビリ日和だねえ」

普通リハビリって、もうちょっと治ってからするもんなのでは…。物凄くイヤな予感がした。

二話 ジョン太（後編）

外界げかいに戻ったジョン太は、関西本社への増援申請や、必要な備品の発注に手間取ったので、鯖丸に頼まれた連絡は、夜遅くになってしまった。

刀と銃器を紛失して、鯖丸が重傷を負った事については、所長に少し説教を食らったが、思った通り自分も出ると言ってくれたので、安心した。

「魔力は高いが、ほぼ素人だ。まあ、仕方ない」

お前が魔法を使えば…とと思っているのは分かったが、幸い口には出されなかった。

この女と最後に寝てから、何年経っただろう…と、ジョン太は考えた。

会社に入った頃だから、十年は過ぎている。

普通、こういう仕事をする時は、互いの魔法を連動させやすくする為、リンクを張る。

魔法陣を描いて、周囲を踊り狂ったり、互いの腕を切って血をすり合ったり、薬物でトリップしたり、その他様々な方法はあったが、一番簡単で確実なのは、セックスだった。

魔力が低くても、高い方から強引にリンクすれば、たいがいは少しなら魔法が使える様になるものだ。

鯖丸程ではないが、所長の魔力はかなり高い。

顔立ちは地味だが、色白でむっちりしていて、おっぱいの大きい、ええ感じの女だった。

勃つのは体の方だけで、魔力は一向に起動しなかったので、最後には諦めた顔でこう言われた。

「まあいいか。君は基本性能が高いから」

その後も、自分とリンクを張れた相手は、一人も居ない。自分が軽微な魔法も使えない理由を、所長は知っている。

だから未だにちょっと苦手だ。

「それで、増援が入る頃には、本当に戦えるのか？」
所長は聞いた。

「分かりません。ハザマのやる事だし」

ジョン太は正直に答えた。

「本人は、やる気です」

「ハザマかー」

所長は考え込んだ。

この人も昔はやんちゃだったし、魔界で色々怪我をしては、ハザマに酷い目に遭わされたクチだ。

「それは気の毒になあ」

九時を回ってから、会社のデスクで夜食のカップ麺を食いながら電話すると、山本はすぐ出た。

「おー、レイジ。こっちはすげー星空だよ。吹雪が晴れてさ。お前も来れば良かったのに」

ケータイのアドレス機能で、こちらを鯖丸だと思い込んでいる山本の話を少し聞いて、ジョン太は言った。

「あー、武藤君のバイト先のウィンチェスターですけど」

どうやら日本アルプスのどこぞでテントを張っているらしい。

ワンドルの友達というのは、こいつだろう。

「あつ、すげー。本物のジョン太？」

何がどういう風に伝わっているのか、全然分からないが、失礼な奴だ。

「武藤君、魔界で怪我してね。当分帰れないから君に連絡する様に頼まれたんだ」

山本は、少しの間黙り込んだ。

「ひどいんですか、レイジの怪我」

普通に、目上の大人相手に話す口調になった。

「まあ、重傷かな」

かなり親しい友達だと聞いていたので、正直に言った。

「右手を切り落とされて、魔法でくつつけたれど、骨も折れてるし、打撲傷もひどい。一月は外へ出られないと思う」

山本は、また少し黙り込んだ。

「俺、今から下りてそっち行きます。いいですか」

夜間にテントを撤収して、日本アルプスを駆け下りてから、四国まで戻るつもり青年の姿が想像出来た。いい友達だ。

「ダメだ。危ないから来るな」

「魔界のパスポート持ってます、俺」

いや：こんな季節に夜の山を歩くのは危ないと言いたいのだが：。
「そうか。じゃあ、無理しないでゆっくり戻って、見舞いにだけ来てくれ。きつと喜ぶよ」

そうします：と、山本は答えた。

迫田は、剣道部の同輩だと聞いていたが、連絡が付かなかったの
でメールを入れた。

最後に溝呂木先生とか言う相手に電話すると、渋い低音の聲が、
即座に出た。

「君かね。ジョン太とかいうふざけた武藤の上司は」

良く考えると、ふざけた名前だが、この場合ふざけたがかかって
いるのは、名前ではなくジョン太本体だ。

「おう、ふざけたジョン太だ。ケンカ売ってんのかい」

「そうだな。武藤を魔界で連れ回しているバカが」

バカの部分に、いくぶん力を込めた。

「居ると聞いていたのな。一度会ってみようとは思っていた」

「よし会おう。今から行く。逃げるなよてめえ」

住所を聞いてから、鯖丸のせっかく買った携帯を机の上に叩き付
け、ジョン太はパソコンの電源を切った。

仕事柄頑丈な機種をチョイスしたらしく、壊れなかったので、ポ
ケットにねじ込んで、残業を切り上げ、会社を出た。

溝呂木先生とアドレスに登録してあったので、てっきり大学の先生だと思っていたが、溝呂木は剣道部の監督で、鯖丸が地球に来た頃から剣道を教えていた師匠だった。

道場も経営している古い家の座敷に通されて、苦手な正座をしながら、ジョン太は溝呂木先生と対していた。

自分よりだいぶ年下の、三十才前後の男が、厳しい顔でこちらを睨んでいる。

「武藤をどうしたいんだ、君は」

原型に近いハイブリットは、見慣れていない人には、年齢が分かりにくい。

年下だと思われるかも知れない。

「将来的には、日本一の大魔導師に……」

冗談が通じない相手だと分かったので、姿勢を崩して、身を乗り出した。

「あいつが、普通に生活出来る様になれば、それでいいんだけど」

「行儀悪いぞ、君」

溝呂木は、顔をしかめた。

「アメリカ人に正座さすなや。いや……見た目で分からないのは悪いけど」

溝呂木は、少し驚いた顔をした。

「それは悪かったが、なまってるいな、日本語」

「祖母が日本人でね……いや、そんな話はどうでもいい。お前、武藤の保護者か？」

「保護者ではないが、師匠だ。彼が地球に来てから、ずっと剣道を教えている」

「じゃあ、保護者だ。もっと保護しろ。出来ないなら、俺がやるから、文句言うな」

「ああ、そういう話になるとは、思っていなかった」

溝呂木は、少しほっとした様子だった。

「武藤がまた、胡散臭いバイトに手を出して、妙な奴に連れ回され

ているのかと思った。あれくらい腕の立つ奴は、いい戦力になるからな」

またって、あんた……。前にも何かあったのかよ。

「うちはちゃんとした会社だよ。これ、名刺」

一応、名刺を渡した。

溝呂木は、名刺を受け取って少し見てから、畳の上に置いた。

「なるほど。聞いた事のある社名だ」

うなずいてから、ジョン太の方を向いた。

「魔界でバイトを始めてから、あいつの太刀筋が変わって来ている。実戦で斬り合うなら、格段に実力は上がっているが、剣道でそれはまずい」

「まずいのか」

何となく分かったが、一応聞いた。

「あいつには才能がある。でも、幕末の人斬りみたいな剣士になって欲しい訳じゃないんだ」

真剣を握ってから、上達までのスピードが速過ぎるのは、気になっていた。

確かに昔から、人一人斬れば一段とかいう俗説もあるが、外界で鯖丸がやっているのはスポーツ競技だ。

この先生は、思っていたより鯖丸と深い関わりがあると思ったので、質問を変えた。

「武藤君が、解離性同一性障害の治療を受けてた事は？」

ジョン太は一応聞いてみた。溝呂木の顔色が変わった。

「そんな事まで、話したのか」

溝呂木は、当然知っていた様子だった。

「まあ、俺の恥ずかしい過去も告白したし。相棒だからな、俺ら」
「そうか」

溝呂木は、少しの間黙り込んだ。

それから、ジョン太の全く知らない話を始めた。

「^{アキラ}暁に会った事はあるか、君は」

「えーと」

記憶を総動員しても、思い出せなかった。

「誰？」

「武藤の別人格だ」

溝呂木は言った。

「子供の頃テロリストに両親を殺されてレイプされた話は聞いたかな」

「ああ」

そんな事まで話していたのかと、溝呂木は意外そうな顔をした。

「暁は、その時出て来た奴だ。玲司の代わりに重装宇宙服をジャックインして、自分を犯したテロリストを全員虐殺した。」

男に犯された事実をチャラにして、人殺しを軽い感じにする為に、ゲイで凶暴な性格の設定になってる」

「それは…」

今までの話の流れからすると、過去形で、精神障害は治っている風に思える。

鯖丸を主観とした話としては…。

「暁は、まだ居るのか」

ジョン太は、暗い気持ちになりながら尋ねた。

「たぶん。魔界に長く居ると、いずれ出て来るだろうな」

あそこは、心の奥に仕舞った事が、表に出て来やすい…と、溝呂木は言った。

魔界に入った経験が、いくらもある様子だった。

「経済的に厳しいのは知っているが、今の仕事は一刻も早く辞めた方がいい。君からもそう言ってくれ」

「ええと…」

ジョン太は、口ごもった。

喧嘩腰で来てしまったので、そもそも最初に溝呂木に電話した理由を、まだ話していない。

「あの…怒らないで聞いて欲しいんだけど」

「駄目だ。怒るけど話せ」

溝呂木は、高圧的に言った。苦手だ、こいつ。

「実は武藤君、あっちで怪我をして…」

嫌な空気になって来た。

「当分魔界から出せないんだ。その…切り落とされた腕を魔法で繋いで…」

溝呂木は、鬼の様な形相になっていたが、静かな動作で立ち上がった。

「そうか…」

床の間に飾ってある日本刀を取り上げて、鯉口を切った。

「じゃあ、貴様の腕も落とそう。どっちが利き腕だ？」

どこまで本気か分からないが、相当強そうだ。

とっさにホルスターを吊った辺りに手が伸びたが、外界では丸腰だ。

逃げる事にした。

「くそっ。今日はこれぐらいにしといたるわ」

悪役の捨てぜりふを吐いて、ジョン太は逃げ出した。

第一回鯖丸保護者会議が決裂して、とぼとぼ夜道を歩いていると、迫田から電話がかかって来た。

山本にしたのと同じ説明を繰り返し、勝手に魔界へ入ったりしないよう説得していると、自分の方の携帯に、所長からメールが入った。

『明日、関西本社で打ち合わせ。出張よろしくm（　　）m』

「顔文字入れるなや…」

何だかもう、ぐったりだ。

家に帰り着いた頃には、日付が変わっていた。

子供達はもう寝ていたので、顔だけ見てリビングに行くと、みっちゃんはまだ起きていて、深夜の微妙なお笑い番組を見ていた。

「ただいま…」

続きになっているキッチンへ入って、水を汲んで飲んだ。

みっちゃんは驚いた顔をした。

「ジョナサン：帰るの今日だった？」

「いや」

もう一杯、コップに水を汲んでから、隣に座った。

「色々あって」

みっちゃんの肩にもたれかかった。

風呂上がりらしく、シャンプーの匂いがする。

「何か疲れた」

言いながら抱きついて、パジャマの下にごそごそ手を入れ始めた。みっちゃんは、ジョン太の手の甲をちよっとつねってから、テレビを消した。

「いいけど、ここではやめて」

「うん」

脱ぎ捨てた上着とズボンをその辺に放り出したまま、寝室のドアを開けた。

こんな行儀の悪い事したら、いつもなら怒られるのに、何も言われなかった。

よほど疲れて見えるんだろうと思った。

自分的には年甲斐もなくいちゃいちゃしている夫婦だと思っていたのに、セックスするのは一ヶ月ぶりっていうのは、どういう事だ：と、ベッドの上にへたれ込んでジョン太は鬱々と考えた。

いや：それ以前に。

「なあ、俺ら同じ日に休みだったのって、何ヶ月前だった？」

「憶えてない」

煙草に火を付けて、ゆっくり煙を吐き出してから、みっちゃんは投げやりに言った。

今時煙草なんか吸う奴は少数派だが、日常的に吸っている訳でもないの、特に意見は言わない事になっていた。

彼女も色々しんどいのだろう。

「嫌なら転職すれば」

「お前こそ」

二人は、顔を見合わせてため息をついた。

「向こうで、何かあったの」

ゆっくり煙草を吸い終わってから火を消して、みっちゃんは聞いた。

煙草の煙より、火を消した後の匂いの方が苦手なので、ジョン太は軽くくしゃみをした。

あ、ごめん…と言って、みっちゃんは灰皿を出窓の奥の方に押し込んだ。

「まあ、色々」

鯖丸が怪我をしてからの経緯を説明した。

「置いて来ちゃったの？あの子」

少し驚いている様子だった。

「あなたが仕事関係の人、家に連れて来る事なんか、今までなかったじゃない。可愛がってるんだと思ったけど」

「別に、一緒にいても何も出来ないし」

リンクを張ったパートナーが回復魔法をかければ、もう少しくらいは楽に治してやれるが、自分にあるのは戦争屋のスキルだけだ。

ハザマにきつつい治療をされて、泣いているかも知れない。

「それで、明日からオーサカ」

「わあ、こき使われてるね」

ふさふさの胸の毛を弄んで、ありんこを量産しながら、みっちゃんと言った。

後でブラッシングの時にひっかかって痛いから、止めて欲しいのだが…。

「お前だって、休み少ないだろ。小さい子供も居るのに、何で考慮してもらえないの」

「教授達のイス取り合戦に巻き込まれちゃって」

みっちゃんは、心底嫌そうな顔で、もう一本煙草を吸い始めた。
「むつかしい手術を、よその病院からいっぱい引っ張って来るから……」

みっちゃんは、腕のいいベテランのナースだ。
おまけに反射神経がいい。

自分が薬物中毒で治療を受けていた頃、点滴の針を差し込んでから、反撃されないで逃げられたのは彼女だけだった。

「もう、外科は出ようと思うの。そしたらあんたの休みに合わせられるから、どっか旅行に行かない？」

「そんなでいいのかよ。お前、今の仕事好きだろ」
みっちゃんは、少しだけ辛そうな顔をした。

「うちの支所、今、人手が足りないんだよ」

関西の方で大きな仕事が続いたので、有能な人材を何人も引っ張られていた。

今回助っ人に来る本社の人間も、こちらから転勤になった者が二人居る。

「求人にかけてるから、その内もう少し楽になる。だから考え直せ」
鯖丸が学校を辞めて常勤で入ってくれたら、どんなに楽になるだろうと何度も思った事はあった。

何か将来の目標があって、貧乏なのに意地でも学校に通っているらしいので、言い出せなかったが。

そんなの何時になるか分からないじゃん……と、みっちゃんはぶつぶつ文句を言ったが、もう少し考えてみると答えた。

本社の社長は、相変わらず偉そうでもかついたが、以前相方だった二人が頑張ってくれたので、意外に早く現場に戻れた。

所長が直接出るのも効いたのだろう。

とにかく、民間では日本一恐ろしい魔女だ。

今日は特攻服じゃないんですかあ……とか聞いてきた本社の魔法使いを「いい年してそんな着れるか、こらあ」と、ぼっこぼこに殴

り倒していて頼もしい。

所長は、魔法とか以前に、恐ろしい元ヤンなのだ。確か、有名なレディースの総長だったはずだ。

「ジョン太、こいつ殺したから、交換して来い」
気持ちのいい無茶を言い始めた。

「生きてますよ」

一応止めた。

本社から来た魔法使いは、車に乗ったら固まったまま動けなくなつた。

打ち合わせは向こうで終わっているから、別にいいが。

応援は、五人来ている。

本来なら三人来るはずだったが、鯖丸の穴を埋めるのに、二人入ってもらった。

ベテランが二人で穴を埋めるなんて、どういう素人なんだ…と、思わないでもない。

早く戻れたので、きつとまだ回復していないだろう。

ゲートの内側で、申請していた装備を受け取った。

所長が、新しい刀を発注していたのは驚いた。

軽くて扱いやすい実用刀と、ごっつい大男にしか振り回せない様な長刀だ。

予想していたのとは全く逆で、軽い方の刀を所長が装備していた。「ほら、私もいい年だし、もうあんまり無茶は…」

とか、いかにも丸まった元ヤンみたいな事を言っているが、絶対かまいたちのスピードに対抗するつもりで居る。そういう人だ。

鯖丸は、後衛に回して、重い刀で一撃を狙わせるつもりだ。

まだ、実戦に出られるとは思えないが…。

村が近付いて来ると、広場で子供らが騒いでいるのが聞こえた。

右だ、左だ、上だ、下だと大騒ぎだ。

車を駐めて見ると、牛小屋の屋根に鯖丸が立っていて、ふははは、かかって来なさいと、不敵に笑っている。

子供達は、歓声を上げて石をぶつけ始めた。

「うわっ、一回十個ずつ。いっぺんにはやめて、マジでやめて」
叫びながら空中に飛び上がった。

落下しながら体を捻り、壁を蹴って水平に飛行し、ひさしの所で片手をかけて回転しながら垂直に飛び上がった。

重力からはあり得ない方向に体が向いているのに、目線が全方向を見ていた。

やめてとか言いながら、全部避けている。

「ジョン太」

所長は聞いた。

「彼は飛べたんだっけ」

魔法使いでも、本当に飛べる奴は少ない。

「別に、飛んでません、あれ」

ジョン太は説明した。

「あいつ、自分の重さを変えられるんです。後は、跳躍と落下を繰り返してるだけです」

非常口から落ちた時に、重さを変えて見せたのを憶えている。

その後、使っているのは見た事が無かったが。

動きがトリッキーなので、本当に飛んでいる様に見える。

鯖丸は上空からこちらを見つけた。

嬉しそうに手を振ってから、いきなり体を反転させ、頭から落下して来た。

「うわ」

本社から来た五人は、悲鳴を上げた。

力場を作って受け止めようとしたが、間に合わず、鯖丸が通り過ぎた上空で展開した。

柿の木の所で、足首を軽く枝に引っかけ、見事な二回転半ひねりで方向を変えてから、斜めにスライディングして着地して来た。

少し砂埃が舞っただけで、尻餅もつかないで立ち上がった。

「ジョン太、久し振り。あ、所長も」

何だかすごく元気そうだ。

「肥えたな、お前」

鯖丸をしげしげ見てから、ジョン太は言った。

心配していた自分が、少し馬鹿らしくなって来た。

「えっ、やだ」

両手で頬を押さえて、女の子みたいなポーズで言った。大変気持ち悪い。

「何だよ、お肌もつやつやじゃねえか」

まあ、元気で何よりだと肩をたたいた。

お肌という単語に敏感な所長は、ちよつと羨ましそうな顔をした。「うん。まだちよつと痛い所もあるけど、何かすごく調子良くて。魔界に居ると、体にいいのかな」

「そんな訳ねえだろ」

まさか、こんなに回復しているとは思わなかった。

どちらかと言うと、外界で駆けずり回っていた自分の方が疲れた感じた。

「お前、外でコンビニ弁当ばかり食ってるだろ。帰ったら少しは自炊しろ」

そんな事を言った後には何だが…と、一応頼まれていた土産を、車の窓から手をつ突っ込んで取り出した。

「悪いな、メガプリン無かったから、小さいやつにした」

「やった、雑誌も入ってる。ありがとうジョン太」

嬉しそうにコンビニ袋から雑誌を取り出した鯖丸は、そのまま固まった。

「一番エロいの選んどいたから」

自分、グッドジョブという感じで、ジョン太は言った。

鯖丸は黙り込んでしまったが、特に要らないとは言わずに、エロ雑誌をこそつと袋に仕舞った。

「いや、無理」

病院というには、あまりにも普通の民家なハザマの家で、本社の人間と一応面通しが終わってから、医者とは断言した。

「一週間って言ったろ。早いよお前ら」

「別に、そっちの都合に合わせて仕事してる訳じゃないから」

所長は、出された座布団の上であぐらをかいて、言った。

「こいつは抜きでやる。悪いが治るまで預かってくれ」

皆から少し離れて、まるまるバナナを食っていた鯖丸は、ええつと言って立ち上がった。

「俺、やれます。練習したから、もう絶対かまいたちの技には当たりません」

「ダメ。万一死なれたらめんどくさい」

所長は言い放った。

「いや：あれ、いけると思うけど」

本社から来たエンマという青年が言った。

「戦えんでも、囧で飛んでもらうだけで、こっちの攻撃、当てやすなるし」

「それだー」

鯖丸は、エンマの手をがしつと握った。

「俺、囧でいいです。連れて行ってください」

それ以外の何で、あんな事練習していたんだ：とエンマは考えた。やっぱりランクSくらいになると、変な奴なんだろう。

ただ、魔力が高くせに努力家という奴は、あまり見かけないの
で、その辺は好ましい。

「ダメ」

所長は、つれなかった。

彼女が出て来た時点で、この仕事の指揮権はジョン太から所長に移っている。文句は言えない。

「明日から出る。ここは狭いから松吉の所で打ち合わせだ。ハザマ
：」

傍観していたハザマの方を向いた。

「鯖丸は、お前が出せると思った時点で、加わってもらうから、一応打ち合わせに連れて行くぞ。いいな」

「正直に言うが、すごい無理して明後日」

ハザマは答えた。

「夕方には治療の続きがあるから、返せよ」

「分かった」

鯖丸は、神妙な顔で皆の後に続いてハザマの家を出た。

服をぼろぼろにされてしまったので、村の人と同じ格好で、草履をつっかけている。

「すごいな君」

横合いから話しかけられた。

「エンマさん…？」

お互い、年齢の近い同業者は少ないので、ちょっと気になっていた。

「普通、初心者の頃に腕とか斬られたら、続けられんで」

「負けるの嫌いなんです」

鯖丸は、きっぱり言い切った。

「そうか。かつこええな、君」

エンマは、うなずいてから、こっちを見た。

「でも、死んだら負けや」

鯖丸は、少し驚いた顔をして、自分とそう年の変わらない青年を見た。

少しは年上に見えたが、大体は同年代だ。

そうか、俺は考えが甘いんだな…と思った。

「そうですね。ありがとうございます」

「君、体育会系やろ。苦手や俺」

エンマは少し引いた。

「違います。理数系です」

そこだけはどうしても譲れない鯖丸だった。

打ち合わせが始まって、何の話も進まない内に、鯖丸が話しをぶち壊した。

「三匹居ます」

「ええ？」

所長はちよつとうろたえた。

「二匹だったろ」

ジョン太は聞いた。

「そうなんだけど…」

言いにくそうに口淀んでから、顔を上げた。

「ますみちゃんが、三匹居たって…」

「目撃者の一人です」

ジョン太が説明した。

「死体と、恐らく殺害現場を目撃したショックで、口が利けなくなってます」

「俺、話した」

鯖丸は言った。

「そうか。すぐ話を聞きに行こう」

所長は立ち上がりかけた。

「絶対ダメ」

鯖丸は、所長に飛びついて押さえつけた。

所長相手にそんな無茶をする人間は、見た事がなかったので、周囲の皆は凍り付いた。

「ますみちゃん、まだちゃんとして無いから、刺激しないで」

「私は、そんな刺激のかね」

所長が冷静に言ったので、鯖丸はすいませんと謝った。

「三匹居るのは、確実なんだな」

「はい」

所長は、周囲を見渡して、考え込んだ。

「よし、予定通りのシフトで、明日出るが、相手が二匹以上だと確認した時点で、一旦引く」

妥当な判断だった。

「一度目で駆除出来なかった場合は、鯖丸の回復を待って、チームを組み直す。それでいいな」

皆、異論はない様子だった。

ただでさえ戦力の高いかまいたちの、更に大型化した個体を、三匹も同時に相手にした経験は、誰にも無かった。

地図を出して、具体的な位置を話し合う地味な作業も終わり、皆で茶を飲み始めた頃、庭先に女の子が現れた。

「鯖丸兄ちゃん居ますか」

ジョン太だけはますみちゃんだと分かった。

見違えるくらい明るい表情になっている。

「先生が、早く帰れって」

「あ、ごめん。もうそんな時間？」

鯖丸は立ち上がって、皆に一礼した。

「すみません。今日はこれで」

ますみちゃんに手を引かれて、ハザマの家がある高台に歩いて行った。

何だか少し、いい雰囲気にも見える。

「ロリコンだっけ？彼」

所長は聞いた。

「違うと思うけど……」

ジョン太は考え込んだ。

年齢が離れているせいか、女関係の事は話題に上らなかった。

ただ、携帯のアドレスに、女の子の名前が一個も無いのは確認済みだ。

「たぶん童貞じゃないかな、あいつ」

「わぁ、最悪」

所長は頭を抱えた。

「別に普通じゃないですか。世間の皆が所長みたいに、中学生で暴

走族のヘッドとデキて、ハイスクールではプロのヤクザ屋さんを何人も乗り回したりはしませんから」

分かっていただけ殴られた。

「あの子なら、お前が魔法使える様に出来ると思ったんだが」

「まだ、諦めてなかったんですか」

ジョン太は、ため息をついた。

「こんなおっさんのオカマ掘るのは、荷が重いでしょう」

所長は、少し驚いた。

「君がされる方なの？逆でいいじゃないか。そういう趣味じゃなかったら」

どうもこうも、女以外は趣味じゃねえんだよ…と、ジョン太は思った。

それに、溝呂木の話信じれば、ポジションを逆にすると、暁とかなう奴が出て来る可能性が高まる。

鯖丸と魔力が同等だとしたら、抑制の利かない暁を怒らせたなら、いくら頑丈な自分でも、少しヤバイ。

「いや…趣味とかじゃなくて、命を大事にー」

RPGの気弱なコマンドみたいな事を言い始めた。

完全に、目が死んでいる。

「リンク張らないで済む、気軽な所が俺の売りなのに」

ジョン太は、ぶつぶつ言い始めた。

所長は不審な顔をしていたが、結局、鯖丸の抱えているらしい精神的な障害については、言い出せなかった。

自分の目で確かめるまでは、所長に話すのはフェアじゃない気がした。

軍属だった頃には、想像も付かない考え方だが、下手をすれば親子くらい年が離れていても、鯖丸は対等な相棒なのだ。

そんな気持ちの悪いカップリングが計画されているとは露知らない鯖丸は、もらったエロ雑誌で二回程抜いてから、ぐっすり眠った。

あまりにもぐっすり眠っていたので、表が大騒ぎになってから、やっと目が覚めた。

外から、何人かの悲鳴と叫び声が聞こえた。

根性で眠り続けようとして、はっとなって飛び起きた。

「何…」

かまいたちが出たぞ、という叫び声が遠くで上がった。

障子戸を開け、まだ閉まっている雨戸に手をかけたが、上手く開けられないので蹴りを入れた。

かかどがじんじんする。

昔の自分だったら、この程度で骨にひびが入っている所だが、何事もなく、二度目で雨戸は外れた。

まだ早朝で薄暗い。

畑の向こうを、うねる様な動きで走って来るかまいたちが見えた。やっぱり三匹居る。

十三人食われたという話を思い出した。

こちらから山狩りに出掛ける事しか念頭になかったが、当然向こうから来る可能性もあったのだ。

村の人々は、もう、守りを固めていた。

男女や年齢の別なく、ランダムに並んでいる様に見えるが、これが魔力の高い順なのだろう。

松吉の奥さんが最前列に居るのが見えた。

「やばい…」

周囲を見回したが、武器になる様な物は何も無かった。

とりあえず、昔、先に鍬が付いていたのではないかと思われる棒を拾って駆け出した。

本社から来た魔法使いが、先の方に展開している。

上方ハルオ、ヨシオという、ぼてぼてのお笑い芸人の様な名前の二人と、エンマの三人だ。

少し離れて、こちらから関西本社に転属になったという、平田と斑という、男女のコンビが居た。

更に先に、ジョン太と所長が居た。

民宿松吉とネームの入った浴衣姿で、腰に刀をぶっさしている所長は、何だか間違った外国映画の侍の様に見える。

刀は抜かないで、突進してくるかまいたちを睨み付けてから、かけ声もろとも地面に掌底を撃ち込んだ。

一瞬周囲が振動し、地面がめくれ上がる様に、何本もの壁が伸び上がった。

かべを踊り越えるかまいたちの腹を、下からジョン太が狙い撃ちにした。

一匹が、血を噴き出して転がったが、二匹は止まらない。撃ち出される鎌を避けながら、平田と斑が左右に離れた。

二人の間に蜘蛛の巣の様な物が展開され、二匹のかまいたちを絡め取った。

間髪入れずハルオヨシオが冷氣をたたきつけ凍らせる。

エンマの周囲に舞っていた火の玉が、待っていた様に飛び込んで行って炸裂した。

一匹のかまいたちの首が吹っ飛んだ。

「みんな、このレベルかよ…」

自分が、魔力が高いだけの素人だという事が、良く分かった。

両足が、地面に張り付いて動かなかった。

体中ががくがく震えた。

首を落とされなかったかまいたちが、蜘蛛の巣を引きちぎって立ち上がった。

背中に鎌を作り始めている。

気が付いたジョン太が、おもちゃの様に軽々とロケットランチャーを構えてから、はっとして止まるのが遠くに見えた。

かまいたちは、村の人々に向かって突っ込んで来る。

破壊力の大きい武器では狙えない。

拳銃を抜いて、かまいたちにだけ正確に打ち込んだが、止められる程のダメージは無かった。

村の人達は引かなかった。
全員で防御壁を展開した。

大き過ぎて、壁が薄い。自分達の身を守るには、もっと小さくて分厚い壁を…。

背後に並ぶ民家が視界に入った。

違う。小さい子供や戦えない人間が居るから、引けないんだこの人達は。

「くそっ」

自分の足を、こぶしで殴り付けて叫んだ。

「動けえ！」

次の瞬間、宙に舞った。

両手で棒を握りしめると、震えが止まった。

木材は刀より魔力の通りが悪い。

力を込めて強引に通した。

かまいたちが、鎌を撃ち出すのが見えた。

皆に当たる。

もっと大きくて重い鎌。あれをはじき返せるくらい、速く、強く。

右腕に、奇妙な痺れが走った。

完治するまであまり動かすなと言われていたが、もう、どうでもいい。

痺れが体の中心まで抜けると、代わりに何かが伸び上がった。

びしりと、体中に芯が通った。

外れそうで不安だった腕も、着地の度に折れないか不安だった骨

格も、何もかもに外側から補強が入った様に安定した。

どんな衝撃にも耐えられる気がした。

もう、繰り出す魔法に、自分の体が耐えられるかとか、気にしなくていい。

叫び声を上げて、魔力の通った棒を振り下ろした。

自分でも信じられない大きさの半月形の鎌が撃ち出され、反動で更に宙高く飛び上がった。

轟音を上げてかまいたちの鎌を叩き付け、勢い余って地面をえぐり、大穴を空けた。

突進は止まった。

かまいたちが、周囲を見回した。

上空を見上げるまでに、少しの時間があつた。

その間に、体を反転し、落下を始めた。

棒を投げ捨て、落下方向に向かって、体を真っ直ぐ伸ばして空気抵抗を減らし、定まった方向に向かって、軌道を安定させる為に回転しながら重量を増した。

最初にかまいたちに会った様な森林を想定して練習していた。

障害物のない場所で飛んでしまつたら、落下地点はもう、微妙な修正しか効かない。

いつも溝呂木先生に「本番に強い奴」と言われていた。

もちろん、練習をさぼってバイトに行ってしまうくせに、公式戦ではそこそこの結果を出す自分への叱咤だが、この際ほめ言葉だと思つて信じよう。

俺は本番に強い。絶対、当たる。

上空からは、小さな点だったかまいたちの首筋に、正確に着地した。

つま先が触れた瞬間、更に重量を追加して、巨大な生き物を地面に叩き付けた。

只では済まないと思つたが、耐えられた。

屈み込んで、毛皮に覆われた首筋を掴んだ。

ハザマに何度も治療されていたので、相手の体に魔力を通す方法は、もう熟知していた。

もっと重く。動けないくらい。

ずしんと音を立てて、長い体が地面に倒れた。

もちろん、自分の重さもその分だけ増している。

遠くでジョン太が、目をむいてこっちへ駆け出すのが見えた。

「何やってんだあ、お前。地球人でも死ぬぞ、それ」

所長がジョン太に足払いをかけて止めた。

最初にジョン太が銃弾を撃ち込んだかまいたちが、立ち上がりかけていた。

「五分止めろ、サバあ」

所長は命令した。

「五分は無理い」

鯖丸は叫び返した。

「じゃあ死ね」

所長がリーダーになったら、命令には絶対服従らしい。

「はい、止めます」

鯖丸は叫んだ。

「それと、所長。おっぱい見えてます」

所長は、浴衣の前をぎゅっと締めてから、きつと顔を上げた。

「見なくていい」

「はいっ」

すらり…と、所長が刀を抜くのが見えた。

剣道をやっている自分から見たら、型も何もかもめちゃうちゃだが、すごい迫力だ。

全員が、立ち上がりかけたかまいたちに向かった。

ハルオヨシオの冷氣で、地面に釘付けにして、平田と斑が確保し、ジョン太とエンマが波状攻撃を仕掛ける。

本気のちんぴら剣法で、所長がかまいたちを真つ二つにするのに、五分はかからなかった。

世の中は広い。

溝呂木先生が見たら、何て言うだろう。こんな無茶苦茶な人。

「よし、放せ」

所長は命じた。

もちろん、確保しているかまいたちを放すのは簡単だが、大変な事に気が付いてしまった。

「すいません。余力がないから、もう飛べない」

「そうか。斑」

「はい」

歌舞伎の土蜘蛛の様に、両手から糸を出した斑が、鯖丸を絡め取った。

体を軽くすると、そのまま空中に投げ捨てられた。

着地の面倒までは見てもらえないらしい。

体を捻って、どうにか藁葺き屋根に背中からぶち当たって止まった。

立ち上がったかまいたちは、走り出した。

村の中心を走り抜け、裏手の山に逃げ込もうとしている。

「残り一匹だ。追うぞ」

「所長おお、乳首見えてるからあ」

ジョン太が、自分のシャツを脱いで渡していた。

「うるせえ。見せてんだよ」

ジョン太を蹴飛ばしてから、シャツを羽織った。

豪傑の様に振る舞っていたが、そうやって男物のシャツを羽織ると、小柄な女だという事が良く分かる。

袖口を折り返してから、振り向いた。

「鯖丸、お前はもういい。戻って休め」

「ええっ、何で。まだ行けます」

実際、調子は悪くなかった。

あれだけの事をしたのに、体のどこも痛くない。

「なあ、兄ちゃん。悪い事は言わんから」

ハルオヨシオのどっちかが言った。

「深呼吸してから、自分の頭、触ってみ」

皆が走り去ってから、鯖丸は言われたとおり頭に手をやった。

何かが額から生えていた。

長いのと短いのが二本ずつ。握ってみると感触があるので、自分の体の一部だと分かる。

「えええっ、何これ、角お」

叫びながら、目の前にかざした両手を見て、更に驚いた。
両方とも、人間の腕では無くなっている。

特に怪我をした右手がひどい。

がっちり、鎧の様な、甲殻類の皮の様な物に包まれて、斬られた場所からは、無数の棘が生えて、全体を補強していた。

「何じゃこりゃあ」

夭逝した大昔の名優の様なセリフを吐いて、鯖丸は地面に転げ落ちた。

「あああ、こんなにしちゃって」

ハザマは、ため息をついた。

鯖丸は、神妙な顔で医者の前に正座していた。

「まずいですか」

元に戻ろうとしたが出来ない。

先刻鏡で確認したが、思った程ひどい事にはなっていないかった。
角が生えて、両手が変わるだけで、おおむね普通の人間だ。

ただ、体中の骨格が、内側から補強されているのは自分で分かった。

たぶん今なら、地球育ちの人間より頑丈だろう。

最後のかまいたちを追って行った皆は、割合速く戻って来た。

手負いの一匹に、本社合同の精鋭部隊で当たったのだから、当然かも知れない。

戻って来たジョン太は、鯖丸を見て固まってしまったが、ハザマと普通に会話しているのを聞いて、その場にへたり込んだ。

姿が変わっているから、曉だと思ったのかも知れない。

「良かった…」

「良くはないよ」

ハザマは言った。

「自力で、こんな変な風に治しちゃって。まあ、怪我は大体治ってるけどなあ」

それは朗報だ。

「元の姿に戻れますか」

鯖丸は聞いた。

「戻せるよ。慣れたら自分でも出来る」

ハザマは、あっさり言った。

「何もしなくても、魔界出たら元通りになるけどな」

それもそうだ。特に深刻に考える事でもない。

「やって見せるから憶えて」

ハザマは、鯖丸の額に指先を当てて、少し力を込めた。

あっけないくらい簡単に、元の姿に戻った。

自分の両手を見て、頭に触ってから、鯖丸は少しほっとした顔をしたが、ハザマはシャツを脱がせて、あちこち点検してから、肩を落とした。

「折角もうちょつとで、傷跡も残らないくらい綺麗に治せたのに」切れた腕と肋骨を折られた右胸に、けっこうひどい傷跡が残っていた。

触ってみると、皮膚の感覚が少しおかしいが、まあ、普通の古傷に見える。特に問題があるとは思えない。

「別に、服着れば隠れるから、いいですよ」

「脱いだら見えるじゃないか。水着とか着れないぞ」

一体何の心配をしているんだ、この先生は……。グラビアアイドルじゃないんだから。

「普通に着ますよ。これくらい」

寒いのでさっさと服を着込みながら言った。

「そんな傷があると、女の子が引くよ」

「うっ…それは」

急に、重大な問題に思えて来た。

「まあ、いきなりあんなのが襲って来たんだ。黙って見てる訳にもいかねえだろうし、仕方がない。」

後で調子の悪い所があったら、連絡してくれ。手紙くらいはここ

でも届くから」

よっこらせと立ち上がって、ハザマは言った。

「何かあったら外の医者に診せられる様に、診断書出しとくから待ってな」

いきなり、普通の医者のような事を言い始めた。

「それと、ジョン太。ちょっと来てくれ」

二人で奥の診察室へ消えたが、割合すぐ戻って来た。

「じゃあこれ、診断書」

普通の茶封筒を渡された。

「もう帰っていいよ。お大事に」

「あ：はい。お世話になりました」

割合あっけなく解放された鯖丸は、拍子抜けしたまま挨拶した。

昼前にはもう、撤収だった。

仕事が終わったら、長居するつもりはない様だ。

本社の人達は、所長が怖いのか、単に別方向へ帰るからその方が便利なのか、なにわナンバーのRVに固まってしまったので、支所に帰る三人は、いつもの四駆に乗り込んだ。

ハンドルは、来た時と同じで鯖丸が握った。

所長は後部座席に偉そうに座ってしまったし、ジョン太は何だか疲れている様に見えたからだ。

「大丈夫？」

路肩の崩れた狭い道を、的確に走りながら、鯖丸は聞いた。

「お前に言われるなんてな」

ジョン太は苦笑いした。

「大変だったな、今度の仕事は」

「うん。何か色々」

しばらく黙って運転していた鯖丸は、たずねた。

「溝呂木先生に、何か聞いた？」

ジョン太は、少し迷ってから、うなずいた。

「聞いたよ。暁の事とか」

「そうなんだ」

戻って来た時の、ジョン太の様子が変だったので、そうじゃないかとは思っていた。

それからしばらく、三人とも口を利かず、車は走り続けた。

診断書を書くついでに、ハザマに聞かされた話を、ジョン太はずつと考えていた。

「治療の時は魔力を通すから、相手の事は良く分かるんだ」

そうでなくては、魔力で他人の体なんかいじくれない。

一方通行だが、リンクを張った状態に少し近いとハザマは言った。

「一体何なんだ、あいつ。三人居るぞ」

まだ他に居るのかよ…と、ジョン太は頭を抱えた。

一応、溝呂木に聞かされた話を手短に説明した。

そうか…と、ハザマは納得した様子だった。

「魔界に長く居ると、まずいつて言われたんだが、何かなかったか」

「別に何も」

診断書を書きながら、ハザマは言った。

外でも良く見かける、普通の診断書だ。

ハザマは、外界での医師免許も持っている。魔法医としては、めずらしいタイプだ。

「その師匠はなあ、心配性だ」

二枚目をめくって書き続けながら、ハザマは言った。

「こっちに居て、あれだけきちんとしてコントロール出来てるんだ。問題ない。外界じゃ完治したと言われてるんじゃないのか」

めずらしい病気だから、わしは実例を診た事はないんだが…と、ハザマは言った。

「本人は、治った様な事を言ってた」

ジョン太はうなずいた。

「出て来たら、どうすればいい？」

「普通に接してやれ」

ハザマは言った。

「二人とも、別に悪い奴じゃないよ」

書き終わった診断書を茶封筒に仕舞って、ハザマは文机の前から立ち上がった。

「わしはなあ、お前の方が気がかりだ。いつ檻の中から出て来る？」

「もう、無理かも」

ジョン太は、諦めた様な感じで言った。

それでも、普通に生きて行ける。

「けっ、チキンが」

ハザマは言い捨てて、皆が居る部屋に戻って行った。

それが二時間程前だ。

車は走り続けていて、風は冷たいが、日差しは暖かだった。

ゲートが見えて来た。

後部座席で寝ていた所長は、起き上がって伸びをした。

ハザマ医院では昼時だった。

いつも通り手伝いに来たますみちゃんは、いつもならお代わりを山盛りにしている青年が居ない事に気が付いた。

おかげでごはんが余っている。

炊事のおばちゃんが、おにぎりにして並べるのを手伝ってから、ハザマの所へ行った。

今の所患者として通っているが、雑用を手伝ってバイト代はもらっている。

将来的には、こういう仕事に就くのもいいかも知れないと思い始めていた。

「こんにちは、先生。鯖丸兄ちゃん居ないんですけど」

「ああ、あいつは退院したよ。外界に帰った」

関節を悪くした老人を治療しながら、ハザマは言った。

「あいつが居た部屋、片付けてくれるかな。来栖さんが入院するか
ら」

「はい」

そんなに急に居なくなるとは思わなかった。
いずれ居なくなるのは知ってたけど。

何だか胸が苦しい。

じっとしていたら涙が出そうだった。

雑巾とほうきを持って、鯖丸が居た部屋に入った。

最初の二日くらいは、本当に辛そうで、得意な冷却の魔法で、冷たくしたタオルを、ハザマ先生に言われた通り首筋や額に当てて冷やしてあげると、ありがとうと言われた。

背が高くて優しそうに笑って、親身になって話を聞いて、一緒に泣いてくれた。

どうして、こんな急に…。

掃き出し窓と障子戸を空けて、部屋に空気を通してから、日の高い内に布団を干してしまおうと、持ち上げた。

ばさりと、何かの雑誌が足元に落ちた。

「あ、忘れ物だ」

今からなら、日義のおっちゃんが持っているカブに乗せてもらえば、追い付けるかも知れない。

せめてお別れくらいは。

雑誌を拾い上げ、ぱらぱらとめくったますみちゃんは、その場に硬直した。

絶対にローティーンには見せてはいけない、身も蓋もない巨乳物のエロ雑誌には、所々に折り目が付いていた。

「うわ」

変な声を上げて、床に放り出した。

かっこいい鯖丸兄ちゃんが、単なるエロいアホ青年に失墜するまで、0.2秒。

「無い、これは無いから」

汚い物を捨てる手つきで（実際、ちょっと汚いかも）エロ雑誌を屑籠に放り込んだますみちゃんは、同じ様な感じで布団を縁側まで

引っ張り出した。

「もういい、あんな奴」

ちよつとませていて、色々知っていたのが敗因だったが、可哀相な感じで、初恋が終わってしまった。

別に、誰も悪くはないんだが…。

その頃鯖丸は、自分の人生初のモテ期が、あっけなく終結した事も知らず、所長のおごりで焼き肉を食っていた。
割合幸せだった。

二話 ジョン太（後編）（後書き）

※解離性同一性障害

強い心的外傷などにより、一人の人間に二つ以上の人格が現れる様になる疾患。一般的に多重人格と呼ばれる事が多いが、必ずしも同義ではない。

この物語はフィクションです。魔界に係わる性質上、実際の解離性同一性障害や薬物中毒とは、違う表現になっています。

三話 鰐丸（前編）

「今度いつ会える？」

ホテルのベッドの上で、背中に和風の刺青が入った男は、半身を起こした。

「さあ」

ほっそりした体つきの少年は、投げやりな口調で言った。

「俺も、そろそろ出て来にくくなっててさあ」

細い体つきだが、背は低くない。

きゃしゃな体を、無理矢理ぎりぎり巻いた様な筋肉が覆っている。

「ほら、俺一人の体じゃないし」

煙草の煙を吐き出して、投げやりに笑った。

「そうか、まあ、仕方ないんだろうな」

どう見ても、職業ヤクザな青年は、ベッドに寝そべった少年の頭をくしゃりとなでた。

「お前が居なくなったら、寂しいよ、あきら暁」

「ウソ付け。俺の持つてるルートがもつたないだけだろ」

「それもあるな」

どこかの組の若頭だと聞いていたが、はなから憶える気も無かった。

何もかも、どうでもいい。

「帰るよ。金は払っておく。小遣いは足りてるか？」

「俺は足りてるけど、玲司は困ってるかも」

手の中に、紙幣が何枚か押し込まれた。

「会計、別々なんだ」

「そうだよ」

男は、一度も玲司に会った事はない。

もちろんミツオにもだ。

「来週、現物が必要なんだが、出来るか」

「ああ、いつもの場所に用意しとく」

少年は、煙草をくわえて起き上がった。

「もうすぐ玲司が戻る。早く帰れ」

「また連絡するよ」

ヤクザ屋さんの青年は、いかにもなスーツを着ながら、暁の頬に手をかけ、唇を重ねた。

「会えたら、またね」

手を振った暁の体が、びくりと震えた。

うつむいて、次に顔を上げた時には、別人の表情になっていた。

「ああ、まただ」

膝に顔を埋めて、少しの間止まった。

立ち上がり、手の中にある少額ではない紙幣に気が付いて、床に投げ捨てようとしたが、気を取り直して、床に放り出された学生服の内ポケットにしまった。

室内からガラス張りになったバスルームの鏡に、自分の姿が映っている。

情けないくらい細い体に、無理をして付けた筋肉と、長すぎる手足。

低重力の地球外コロニーで生まれ育った人間の、典型的な体型だ。同じ条件の帰国子女の中では、かなり上手に地球環境に適応している。

別に、来たくて来た地球でもないんだけど…。

暁が居なかったら、地球に来る必要なんか無かった。

軌道上には、こんなややこしい病気を治療出来る医者が居なかっただけだ。

バスルームに入って、見た事もない男の精液と自分の血を洗い流していたら、涙が出て来た。

地球に来る前から、良くある事なのに、いつまでも慣れない。

もう、うんざりだ。

今時珍しい、昔ながらのきっちりした詰め襟学生服を着込んで、

ラブホテルを出ると、九時を過ぎていた。

この辺りでは有名な進学校の制服なので、周囲から奇異の目で見られた。

どうでもいいや。

今日は学校はさぼろうと思って、ぶらぶら歩き出した。

川沿いの散歩道は、桜が満開だった。

舞い散る花びらが、頬に当たった。

こんな時だけは、地球に来て良かったと思う。

上を見上げながら、ゆっくりと桜並木を堪能し、早い時間なのにもう場所取りをしている花見客を避け、公園のベンチに腰を下ろして、暁が持っていた煙草に火を付けた。

缶コーヒーでも買って来れば良かった。

二本目の煙草に火を付けた所で、背後に赤い光が点滅するのが見えた。

程なく、花見の酔っぱらいや違法駐車を取り締まる為に出て来た警官に、左右から囲まれていた。

「君、学校は？ここで何してるの」

煙草を吸っていたのは、見れば分かるはずなのに、この手の人達は、わざわざ聞いて来る。

「花を見ながら、自分の人生に絶望してました」

煙草を隠そうともせず、吸い続けながら、ぼんやりと言った。
怒っている風だった警官の表情が、急に優しくなった。

「大丈夫かい君。どこの中学？」

「高校生です」

「そうなんだ。一応、署まで来てもらうけど、ご両親は」
「居ません」

「じゃあ、他に保護者の方を呼んでもらうけど」

「そんな人居ません。期限まで拘留してください」

警官にポケットと鞆を探られ、学生証を見付けられた。

「秀峰高校二年、武藤玲司君……」

警官の片割れが、ああ……という顔をした。

「溝呂木先輩を呼ぶけど、いいかな」

「はい」

何回も補導されていると、顔見知りが増えて来る。めんどくさい。まあ、今日は煙草しか持っていなかったのは幸いだった。

暁はいつも、援交とドラッグを繰り返している。

とは言っても援交は男相手だし、ドラッグは自分でやるならまだ可愛い、売人だった。

本人は、マリファナと煙草くらしいかやらない。

捕まるのは自分なのだから、いい加減にして欲しいと思う。

これで自分が女の子だったら、暁の尻ぬぐいで何回くらい墮胎するはめになっていただろうと思うと、ぞっとする。

暁がゲイで、自分が男の子で本当に良かった。

ネガティブな良かった探しを始めた自分に、ちよっとうんざりした。

パトカーに乗せられて、窓の外を流れる景色を見ながら、玲司はぼんやりと考えた。

もう、何もかも消えて無くなればいいのに。

桜の花は綺麗だけど。

「所長、お仕事くださいー」

鯖丸がもみ手をしながら現れた時、ジョン太は死にそうだった。

「今月は三件も入っただろう。留年しそうなんじゃなかったの君」所長は、ちよっと顔をしかめた。

どこのメーカーとも分からない、小汚いジャージを着て、頭には粗品丸出しのタオルを巻いている。

また、電車に乗らないで走って来たらしい。

「いえ、おかげさまで無事三回生になりました」
どうにか単位は足りたらしい。

「今月、厳しいんです。お願いしますよ所長」
皆に恐れられている所長にすり寄っている。天然はこれだから怖い。

「君に回せる様な仕事は来てないよ。ほら、これやるから帰りなさい」

机の引き出しからうまい棒を取り出して渡した。

所長もだいぶ、鯖丸の扱いに慣れてきた様だ。

「所長。例の件、まだ担当が決まってなかったんじゃ」

最近、斑と一緒^{またら}に本社から戻って来た平田が言った。

二人とも、営業で魔界に出る準備をしているので、別件を担当しているのだろう。

「こんな奴、連れて行ける訳ないだろう。私とジョン太で出る」

「気の毒に……」

平田は、ちらりとジョン太の方を見た。

「俺も連れて行ってください。うまい棒だけじゃ、月末まで無理」

あと四日もある。それは無理だろう。

「気の毒に。ほら、これもやるから」

なぜか机の下からチキンラーメン五個パックを取り出した平田は、鯖丸に寄越した。

一袋目は、半分程生食した形跡があった。

「うわ、ありがとうございます。助かります」

四日間生きていく目処が立ったらしい鯖丸は、帰りかけた。

突然、今まで机の前で死んでいたジョン太が立ち上がった。

「もうだめだー。俺、ちょっと仮眠して来る」

奥にある仮眠室というか、単なる物置に入って、ばたんとドアを閉めた。

「何かあったんですか」

鯖丸は、不思議そうに聞いた。

「君の知り合いで、何とか言う先生と飲みに行ったらしいが、聞いてないの」

「溝呂木先生ですか」

鯖丸は、怪訝な顔をした。

かまいたちの件で魔界から戻ってすぐに、二人が喧嘩した事を知った。以来、お互いの口からは、悪口しか聞いた事がない。

「そう、確か新体操部の顧問で…」

「剣道部です」

所長は、聞き流した。特に何部でも興味はないらしい。

「ジョン太って、酒は飲まないんじゃないんですか」

昔薬物中毒だった事は、本人の口から聞いていた。

そんな事もあって、酒も煙草も一切やらないのだと何となく思い込んでいた。

「飲めないんだよ。でも、あいつ飲ますと面白いからなあ」

明らかに、所長も以前何かやっている。

「仲いいのかなあ、二人とも」

鯖丸は、考え込んだ。

所長は、しばらくの間、紙の書類とパソコンを行き来しながら、仕事していた様子だったが、ふと…という感じで、顔を上げた。

「武藤君…」

「はい？」

「君、今日は時間ある？」

「二時くらいまでは」

留年しない様に色々助力してくれた倉田教授から呼び出されている。

どうしてもそれだけは予定を外せない。

「じゃあ、ジョン太が起きて来たら打ち合わせだ。明日から人捜しが一件入ってる。たぶん三日くらいで終わるが、やるかい」

「やります、ぜひやらせてください」

明日から三日間仕事だという事は、バイト代がもらえる上に、月

末まで食いつぱぐれが無いという事だ。

絶対にやらなくては…。

じゃあ、俺達は行つて来ますから…と、事務所を出てから、平田と斑は顔を見合わせた。

「可哀相に…あの子」

斑は、ため息をついた。

「じゃあ、君が替わつてやれよ。本当は、所長と君でやるのが一番なんだから」

平田は、言った。

「絶対嫌」

斑は断言した。

一時間程でジョン太は生き返った。

所長に命じられて、事務の斉藤さんを含め、四人分の弁当を買つてきた鯖丸は、お茶をいれていた。

事務所の給湯室には、コンロが二口あって、小型の冷蔵庫も置いてあったが、中には所員の私物の飲み物とか、キープしてあるおやつが入っていたが、ペットボトルのお茶は無かった。

「所長、冷蔵庫にお茶がありません。すぐ買つて来ます」
茶を持って来いと言われた鯖丸は、叫んだ。

所長は、頭を抱えて、事務のパートで入っている斉藤さんに言った。

「斉藤さん。あのバカに教育的指導」

「はい」

孫も居るという事務のおばちゃんに、お茶というのは自分で作れる物だと聞かされて、鯖丸が目からウロコを落としている頃、ジョン太はよろよろと起きて来た。

「こんな葉っぱが…」

そう言えば、民宿松吉でも、ハザマ医院でも、急須やヤカンからどんどんお茶が出て来たと思っていたが、中には葉っぱが入ってい

た。

「おー、何でお茶くみなんかやってんだ、お前」

鯖丸から茶を受け取ったジョン太は、一口飲んで顔をしかめた。

「これは、お茶…?」

「たぶん…」

自分で入れておいて、鯖丸も考え込んだ。

結局斉藤さんが入れ直した茶を持って来てくれると言うので、二人は事務所に戻った。

所長は、遅いと文句を言ってから、話を始めた。

「サキュバスが家出した」

「またですか」

自分の机に座って、弁当の包みを開けたジョン太は、うつ…という顔をした。

唐揚げと、ぎつとりしたフライが入っている。

「誰だ、これ買って来たの」

「あ、俺」

自分の分は、すでに半分食ってしまった鯖丸が言った。

所長も、若者に弁当のチョイスを任せるんじゃないかかったという顔をしている。

斉藤さんがお茶を持って戻って来たが、意外と平気そうに、ぎつとりした弁当を食べ始めた。

「それで、所長と斑が行くんですか？」

まだ二日酔いで、頭があさっての方に行っているらしいジョン太は、たずねた。

「斑はさっき平田と出ただろう。寝てたのかお前は」

「寝てました」

そうだったな…と、所長は言った。

「じゃあ、所長と斉藤さんが…」

「まだ寝てるのか」

所長は、わざわざ机を回り込んで来て、ジョン太を殴り付けた。

「やめて、頭痛いのに、これ以上はほんとやめて」

所長にお願いしていたジョン太は、ふいに正気に戻った。

「えええ、俺が行くんですか。マジで」

「だからこうやって、打ち合わせしているんだろう」

所長は言った。

「いや、無理でしょう。絶対無理。サキュバスの確保は、男には無理ですよ。何で斑と行かないんです」

「平田と斑に、名指しで先約が入ったからなあ」

所長は、遠い目をした。

斑は、所長と斉藤さんを含め、この事務所に三人しか居ない女だ。平田とは夫婦で、本名は薬師寺という。

もちろん、平田も実際の名前は薬師寺だ。

魔界で本名を知られると危険なので、たいがいは適当なあだ名を使うが、こんな本名っぽい名前を使っている奴はめずらしい。

「お前達はサポートでいいよ。確保は私がやる」

所長は、めずらしく優しい事を言った。

「まあ、それくらいしか出来ないと思いますけど」

斉藤さんの入れてくれた美味しいお茶をすすって、ほっとため息をついたジョン太は、食い終わった弁当箱を分別している鯖丸をぼんやり見た。

「ところで、何でこいつ居るんです」

「連れて行く。ランクSを一人入れておけば、書類上は豪華メンバーだから、技術料をふんだくれるしな」

ジョン太は、湯飲みをぼとりと落とした。

「実際には何の役にも立たんでしょ」

「いいんだよ。毎回毎回、あのバカ女の気まぐれに付き合わされて」

箸を持った手が、ぷるぷる震えている。

「せめて取れるだけふんだくってやらんと」

「だからって、こんな真性の童貞連れて行って、どうするつもりな

んです。絶対、居ない方がましでしょうに」

「真性とか言うなー。将来的には無くなるから仮性と言ってください」

ぐだぐだになって来た。

斉藤さんは、一人冷静に弁当を食い続けた。

「えーと、サキュバスって言うのはね」

ぐだぐだになったので仕切り直した。

「うちのお得意様の娘。戒能悠木奈。年齢は二十八才、既婚。夫は戒能工業の専務で婿養子の時雄。これ、写真な」

ジョン太から渡された写真を見た。

清楚な感じの美人だ。

豪華な内装の居間で、白いワンピースを着て、家族に囲まれて笑っている。

幸せそうで、何の問題もない人に見えた。

「戒能の奴からは、色々便宜を図ってもらってるし、大口の仕事も融通してもらってる。正直言って、逆らえない」

所長は、忌々しそうに言った。

この会社も、裏では何か色々あるらしい。

「こいつは、どっか心のタガが壊れててな。昔から定期的に家出しては、魔界で常軌を逸した男遊びを繰り返してる」

「そういうのは、専門医にちゃんと治療してもらえば、ある程度は治るはずですけど」

鯖丸は、真面目な顔で言った。本物が言うのと、重みがある。

「そんな長い期間、同じ状態なんですか」

「ある種の金持ちは、娘の健康状態より、世間体が大切なんだよ」
所長は説明した。

「ひどい」

「感情移入するな。こいつに捕まったら、お前なんか死ぬまで精気を抜かれるぞ」

「死ぬんですか」

穏やかな話ではない。

「死ぬまで精液をぶちまけて、悶え死ぬ。嫌だろ」

「嫌だー、そんなの」

絶対、嫌な死に方ベストテン圏内だ。

「だから、実際の確保は、私一人でやる」

所長は言った。

「幸い、あいつのタイプの性別は男だけだからな。ジョン太に追跡させて、見付けたら引いてもらう。」

たぶん、向こうで色んな男を配下にして操ってるはずだから、そいつらの排除はお前達でやれ」

ただ…と付け加えた。

「サキュバスの魔法の射程距離は、約百メートルだ。魔力もぎりぎりランクBで、強くはない。」

能力が特殊なだけだが、これが厄介だ。

私が死にそうになっても、百メートル以内には近付くな。死人が増えるだけだから」

「百メートルっていうのは、その人を中心にした、平面ですか、それとも立体ですか」

鯖丸は聞いた。

「分からね。そんな事試した奴は居ないからな」
所長は答えた。

鯖丸は重さを操る特殊能力があるので、ある程度の時間は飛ぶ事が出来る。

「でも飛ぶな。立体だったら、死ぬのはお前だ」

「はい」

「大丈夫だ。百メートルなら、髪の毛一本でも狙えるから」

ジョン太は言った。

まあ、ジョン太なら倍の距離でも難なく当ててるだろう。

「怪我はさせるな。金もらえなくなるから」

所長は釘を刺した。

「殴る時はボディーを狙え。顔はダメだ。跡が残るから」
真性のヤンキーだ。

「所長、体でも跡は残りますよ」

日常的に竹刀でばきばき叩き合っている鯖丸は、一応止めた。

明日の集合時間を決めた頃には、一時半を回っていた。

「ジョン太、今日は上がっていいから、鯖丸を学校まで送って行け。
二時だったな」

所長は言った。

「走れば十五分で戻れます」

既に走る気満々で、柔軟をしている。

普通に歩いたら、四十分以上かかる。どういうペースで走るつもりだ。

「元気だなあ、お前」

もちろん、ジョン太なら徒歩四十分の距離なら、五、六分で走り切る。

生まれ付き身体能力の高いハイブリットだからで、普通の人間には絶対無理だ。

「今月、練習さぼってるから走らないと」

昨夜溝呂木と、そんな話もした様に思えるが、記憶がない。

「ちょっと待て。お前確か、昔のゲーム機持ってたよな」

河原に不法投棄されていたテレビと一緒に拾ってきて、直して使っていると言っていた。

「これやるから、帰ったら十回くらい抜いとけ。気休めでもやらないよりマシだから」

明らかにA Vらしいディスクを渡された。

「ご丁寧に『世界の車窓から』と書かれたカモフラージュタイトルまで印刷されている。」

絶対、ジョン太の私物だ。

「うちのゲーム機、三世代前だから、こんなディスク再生出来ないよ」

鯖丸は断った。

「そうか、プレスタ二号機はDVDだっけ。すぐ焼けるよ」

ディスクをお急ぎ設定で焼こうとしたジョン太を蹴るつもりだった所長は、ちよつと考えて止まった。

「いや待て……。ジョン太、お前今晚、こいつを女の子の居るお風呂屋さんに連れて行って童貞捨てさせて来い。最初がサキュバスじゃ、あんまり気の毒だ」

「あ、そうですね。俺も以前から、どうにかしようとは……」

「待ってください。二人とも、俺をどうしたいんですか」

鯖丸はじりじり逃げ始めた。

「魔界で仕事するのに、童貞じゃめんどくせえんだよ。それともお前、所長に犯してもらうか」

ジョン太は脅した。

「えっ、所長ですか……」

急に逃げるのを中止して、何だかもしもじしている。

「それは……どうしても言うなら」

「気持ち悪いから却下」

所長は断言した。

「明日までにどうにかしとけ」

「うわーん、どうせ俺はキモいよ。彼女居ない歴と年齢が一緒だー。もう放つといてー」

鯖丸は、泣きながらすごい速さで走り去った。

「そうなんだ……」

所長は、意外そうな顔で言った。

「けっこう可愛いのかなあ」

「そう思うなら、気持ち悪いとか言うなよ」

ジョン太は呆れて言った。

「だってあいつ、うちの息子とタメだぞ。そんな奴とやれるかい」

「所長とこの息子さん、もうそんな年なんだ」

さすがヤンキー、ライフサイクルが速い。

「ところで所長」

「何だ」

「あんた鯖丸を皿に使う気ですね」

所長はちよつと黙ってから、悪い顔でにやりと笑った。

「バイト代の分は、しっかり働いてもらわんとなあ。なに、若いんだからちよつとの間なら死にやしないだろ」

「鬼だ」

ジョン太はつぶやいた。

鯖丸は翌朝まで携帯の電源を切って逃げ回っていたが、約束の間にはきっちり会社に現れた。

仕事用の服に着替えている所を見ると、一度は家に戻ったらしい。

「捕まらなかったのか」

所長は、責める様にジョン太を見た。

「ダメでした。あいつが立ち回りそうな場所は、全部押さえたんですけど」

ジョン太は肩を落とした。

「仕方ないからデリヘル二人呼んで、あいつの部屋に放り込んで来た」

「ナイスだジョン太」

「帰ってもらいましたから」

ふてくされた顔で助手席に乗り込んで、鯖丸は言った。

「もったいねえな、おい」

失敗だー、絶対いけると思ったのに。

「仕方ない。ウィンチェスター君、今日は体調はどうかね」

所長にめずらしく名字で呼ばれた。

悪くはない。傍目にも、昨日より毛づやがいいのが分かるくらいだ。

俺、ピンチ。

「いやいや、こんなおっちゃん囧にしても、食いつかないから、はは」

地下の駐車場から車を出しながら、ジョン太は乾いた感じで笑った。

「囧って何の話？」

めずらしく、ダッシュボードに足を放り上げて、なめた態度を取っていた鯖丸は、姿勢を戻した。

ジョン太は、しまったという顔をした。

「お前がサキュバスに食われてる間に、捕まえるんだよ」
所長は、きっぱりと言った。

「ええ、死ぬじゃないですか、それ」
後部座席に頭を突っ込んで、鯖丸は叫んだ。

「大丈夫。頑丈なジョン太が替わってくれるそうだから」

「いや、無理無理。俺、体は丈夫だけど、あっちの方は人並みだから」

「ウソだー。絶対たかれた女性遍歴を繰り返して来たはずだ。だって目がすけべそうだもん」

「人を何だと思ってんだ。殺すぞ、くされ童貞」

二人はつかみ合った。

「運転しろ」

所長は二人を殴り付けた。

「所長！！」

二人は、見事にハモった。

「囧は無しの方向で」

今日も朝からぐだぐだだった。

サキュバスの件で出ると、大体はぐだぐだになってしまふのだと、頭を抱えて所長は言った。

「斑を、俺か鯖丸とチェンジ出来なかったんですか」

いつもの定食屋で、遅めの朝飯を食いながら、ジョン太はぼやいた。

壁の『ごはんお代わり自由』の張り紙の下には『常識の範囲内でお願いします』と、付け加えられていた。

絶対鯖丸のせいだ。

「逃げられた」

所長は言った。

「女同士で出ても、けっこう嫌な戦いになってしまっただよ。あいつ相手は」

「そうなんですか」

そう言えば、何年か前に斑と所長が、不愉快な顔で仕事から戻って来た事があった。

何があったのかは、特に聞いていない。

鯖丸は、いつも通りもりもりメシを食っていた。

「いや：しかし食うね、こいつ」

所長は呆れた。

「意外と、性欲より食欲が勝ってるんじゃないのか。危なくなったら、菓子か何かで吊れば大丈夫かも」

「ああ、まるまるバナナ五本くらい買っときますか」

ジョン太も同意した。

「そんな訳ないでしょう」

言いながら、ご飯のお代わりと、豚の生姜焼きを取って来て、更に食い始めた。

そんな訳ある様な気がして来る。

「いいなあ、それで太らないんだから」

所長は、本気のため息をついていた。

いつも通りゲートを通ってから、会社の倉庫で装備を調えた。

ジョン太は、いつもとは違う銃身の長いライフルを持ち出した。いた。

「遠距離射撃は久し振りだから、ちょっと練習して行きたいんだけど」

「手短にな」

所長は、その辺に腰掛けた。

ジョン太は、小石を拾って、駐車場にしている広場の片隅に立てた杭の上に並べて行った。

それから、どんどん反対方向に歩き始めた。

ずいぶん離れた場所で、距離を調節してから、こんなもんかと言
って、ライフルを構えた。

かなり距離がある。

とても小石が見えているとは思えない。

「当たるんですか、あれ」

所長の隣に座って、鯖丸は聞いた。

「当てるだろ、ジョン太だし」

ジャージのポケットから煙草を出して火を付けた。

「いる？」

軽く箱を振って、一本出しかけにしてから、差し出した。

「いえ：止めたんで」

パンと銃声が響いたが、この距離からでは当たっているのかどうか
も、判別が付かない。

辛うじて、銃を持ち替えて装弾しているらしいのが分かった。

「連射出来ないんだ」

「その方が精度が高いからな」

所長は、付け加えた。

「高いんだよ、オートマチックのスナイパーライフルって」

後は、ジョン太の腕でどうにかしてもらおうと、所長は言った。

「どれくらいの距離から狙えるんですか」

鯖丸は聞いてみた。

「一キロ近くなったら、精密に狙うのは難しいと思うが：」
所長は言った。

「あいつならやりそう」

「ゴルゴか何かですか、あの人」

どんな強力な魔法使いでも、それだけの射程距離を持っているという話は、聞いた事がない。

銃器の有利な点だ。使いこなせばの話だが。

何度か撃ってから、ジョン太は手招きした。

鯖丸は走り寄った。

「おう、その辺で止まれ」

だいぶ近寄った所で、止められた。

「もうちょっと下がって」

的にでもされるのかと、びくびくしながら少し後ずさると、あ、そこでいいと言われた。

「これ、百メートルだから、憶えという」

「ああ」

サキュバスの魔法の効果範囲だ。魔法使いとしては、異常に広い。

「遠い…」

思ったより距離がある。百メートルくらいと、軽く考え過ぎていた。

「意外とあるだろ」

所長の所へ戻りながら、ジョン太は言った。

鯖丸はうなずいた。

「所長、悪いけど危なくなったら撃つからな」

所長は、地面に煙草をねじ込んで、立ち上がった。

「仕方ないけど、殺すなよ」

ジョン太は、返事をしないで肩をすくめた。

魔界はそんなに広くないはずなのに、初めて行く場所だった。

複雑にパイプの絡まった、海岸沿いの大昔の廃工場に、寄り添う様にして街が出来上がっている。

「何これ」

鯖丸は、ぽかんと口を開けて見上げた。

エネルギー効率も何もない、巨大な戦前の廃工場は、何だか古代遺跡のようで美しかった。

たぶん、外界げかいにあったら、取り壊されるか、文化遺産に指定されて保護されている建物だ。

「すごい」

「そうか？」

所長もジョン太も、貴重な建造物には、何の興味もない様子だ。所長に呼ばれて、魔法陣で車を隠す方法を教えられた。放っておくと盗難もあるという話だ。

街の中は少し薄暗かった。

廃工場が空を覆ってしまっている。

街自体には活気があって、道沿いには食べ物屋や日用雑貨、良く分らないジャンクパーツの屋台が並んでいる。

驚いた事に、明らかに外から来たスーツ姿のサラリーマンらしい男女が、ちらほら歩いていた。

「外でやると、特殊な技術とコストがかかる精密機械のパーツなんかも作ってるからな」

ジョン太は説明した。

魔法で製造しても、外の世界で安定して使える技術もある。

ハイブリットも、最初はそうやって作られたと、歴史の教科書には書いてあった。

宇宙開発に使われた技術にも、魔界が係わっている物が多い。

たぶん、魔界が出現しなかったら、人類はまだ、火星あたりに有人ロケットを飛ばすのがせいぜいだっただろう。

にぎやかな通りを抜けて、少し裏に入った辺りで、所長はビジネスホテル草薙と書いた看板のある建物に入った。

魔界の各街や村に、会社の定宿がある事は、鯖丸も何となく分かっ

て来ていた。「とりあえず三日。部屋開いてる？」

フロントの男は、うなずいて鍵を二つ差し出した。

「すみませんね。今、外の人達がけっこう来てて」

ロビーのソファーに、外から来た人間と、こちら側の職人らしい男女が四人、図面を広げて話し込んでいた。

「二部屋しか空けられないけど、いいですか」

「君ら、相部屋でいいかって」

所長は、後ろにいるジョン太と鯖丸に言った。

今までの仕事で、そもそも個室の宿を取った事なんか無い。二人は無言でうなずいた。

「わあ、お風呂がある。便所風呂」

鯖丸ははしゃいだ。

ユニットバスの、そんな汚い名称を初めて聞いたジョン太は、顔をしかめた。

「入って来ていい？」

「後にしろ。すぐに出るから」

驚いた事に、エレベーターが動いていた。

ロビーには所長が待っていて、フロントの男から、少し情報を入手していた。

「やっぱり来てるって、サキュバス」

毎回、家出すると高確率でこの街に来るという。

「困るんですね、あの人」

フロントの男は言った。

「戒能さんには、色々融資してもらってる人が多いから、言い出せないけど、皆迷惑してます」

「分かってるよ。うちも同じだけど、きっちり連れて帰るから」

所長は言って、ホテルを出た。

通りの屋台をきよろきよろ見回して、いつの間にか釜玉うどんを吸い込んでいた鯖丸は、すぐに追いついて所長と並んだ。

「ちょっと待ってください」

「待たんよ。お前、食い過ぎだ」

「そうじゃなくて、サキュバスって、本名知られてるんですか」

「いい所に気が付いたな」

所長は言った。

魔界で本名を知られたら、最悪の場合は死ぬ事になる。

そうでなくても魔法の通りが格段に上がるので、攻撃されれば何倍ものダメージを受けるし、行動を縛る事も、魔力が格下の人間にも簡単に出来る様になる。

魔界で生まれた人間は、親以外には本名を知らないシステムが出来上がっているが、外から来た者は、そうはいかない。

プレイヤーに魔法整形者が多いのは、その為だ。

「サキュバスの魔法は、特殊だ。男相手なら、万難を排して、がつり魔力を通して来る。本名を知られたくらい、へでもない」

「女相手だったら？」

一応、聞いてみた。

「普通。でも、あいつの周囲は、操られてる男共で一杯だから」
所長は、頭をがりがり掻いた。

「ああ、もう思い出しただけでむかつく。ぶっ殺してえ」
すごく嫌な事があったのは、想像が付いた。

いくら所長が豪傑の男前でも、数で押されたらかなわないだろう。

「犯られたの」

一応聞いたら、殴られた。

「別にいいんだよ、それは。ただ、あの女の勝ち誇った笑顔が許せん」

酷い目にあったらしい。

「私があの子を殺しそうだったら、止めてくれ」

「俺には無理。ジョン太に言ってください」

「あいつは今回、遠距離支援してもらわないといけないから」

自分も所長も、獲物は刀で、近距離の攻撃しか出来ない。

「いや、銃器は近距離の方が当たるから、寄ってもいいですよ、俺」

ジョン太は口を出した。

「ダメだ。お前は今回、安全圏で保険になってもらう」

「嫌な役目…」

安全な方がいいに決まっているのに、ジョン太は嫌そうに言った。サキュバスはすぐに見つかった。

街の奥で、自分の縄張りを確保して、周囲にややこしい連中を配備している。

街の中では花街に属する、最初から縛りの緩い場所だ。

廃工場のパイプを上って、サキュバスを確認するのは、鯖丸に任された。

ジョン太でも出来るが、重さを操れる鯖丸の方が楽な仕事だ。

下りてきた鯖丸は、手短に報告した。

「居た」

それだけ言って地面にしゃがみ込んだ。

「ごめん、何か吐きそう」

吐きそうではなく、本気で吐いた。

「気持ち悪い」

「サキュバスはどうしてた」

ジョン太は聞いた。

「何か取っ替え引っ替えやりまくってたみたい。うえっ」

更に吐いた。

「魔力の高い奴の方が、魔法に対する感受性も強いからな。良く耐えられたな」

所長は言った。

「耐えられてません。無理です、あんなの確保するなんて」

「確保は私がするんだ」

「すみません」

短く痙攣しながら更に吐いてから、やっと立ち上がった。

「ひどい。何だあれ」

百メートル以内には近付いていない。

それでこんなだ。

「で、周りに何人居た」

ジョン太はたずねた。

「ええと、八人かな」

指を折ってから、鯖丸は答えた。

「一応下からも確認して来ます」

ジョン太は言って、裏道に入って行った。

「あ、俺も行く」

「あんまり近付くなよ」

所長は後ろから声をかけた。

袋小路になった広場の中心で、男達を周りにはべらせて、サキュバスはソファアの様な物に横たわっていた。

何で屋外で寝転んでいるのかとか、そう言う事はさておいて、獲物や敵を誘い込むにはいい地形だ。

周囲は建物が囲んで、通りから死角になっている。

周囲の建物には、サキュバスの配下らしい男達の気配があった。

ジョン太は、用心深く数を確認した。

西と東に四人ずつ。南には三人。

広場には、鯖丸が確認した八人が居たが、二人は獲物として食われた後らしく、倒れたまま動かなかった。

思ったより数が多い。

単発のライフフルで、この人数を相手にするのは無理だ。

所長はサキュバスの攻撃範囲内に斬り込めるだろうが、鯖丸は無理だ。

やっぱり囧か…と、ジョン太までひどい事を考え始めた時、追って来ていた鯖丸が、ずいぶん後ろで立ち止まる音がした。

魔力が高いと、そんなに感じ方が違う物かと思いつながら振り向くと、必死の顔をした鯖丸が、無言で前方を指差している。

指の先には、倒れた男が居た。

サキュバスの範囲内では、ずいぶん中心から離れた場所に居る。こちらからの距離は、大体六十メートル。

ジョン太は、嫌な予感がして、自分と鯖丸の距離を測った。四十メートル強、離れている。

六十足す四十とかいう、簡単すぎる計算をするまでもなかった。鯖丸の立ち位置が、本当のサキュバスの範囲だとしたら…。

倒れていた男が、ゆっくりと起きあがり始めた。

革ジャンの下から、長い黒髪がこぼれ落ち、裸の白い胸が露わになった。

男じゃない。こいつがサキュバスだ。

そう思っで見ると、ソファーに居るサキュバスは、少し体型がごつい様にも見える。

やられた…と思った瞬間に、もう体が動かなかった。

電気で痺れた様な感覚だが、とてつもなく気持ちいい。

腹の辺りを中心に、快感がぐるぐると渦を巻きながら集まって来る。

捕まる前に銃は抜いていたが、腕が上がらない、手が痺れる。

背後で、鯖丸が刀を抜いて一歩踏み出す音がした。

「来るな！」

ジョン太は怒鳴った。

まだ、指くらいは動く。

全身の力を込めて、腕を二センチだけずらした。

ああ、もっと口径の小さい銃にしておけばよかった…。

微妙に後悔しながら、自分の太股に銃口が当たるのを確認して、迷わず引き金を引いた。

痛みが一瞬、正気を戻した。

サキュバスが驚いて目を見開き、明らかに少し、縛りが緩んだ。

ジョン太は後ろへ飛び下がり、走り出した。

「無茶するなよ」

鯖丸は、並んで走り出した。

周囲の建物から、サキュバスの配下が出て来た。

百メートルの範囲を超えているが、一度操られてしまうと、効果が持続するのか、単に操られていなくても仲間なのか、追ってくる。走りながら撃ったが、まだ手が痺れていた。

一人倒れたただだった。

「くそ、当たらねえ」

「走るのも無理だ。それ、ひどいよ」

鯖丸は、ジョン太の足をちらりと見た。

「そーゆー話は、後で聞くから」

もっとひどい怪我をしたまま、一日戦った事もある。

最も、あの頃は今より若かったし、毎日がつり訓練も積んでいた。

「ジョン太」

鯖丸は、走りながらジョン太の手を握った。

意外なくらい大きくてごつい手なので驚いた。

「このまま逃げるのは無理だ。飛ぶ」

言うなりこっちへ魔力を通して来た。

魔力が低い自分相手に、こんなに短時間で通して来るのは尋常ではない。

気心の知れた相棒だという事を差し引いても、普通の人間には絶対出来ない。

少し鯖丸が怖くなった。

どこまで行くんだろう、こいつは。

急に体が軽くなった。

鯖丸が地面を蹴って飛び上がる衝撃は、腕を伝わって来たが、重さはほとんど感じなかった。

あっという間に、地上から十メートル以上離れていた。

廃工場の壁を、垂直に駆け上がり、斜め上に向かって、更に高く飛び上がった。

「うわ、怖ええ」

手を放したら、絶対落ちて死ぬ。

宇宙軍に居た経験が無かったら、軽いパニックになっていたかも知れない。

鯖丸も、その辺は分かっているはずだ。

下から何度か発砲して来たが、もう、普通の腕では当たる距離ではなかった。

銃を使う奴が二人程居る様子だが、ジョン太の様な玄人ではない。

「あの辺に下りるから」

頭から落ちながら、鯖丸が指差す方向を見た。

単なる裏路地だ。超狭い。

宇宙軍で、体が鈍らない様にやっていた三次元のバスケットを思い出した。

無重力空間では、結構楽しい娯楽だった。

自分達は軍内では割と強い方だったが、コロニー育ちの子供のチームに、ぼっこぼこに負けた記憶がある。

ああ、だからこんなに飛べるんだ、こいつ。

サーカスの空中ブランコより激しく空中をぶん回され、最後にはお姫様抱っこされて着地した。

着地すると通常の重さが戻って来る。

鯖丸は「うわ、重っ」と言って、そのままへたり込んだ。

「ジョン太、重い。体重何キロだよ」

「失礼だな、百キロはないよ」

二メートル近いごつい体型の男としては、軽い方だと思う。少なくとも太ってはいない。

「九十八キロくらいかな」

「重いよそれ」

文句を言われた。筋肉が付きやすい体質だし、仕事上もこれより減らしたくはないのだが。

「じゃあ降ろしてくれ」

地面に放り出されながら、低重力環境で育った人間が、百キロ近

いウエイトを持ち上げていた事実思い当たった。

特に、魔法で補強していた様子もない。

「お前って、凄いな」

「何が」

言いながら、ガンベルトを外し、ズボンのチャックを降ろしている。

「ええええ、何すんのお前」

「傷口だけでも塞ぐから。後は所長にやってもらって」

ズボンをずり降ろされた。

思いの外力が強い。

何かぼんやりと、大食いのガキというイメージで付き合っていたが、実際には身長百八十センチ近い大柄な剣道の有段者だ。

素の状態で弱い訳がない。

「脱がなくていいだろ」

一応抵抗した。

「直に触らないと、出来ないんだ。熟練度低いから」

太股に手を当てられると、沸騰する感じがした。

ハザマが使っている治癒魔法だ。

後遺症とか、傷跡が残るとか考えなければ、もっと楽な一時しのぎの回復魔法もあるのに、何でこういう高等技術から先に憶えてしまうんだ、こいつは。

「痛い。痛いから、もうちょつと優しくして」

ズボン半脱ぎで、裏路地に押し倒されてそんな事を言っている所へ、所長がやって来た。

「何してるの、君ら」

「えーと、何って言われても…」

ジョン太は、説明に困った。

「あ、所長。後はお願ひします」

自分より回復魔法の得意な人が現れたので、鯖丸は簡単にバトンをタッチした。

別に、それはいいけど、状況を説明してからにしろ。

「お願いされたけど、どうする？」

所長は聞いた。

「もう放つといってください」

ジョン太は投げやりに言った。

三話 鰐丸（後編）

ホテルに戻って風呂に入ると、だいぶ気分が良くなった。

サキユバスに捕まった時の、嫌な感覚もほとんど消えている。

皮肉な話だが、魔力が低い者の方が、魔法防御は高い。

バスタオルを腰に巻いて風呂から出ると、ベッドの上で寝転んで本を読んでいた鰐丸は、不思議そうな顔でしげしげとこっちを見た。まあ大体慣れている。

原型に近いハイブリットの、普段服で隠れている部分がどうなっているのか、興味をそえられる人間は多い。

腹の辺りは少し薄いのが、大体全身が白い毛皮で覆われていて、背中と手の甲や肘の辺りは、灰色になっている。

おおむね顔と同じ毛色だ。

今まで何度も仕事で宿には泊まったが、部屋に風呂がある様な、普通のホテルは魔界には少ないので、お互い服を脱いだ所は、見た事がなかった。

「わあ、ジョン太ふわふわだ。触っていい？」

不躰な事を言いながら、本を畳んでこっちへ来た。

「ダメだ。実はごわごわだから」

断ったのに背中の中を触られた。

「本当だ。けっこう剛毛だね」

不愉快そうに視線をそらす奴や、気の毒な人を見る目で、優しい（自称）視線を向ける、自分をいい人だと思っているアホは、全員ぶっ飛ばす事になっていたが、天然には対処出来ない。

「あつ、胸の毛は柔らかいんだ。でも、何でありんがこんなに？」

「それはみっちゃんが…」

うかつに、嫁の変わった性癖まで口走りそうになって、あわてて自分の口を塞いだ。

「お前も風呂入れや。楽しみだったんだろ、便所風呂」

着替えの下着と、すっかりダメになってしまったズボンの替えをダッフルバッグから出しながら、ジョン太は言った。

「うん、今日はちゃんと、髭剃りと歯ブラシ持って来た」

ご自慢な感じで、ぺらぺらな鞆から、安全カミソリと歯ブラシを取り出した。

それ以外の物が全く入ってなさそうな鞆の薄さが気になる。

「それ、普通のホテルは、備品であるから」

「うそ」

そういう事は、早く言ってよ…と、ぼやきながら、鯖丸は服を脱ぎ始めた。

「ジョン太はいいよね。ヒゲ剃らなくていいから」

毎朝、鏡に向かって渋い男の深剃り二枚刃とかいうアホな展開にあこがれていた過去があるので、ジョン太は返事に困った。

「まあ、便利かな」

鯖丸に背中を向けてから、バスタオルを外してパンツを履いていたのに、わざわざ回り込んで来てじっくり見られた。

「あ、普通」

「普通って言うなー!!!」

嫌な過去が甦ったので、思わず首を絞めてしまった。

大体、戦闘用ハイブリットの先祖返りと言うだけで、皆、多大な期待をし過ぎるのだ。

本気の戦闘用なら、めんどくさい生殖器なんか付いてない方がいいに決まっている。

宇宙開発の初期に、製造コストのかかるハイブリットを、更に金をかけて宇宙へ送るより、行き先で増えもらった方がいいと判断した学者が居たのだ。

倫理的に問題はあったが、予算としては物凄い節約になったので、皆が計画を承認した。

大規模な戦争が起こり、ハイブリットの父とも呼ばれたその学者が死んだ後に、大変な事実が発覚した。

人工的に作られたハイブリットが、普通の人間とも交配可能で、もう後戻り出来ないくらいお互いの間で混血が進んでいたのだ。

一時は、厳格な遺伝子チェックと、差別政策を取っていた国連議会も、リベラルな芸風を誇るカナダ政府辺りからじわじわ広がった解放運動に負けて、ハイブリットと一般の人間を差別する事は避けている。

今現在、両者の間に残っている厳格な差別と言えば、感情的な問題を抜きにすれば、公式なスポーツ競技への参加くらいだ。

これだけは、生まれ持った性能が違い過ぎるので、同じ土俵で戦うのは不公平だという意見は、あっさり通った。

ジョン太にしても、十代の頃には、何の訓練も無しに百メートルを六秒台で走れた。

こんな奴をオリンピックとかの競技に出すのは、絶対反則だという事は、自分でも分かる。

中年になった今でも、普通の人間の百メートル世界記録保持者を軽く抜く自信はある。

ただ、下半身の問題に限って言うと、ハイブリットは普通だ。

その普通さが、全然理解されていない。

「普通じゃダメなの」

鯖丸は聞いた。

それは、普通の方が嬉しいが、こういう場合の普通は、たいがいダメな意味だ。

ケダモノの様な外見なのに、何でここだけ普通なのとか、そういう感じの。

「俺は普通でいいんだけど、世間が納得しなくて…」

「へえ」

どうでも良い感じで、普通の部分は素通りして、怪我をした太股に目をやった。

「痛くない？これ」

「ちよっと痛いよ」

正直に言った。

「でも、骨は外してるし綺麗に弾は抜けてるから、大した事はない」
「良かった」

安心したらしく、下着のTシャツとトランクスを、ベッドの上に抜き捨て、ハンドタオルとバスタオルを手を取った。

体育会系の奴は、割と簡単に同性の前で裸になるのは、軍隊と大体同じだと分かっていたが、久し振りに見たので少しうろたえた。ちよっとくらい前は隠せよと思ったが、本人は全然気にしていない。

かまいたちにやられた傷が、まだ痛々しい感じで残っていたが、長い手足にバランス良く筋肉が付いた、いい感じの体だ。

少なくとも、十代半ばまで、低重力コロニーで育った人間には見えない。

ここまで鍛えるのに、どれくらいの努力が要ったかと思うとぞつとするが、今現在の鯖丸からは、そういう暗い部分は全く見えなかった。

ただ、努力では鍛えられない部分が、ちよっと凄過ぎる。

「うわ、無駄に立派だなそれ。使う予定もないのに」

昔から、普通の人間だったらしいのとは思っていたが、こんな部分だけ普通だとかえってむかつく。

「その内使うよ」

むっとした顔で言われた。

「付き合って三ヶ月くらい経った彼女と、海辺の見える公園でデートした後、ええ感じで…」

「それ、童貞の妄想だから」

ジョン太は、釘を刺した。

「いいじゃん、夢くらい見ても」

鯖丸は、文句を言いながら風呂に入った。

あつという間に出て来て、脱ぎ捨てた服を再び着始めた。

「お前、着替えは」

不安になって、ジョン太は聞いた。

「無いよ、三日くらいだし」

嫌な回答が帰ってきた。

「大丈夫だよ。今度の装備は、山本に選んでもらったんだ。一週間くらい着たままで日本アルプスを縦走しても耐えられるって言った」

前回かまいたちに装備をぼろぼろにされた時、所長はめんどくさかったのか、資金だけ渡して鯖丸に勝手に装備を選ばせていた。

ワンドルの友人が選んだ逸品らしいが、ここは山の上じゃない。

「耐えるな、平地なんだから洗え」

「めんどくさいから嫌だ」

凄い意見だ。

こんなで、普通の女の子とええ感じになろうとしている鯖丸の人間性が、根本的に間違っている。

「お前、所長みたいなタイプ、好きだろ」

「うん。かっこいいと思う」

思いの外積極的な意見だ。

「お前はもう、同年代の女は無理だと思う。これからは熟女マニアで行け」

「ええ、何で始まる前からマニアク宣言？ 大体、所長結婚してるじゃん。俺、そういうの気になるし」

「この業界で、細かい事気にするなよ」

「するよ、普通だから」

「お前は、普通じゃない」

「普通って言って。お願いだから」

目指す方向は違うのに、到達地点は似た様な感じになって来た。

「とにかくパンツ買って来い。三日間同じのは、生理的にダメだ俺」
自分ではく訳でもないのに、何本気になってんだ、このおっちゃんは。

「うう、抗菌防臭加工で一週間安心なのに」

文句を言いながら、出張用にもらった財布を持って、鯖丸は部屋を出た。

何でも売っている街だから、下着くらいすぐに見えよう。

「ついでに工場見て来ていい？　すごい建物なんだ、あれ」

「いいよ、今日はもう、メシ食って寝るだけだから」

あんなスクラップのどこがいいんだか…と、ジョン太は思った。

出掛けた後に、鯖丸が読んでいた本が目についた。

どこから借りて来たらしく、管理用のタグが付いている。

宇宙船のエンジン設計に関する専門書で、一通り目を通したが、ジョン太にはそれ以上の事は分からなかった。

「そう言えば、あいつ理工学部とか言ってたなあ」

溝呂木の所でスポーツ根性マンガの様に剣道に明け暮れているのは知っていたが、そもそも何を目標にして学校に通っているのかは、全然知らなかった。

「宇宙船かあ」

生まれた場所に帰りたいのかも知れない。

それとも、もっとずっと、遠い所に行きたいのだろうか。

ジョン太には、分からなかったが、鯖丸の気持ちは、少しでも分かる気がした。

ふと思いついて窓から通りを見下ろすと、鯖丸はホテルを出て表通りに向かっている所だった。

「おおい、靴下も買えよ。二足」

とうとう、おかんの様な事を言い始めたジョン太に手を振って、鯖丸は歩き出した。

背後から、四人の男達が走り寄った。

嫌な感じがした。

窓から飛び降りようと手をかけたが、換気は出来ても大きく開かない構造になっている。

「くそ…割るか」

派手な音を立てるのはまずい。

男達が鯖丸の腕を掴み、一人が背中に銃を突きつけるのを確認して、部屋を飛び出した。

廊下を走り抜け、非常口から外へ出た。

丁度、狭い横道に連れ込まれる所だった。

時間が惜しいので、階段を使わずに飛び降りて走った。

普通に考えれば追い付ける距離だったが、角を曲がった時、鯖丸と男達の姿は、どこにもなかった。

ホテルの備品で置いてある、安っぽいシャンプーの匂いも、その場で消えている。

「やられた」

サキュバスは、追っ手が来ているのは知っていたのだ。

毎度の事だから、来るタイミングも分かっていたのだろう。

うかつに捕まってしまったから、今度の追っ手が男二人だという事も分かっている。

とりあえず、若くてぴちぴちした方からお持ち帰りされてしまった。

「大変だ、こりゃ」

先刻、サキュバスが居た場所まで行ってみた。

広場には粗大ゴミ状のソファが転がっているだけで、周囲にも人の気配は無くなっていた。

「どうしよう」

ジョン太は、呆然としてつぶやいた。

「所長おおお、鯖丸がさらわれた」

ホテルに駆け戻ってドアを叩くと「開いてるから入れ」と声がした。

部屋に駆け込むと、下着姿でベッドの上にあぐらをかいた所長が、ワンカップ片手にするめを食っていた。

そんな格好で入れとか言うな…と思いつながら、ジョン太は視線を

そらした。

「何だ、段取り悪い奴だな。さらわれるなら明日にしてくれればいいのに」

髪の毛をゴムで縛って、ジャージを着込み始めた。

「で、どこに連れて行かれた」

「分かりません」

ジョン太は言った。

「痕跡が消されてて」

「そうか」

手の平を広げた所長は、短く韻を踏んで何かをつぶやいた。

小さな、ぼんやりした光の玉が、手の中に浮かび、一人でふわふわと漂い始めた。

「こんな事になるかも知れないから、あいつには印を付けておいた。行くぞ」

刀を掴んで立ち上がった。

「所長。まさかそれ、俺にも付けてないですよね」

ジョン太は聞いた。

「サキュバスは、おっさんも割と好きだ」

「付いてるんだ…」

どちらかが囹になる運命だったらしい。

急いで部屋に戻ったジョン太は、装備を調べてから鯖丸の刀を掴んで、所長の後を追った。

行き先が分かったのは有難いが、光の動きは、イライラするくらい遅かった。

鯖丸が消えた場所に行き着くまでに、二分以上かかっている。

「早くしないと、あいつ干からびて死ぬかも」

「だったらまだいいが」

光は、道なりに飛び続けていた。

痕跡は消されているが、確かにこの道を通って行ったらしい。

「操られて敵に回ったら、厄介だ」

鯖丸が、高速で飛び回りながら、日本刀を振り回して襲いかかって来る所を想像した。

絶対、敵には回したくない。

「こっちは本名押さえてるから、いざとなったら止められるが、あいつも私らの名前は知ってるはずだからな。

ランクSに名前を呼ばれたら、私でも動けるかどうか…」

ジョン太は、しばし考えてから言った。

「あ、大丈夫です。あいつ雑な奴だから、所長の名前憶えてませんよ」

「うわー、ダメなバイトの見本だな」

所長は呆れた。

「もしかして、お前のフルネームも、知らないんじゃないか」

「知りませんね。言った憶えないし」

名刺にも、ミドルネームは頭文字しか書いていない。きっと知らないだろう。

とりあえず、敵に回っても大丈夫そうだった。

街を抜けて、海が見えて来た。

日は落ちているが、まだ少しだけ明るさが残っている。

周囲には、高級な別荘やリゾートホテル風の建物が並んでいた。

けっこう上の方の地位の人間も、ここへ仕事で来る事があるのだ。

光の飛ぶ速度が、速くなった。

一直線に、海岸沿いの建物に向かっていく。

けっこう大きな別荘だ。

洋風の作りで、周囲には広い庭がある。

「戒能の別荘だ」

所長は言った。

「それ、もう家出じゃないでしょう」

単に、自分家の別荘に遊びに来ただけだ。

光が家の中に吸い込まれるのを確認すると、所長は立ち止まった。

「お前はここまでだ。援護しろ」

別荘としては大きくても、建物の中に踏み込めば、確実に百メートルの範囲内に入る。

ジョン太は、建物全体を狙える場所を物色した。

一人で行くのは絶対無茶だが、自分が行っても足手まといになるだけだ。

「これ、持って行ってください」

鯖丸の刀を渡すと、所長はうなずいて受け取った。

そのまま、後も見ないで庭を横切って行った。

ジョン太は、向かいの建物に走った。

似た様な別荘だが、幸い鍵がかかっている、無人だった。

ピッキングで入り口を開けたジョン太は、上の階への階段を捜した。

玄関は開いていた。

常夜灯が点っていて、ぼんやりとエントランスを照らしている。

発光魔法ではなく、電気の照明だ。

海に面したこの場所では、魔界に属さない対岸から、海底ケーブルで電力を引いているのだ。

とてつもない贅沢だ。

所長は、煙草に火を付けてポケットに手を突っ込んだまま、ぶらりと敵陣に踏み込んだ。

ジョン太が居たら、的になるからと絶対に止められる行為だが、

煙草はドラッグ程ではないが多少魔力を増幅する。

どうせ、こっちが来るのは分かっているのだから、逃げ隠れしても無駄だ。

ぶらぶらと歩きながら、ドアを見付けると蹴り飛ばして中を確認した。

誰も居ない。

元々使わない時は無人なのか、お嬢様が家出して来たら、危険だ

から逃げる事になっているのか、これだけの屋敷なのに、使用人らしい人間の気配も無かった。

人の気配は全部、上から来ている。

嫌な感じの魔力も、二階からじくじく湧き出していた。

「ちっ、めんどくせえな」

だらだらと階段を登り、最後の二段を残して、ふいに止まった。居る。

短時間で決めた方がいいと判断して、自分ではなく、鯖丸の使っている長くて重い刀を引き抜いた。

こんな得物を長時間振り回すのは無理だが、破壊力は高い。

おまけに、魔力だけはバカ高いあのガキが、何回も力を通してるので、刀の方で攻撃力を底上げしてくれる。

びりつと腕が痺れた。

煙草の煙を、すばあと吸い込んで吐き出してから、一氣に残り二段を飛び上がった。

「よし、来いやあ」

床に手の平を叩き込んだ。

床から、天井から、無数の壁がばきばきと伸び上がり、あつという間に五人程が宙に吹き飛ばされ、倒れた。

壁を吹き飛ばしながら魔法が来た。

使える奴はそれ程多くない雷撃系で、人の頭程もある球形の雷が、こちらに向かってぶっ飛んで来る。

まともに当たったら、一瞬で黒こげの死体だ。

刀の切っ先まで魔力を通すと、ぶうんと刀身が振動した。

輪郭がかすかにぼやけた。

そのまま、力はいれないで、ふいと雷撃を押し返した。

行き先を失ってランダムに飛び回った雷球は、廊下の向こうで物凄い落雷を起こし、消えた。

術を使っていた奴も、最悪死んだかも知れない。

刀を肩に担いで、ぐちゃぐちゃになった廊下に、ぶらりと踏み出

した。

即座に飛び出して来た三人は、普通に刀で叩き伏せた。

先頭の一人は、こちらが攻撃する前に、胸から血を噴き出して倒れた。

ちよつと遅れて銃声が聞こえた。

ジョン太が、いいポジションに付いて援護を始めている。

以前斑と来た時程は、腕利きを集めていない。

あの時は最悪だったが、魔界もそんなに広くないし、腕の立つプレイヤーや魔法使いの数も、限られている。

ほとんど全員、二人で再起不能にしてやったからなあ…と、思い出すとちよつと気分が良くなった。

その前に、二人で捕まって、素人物のAVが十本は作れる様な目に遭わされたので、その程度でちゃらにしてやるつもりは全くないが。

「今度は、手応えないな」

口に出してから、嫌な感じがして止まった。

確実に、この先の部屋にサキュバスが居る。

しかし、それとは全く違う、強くて凶暴な魔力が流れ出していた。暗くて深い場所から湧き出した、大き過ぎる力が、闇雲に暴れ狂っている。

こんな奴が魔界に居たら、ウワサでも知っているはずだった。

いや…待て。知り合いだ、これ。

戦力が減らされたら、補充するのは当然だ。

精気を吸うより、手下にした方が、絶対役に立つ。

「くそ、めんどくさい事に」

両開きの豪勢なドアを蹴り開けると、広い部屋の奥で、天蓋付きのベッドに全裸で両手両足を縛られている鯖丸が居た。

勃起したペニスだけが、全体からちよつと違和感があって笑える。

「あっ、所長ー」

助けに来てくれたんだと、嬉しそうな顔になったが、自分の状況

に気が付いて体をよじった。

「嫌ー、見ないでー」

「手遅れか？」

一応聞いてみた。

「まだ。でも、やばい。俺の事はもういいから逃げて」

「手遅れだよ、バラクーダ」

ベッドの向こうで、サキュバスが立ち上がった。

素肌に着た革ジャンの下から、白い乳房が見えている。

ここからは確認出来ないが、下は何も付けていないと思われた。ばらりと乱れた黒髪の下で、凄みのある顔でにと笑った。

背後から、まだ残っていた男達が近付いていた。

反撃しようと、刀を握った手に力を込めた時、ふいに呼ばれた。

「土方里見。止まれ」

全身が固まった。

何で本名を知られてるんだ。

少し考えて、思い当たった。

戒能の持っている情報網を使えば、NMC社員全員の名前を調べるのは、難しくはない。

だが、こっちも相手の名前は押さえている。

押さえ合いになったら、魔力の高い自分が勝つに決まっている。

「戒能……」

言いかけた所で男達に口を塞がれ、床に押し倒された。

全員、低い姿勢を確保して、窓からの狙撃範囲を避けている。

やばい、ジョン太の事も知られている。

「所長、里見ちゃんだったんですね」

捕まったままの鯖丸が、間抜けな事を言っている。

だからどうした……と思ったが、所長の名前も今初めて知ったダメなバイトは、納得した感じでうなずいた。

それから、少し深呼吸して、低い声で淡々と言った。

「土方里見、立て」

ランクSの命令は、サキュバスの命令を何事もなかったかのようにキャンセルするくらい強烈だった。

自分の意志に反して、ぐわっと体が立ち上がった。

引きずられて一緒に立った男の一人が、次の瞬間銃弾で打ち抜かれて倒れた。

ジョン太もいい加減気が立っているらしい。

どうやって装弾したのかと思うくらい短時間で、反対側の腕を掴んでいた男も撃ち倒された。

残り二人は、所長があっという間に叩き伏せた。

「終わったな、サキュバス」

強烈な命令を食らったので、手足に力が入らない。刀を杖にして、何とか立った。

「うちの若い者を返してもらおうか」

ヤンキーと言うよりヤクザのセリフだ。

「所長かっこいいー」

思い切り懷かれている。

「終わったと思うのか」

サキュバスは、にやりと笑った。

明らかに人間の物では無くなっている、尖った歯がこぼれた。

次の瞬間、無数の触手が伸び上がった。

イソギンチャクの触手に似ていない事もないが、もっと均等な長さで肉色で、先端が丸くなっている。

一番似ているのは、エロゲーとかに出て来る、触手物のアレだ。

唯一違っているのは、先端に赤い口紅を塗った様な女の口が付いている事だ。

無数の触手は、あっという間に鯖丸の全身を覆い尽くした。

「どんなマニア向けだー」

所長は一応突っ込んだ。

鯖丸はくぐもった悲鳴を上げたが、それもすぐに聞こえなくなっ

触手の固まりから突き出したつま先が痙攣している。

えぐい光景だ。

普通に犯された方がまだましだったな、気の毒に。

刀を構え直した所長に、サキュバスが言った。

「動くなよ。こいつを生かすも殺すも、もう私の自由なんだから」

さっきどつき倒した二人の男が立ち上がった。

両脇から再び腕を押さえられたが、ジョン太は狙撃して来なかった。

「上司より相棒を取ったな…犬のくせに」

サキュバスは笑った。

すうっと、無数の触手が吸い込まれる様にサキュバスの股間に引いて行った。

あれだけの触手が、サキュバスの小さな体に収納出来るはずがない。

もしかしたら実体のない幻覚なのかも知れなかった。

触手から解放された鯖丸は、普通に起き上がり、にこりと笑って所長に歩み寄った。

「お前、無事…」

目つきが普通ではない。こいつの場合、何が普通か迷う所ではあるが。

「じゃないな、残念ながら」

こちらに手を伸ばして、背中にかけた刀をすらりと抜き取った。

いつも使っている実用刀だ。研ぎに出したばかりなので、物凄くよく斬れるはずだ。

斬られると思った。

こいつの腕は知っている。

新しくなった刀の試し斬りで、分厚い昔の畳を、袈裟懸けに真っ二つにして「わぁ、良く斬れる」とか、無邪気な事を言っていた。

刀が、斜め上段に構えられた。

切っ先が震えている。こいつらしくない。

ふいに、目の中に一瞬だけ正気が戻った。

「所長…」

しゃべるのが辛そうだ。表情が笑ったままなのが怖い。

「ジョン太に、俺を撃てって、言ってください」

ジョン太なら聴覚も普通の人間ではないので、この距離でも聞こえているはずだった。

「ダメだ」

イチかバチかで命令をかけてみた。

「武藤玲司、正気に戻れ」

命令が通ったのは、一瞬だけだった。男に関しては、サキユバスの縛りの方が大きい。

一拍置いてから、刀が振り下ろされた。

たぶん死ぬなと思った。

振り下ろされた刀は、肩の少し上でぴたりと止まった。

「ああ…」

目の前の男は、刀を手を持ったまま、大きく伸びをした。

「また変な事になってるな」

ふう…と両手を下ろし、辺りを見回した。

「いつもこうだよ、玲司の奴」

自分の名前を、人事の様に口に出してから、背中をかがめて所長に顔を近づけた。

「あんたが呼んだのか、おぼちゃん」

顔も体も同じなのに、口調も表情も、知らない男だった。

「呼んでないよ。誰だ、君」

鯖丸に何が起こったのか、事情を知らない所長には分からなかったが、目の前に居るのが別の人間だという事だけは分かった。

「ええと」

さっきまで鯖丸だった男は、少し考え込んだ。

「魔界で本名はマズインだったな」

その辺のルールは、知っているらしい。

「とりあえず、俺の事は鰐丸わにまるって呼べ」

言いながら、所長を押さえている男を、ヤクザキックで蹴り飛ばし、反撃しようと抜いた銃ごと腕を切り落とした。

反対側に居た男は、逃げようとしたが、ずぶりと腹に刀を差し込まれ、倒れた。

「良く斬れるな、これ」

にっと笑って、血だらけの刀を見た。

言っている事は鯖丸と同じだが、怖い。

「お前は、鯖丸には大事な奴らしいから、助けてやる」

所長の顎に手をかけて、上を向かせてから、言い聞かせる様に言っ
て、怖い顔で笑った。

それから、ひょいと突き放した。

「鯖丸だって……。相変わらずだせえ奴」

普通に、サキュバスの居る方へ歩いて行った。

途中で、壁の鏡を見て立ち止まった。

「うわ、ごついな俺。いつの間にこんなになったんだ」

体中を確認して、まんざらでもないという顔をした。

「力もあるな。暴れやすそう」

そのままずかずかとサキュバスに歩み寄ったが、完全に存在は無視して、傍らに落ちた自分の服を拾って着始めた。

「くそっ、相変わらず服もだせえ」

文句を言いながら着終わって、隣に居るサキュバスにやっと気が付いたと言う顔をした。

その間サキュバスはずっと、さっきまで操れていた男を再び動かそうとしているらしかったが、途中から顔色が変わっていた。

男相手に自分の魔力が通らなかった事など、今まで無かったに違いない。

「ああ、何やってんだてめえ」

全く、一瞬のためらいもなく、小柄な女の腹に、本気の蹴りを入れた。

「気持ち悪いんだよ。寄るな淫乱」

サキュバスは、体をくの字に曲げて、部屋の隅に倒れた。

「ところで、どいつを殺ればいいんだ」

「ああ、今のそれ」

所長は言った。

異変を感じたジョン太が、持ち場を離れて駆けつけた時、鰐丸はサキュバスの髪の毛を掴んで持ち上げ、ぼこぼこにしている所だった。

所長は、もう止めるのを諦めて、イスに座って煙草を吸っていた。

「うわ、暁かお前」

鰐丸は、サキュバスを殴るのを止めて、ジョン太の方を見た。

それからゴミみたいに女を放り出して、ジョン太に歩み寄った。

しげしげと周りを回って見てから、近寄って手を握った。

「ジョン太？ やっぱり生で見るとステキ」

手の平を指先でくりつとなでられた。

ジョン太の全身の毛が逆立った。

「放せ。お願いします、放してください」

もう、泣きが入っている。

「どういう事だ、これは」

所長は、腕を組んだ。

「ああ、話すと長いですよお」

鰐丸にべったり寄りかかれて、声が震えている。

こういうキャラだったのかよ、ゲイだとは聞いてたけど。

「別に長くねえ。多重人格ってやつだよ。分かったらてめえは帰れしつしと手の先で所長を追い払おうとしている。

こいつ、絶対所長に殴られると思ったが、彼女は刀を拾い上げて、普通にドアの方へ歩き出した。

「先に帰ってるぞ」

「ええ、何で？ ここは怒る所でしょう」

身の危険を感じて、ジョン太は所長を引き留めた。

「今日はもう、疲れた」

所長は、ため息をついて立ち去りかけ、ふと振り返った。

「そいつと寝たら、鯖丸とリンク張った事になるかも知れんぞ。がんばれジョン太」

「嫌だああ。俺も帰ります。帰って一人で寝ます」

隣に、意味ありげにある天蓋付きのベッドが怖い。

「ほら、サキュバス連れて帰らないと。気が付いたらヤバイから、眠らせてから回復魔法かけましょう。」

黙ってればこぼこにされたのなんて、分かりやしませんよ」

「そうか、後で持ってきてくれ。じゃあな」

所長は、本当に帰ってしまった。

おまけに尻を触られた。

「お前ももう帰れよ、頼むから」

ジョン太は、本気で泣きを入れた。

「ひどい事言うな。久し振りに出て来たのに」

ベッドの端に浅く腰掛けて、ジョン太を見上げた。

「鯖丸はどうなってる」

ふと気になったので、聞いてみた。

「居るよ、俺の後ろ辺りに」

目をこらしたが、別に何も見えなかった。イメージ的な話かも知れない。

「助けてやったのに、また怒ってる」

ちよつとため息をついてから、ジョン太を見上げた。

表情や動作が違うので、普段の鯖丸より二割り増し男前に見えた。

「分かった、帰るよ」

ほっとする間もなく、続けて言った。

「キスしてくれたら帰る」

ジョン太はうっと口ごもった。

確かに別人だが、顔はどう見ても鯖丸だ。これはきつい。

「あ…あのね、俺は、男同士とかそういうの、全くダメで」

「知ってるよ。だからキスだけで帰ってやるって言ってるんだ」

「わ…分かった」

腰をかがめて、軽く唇を合わせた。

ああ、何でこんな事に。

体を離そうとする間もなく、ぐいと両手を絡められ、ベッドに押し倒された。

同じ体のはずなのに、鯖丸より力が強い。

そのまま、舌を入れてゆっくりキスを続けながら、ズボンの中に手を入れて来た。

やばい、それはやばいから。

さすがに同性だけあって、どの辺が感じるか良く知っている。

顔さえ見なければ、割と…いや、やっぱり無理、絶対無理。

かちりと撃鉄が起きる音がした。

鰐丸の頭に、32口径の拳銃が押し当てられていた。

「その辺にしとけや、ガキ」

鰐丸は、いつの間に…という顔をしたが、小馬鹿にした感じで見下ろした。

「撃てないくせに」

にっと笑ってから、もう一度キスをした。

「怒った顔もステキ」

頬の毛をさわりと撫でてから、ふいにがくりと体が傾いた。

はっとした様に顔を上げたのは、鯖丸だった。

「うわ、何これ。何でそんなもん」

自分に突きつけられた銃と、怒った顔のジョン太を見比べた。

それから、ジョン太のズボンに右手を突っ込んでいる自分に気が付いて、ぎゃっと叫んで飛び下がった。

「何でジョン太のちんこ掴んでんだー、俺」

「こっちが聞きたいよ、それ」

ごそごそ服を直してから、ジョン太も鯖丸から少し離れて座った。

「うう、嫌だあ、ちよつと勃つてた」

「言うな、そんな事」

銃をホルスターに戻して、ジョン太は不機嫌に言った。

「暁が出たんだ…」

両手に顔を埋めて、鯖丸はつぶやいた。

「ああ、出たよ」

なるべく普通の口調で、答えた。

「やっぱり…」

しばらくそのまま、じっと俯いていたが、ふいに顔を上げた。

「あいつに何かされた？」

まっすぐこちらを見て、真面目な顔で聞かれたので、適当な事は言いにくくなった。

「キスしただけだよ。まあ、ちよつと触られたけど」

鯖丸は、さっきの状況を思い出しているらしかった。

もっと最悪の事態を想定していたらしく、安心したのか短くため息をついた。

「何か、ごめん…」

「お前が謝る事、ないだろう」

「そうかな…」

「そうだよ」

鯖丸は、少し考え込んでから、言った。

「あいつ、ジョン太みたいなタイプ好きだから、もっとひどい事さ
れたと思った」

「変な趣味だな、おい」

意外と、そう言われると悪い気はしない。大丈夫か、俺。

「あいつ、自分の事鯖丸って言ってたぞ」

「そうなんだ」

今まで、暁がこちら側のルールで動いてくれた事は、希だった。
思いの外、上手くいっている。

「もしかして、お前、自分で暁を出したんじゃないのか」

そんな気がしたので、ジョン太は聞いた。
鯖丸はうなずいた。

「あいつ出さなかったら、俺、所長を殺してたかも」
コントロール出来ているという、ハザマの言葉を思い出した。

あの場面で最良の選択は、鯖丸を撃って殺さない程度に動きを止める事だった。

俺が選べなかったから、こいつが暁を呼び出す事になったのだと思うと、心が痛んだ。

暁が出て来るのと、また大怪我するのと、どっちがいいのかは分からなかったが。

まあ、所長が気合いでどうにかしていた気もする。

あの人はそういう人だ。

「所長は、殺しても死なねえよ。気合い入ってるから」

「うん、本当にすごいよね。かっこ良過ぎ」

「惚れるなよ。一応人妻だから」

ジョン太は、釘を刺した。

「まあ、さばけた人だから、一回や二回は、やらせてくれると思うけど」

「そんなじゃないよ。尊敬してるんだ」

鯖丸は反論した。

部屋の隅で、サキュバスがうめき声を上げたので、二人は会話を中断して、顔を見合わせた。

魔法は、意識があれば体はぼろぼろでも使える。

女に全然興味の無い暁が引っ込んでしまった今、サキュバスが目覚めたら大変な事になるのは明白だった。

「やばい、早く眠らせないと」

ジョン太は、ベルトに付けている物入れから、ファーストエイドキットを取り出した。

小型の簡易注射器と麻酔薬のアンフルを手に取り、慣れた手つきで薬液を吸い上げた。

部屋の隅で倒れているサキュバスに近寄り、革ジャンの袖をめくり上げて、一個ずつパックされている消毒綿で腕を拭ってから、簡易注射器を押し当てようとした。

そのままの姿勢で、固まってしまった。

サキュバスの魔法かと思ったが、それなら魔力の高い自分の方が、先に影響を受けているはずだった。

「ジョン太…？」

「済まん、出来ない。お前がやってくれ」

「うん、分かった」

簡易注射器を受け取る時、かすかに腕が震えていた。

昔、どういう方法でドラッグを使っていたか、大体分かってしまった。

時間が経っても克服出来ない事って、あるんだなと思った。

どれくらいひどい状態だったのか、何となく想像が付いた。

もしかして、俺よりジョン太の方が、ヤバイんじゃないのか…？

「カチって音がするまで、押し込むだけだから」

言われた通りにした。

少しして、サキュバスの体から、がくりと力が抜けた。

二人は、顔を見合わせて、安堵のため息をついた。

「戻ろうか」

「そうだね」

ジョン太は、床に放り出したライフルを肩にかけて、倒れているサキュバスを抱き起こした。

まだ、両手が震えているのが分かった。

鯖丸が横合いから手を出して、サキュバスを背中に負ぶった。

「ジョン太、まだ足痛いだろ」

的確な指摘をされた。

「気い使わなくていいから。普通の人が持てるくらいの重さなら、平気だから」

鯖丸の普通の基準が、どの辺にあるのかは分からなかった。

たぶん、かなり高い位置だ。

低重力コロニー育ちのくせに。

「済まんな、頼むよ」

頼ってしまうと、少し楽になった。

ホテルに持って帰ったサキュバスを、所長と鯖丸で完膚無きまでに回復させた。

所長はまだいいが、鯖丸の回復魔法は、ハザマ直伝なのでほぼ拷問だ。

相手に意識がないのは幸いだった。

「一日で終わってしまった。困ったな」

所長は言った。

「三日分の料金はもらってるのに」

「じゃあ、あと二日遊びましょう」

ジョン太は、魅力的な提案をした。

普通の相手ならそうするが、サキュバスを後二日、意識不明にしておく手段がない。

「帰る、撤収だ」

所長が言ったので、二人はうなずいた。

魔界の入り口には、連絡を受けた戒能雄治が待っていた。

今回の依頼者だ。

ご苦労だったなと言って、悠木奈の腕を掴んで、車の後部座席に放り込んだ。

「いい加減にしろ、恥曝しな」

言葉を投げつけた。

魔界から出たサキュバスは、すっかり毒気を抜かれた普通の女だった。

後部座席に、俯いて座っている。

「あの…いいですか」

鯖丸が、後部座席のドアを開けた。

小さな紙切れに書かれたメモを手渡した。

「この先生、いい人で、ちゃんと話聞いてくれるから」

サキュバスは、顔を上げた。

「君は病気だ。治せるから」

サキュバス：戒能悠木奈は、ため息をついた。

「あんただって、治ってないじゃない」

吐き捨てる様に言った。

「それでも良くなったよ」

鯖丸は反論した。

「考えとく」

車が走り出して暫くして、渡したメモが窓から捨てられるのが見えた。

悠木奈本人が捨てたのか、誰かが取り上げたのかは、もう分からなかった。

翌日ジョン太は、溝呂木に呼び出された。

約束していたと言われたが、全然記憶がない。

おまけに、また飲み屋だ。

「いい加減にしてくれよ、ほんと」

カウンター席で待っていた溝呂木の左側に座ろうとすると、強引に反対の席に座らされた。

「本当に憶えてないんだな」

溝呂木は言った。

「武藤にこっち側の鼓膜破られたから、聞こえないって言っただろ
う」

「ええ、何それ」

初耳だった。

「お前、酒弱すぎ」

「だから、最初から言ってるだろ。飲めないって」

全然記憶がない。

「鯖丸が何やったって？」

溝呂木は肩をすくめて、たぶん二度目になるだろう説明を始めた。「あいつ、最近ろくに練習にも出て来ないしな、そんなにバイトに入れ込んでるなら、俺から一本取れば行っていって話になったんだ」

「あのね、あいつがバイトに熱心なのは、単に貧乏だからで…」
ジョン太は言った。

スポーツ根性物だって、生活の基盤がないと出来ないのだ。
こんな話も、溝呂木に酔いつぶされる前にした気がするが。

「あつという間に一本取られて、鼓膜破られた。何なんだあいつ」
「防具は付けてたんだろ」
ジョン太は一応聞いた。

「当然だ」

溝呂木は言った。

「まあ、仕方ないんじゃないの」
ジョン太は言った。

竹刀で、防具を付けた相手の鼓膜を破る様な奴なら、魔界であれだけ強いのも、納得がいく。

「弟子はいつか、師匠を越えるものさ」

「分かってるけど、お前に言われるのは心外だ」

溝呂木は、不愉快な顔をした。

「俺、剣道の事は良く分からないけど、あいつ、どれくらい強いんだ」

前から気になっていたのでジョン太は聞いてみた。

「お前も、格闘技か何かやってたはずだから、分かるだろう」
溝呂木は言った。

まあ、鯖丸が素の状態で弱くない事くらいは分かる。

「ベストエイトには毎回入るくらいかな」

「ええと、県内で？」

「全国だ、バカ」

バカ呼ばわりされた。

「ええ、そんな強い、あれ」

まるまるバナナを食っている、バカそうな鯖丸の笑顔が脳裏に浮かんだ。

「強いんだよ、あんなで」

溝呂木も、頭を抱えた。

「昔、うちの道場に来た頃は、防具を付けたらまともに立てなかったのにな」

低重力障害の子供は、大体そんな感じだ。

「昇段試験を受けるには、修行期間が足りないから、まだ二段だが、実際の实力はもっと上だと思う」

剣道の昇段システムについては、全然分からなかった。

実力があるなら、気にしないでばんばん上げてやればいいのに。

たぶん精神面とか、どうでも良い様な要素があるのだろう。

「魔界のバイトは、修行の邪魔になると思ったが、逆なのかも」

「どうかな、真剣を振り回してたら、肝は座ると思うが」

考え込んだジョン太のグラスに、どぼどぼ酒が注がれた。

「まあ、飲め」

溝呂木は言った。

「飲まねえよ。前に飲まされて、どうなったと思うんだ」

「知らん」

溝呂木は断言した。

「飲め」

「嫌だ」

二人は、にらみ合った。

その頃鯖丸は、自分の部屋で布団をかぶったまま、途方に暮れていた。

一人暮らしの無精な大学生を絵に描いた様な汚い部屋には、A V

とエロ本が散乱していた。

「やっぱりダメだー」

セーラー服物のよれよれになった本を放り出して、手書きタイトルの付いたDVDを古いゲーム機に突っ込んだ。

古いので起動が遅い。

やっと出て来た中身をばんばんスキップして、いい場面だけ再生したが、しばらくしてコントローラーを放り出した。

「これもダメだ。どうなってんだよ俺」

魔界から戻って以来、全然勃たなくなっていた。

いい感じになって来ても、あの触手に巻かれていた感触を思い出すと、もうダメだ。

ちよっと思いい出しただけで、鳥肌が立っていた。

二十歳で童貞なのにEDだなんて悲惨過ぎる。

「どうしよう…」

EDって泌尿器科だっけ…前に怪我した時は労災が出たけど、これは無理な気がするし、もうちよっの様子を見てから…。

パンツ半脱ぎでエログッズを散らかした状況だが、本人は真剣に悩んでいる。

ふいに何か思い付いたらしく、ケータイに手を伸ばした。

「もしもし山本。ごめん、寝てた?…お前熟女物のAV持ってたよな。あれ貸して。今すぐ」

電話の向こうで、明日でいいじゃんと言った。

「ダメなんだよ。ていうか、もうダメになってるんだ。…え、理由は話すと長いけど、エロ触手に巻かれて、全然ダメに…」

「いいから落ち着け」

全然話が見えない。

「じゃあ、これからそっち行くから」

相変わらず、いい友達だった。

数時間後、山本特選熟女物AVで、鯖丸は復活した。

山本は、再生も出来ないのにしっかり持ち帰っていた『世界の車

窓から』を、交換に持って帰って行った。

程なく山本からメールが届いた。

『すげえ、これ。世界の車窓サイコー』

「うわ、今度焼いてもらお」

溝呂木の心配とは全く別の方向へ、着実に変な風に育ってしまった。
ている鯖丸だった。

三話 鰐丸（後編）（後書き）

注・この物語はフィクションです。魔界に係わる性質上、実際の解離性同一性障害や薬物中毒とは、違う表現になっています。

四話 トリコ（前編）

ごうごうと風が吹き荒れていた。

魔界の最深部に属する『穴』は、ぽかりと深淵の口を開け、異界の大气が目に見える形で噴き出している。

穴の周囲に、二人の男女が立っていた。

ゴーグルと長い皮のコートを身に着けた、がっちりした体格の男と、すらりと手足の長い、赤毛の女。

目に見える風に煽られながら、二人は穴の淵をのぞき込んだ。

「お前は残れ」

女の肩に手を置いて、男は言った。

「嫌だ」

女は即座に答えた。

追っ手が来ていた。

今ここで追いつかれたら、二度と『あれ』を捕まえるチャンスは無くなるだろう。

それが、どういう事態を引き起こすのか、おぼろげにだが女にも分かっていた。

世界が、壊れるかも知れない。

「あんた一人じゃ無理だ。私も行く」

「バカな事言うな。その子を殺す気か」

女は、自分の腹を両手で押さえて、男を見上げた。

「それは…」

「絶対、戻って来る」

女をぎゅっと抱きしめてから、男は走り出した。

しばらく男を見送ってから、女は振り返った。

追っ手はすぐそこまで来ていた。

大半は、顔見知りの同僚だった。

先頭に居るのは、昔コンビを組んでいた青年だ。

今は、本部で割と出世したと聞いている。

「ビーストマスター・トリコ。君には本部から搜索願が出ている」

「へえ、私も有名になったね」

女は、両手をだらりと垂らした無防備な姿勢で、追っ手を見た。

「そこを退いてハンニバルを引き渡せ。今ならまだ、懲罰の対象にはならない」

「そう。本部も優しくなったね」

女は俯いて、少し笑った。

「でも、断る」

右手の指先がぶうんと震えた。

湧き出す様に、得体の知れない怪物が、指の間から躍り出た。

「襲え」

がぱりと怪物の口が開いた。

そのまま、長い体をくねらせて、泳ぐ様に空中を走り、追っ手を飲み込み、なぎ倒した。

男は、穴の淵に立った。

ゴーストを押し上げ、見慣れた優しい目が、こちらを見た。

それから、意を決した様に、穴の中に身を躍らせた。

怪物がふいに消えた。

女は、両手を上げて、追っ手の中に踏み出した。

「終わった。投降する」

無数の手に捕らえられ、地面に組み敷かれた。

「君には失望したよ、トリコ」

青年は、女を見下ろして言った。

「私もだよ」

女は、セリフを切り返した。

「連れて行け」

捕らえられて引きずられながら、穴の淵を見た。

そこにはもう、誰も居なかった。

その日鯖丸は、めずらしく仕事の事でジョン太に叱られたので、少し落ち込んでいた。

別に魔界に入る予定とかは無かったが、保険の更新手続きが必要だったので、事務所に顔を出したのだ。

最初にこの事務所に面接に来てから、一年と少しが過ぎていた。色々ひどい目にも遭ったが、待遇は悪くないし、仕事にも慣れて来た。

相変わらず電車に乗らないで走って来て、雑居ビルの階段を駆け上がると、昼休みなのか事務所はもぬけの殻だった。

不用心だと思いつながら給湯室へ行くと、事務の斉藤さんが昼寝をしていた。

起こさない様にカップ麺を作って食っていたら、電話が鳴った。

「はあい、NMC中四国支所でーす」

鯖丸が電話に出た時、その辺で昼飯にざるそばを食ったジョン太が、戻って来た。

嫌な予感がしたので、すぐに別の電話から受話器を取った。

「あの：西谷商会さんですか。お願いしたい事が：」

電話をこちらに切り替える間もなく、鯖丸は即答した。

「えー、違いますよ。うん：間違い電話には気を付けてね」

「うわー、このバカ」

受話器を置いた鯖丸を、ジョン太はスリッパでぶん殴った。

すぱーんとアホそうない音がした。

「ええ？何」

鯖丸は、怪訝な顔でジョン太を見た。

「お前、うちの会社名、ちょっと言ってみ」

「NMC中四国支所」

自信満々で、鯖丸は答えた。

「違う。略称じゃない方」

「え、そんなのあったの」

本気で驚いた顔で言われた。

「西谷魔法商会じゃ、ぼけー」

もう一回スリッパではたいした。

「お前、一年も居て、うちの会社名も知らなかったのかよ」

「うん、初耳」

天然にも程がある。

「かんべんしてくれよ、もう。いい大人なんだから、電話の応対くらいで、俺にお笑い芸人みたいな突っ込みさせんといて」

普段ガキ呼ばわりしてるくせに、こんな時だけ大人扱いかよ…と、釈然としないまま、鯖丸は反論した。

「別にいいじゃん。俺は現場だけだし」

「それ以前の常識問題だ。出来ないなら、二度と電話取るな」

普段細かい事は言わないジョン太が、本気で怒っている。

それから三十分程、説教されて電話の応対を練習させられた鯖丸は、少し泣きが入っていた。

「全く…、剣道は礼節を重んじる武道じゃなかったのかよ。そんなじゃ次の昇段試験落ちるね。絶対落ちる。ふふふ、これでやっとな溝呂木の奴をへこませるネタが…」

ジョン太が、個人的に暗い情熱を燃やし始めた時、再び電話が鳴った。

鯖丸は、名誉挽回する為、即座に受話器を取った。

「はい、ありがとうございます、NMC中四国支所です」

ジョン太は聞き耳を立てた。

「どのようなご用件でしょうか…はい」

相手がしばらく話しているのが聞こえた。

「かしこまりました。担当の者と替わりますので、少々お待ち下さい」

そのまま受話器を差し出して、鯖丸は言った。

「ジョン太、替わって」

「保留しろ、バカ」

小声で叱ってから、電話に出た。

しばらく話していたジョン太の表情が、少し複雑な感じになった。仕事の依頼だった気がするが、それにしても嫌そうな顔をしている。

「はい、ウィンチェスターは私ですが：ええ、分かりました。一度確認して、こちらからお電話致しますので：はい」

電話に向かって、何度も頭を下げている。

ジョン太って、確か外人だったよな：と、鯖丸は不思議な物を見る目で、日本人のサラリーマンにしか見えない犬型ハイブリットを眺めた。

受話器を置いてからも、ジョン太はしばらく複雑な顔をしていた。

「あ：何か今のまずかった？」

鯖丸が聞くと、ジョン太は首を横に振った。

「俺とお前に、名指しで依頼が来た」

そう言う事は、時々ある。

民間で魔界関係の雑事を引き受けている企業は少ないから、一度仕事を頼んで満足したら、また同じ人間に依頼したくなるのは当然だ。

魔力が高かったり、過去に業績を上げていたりするチームには、面識が無くても指名が入る事もあった。

実はこの時点で、ジョン太と鯖丸のコンビは、少し有名になっていたが、もちろん天然でダメなバイトには、知る由もなかった。

「へえ、かっこいい」

斑と平田が指名の仕事を受けていたりするのを見て、ちょっといいなとは思っていた。

「政府の仕事だけど、どうする？」

まるで、断る事も選択肢にある様な言い方だ。

「夏休みだから行けるけど、何か問題あるの」

明日から合宿だー、という溝呂木の言葉は、忘れる事にした。
長期休暇の間に、入れられるだけ仕事を入れた方がいい。

「めんどくさいだけで、安い仕事だ。やっとならば経歴に箔は付くけどな」

「そうなんだ」

どんな仕事でも、やる事に決めていた。

来年になったら、卒論もあるし、今程がつつり仕事は入れられない。
い。

「俺はやつてもいいけど、ジョン太は？」

「いや：俺はやるけどね。お前が学生なのは向こうも知ってるから、断っても別に、うちの会社に不利にはならない」

ジョン太には断れないという事だ。

「断った方がいいんだ」

一応聞いてみた。

「微妙」

ジョン太は答えた。

「じゃあ、受けていい？ 来年は今程入れないと思うし」

「いいよ」

ジョン太は即答した。

「そうか、来年は四年だもんな。卒論も就活もあるし」

月日の経つのは早いなあと思った。

最初にここに来た時は、もっとおどおどして頼りない感じだったのに。

「あ、まだ就職はしないから、あと三年くらいはここで働かせて欲しいんだけど」

予想とは全然違う事を言い出した。

「大学院に行くつもりだから」

「貧乏のくせに、どんだけ勉強好きなんだよ、お前」

天然を相手にしていると、突っ込み癖が付いてしまう。

「研究職に就きたいから」

ここに来てから初めて、鯖丸は将来の希望らしい事を口にした。

昼休みが終わっても、戻って来たのは所長と斑だけだった。

他の者は営業に出ている。

「いいんじゃない、やれば」

所長は鷹揚だった。

「どうせ、政府の偉いさんの息子とかが、プレイヤーやっててトラブったとか、そんなだろ」

「それが、違うんですよ」

ジョン太は、ちよつと困った顔で言った。

「ビーストマスターって居るでしょう。政府公認魔導士の」

「ああ、居たね、そんな奴」

所長は、うなずいた。

政府関係の仕事を専門にやっている、政府公認魔導士とは、ジャンルが違うので接触する機会はほとんど無い。

同じ魔界関係でも、行方不明の猫を捜したり浮気調査をする探偵と、刑事事件を捜査する刑事くらいかけ離れた存在だ。

「潜入捜査中に、捕まったらしいです」

表立って動けないから、民間で回収して欲しいって」

「そんな仕事を、この金額で依頼して来るか。いい度胸だな、政府の奴ら」

所長は、依頼状を見て、眉をひそめた。

「居場所は分かっているから、一日でちゃっちゃと終わらせますよ」

ジョン太は、自分のノートパソコンを開いて、準備を始めた。

鯖丸は、空いている机に座って保険の更新用紙に記入していたが、出来上がって所長に見せに行った。

「まあ、いいかな」

所長は、ざっと一通り確認して言った。

「もう、一年経つのか。君、今年いくつだっけ」

「来週二十一です」

所長は、うんうんとうなずいたので、色々気にかけてもらっているのだと思うと、何となく嬉しかった。

実際には、うかつに自分の息子の年を忘れそうになった所長が、タメ年だったはずの鯖丸で確認していただけただけだが。

世の中には、知らなくていい事の方が多い。

「鯖君、獅子座なんだ」

女性向けのファッション雑誌を読んでいた斑が、顔を上げた。

「あ、そうなんですか」

世間一般のたいがいの男同様、星占いには何の興味もない鯖丸は、気のない返事をした。

「今月の運勢は、ええと、新しい出会いがありますだって。いいじゃん」

それは、ちょっといい。出来れば女の子がいい。

「マダちゃん、俺も見て。山羊座だから」

ジョン太が横合いから口を出した。

「ええと、山羊座：頭上注意」

「工事現場かよ」

着実に、突っ込みぐせが付いている。

「もういいや。おっちゃんは九スポのパチスポ占いで充分さ」（注・九スポとは、いわゆる東京スポーツこと東スポの地方版である）
がさがさとスポーツ新聞をめくったジョン太は、うっと短くうなつた。

『頭上注意。超海物語2のトレジャーステージが吉』

「どうなってんだ、俺の頭上」

「いいじゃん、占いなんて科学的根拠はないよ。早く明日の段取りしよ」

言いながら、新しい出会いのある人は、まんざらでもない顔をしていた。

翌朝二人は、慣れた感じで会社の地下駐車場を出た。

いつもの四駆は、舟虫とハートの二人と臨時でトリオを組んだ平田が乗って行ったので、年代物の軽四駆に乗り込んだ。

「安い仕事だから、これで充分だろ」

と、ジョン太は言った。

古い軽自動車なので、上背のある二人が乗り込むと、ちよつと窮屈だ。

「やっぱ写真は無いんだ」

いつも通りハンドルを握った鯖丸は聞いた。

魔界では、光学機器が上手く作動しないので、まともな写真が撮れる事は希だが、外界で撮った写真の一枚も提供されないというのは、普通ではない。

「公認魔導士は、セキュリティ高いからな。結局写真は貰えなかったよ」

助手席で、ジョン太は言った。

「名前はトリコで、性別は女。外見は、たぶん若い」

「それだけの情報で、捜せるかなあ」

鯖丸は、不安げだ。

「観光街のくらき屋って店に、カエデって名乗って入ってる。それだけ分かりゃ、すぐ見つかるだろ」

観光街には、小口の仕事で何度も入っていた。

使い走り程度の仕事なら、一人で来た事もある。

以前入った民宿松吉のある縄手山山系の麓に位置して、観光目的の為に、昔の日本の風景を人工的に再現した街だった。

だったと言うのは、観光客の要望や、商売熱心な住民の暴走で、だんだん無国籍な歓楽街に変化して来た為だ。

政府の方針で、地方自治体が出資した事業だったが、もちろん、魔界の住人には、外の政府や地方自治体に属しているという考えは全く無く、関係は険悪になっていると聞く。

民間の仕事で入る分には愛想がいいが、政府関係には風当たりが強そうだった。

何度も入る内に、顔見知りも出来たし、今後の仕事の事を考えると、良好な関係は壊したくない。

政府の仕事だというのは、隠した方がいいだろう。

「くらき屋って、何の店だっけ」

知らない店だったので、鯖丸は聞いた。

観光街の飲食店は、グルメガイドが書けるくらい完璧に憶えていたつもりだった。

実際、会社には内緒で、タウン誌に魔界のオススメB級グルメスポットという記事を書いて、小遣いを稼いだ事がある。

次回もよろしくと頼まれていた。

ジョン太は、お前は知らないだろうなあ…という顔をした。

「女郎屋だよ」

「ええと…女郎って言うと、蜘蛛」

鯖丸は納得した感じで言った。

「魔導変化した巨大蜘蛛を戦わせて、賭け事をする店だね。闘牛みたいな感じで」

ものすごいバカを見る目で見られた。

まあ、外界に女郎屋が無くなって、百年以上経つので、仕方がないと言えない。

同じ内容の店は、風俗関係で存在しているが、昔の女郎屋とは別物だ。

ジョン太だって、本物の女郎屋が外界にあった頃には、本人どころか祖父母だってまだ生まれていない。

知識として知っているだけだ。

「女の子を集めて売春してる店だよ」

一応説明した。

「ええ、そんな所に潜入して、大丈夫なの？その人」

「大丈夫だろ。減るもんじゃないし」

ジョン太は、軽く言った。

「入り込みやすくていいだろ。何ならお前、今度こそ童貞捨てるか

「？経費で落ちるし」

「そういうのはちょっと…」

鯖丸は躊躇した。

仕事でサキュバスのエロ触手に巻かれたり、別人格の暁が男遊びを繰り返したり、肉体的に言うと、全然清くない気がするが、メンタル的には純情な青年だ。

AVとエロ雑誌が大好きというのが、純情な青年に含まれると仮定しての話だが。

「最初はやっぱり、自力でどうにかしようと思うので」

「ああ、そう」

疲れるので、いちいち突っ込むのはやめにした。

「まあ、ビーストマスターと接触出来れば、それでいいよ。まだ店に出てたら、お前、女郎に惚れて、足抜けさせて一緒に逃げる役な」

「店に出て無かったら？」

捕まっているなら、そっちの可能性が高い。

「有無を言わず凄く速さで掠って逃げる」

ジョン太は断言した。

「こんな仕事に時間はかけられないからな。今日中に終わらす。

明日は久し振りに家族そろって海水浴に行くんだよ。遊園地にも寄る予定だ」

おっちゃん、私情丸出しだ。

「そう…いいね、楽しそうで」

鯖丸は、冷たく言った。

「お前、拓真の夏休みの絵日記を『お父さんは今日も出張でした』で終わらす気か。可哀相だろ、察しろ」

「お父さんは出張でも、ネタは色々あると思うよ。朝顔が枯れたとか、ひまわりが枯れたとか、カブトムシが死んだとか」

「暗いよ。お前の発想が恐ろしいわ」

やめよと思ったのに突っ込んでしまった。

「全部事実だから。それと海水浴は先週行った。大山寺海岸。まず

い焼きそば食って、となりの遊園地で壊れそうなジェットコースターに乗った。けっこう楽しかった。明日はプールの方がいいと思いますーす」

「てめえ、人の家庭にさくつと入り込むなあ」

どうせメシ目当てだ。

海水浴に行くと言った時の、拓真の微妙な喜び方が引つかかってはいた。

「明日は、武道館の横の市営プールで遊んで、隣の球場でパイレーツの試合観戦が拓真の第一希望。みおりちゃんは近くのレストランでオムライスが食べたいけど、みっちゃんは内心、ジョン太と二人でイタリアンのお店に行きたいなあとか思ってる。

ベビーシッターのご用命はないですかあ」

「お前、本気で稼ぐモードに入ってるな」

ジョン太は呆れた。

「まあね。色々あるから」

鯖丸は答えた。

「それで、オススメのイタリアンの店は？」

「俺が知る訳ないじゃん。コンビニで弁当買うのがやつとなのに」
鯖丸は、割と普通の事を言った。

「ああ、でも老舗のナポリ亭は、やめといた方がいいかも。あそこ、若手が入った料理人に、仕出し弁当取って、店の料理食わせてないから、味がぶれてるって。空港通りのエル・サントスカ、フレンチでも良かったら、カドワキとか」

「どこでそんな無駄知識を…」

ジョン太は呆れた。

「すいません。実はタウン誌でもバイトしてました」
今年は、本気で稼ぐつもりらしい。

「じゃあ、パイレーツの試合が終わった時間から頼むわ。あと、チケットの予約もしといて」

「へい、まいどー」

運転しながらケータイを開いたので、軽くしばいた。

「運転替われ。まずいから、それ」

コンビニに入って、いつものまるまるバナナを買ってから、チケツトを予約して駐車場を出た。

何の緊張感もないまま、二人は魔界に入った。

大変な事件に巻き込まれる前兆とも知らずに。

ジョン太は、倉庫の隅からオフロードバイクを引っ張り出した。

乗って来た軽の四駆は、もう少し奥まで入った場所に、魔法陣で隠してキープすると言った。

「こいつの方が、加速もいいし、小回りも利く。街中でビーストマスターを掠って逃げるには、ジムニーじゃ重たいからな」

メーカーの人が聞いたら怒りそうな事を言い切ったが、三十年前に発売された車としては、頑張っている方だ。

まだ走っているという事実を、むしろ賞賛されるべきだろう。

魔界では、最新型の車は構造が複雑なので、色々トラブルを起こして動かない事が多い。

マニアしか乗らなくなって、大して変化のないマニュアル二輪の方が、最新機種でも魔界で稼働する確率が高い。

出して来たのは、大排気量のオフローダーで、普通の人間はこんな物には乗らないので、車高も高くてエンジンもシビアだった。

パリダカとかで走っている様な機種だ。

「アクセルロック出来る様に改造してあるから、きちっとホールドすれば、両手離しても運転出来るよ。乗ってみな」

自分は、軽四で後から付いて行くつもりだったジョン太は言った。

「ヘルメットは？」

鯖丸は聞いた。

「魔界に警察は居ない」

ジョン太は答えた。

そうかも知れないが、安全性とかは？

教習所を出てから、二輪には一度も乗る機会がなかった。

正直言って、免許はあるが得意ではない。自転車にも乗れないのだ。

一応思い出して、エンジンはかかった。

ちよつと深呼吸して、クラッチを繋いでからアクセルを開けた。

あつという間にエンストして、そのまま立ちゴケた。

だからヘルメットと言いながら、鯖丸はバイクの下から這い出して来た。

「お前、免許は？」

ジョン太は聞いた。

「あるよ。ペーパーライダー」

鯖丸は答えた。

「得意じゃないよ。補習も三時間付いたし」

バイクの運転で絶対必要な才能は、まず、跨った時に足が地面に届くかどうかだ。

それでも本気で乗りたいなら、小柄な女の子でもちゃんと免許は取れる仕組みになっている。

手足が長くて運動神経もいいのに、三時間も補習が付くというのは、ただ事ではない。

「お前、バイク嫌いな？」

ジョン太は聞いた。

「割と」

鯖丸は答えた。

「二本しかタイヤないのに走るなんて、意味分らない」
理数系とは思えない、感情的な意見だ。

「大体、引き起こせないと免許貰えないなんて、どういう嫌がらせだよ」

それは、転けた時に自分で起こせないバイクに乘せられる訳がない。当然だ。

しかし、教習所の引き起こし用バイクは、傷まない様に様々な安

全装置が付いていて、同排気量の機種より重くなっている。
たぶん、190キロくらい。

普通の地球人なら、自分の体重の三倍までのバイクなら、引き起こせる。体が弱い人は別にして。

一年前のこいつが、どういう状態だったか思い出せない。

「補習って、あれか。引き起こし」

「まあ、起こせたけど」

鯖丸はぶつぶつ言った。

「鎖骨にひび入った」

「お前それ、力任せに起こそうとしただろ。コツがあるのに」

自分だって力任せで免許を取ったくせに、ジョン太は言った。

「今なら平気なものにな」

悔しそうに言った。

基本的に、すごい負けず嫌いなのだ、こいつは。

「そうか。じゃあ今なら上手に乗れるな」

適当におだてた。

「うん、乗れるよ」

そのまま暴走して、木立の中に突っ込んで止まった。

「ダメだこりゃ」

バイクは自分で運転する事にした。

観光街は賑わっていた。

バイクも隠して、団子とか買い食いしながらぶらぶら歩くと、くらき屋はすぐ見つかった。

周辺は皆、その手の店らしく、他の地区とは浅い堀で区切られて、橋が架かっている。

昼時なので、客足は少なかった。

「時間的にちょっと早いけど、まあ行ってみるか」

ジョン太はぶらりと木戸をくぐったので、鯖丸も後に続いた。

何人かの女達はもう支度して店に出ていたが、実際に客が増える

のは夜なので、まだだらだらした感じで座っている。

女将らしい女が、いらっしゃいと言って出て来た。

「カエデちゃんて居る」

上がり口にどかりと腰を下ろして、ブーツを脱ぎながらジョン太は聞いた。

「知り合いかい」

女将は、用心深い顔をした。

「いや、可愛いって聞いたから」

「あの娘はもう辞めたよ。他の娘でいいかい」

ジョン太は、口の軽そうな娘を物色した。

「じゃあ、あの右端の娘」

「小夜ちゃん、お客」

右端でまだ爪を塗っていた娘が、はあいと言って立ち上がった。

「そっちの兄ちゃんは？」

「ええと…」

出来れば外で待っていたいが、そう言う訳にもいかないだろう。

「窓際に居る人を」

窓の近くに立って、ぼんやりと外を眺めている娘を指差した。

他の女の子達より、普通っぽい感じだった。

「雛菊、おいで」

女将に呼ばれて、娘はこちらに来了。

「よろしくお願いします」

可愛いが、細い声だ。

もたもた靴ひもを解いている内に、ジョン太は奥へ消えてしまった。

店の性質上、別行動になってしまうのは仕方ないが心細い。

魔界では携帯も通じないので、何かあっても連絡も取れないのだ。

「あの…武器はお預かりする事になってます。規則で」

刀を渡すと、雛菊と呼ばれた女の子は、木で出来たロッカーに仕舞って、古い銭湯の脱衣所にある様な木製の鍵を差し出した。

丸腰になってしまつて、益々心細い。

「じゃあ、こちらへ」

手を取つて廊下を案内され、狭い階段を登つた。

襖を開けると、畳を敷いた普通の部屋があつた。

狭いが二間になつていて、奥の部屋には布団が敷いてあるのが見えた。

ちよつとどきどきする。

座布団が出されたので、とりあえず座つた。

「何か飲みますか？」

うなずくと冷酒が出て来た。

一緒に、小鉢に入つたつまみが出された。

昼間からええ感じの贅沢だ。

「うわ、美味い。何これ」

ちよつと箸を付けてから聞いた。

「釜揚げのシラスですけど」

「そうなんだ。初めて食つた」

この辺の近海で取れるのは知っていたが、こんな食いでのない魚は、自分で金を出して買った事がない。

大根下ろしを乗せて、醤油を垂らしてある。

「ごはん欲しいなあ、これ」

雛菊と呼ばれていた女の子は、初めて緊張した表情を崩して、可笑しそうに笑つた。

「頼みますか」

「いや……いいよ」

ガラスの器に入つた冷酒を、少し飲んだ。
きりつと冷えていて、辛口で美味しい。

室内を見回すと、部屋自体は狭いが、内装はシンプルでいい感じだつた。

昔の茶室とかに、少し似ている。

もしかしたら、そんなに安い店ではないかも知れない。

目の前の女の子も、中々可愛い。

派手な着物を着ているが、実際は自分より年下かも知れない。どう云った経緯で、こんな仕事をしているんだろうと思った。

自分の意志でやっているなら、いいんだけど…。

「君は、ここに来てどれくらい？」

色々聞いてみた方がいいと思ったので、尋ねた。

二杯目をお酌してくれた雛菊は、ちょっとためらってから答えた。

「二ヶ月程です。不慣れですみません」

「いや…いいから。俺も不慣れですから」

ちよつとあわててしまった。

「あの…女の子に年聞くのは失礼だけど、君は幾つ」

「十六才です。今年で十七」

きやああ、ばりばり年下やん。

鱈丸は、ちよつとむせた。

けっこう可愛いし、このままの流れでやっちゃってもいいかと思っていたが、もうダメだ。

「お客さん、大丈夫？」

背中をさすられた。

「うう、セーラー服物は好きだけど、本物の女子高生は無理だよ、犯罪だよ」

「お客さん、何か変わった人ですね。皆気にしませんよ、そんな事こういう仕事は辞めなさいと言いたかったが、どんな事情があるのか分からないので言えなかった。

自分だって女の子だったら、手っ取り早くこっち方面の業種に流れていたかも。

「実はね、カエデって娘を捜してるんだけど」

言ってみると、雛菊は緊張した表情に変わった。

「お客さん、政府関係の人？」

「違うよ。そんな風に見える？」

自分の外見からして、すごい説得力のあるセリフだと分かった。

雛菊は首を横に振った。

「ううん、全然見えない」

そう言われる自信はあった。

「あ、もしかしてカエデ姐さんの弟？」

「違うけど知り合い」

雛菊が姐さんと呼んでいるという事は、ビーストマスターの外見は、少なくとも十七才以上だ。

自分が弟だと思われたから、二十一才以上に見えていると思った
いが、童顔なのは自覚しているので、自信はない。

「何で姉弟だと？」

聞いてみた。

「雰囲気似てるから。魔力高そうな所とか」

政府公認魔導士だから、それは魔力は高いだろう。

「姐さんは、すごくいい人だったの」

雛菊は言った。

「無茶なお客さんを追い出してくれたり、調子の悪い娘を治してくれたり」

ビーストマスターは、割といい人らしい。

「外からの密偵だって分かった時も、お店の皆は反対したんだけど、結局晒し者にする事になって」

何となく、話の核心に近付いている。

「晒し者って、どういう？」

雛菊は、俯いた。

「言って。君から聞いたなんて、絶対言わないから」

雛菊は、しばらく黙っていたが、顔を上げた。

「広場で晒し者になってます。たぶん今日くらい、燃やされるかも」

「今日の何時に」

鯖丸は焦った。ぐずぐずしていたら、ちよつとヤバイかも。

「分からない」

雛菊は言った。

「ジョン太、ヤバイ。すぐ出よう」

廊下に駆け出して叫ぶと、ジョン太はすぐに出て来た。

こちらにも似た様な情報を手に入れたらしく、本気で階段を飛び降りて、武器を仕舞ったロッカーを開けた。

鯖丸も後に続いた。

ブーツとか登山靴とか、どうしてこういう脱ぎ履きに不便な装備を選択したのかと二人で後悔しながら、靴をひつつかんで、通りに飛び出した。

広場は娼婦街の中央にあった。

絶対、それ目的に立てられた、長く伸びた朽ち木の上に、女が後ろ手に縛り付けられていた。

周囲には、何十人の人間が係わったのか、もう判別も付かない結界が、ぎりぎりとは巻き付けられていた。

いくら魔力が高くても、個人でこれを破るのは無理だ。

政府関係者に向けた、この街の人間の恨みが、目に見える様で怖かった。

「どうする、ジョン太」

鯖丸は聞いた。

「結界があるな。お前、あれ破れるか」

魔力の低いジョン太にも見える様な結界ならお手上げだ。

「分からないけど、下の方は結界が薄い。木ごと切り倒して、持つて逃げるなら出来るけど」

「よし、バイク出そう。タンデムで行くから、お前後ろで斬れ」
「分かった」

二人は屈み込んで、靴をきちっと履き直してから走り出した。

バイクに二人乗りするのも初めてだった。
けっこう怖い。

おまけに、ジョン太の運転はめっちゃ乱暴だった。

車が走る様には出来ていない狭い道に、アクセルをゆるめないで
がらん突っ込んで行く。

後輪をスライドさせながら、直角に角を曲がった。

地面がぐわっと近づいた。

「うわ、やめて、転ける」

鯖丸は叫んだ。

「後ろで引き起こすな。ホントに転けるから」

ジョン太は怒鳴り返した。

こんな状態であの木を切り倒せるか、ちょっと不安だ。

躊躇しているのが分かったのか、ジョン太が言った。

「無理なら降りてからにするか。捕まるかも知れんけど」

広場に人が集まっていた。

燃やすとか言ってたけど、まさか。

「出来るよ。このまま行っ」

ジョン太はにやりと笑った。

負けん気が強いのを、すっかり利用されている。

バイクはそのまま突っ込んだ。

人混みがさっと二つに分かれたが、逃げない奴が何人か居る。

仲間が助けに来る事を予想して、人を配備していたのだ。

手の中にナントカ波みたいなやつを溜めて撃ち出そうとしていた

奴を、ジョン太が走り抜けざまに蹴り飛ばした。

「おりゃあ、ライダーキック」

「ジョン太、それライダーキック違う」

「最近のはこんなんだよ」

もちろんウソだ。

「行くぞ」

車体を真っ直ぐにして、一直線に木に向かって加速した。

鯖丸は、ステップの上で立ち上がり、背中 of 刀をすらりと抜いた。

加速する中で、ぴたりと刀を構えタイミングを計った。

刃が高速で空を斬った。

一瞬遅れて、びしりと木の幹に亀裂が入った。

ジョン太はそのまま走り抜け、アクセルターンで車体を切り返した。

「落ちるー」

鯖丸はジョン太にしがみついた。

ビーストマスターを括り付けている木が、ぐらりと傾き始めていた。

あっちもすぐに落ちそうだ。

広場を走り抜け、落ちてくる木ごとビーストマスターをひっ掴んだジョン太は、片手でどうやってギヤチェンジしているのか、一気に加速した。

堀を飛び越え、路地を抜け、街を出るまで走り続けた。

ある程度街を離れた場所で、ジョン太はバイクを止めた。

まだ、抜いたままの刀を片手に掴んでジョン太にしがみついていた鯖丸は、よろよろ降りてきて、やっと刀を仕舞った。

やっぱりバイクダメだ：と、ぶつぶつ言っている。

木に括り付けられたまま地面に横たわっているビーストマスターが、少し身じろぎした。

「大丈夫かな？」

しゃがみ込んで様子を見ているジョン太の横から、鯖丸ものぞき込んだ。

情報通りビーストマスターは、若い女だった。

アンチエイジング治療が一般的になったので、昔の様に見た目で細かい年齢を特定するのは難しいが、少なくとも未成年ではない。

長い黒髪を結い上げて、胸が大きく開いた着物を着ている。

「苦しそうだ。早く解かないと」

「そうだな。ぜひ早く解こう」

言いながら、二人は全く同じ事を考えていた。

おっばい、でかつ。

90パーセントくらいよしまな気持ちで手を伸ばした鯖丸は、結界にはじき飛ばされて地面に転がった。

そのまま痺れて、しばらく起き上がれなかった。

「ダメだ。結界から解かないと」

目をこらしたが、あまりにも多人数でめちゃくちやに巻いてあるので、かなり時間をかけなければ、解けそうになかった。

こんな中に長時間居たとしたら、そうとう弱っているはずだ。

「解けないから、このまま持って来たんだろ。俺がやるよ」

ポケットから折りたたみナイフを取り出したジョン太は、ちよつと顔をしかめながらも、普通に結界の中に手を突っ込んで、縄を切り始めた。

魔力が低いって、ある意味すごい。

結界からずるりと引き出されると、女は苦しそうにうめいた。

長時間縛られていたのか、縄をかけられていた手足に、ひどい擦り傷が出来ている。

「おおい、大丈夫か」

軽く頬をはたくと、ビーストマスターは目を開けた。

引き込まれそうな瞳だった。

「水かなんかあっただろ」

ジョン太は、ビーストマスターを抱き起こしながら言った。

鯖丸は、バイクのカウルに差し込んであった飲みかけのペットボトルを持って来た。

渡されたスポーツドリンクを少し飲んで、女は咳き込んだ。

それから、自力で体を起こした。

着物の裾から真っ白な太股がのぞき、二人はちよつと息をのんだ。まだ自分の状況が分からないらしく、ビーストマスターは、周囲を見回した。

「ビーストマスターのトリコだな」

ジョン太は、確認の為に聞いたが、女は答えなかった。

「政府の依頼で、あんたを回収に来た」

「民間か」

驚いた様に言った。少しハスキーで色っぽい声だ。

「どうして…？」

確かに、こんな状態になると分かっている民間企業に救出を丸投げしたのだとしたら、ひどい話だ。

「さあ、詳しい話は聞いてないからな。聞くつもりもないし」

言っている事は普通だが、おっちゃんいつの間にか乳に話しかけている。

気が付いたトリコに、思い切り顔面を蹴られた。

「私の顔は、そこかあ」

「うわ、こいつ芸風が所長に似てるぞ」

「良かったじゃん、元気そうで」

鯖丸は、自分も立ち上がった高い位置から真剣に見ていたくせに、いい人側に回ろうとした。

トリコは、残ったスポーツドリンクを一気に飲んで、少し人心地が付いたらしく、二人の男を見比べた。

変なコンビだ。

しかし、あの状況から自分を救出したのだから、腕はいいのだろう。

「じゃあ帰ろうか。立てる？」

若い方の男が、手を差し出した。

握っただけで、物凄く魔力が高いのが分かる。

民間にランクSが居ると聞いた事があるが、こいつかも知れない。もう一人の、魔法整形で獣人の姿をしている男も、けっこう使えるそう。

「待ってくれ」

立ち上がり、二人を交互に見て、言った。

「荷物を盗られた。あれを回収しないと、帰れない」

「そうか」

ジョン太は、うなずいた。

「車を取って来よう。話は後で聞く」

鯖丸を引っ張って行つて、バイクに跨った。

「待って、どっちが残った方が……」

「じゃあ、お前一人で、これ運転して車取りに行けるか？」

「それは無理」

ジョン太には、魔法陣の解除が出来ない。

結局二人で行くしかないのだが、何か、トリコに聞かせたくない話もあるらしかった。

「よし、さっさと帰ろう。明日はお休みだー」

車の助手席で、ジョン太は清々しく言った。

「ええっ、荷物の回収は？」

鯖丸はたずねた。

「知らん。回収を頼まれたのは、あの女だけだ」

車を魔法陣から出した二人は、バイクを残して引き返していた。

バイクは、帰りに寄って回収する段取りだ。

めんどくさいから、乗って付いて来ればいいのに……と、鯖丸は言った。

「あいつ、魔力高そうだから、気付かれる前に素早くやりたいんだよ」

ごそごそと、シートの後ろから何か出して来た、

頑丈そうなロープと、布の固まりだ。

広げると、人一人入りそうな袋状になっている。

某国が昔、某海岸とかで、某民間人とかを誘拐するのに使ったと言われている、某伝説の拉致袋だ。

「お前、これに軽くくでいいから、動きを止める魔法かけとけ」

「うわ、ジョン太また、えぐい事考えてる」

言いながらも、鯖丸は車を止めて道端に袋とロープを広げ、不慣れな手つきで念入りに拘束魔法をかけ始めた。

車が戻って来た時、トリコは大人しく座って待っていた。

「おう、待たせたな―」

ジョン太がにこやかに手を振ったので、彼女も曖昧に笑って振り返した。

そのまま車を降りると、いきなり目にも止まらない速さで、後ろ手に隠した袋を頭からかぶせて、上からロープで縛り上げた。

ジョン太がハイブリットだと気が付いていなかったトリコは、そんなに速く動けるとは思わなかったのだろう。

あっさり袋に押し込められて梱包され、悲鳴を上げた。

まあ、気が付いても避けられるスピードではないのだが。

「ぎゃあああ、何すんだてめえ、出せ―」

綺麗な外見からは、全く似合わない言葉遣いになっている。

「こんな事なら、結界から出さない方が良かったなあ」

トリコを後部座席に放り込んで、ジョン太は言った。

「そうだねえ」

鯖丸まで、ひどい事を言い始めた。

「くそっ、てめえらの血は何色だ―。ゆるさんぞ。次に会ったら生きて帰れると思うな―」

「何か言ってるよ、ジョン太」

「放っとけ。撤収―」

車は走り出し、ビーストマスターは後部座席で二人を罵り続けた。

翌朝、鯖丸は、ジョン太からの電話で起こされた。

夜の打ち合わせならメールでいいのにと思ったが、丁度早起しなればならないので助かった。

「お前、昨夜どこ行ってたんだよ。電話したのに」

「え：ちよっと」

夜の公園で竹刀を振り回していたら、警察に職務質問されてそのまま連れて行かれそうになったので、帰って来て着歴も見ないでふ

て寝したのは、黙っておく事にした。

「ごめん、急ぐ用だった？」

「また、名指しで依頼が入った。早く報せた方がいいと思ってな」
ジョン太は言った。

「明日からだ。日程は分からないが、どうする」

今日から、一日遅れで合宿に参加する予定だった。

鯖丸は少し考えたが、答えた。

「やるよ。どんな仕事？」

「荷物の回収」

昨日も、そんな話を聞いた気がする。

悪い予感がした。

「ビーストマスターから、個人的に依頼が入った。荷物の回収に行くから、俺達をサポートを頼みたいって」

「何で、個人で？」

生きて帰れると思うなと言っていた。まさか本当に生きて返さな
いつもりとか…。

「さあ、クビになったのかも」

ジョン太は、適当な事を言った。

まあ、荷物の回収じゃなくて、回収のサポートなら、そんなに大
仕事じゃない。

「明日朝六時な。よろしく」

「早っ」

分かりましたと言って、電話を切ってから、急いで身支度を調え
て家を出た。

とりあえず、今日だけでも合宿に顔を出しておこう。幸い、近場
でやっている。

最近ちょっとハードだと思う。

たまには昼頃までゆっくり寝たいなあと思ったが、結局合宿先ま
では習慣で走って行ってしまう鯖丸だった。

良く考えたら、合宿先の武道館は、ジョン太が来る予定のプールや野球場と同じ敷地内にある。

後の移動が大変楽だ。

「ナイス、昨日の俺」

溝呂木先生に事情を話すと、いつも通り怒られたが、すっかり慣れきっている鯖丸は、機嫌良く練習に参加した。

一人で出来る練習は毎日続けていたが、やはり相手が居る方が格段に楽しい。

午後から昼飯を食って、少しの間休憩している所へ、迫田がやって来た。

頻繁に魔界に入って行方不明になる自分と違って、練習熱心で後輩の面倒見もいい迫田は、皆から慕われている。

何で武藤なんかと友達なんだろうと言われているのは、知っていた。

「久し振りだなあ」

と言って、向かいに座ってメシを食い始めた。

「三日前にも会ったけど」

茶を飲みながら答えた。

「いや：お前が練習に出て来るのが」

「そうだっけ」

言われてみれば、そんな気もするが、忙しかったのであんまり記憶がない。

「合宿には、これから普通に出られるのか」

迫田は聞いた。

「ううん、今日だけ。今晚は子守のバイトで、明日から魔界」

「何やってんだよ、お前」

迫田は、ため息をついた。

「何って、日々貧乏と戦っているんだよ」

鯖丸は断言した。

「そこまでバイト入れなくても、どうにか生活出来るだろ」

「色々、予定があつて」

「知ってるけど」

メシを食う手を止めて、迫田は言った。

「お前最近、先輩達に睨まれてるぞ。小林さん達とか」

「そんなの最初からじゃん。俺、生意気だもん」

鯖丸はしゃあしゃあと言い切った。

「いつかしめるって。後、選抜のメンバーから外すとか」

「俺を外して、どうやって団体戦で勝つつもりなんだ」

仕事を離れた武藤君は、割と性格が悪い。

間の悪い事に、背後にその小林さん達が居た。

「ちよつと来い。話がある」

「ここで出来ない話ですか」

嫌そうな顔で立ち上がった。

迫田は、無言だが全身で行くなと言っている。

「いいから来い」

「はい。武藤行きまーす」

連邦軍の白い奴みたいにな、行ってしまった。

「アホだ、あいつ」

迫田はつぶやいたが、時々ある事なので、後でメシを食い終わってから、骨は拾いに行つてやる事にした。

先輩四人に20発ほどボコられた武藤玲司は、反撃に転じて竹刀を奪い取り、全員をぶちのめした。

おかげでまた溝呂木に怒られた上に、道場の隅で正座して、午後からを過ごす事になった。

「座りに来たんじゃないのに…全く」

全然反省していない。

おまけに、座ったままマジ寝してしまった。

溝呂木は、お手上げだと思ったのか、もう何も言わなかった。

パイレーツの試合が終わる頃に、鯖丸は時間通り現れた。

顔に何方所か絆創膏を貼っていて、見える範囲だけで凄い事になっている。

「うわ、何だそれ」

家族そろって楽しそうに出て来たジョン太は、驚いた。

「別に」

ふてくされた顔で言った鯖丸は、美織ちゃんを見ると、にこりと笑って抱き上げた。

「よし、みおちゃん、オムライス食いに行こう」

「待て待て」

ジョン太は止めた。

「お前、そんな顔でうちの子二人連れ歩いてたら、捕まるぞ」

「何で？」

警察はもういい。

「明日、大丈夫かよ」

「平気だよ。魔界に入ったら、自分で治す」

「大丈夫？」

心配そうに声をかけたジョン太の嫁のみっちゃんも、鯖丸に比べたら軽傷だが、顔に少し痣が出来ている。

「ええ？ みっちゃんこそどうしたの、それ」

「別に」

ちよつと不機嫌そうに言った。

「じゃあ武藤君、お願いね」

いや：捕まるから、と反論するジョン太の腕を掴んで、行ってしまった。

ジョン太は別に、女性に優しい訳ではないが、奥さんに暴力を振るう様なタイプでもない。

どちらかというと、座布団代わりに敷かれている感じだ。ケンカをしている様にも見えなかった。

「何かあった？」

拓真に聞くと、微妙な顔をしていたが、言った。

「母さん、プールの監視員と、マジ切れでケンカした」

「何でまた…」

聞こうとしたが、止めた。

普通の人に近いタイプならどうという事もないが、ジョン太の様なハイブリットは、公衆浴場やプールでは、割と嫌がられる事もある。

「僕がプールに行きたいって、言わなきゃ良かったのに」

拓真は、俯いてしまった。

朝顔とひまわりが枯れて、カブトムシが死んだというのに、夏休みの絵日記が、益々ネガティブな感じになりそうだ。

まあ、朝顔とひまわりとカブトムシは、拓真本人の責任だが。

鯖丸は、拓真の手を握って歩き出した。

「いいじゃん、マジ切れされるくらい愛されてて」

拓真は、顔を上げた。

「俺なんか、憎まれてこの有様だよ」

「武藤君、いい子なのに憎まれてるの」

拓真は聞いた。

「実は悪い子だ」

鯖丸は答えた。

「分かってるけど、直らないんだよな…ああ、近いからこのファミレスでいいか」

歩いて五分もかからない所にファミレスがあった。

パイレーツの試合が終わったばかりなので、少し混んでいる。

「みおちゃん、パフェも食べようか」

「うん、食べる」

絶対、自分も食いたいだけの様な気がする。

「分かってるなら、直せばいいのに」

席に案内されながら、拓真は言った。

子供は時々、すばっと本当の事を言うのだ。

その後、家に二人を連れて帰る為に、電車を降りて夜道を歩いていた、顔中痣だらけで小汚いジャージを着た不審な青年は、本気で警察に捕まった。

おまけに、昔暁がやんちゃな事をしていた頃に顔見知りになった警官がまだ居て「お前、何やってんだ」と言われた。

「一見変質者ですが、ベビーシッターです」

こう見えて前科者の鯖丸は答えた。

「変質者じゃありません。ちょっと食欲が異常なだけです」

拓真が、おかしいな弁解をしてくれて、みおちゃんが泣きはじめた頃に、ジョン太とみっちゃんを迎えに来た。

「だから、捕まるって言ったのに」

ジョン太はぶつぶつ言いながら、警察に事情を説明して、親子四人で仲良く帰って行った。

鯖丸は、ため息をついて見送った。

「いいなあ、俺も早く嫁さんとか子供が欲しい」

童貞のくせに、一足飛びにそこまで結論が行くのが恐ろしい。

「お前はその前に、一般常識をどうにかしろ。捕まるわ、そんな格好で歩いてたら」

顔見知りの警官は、言った。

ひどい休日が終わって、早朝に事務所へ行くと、ジョン太はもう来ていて、茶を飲んでいた。

おはようございますと言って事務所にはいると、ジョン太は少し不機嫌に「おはよう」と言った。

「昨日はごめん」

謝ると、別にいいよと言われた。

剣道部の先輩にも、こういう風に接したら、もめ事は起こらないのだが…。

「いいけど、お前、拓真の絵日記が、凄い事になって来たぞ」

写メで撮った絵日記を送って来た。

『きょうは、みんなでプールに行きました。

お母さんは、お父さんのめいよを守るためだと言って、
プールのおじさんと乱とうしました。』

「いい話じゃん」

鯖丸は言った。

「続き読め」

ジョン太は言った。

『そのあと、野球を見ました。パイレーツは負けました。』

「あ：内容が辛くなって来た」

「もっと辛くなる」

『ばんごはんは、お父さん部下のむとうくとオムライスを食べました。』

むとうくんは、変しつ者とまちがえられて、けいさつにつかまりました。

ひどい一日でした。』

「うっ…辛い」

捕まった時よりダメージが大きい。

「これ、学校に提出するのかよ。誰も見たくないよ、こんな辛い絵日記」

「俺は面白いと思うけど」

ジョン太は言った。

絵日記が面白い必要があるのだろうか。受け狙いで描いている訳でもないのに。

全く…と、言いながら自分もお茶を飲もうとした鯖丸は、部屋の中にもう一人人が居るのにやっと気が付いた。

適当にその辺のイスに座って、茶を飲みながらジョン太が出したらしい羊羹をつまんでいる。

「ええと…この人は」

「依頼者だ」

ジョン太は答えた。

依頼者が、イスから立ち上がった。

と言うより、降りた。

小さい。

たぶん、自分の肩までもないくらいだろう。

中学生くらいに見える女の子だ。

癖のある赤毛で、ソバカスだらけの無愛想な顔をしている。

細い手足が、大き過ぎる服から付き出していた。

「バカ話が終わったら、そろそろ出ようか」

大人びた口調で言って、こちらに近付き、右手を差し出した。

「よろしく。変質者の武藤君」

ジョン太、無差別に絵日記を人に見せるな！。

鯖丸は、苦い顔で少女の手を握った。

ちよつと覚えのある感触だ。

ええと：依頼者。依頼者って、確か。

「ええっ、ビーストマスター？」

一昨日見た色っぽい女とは、何の共通点もない外見だ。

「子供じゃないですか」

「そう。あのFカップも、魔法整形のにせ乳なんだよ」

ジョン太は本気で残念そうだ。このおっちゃんは、全く。

「お前こそ、整形だと思ったのに、本物の獣人とはな」

ビーストマスターは言い返した。

ジョン太も悪いが、それは言い過ぎだ。

魔界で魔法整形の人間を指して言うなら問題はないが、外では一

番ひどい類の差別用語だ。

普通、本人の前では言わない。

「いくら客でも、ちよつと酷くない、それ」

鯖丸は、トリコを睨んだ。

強面に見えるが、一年も付き合っていれば、ジョン太が意外に繊細な所もあるというのは、分かる。

「放っとけ。行くぞ」

いつものダツフルバッグを肩にかけてから、ジョン太は振り返って中指を立てた。

「てめえ、魔界に入って乳でかくなったら、揉むからな。憶えとけ」

「うわ、どっちも最低だ」

先が思いやられた。

車の中でも険悪な雰囲気だったが、幸い二人とも仕事の話はきちんとしていた。

変質者呼ばわりされて、全然気にしていない鯖丸が、一見一番大人の対応に見えるが、実は天然なので気が付いていないだけだ。

「荷物と言っても、盗られた物全部を回収する必要はない」

移動する車の中で、トリコは説明した。

「必要なのは、これくらいのもの」

指で、形を作って見せた。

「石だけだ。石と言っても、そう見えるだけで本当は石じゃない」

「じゃあ、本当は何だ」

ジョン太は尋ねた。

「ファイヤーキング」

「ああ、あれね」

鯖丸は初めて聞くが、ジョン太は知っている様子だった。

「ばあちゃんがワンセット持ってたな。色は？」

「普通に緑っぽいやつ」

「はいはい」

鯖丸には、さっぱり話が見えなくなった。

「石に見えるなら、破片だろ。アンティークとしての価値なんかないぞ」

「個人的に大切な物なんだ。だから、個人で依頼している」

あんなに陰悪だったくせに、二人だけで会話がかみ合っている。

「何なのそれ」

鯖丸はたずねた。

「昔アメリカで作ってた、安もんの耐熱ガラス食器だよ。俺、ガキの頃割って怒られたから憶えてる」

ジョン太は、コレクターに石を投げられそうな事を言った。

「トゲ男って奴に、荷物ごと持って行かれた。どっかのちんぴらだと思うが」

ジョン太は、腕組みして考え込んでしまった。

「それ、思ったよりマズイ奴だ」

しばらくして、言った。

「向こうに入ったら情報屋に頼んでみよう。相手がトゲ男なら、大体の動きは知ってるはずだ」

「民間にも、情報屋が居るのか」

トリコは、驚いた様に言った。

「居るよ。お役所仕事と違って、優秀だ」

ジョン太は答えた。

いつも通りの定食屋で、いつもの朝飯を食って、三人は魔界に入った。

鯖丸は、口の中を切っているらしく、ちょっと顔をしかめて味噌汁をすすっていたが、いつも通り大メシを食らってトリコを驚かせていた。

倉庫の中には、段ボールで梱包された荷物が届いていて、中から見覚えのある銃と折れた刀が出て来た。

去年、かまいたちにやられた時に紛失していた装備だった。

何だか懐かしい。

「先月、船虫とあっちまで行く仕事があったから、回収してレストアに出してたんだ」

ジョン太も、嬉しそうに銃を取り出したが、AK-47とスコピオンを見比べて、結局小型の短機関銃だけ持って行く事に決めたらしかった。

「刀は直らなかつたな」

「直せるかも。腕を繋げるより、全然簡単だし」

鯖丸は言ったが、とりあえず今回は、使い慣れたいつもの長刀を手にとった。

「お前ら、セキュリティゆるゆるだな」

トリコは、めずらしそうに辺りを見ながら倉庫に入ってきた。

民間企業の倉庫に入るのは、初めてらしかった。

「別に、秘密なんて、本名と客のプライバシーくらいだしな」

ジョン太は、さっさと着替えて、標準装備の32口径と44口径を身に着けて、車に乗り込んだ。

車が境界を抜けると、トリコの外見が変化した。

少年と大差ない体形が、徐々にふくらみ、一昨日見た色っぽい体つきに変わって行った。

身長も伸びている。

魔力の高い奴は、魔界に入っただけで、意識しなくても外見変わる事があるしな…と、最初に面接で入った時に、ジョン太が言っていたのを思い出した。

そこまで魔力の高い人間には、今まで会った事がなかった。

一昨日見た、色っぽいカエデ姐さんが出現する事を期待したが、後部座席で、二回り大きくなった体に合わせようと服を整えているのは、単にトリコが大人になった様な外見の女だった。

一昨日のあれは、潜入捜査の為の整形だったらしい。

でも、胸はFカップだ。

街の手前で車を降りたジョン太は、ちょっと残念そうだったが、結局巨乳なら何でもいいらしく、しばらく横目でトリコの乳を鑑賞して、情報屋に連絡を付けると言って、一人で先に行ってしまった。二人で残されてしまった鯖丸は、ちょっと気まづくなったので、怪我を治すのに専念した。

トリコは、怪訝な顔をしてそれを見た。

「何だお前。そんな根本治癒の魔法使わないと、打撲傷を治せない

のか」

表面の怪我なら、もう普通の回復魔法で治せる様になっていたが、内部損傷の治療は、割合難しい技術だ。

表面だけ綺麗にして、痛みを取る事は出来るが、これから仕事だから、きちっと治しておいた方がいい。

「まあ：それ程ベテランでもないんで」

「それ、大怪我した時だけ使うやり方だぞ。いちいち使ってたら面倒だし、痛いだけだろ」

急に両手を握られた。

魔力が通る時の、少し痺れる感覚があった。

「はい、治った」

トリコは、手を離れた。

全身が綺麗に治っていた。

「うそつ、早」

鯖丸は、若い女の前だという事も忘れて、シャツをめくって体を点検した。

外から見えない部分も、完璧に治っている。

「民間でも、そんな怪我する程危ない仕事、やるんだな」

ちよつと意外そうだ。

仕事でもっと重傷を負った事もあるが、これは全然関係ない自業自得だ。

「いえ：これは部活の先輩に生意気言って、しめられただけです。治してくれてありがとうございます」

「え：学生？」

去年、新しくランクSが登録されたのは、知っていた。
まだ二十歳前後の大学生だったはずだ。

民間に居るランクSって…。

「ええ、お前学生？」

「はい」

そう言えば、見た目がやたら若いと思った。

「じゃあ、バイトか、これ」

「バイトですよ」

鯖丸は答えた。

何てこった。いくら狭い業界とはいえ、西日本で一番腕利きのコンビが、片割れバイトかよ。

評判と、仕事の実績だけ見て、どんな奴らか確認もしないで依頼してしまっていた。

一昨日の二人組だと分かった時点で、解約しておけば良かったかも。

「それじゃあ、あの…」

獣人と言いかけて、先刻事務所でこの青年に睨まれたのを思い出した。

こういう仕事では、信頼出来るパートナーが一番大事だ。

その辺りでは、こいつらは大丈夫そうだった。

「ハイブリットの男は、どういう経歴の奴だ」

「それ、言わないといけない事ですか」

鯖丸は、たずねた。

「別に」

トリコは、答えた。

「ただ、一時的にはトリオでやる訳だし、どんな奴か知りたいのは当然だ」

自分のデータは、公開出来るギリギリの部分まで、依頼状に記入していた。

当然、鯖丸も知っているのと、トリコは考えていたが、ダメなバイトはそんなもん目を通してもない。

「ジョン太は、この仕事はたぶん十年くらいのキャリアで、元軍人です。銃の腕はゴルゴ並ですよ」

鯖丸は、小声で付け加えた。

「魔法は全然使えないけど」

「ええっ」

そんな奴が、魔界で仕事しているとは、尋常ではない。

それでもキャリアが十年くらいあって、ランクSのバイトを任されているのだから、使えない奴ではないだろうが…。

いや…、それより。

「何でだ。あの男、そんなに魔力は低くないだろう。何かの病気か？」

「え…？」

今まで、ジョン太が魔法を使えないのは、魔力が低いせいだと思っていたが、所長やハザマは、確かに別の意見がある様子だった。それでも、何かの理由をどうにかすれば、魔力が低いなりに軽微な魔法は使える様になるというくらいの意味だと思っていた。

「いいえ、ジョン太は魔力低いですよ。その方が便利な事もたくさんあるでしょう」

確かに、解除も出来ない重合結界に、素手を突っ込んで自分を救助している。

異常に魔力の低い人間にしか、そんな事は出来ない。

しかし、自分を掴んだ腕からは。もう少し高い力を感じた。余程の事情があるのだろうか、係わっている閑はなかった。

石を取り戻せば、それでいい。

ジョン太が戻って来た。

情報屋と連絡が取れたと言った。

観光街の表通りは賑やかだった。

様々な店や屋台が並び、お祭りの日の表参道を思わせた。

たいがいは外からの観光客だが、魔界の別の街から来た客や、プレイヤーらしい姿も多く混じっている。

武器を携行して、一見魔法整形に見える獣人が混じっている三人は、たぶんプレイヤーに見えるだろう。

なぜ、外の人間が獣人という言葉に、あんなに過剰に反応するのか、トリコには未だに分からなかった。

獣人は獣人だ。

ジョン太は、皆を先導して一軒のうどん屋に入った。暖簾には『うどんのめん吉』と染め抜いてあった。

いらっしゃいと、景気のいい声をかけられた。

カウンター席以外は、狭いテーブルが二つしかない店だ。

カウンターの向こうで、スキンヘッドの店主が、一人でやっている様子だった。

ジョン太は、カウンターに座って、勝手に注文した。

「素うどん三つ」

「へい、まいどー」

ジョン太に続いて、鯖丸とトリコも席に座った。

「俺、天ぷらうどんが良かったのにー」

「私は、おろしぶっかけうどんが」

魔力の高い奴は、大体わがままだ。

ジョン太は無視して続けた。

「それと、いつもの。領収証ちょうだい」

素うどんはあつという間に出て来たが、鯖丸にはエビ天が一個乗っていて、トリコの分には大根下ろしがトッピングであった。

わがままも言ってみるものだ。

何か、天ざるうどんの残り物の様にも見えたが。

ジョン太は、うどん代にしては過分な金額を差し出して、自分も素うどんを食い始めた。

「トゲ男は、殿の所にいる」

うどんのめん吉は、言った。

「殿って言うと、あれ？」

ジョン太は、カウンターの奥にある、換気用の小さな窓を箸で指した。

窓の外には、小高い山があった。

一年くらい前までは、確かに普通の山だった。

今は、山頂に作られた妙な建造物がどんどん浸食し、蟻塚とバベ

ルの塔を足して二で割った様な奇妙な構造が出来上がっていた。

殿とかいう男が（殿だからたぶん男なのだろう）城と呼ばれるその建造物を造って、そこに居るらしかったが、何を目的にしているのかも、どんな奴なのかも、知っている人間はほとんど居なかった。侵入する事は、難しかったし、入って帰って来た者もあまり居なかった。

政府関係の捜査官も、どんどんそこに吸い込まれて消えているという話だ。

本人の口からは聞けなかったが、トリコが探っていたのも、たぶん殿だ。

「トゲ男は、殿に会って戻って来た数少ない奴だ。今は、殿の配下で何かやっているらしい」

その辺までは、トリコも知っている情報だったが、こんな民間の情報屋に知られているとは思わなかった。

「ビーストマスターから、何か盗んだって話だよ。あいつもプレイヤーだし、いつも魔界に居る訳じゃない。整形も極端だから、魔界を出たら、もう誰だか分からない。捕まえるなら、今だな」

「どうして今だと？」

トリコは尋ねた。

トリコの方をちらりと見て、めん吉は続けた。

「あいつが魔界に居る時期とパターンから見て、トゲ男は学生だ。今、外界は夏休みだからなあ」

政府公認魔導士も知らない様な情報を掴んでいる。

この場合、間抜けなのは政府の方なので、ちよつとがっかりだ。

「盗られた物だけ戻れば、トゲ男はどうでもいいんだが」

トリコは言った。

「へえ…」

めん吉は、意外そうな顔をした。

「じゃあ、城に行ってみるか？盗んだ物は殿に渡したって言うてたからな」

「入れるのか」

ジョン太が尋ねた。

めん吉は、くわえ煙草のまま、悪そうに笑った。

「いつものやつなら。追加料金」

手を差し出した。

ジョン太は、舌打ちしながらポケットから金を出して渡した。

「領収証くれ」

「まいど」

領収証は、あっという間に出て来た。

「じゃあ、今晚手引きしてやるよ」

めん吉は言った。

「宿はいつもの所だな」

ジョン太は、ああとうなずいた。

うどんでは足りなかったのか、鯖丸は道すがら色々買い込んでいた。

大半がジャンクフードだ。

いくら何でも、もうちょっと健康に気を使った方がいいと思う。

「お前なあ、そんな食生活続けてたら、今はいいけどいずれ病気になるぞ」

トリコは注意した。

「だって、お腹空くもん」

菓子パンを一気食いしていた鯖丸は言った。ダメだ、こいつお子ちゃまだ。

「肉と野菜も、バランス良く食べなさい」

ビーストマスターの二つ名を持つ政府公認魔導士にまで、おかんの様な事を言わせるとは、恐ろしい天然だ。

宿は、街の入り口に近い場所にあった。

普段、民間がどんな様子で仕事をしているのか知らなかったが、特に悪くはない。

潜入捜査で入る時は、もつとひどい場所で寝泊まりする事もあった。

気を使ったのか、部屋も別々に取ってくれた。

夜に、めん吉が手引きしに来るから、それまで自由行動と言って、ジョン太は一人で出掛けて行った。

トリコは、手持ち無沙汰になってしまったので、宿で貸してくれる二ヶ月遅れの外界の雑誌とか見て過ごしていたが、思い立って、部屋を出た。

鯖丸は、三つ向こうの部屋に居た。

ノックをしても返事がないので、勝手にドアを開けた。

狭い空間にベッドと椅子を詰め込んだ、自分が居た部屋と大体同じ仕様だった。

自分の部屋にはあった、申し訳程度のシャワーとトイレは見あたらぬ。

女だからか、客だからか、一応その辺は気を使ってくれていたらしい。

鯖丸は、ベッドの上で爆睡していた。

周囲には、食い散らかしたジャンクフードの包みと、脱ぎ捨てた服と、訳の分らない英文の専門書が散乱していた。

武器を枕元に置かないで、部屋の隅に立てかけてあるのが、素人丸出しだ。

「おーい」

声をかけたが、ぴくりと体を動かしただけで、全然起きる気配はなかった。

夜に備えて仮眠しているとしても、仕事中にこんなに熟睡するか、普通。

「ちよつといいか？」

頬を軽くはたいた。

少し起きる気配があったが、また寝てしまった。

寝顔がけっこう可愛いので、しばらく見ていたが、意を決してベ

ツドのフレームごと蹴り上げた。

「起きろ、こら」

「え：お母さん、あと五分」

アホな夢を見ている。

耳を掴んで引っ張り起こす事にした。

「いでででで、何？」

やっと起きた。

「母ちゃんには、外界に帰ってから起こしてもらえ」

耳をこすっていた鯖丸は、一瞬物凄い表情をして、こっちを睨んだ。

それから、本当に目が覚めたらしく、起き上がった。

「何か用ですか」

普通に、客に対する口調に戻った。

トリコはうなずいた。

「けっこうめんどくさい事になりそうだから、お前とリンク張つとこうと思うんだけど」

手早く服を脱ぎ捨てながら、言った。

「別に、客とリンク張るの、契約違反じゃないよな」

「ええと」

ダメなバイトは、色々思い出そうとしていた。

「リンクって：ええと、ええっ！？」

もちろん、禁止はされていない。

しかし、この業界に入って以来、魔法を使えないジョン太と、後はイレギュラーで所長と組んだだけだったので、誰ともリンクを張るどころか、張ろうとした事も無かった。

どうやってリンクを張るのかも、ジョン太が相棒なら必要ないと言われて、何も教えてもらっていない。

何となく、色々方法はあるが、一般的にはセックスすればいいというのは知っていた。

リンクの張り方に関しては、ほぼ素人だ。

返事をしなかったので同意したと思ったらしく、トリコはベッドの上に上がり込んで来た。

「お前も早く脱げ。時間がもったいない」

あつという間に一週間大丈夫なTシャツを脱がされた。

「ええ、ちよっと待って」

さくさくパンツまで脱がされそうになって、あわてて両手で押さえた。

「え？ダメなのこういうの」

もうちよつと利用規約を良く読んでおけば良かった。

「ダメです。絶対ダメ」

鯖丸は、パンツを押さえたまま、ずりずりと後ずさった。

「だってあんた、本当は子供でしょう」

「ええと…」

トリコは、考え込んだ。

ダメなのは、契約書も読んでないお前だ。

外界での姿も、本当は見せたくないかったし、こんな事、口で説明するのも嫌だった。

その場に座って、トリコはため息をついた。

「心身成長同調不全症候群って、聞いた事あるだろ」
ぼつりと言った。

聞いた事がある様なない様な言葉だ。

「何だっけ」

天然の相手は疲れる。

「体の成長が止まる病気だよ。魔界に居ると魔力が身体能力を底上げするからな」

魔界生まれで、魔力の高い人間だけが掛かる病気だ。

別に、健康上問題がある訳ではないし、魔界に居る間は、普通に成長している様に見えるので、気が付かない事の方が多い。

魔力の高い人間は、魔法が使えなくなる外界には、あまり出たがらないからだ。

トリコは、ちょっとあさつての方を向いて、言った。

「ぶっちゃけ、お前より十コぐらい年上なんだけど」

「ええっ」

本気で驚いている。

でもまあ、腕利きの政府公認魔導士が、そんな子供の訳がないと納得した様子だった。

「そうなんだ。こっちの出身なんですね、初めて見ました、そういう人」

確かに、魔界出身で魔力が高いのに、外で生活している人間は少ない。

珍しい人を見る様にトリコを見たが、顔を赤くして視線をそらせた。

「何か着てくれませんか」

珍しい人はお前だろう：と、トリコはパンツを押さえて座り込んでいる青年を見た。

良く見ると、けっこう凄い体をしている。

魔力が高い人間は、どうしてもそれに頼ってしまうので、腹筋が割れているランクSなんか、初めて見た。

魔法で付いたらしい酷い傷跡が右手と胸に残っていて、首筋には電脳接続のプラグを埋め込んでいる。

どういうキャラだ、これ。

「これから色々するのに、何でもまた着なきゃいけないんだ」

トリコは、鯖丸のパンツに手をかけた。

「お前が脱げ」

両手で押さえていたのに、手品師のイリュージョンの様に脱がされてしまった。

裸の女と向かい合わせで座っていたので、けっこう恥ずかしい状態になっている。

慌てて隠したが、両手を掴んで、ゆっくり退けられた。

腕力では絶対勝っているのに、抵抗出来ない。

鯖丸の股間をしげしげと覗き込んだトリコは、少し驚いた顔をした。

「何で隠すんだ。すごいじゃん、それ」

そりゃ普通は隠すでしょう。何言ってるの、この人。

おまけに、何だかとても楽しそうだ。

単にエロい人なのか、もしかして。

細い手で押し倒されて、体を押しつけられた。

やわらかい。

おまけにいい匂いがする。

言われるままにあちこち触ったが、自分でももう、何が何だか分からなくなって来た。

この先どうしていいかも全然分からない。

A Vとかいっぱい見たけど、いざとなったら何の役にも立たない。トリコがふいに体を起こした。

乱れた髪が、ばさりと頬にかかっている、何だかすごく色っぽい。もういいかな…とか言いながら、上に跨って来た。

もうちょっと普通の体勢ですると思ってたけど、どうやっていいか分からないし、もういいや、全部任せてしまおう。

そう思うと、ちよつと気が楽になった。

「じゃあ、入れるから」

トリコは言った。

「ちゃんと繋いでね」

何をですかー？

この時点で、目的がリンクを張る事だったのは、もう記憶にない鯖丸だった。

二十一才の誕生日の一日前に、鯖丸童貞喪失。

リンクを張るところか、トリコが二三回腰を動かしたら、あつという間にイッてしまった。

「ええと…」

困惑した顔で、トリコは鯖丸を見下ろした。

「困ったな」

困られても、こっちも困るけど。

「もしかして、初めてだったの」

色々文句を言おうと思ったが、小さい声で「うん」と言うのが精一杯だった。

トリコは、まいったな…と、頭を掻いた。

「それは…ごめんな、急にこんな感じで、いきなり」

本気で申し訳なさそうに言った。

エロいし口も悪いけど、そんなに悪い人ではないらしい。

「いえ…」

予定とは違うが、初めての相手が色っぽい年上のお姉さんというのは、これはこれでいい感じだ。

トリコは、鯖丸の隣に寝転んで、しばらく天井を見上げながら、何か考え込んだ。

それから肘を突いて半身を起こし、鯖丸の顔を覗き込んだ。

「どうする、このまま続けるか？」

何をと聞き返しそうになって、リンクを張る為にこんな事をしていたのを思い出した。

「嫌なら止めてもいいんだけど」

「嫌じゃないです」

鯖丸は即答した。

「だったら、いいけど…」

トリコは、まだ何か考えていたが、聞いた。

「お前、リンクの張り方とか、知ってる？」

「知りません」

まあ、相棒が魔法使えないんじゃ、知らなくてもいい事だろう。

「トラウマ映像とか、接続事故とか、聞いた事ある？」

「ないです」

本物の素人だ。

「止めた方がいいかも」

トリコは言った。

「リンクを張る時は、相手の深い部分まで踏み込むからな。けっこ嫌な物を見る事になるよ」

鯖丸は、しばらくの間考え込んでいた。

それから、トリコの方を真っ直ぐ見て言った。

「俺の方がたぶん、相当ひどい事になってると思うけど」

子供の強がりみたいなものだと思ったが、目が本気だった。

「それでもいいなら」

強がりどころか、控えめな表現だという事は、すぐに分かった。

セックスに不慣れな青年の、ぎこちない感じをしばらく楽しんでから、魔力を相手の内側に伸ばした。

誰でもこんな感じでやるのではなく、自分なりに色々な方法があるとは聞いているが、この辺は本当に個人的な領域だった。

きちんと繋げる前から、何か深くて暗い物が流れ込んで来ていた。血と暴力と、それから、もっと嫌な何か。

こいつの中身、絶対におかしい。

繋ぐ前から飲み込まれそうだった。

本気で、こんな危ない奴とリンク張るのは止めようかと思い始めた時、現実の方の鯖丸が、情けない声を出した。

「あっ：俺、もうダメ」

ここで終わったら、さっきと同じ、無駄手間だ。

「我慢しろ、もうちょっとで繋がるから」

「そんな難しい事、無理だよー」

ぎゅっと容赦なく尻をつねると、どうにか止められた。

そのまま腕を伸ばすと、深い場所で何かに触った。

一瞬の間を置いて、深淵の中に突き落とされた。

その場所には、上も下も無かった。

真っ暗な空間に浮いていて、それでも周囲には光があった。
瞬かない無数の星が、無限に広がっている。

魔界生まれで、特に科学知識はないトリコにも、ここが何処なのか分かった。

宇宙空間だった。

右手の方向に地球が見える。

リアルな映像だ。

反対方向の、宇宙空間に浮かぶ建造物に向けて、どんどん落ちて行く。

重さのない空間は、思いの外爽快だった。

明らかに建設中の巨大な建造物を素通りし、小さな人工物に向かって行く。

けっこう楽しい。

人工物が、小規模なマイナーコロニーだと分かるくらいまで接近した。

その中に、壁を通り抜けて吸い込まれる様に着地した。

楽しかった雰囲気は一変し、辺りは血と暴力の匂いに包まれた。

繋がるからと言われて、尻をぎゅっとつねられた瞬間、目の前が真っ白になった。

少しの間、何が起こったのか分からなかった。

全く別の場所へ放り出された様な気がして、鯖丸は目を開けた。

自分の体の下で、ちよっと色っぽい感じで体を反らせているのは、さっきまで見たトリコだ。

それなのに、頭の中では、真っ白な風景が消えない。

目を閉じると、白い物が横殴りに吹き付けていた。

一面の雪景色だった。

吹雪の中に、自分は為す術もなく佇んでいた。

体には、寒さは感じない。

それでも、ここが寒い事は理解していて、どうにかしなければ死

んでしまっただろう事が分かった。

吹雪の向こうに、ぽつりと赤い点が見えた。
点に向かって、歩き始めた。

マイナーコロニーの内部は、血の匂いで充満していた。

たぶん少し前まで人間だった物が、通路に、部屋に、血を流して
散乱している。

生きている人の気配は奥の方にあったが、もう見たく無かった。
きつと、酷い事になっている。

物凄く嫌だった。帰りたい。

重い足取りで通路を進んだ。

奥の部屋に、それは居た。

赤い点が、徐々に近付いて来た。

近付くに連れて、それは人だと分かった。

分厚い、暖かそうなフード付きの赤いコートを着た少女が、雪の
中にうずくまっていた。

こちらを見上げた顔は、外界に居た時のトリコだった。

顔立ちは同じだが、雰囲気はまだあどけない。

実際に、見た目通りの年齢だった頃の彼女かも知れない。

雪の中で、ゆっくりと立ち上がった。

こちらに笑いかけながら、コートの前をはらりとほだけた。

下には、何も付けていない。

細い体と薄い胸が露わになった。

白いきゃしゃな手が、自分の腕をそっと掴んだ。

そのまま、ゆっくりと、細い体に引き寄せた。

エロい感じだ。

子供は別に好きではないが、目の前の小さな少女が、凄く色っぽ
く見える。

このままどうにかなってしまいそうな感じだが、そう言えば現実

の方でもうトリコとどうにかなっている最中なのに、ここで二重に……ええと、どうなるんだ、これ。

指先が、肉付きの薄い腹に触れた。

すうっと、体の中心に亀裂が入った。

ばくりと胸から下腹部まで、傷口の様な物が開いた。

こんなになつたら、普通血とか内臓が出て来るはずだが、ただ、得体の知れない蠢く中身がのぞいているだけで、痛そうな顔すらしていない。

笑いながら、ゆっくりと掴んだ腕を、自分の腹の中にずぶずぶ差し込んで行った。

生暖かさと、ぐちゃりとした感触が、リアルに伝わって来た。

鯖丸は悲鳴を上げた。

機械の類が散乱した、物置の様な場所だった。

照明だけが、やけに眩しい。

入り口に、女が一人倒れていた。

体中を切り刻まれて、下半身は服をむしり取られた姿で、小型の銃を握りしめている。

どんな殺され方をしたのか、考えたくない。

部屋の両脇には、少年が二人、うずくまっていた。

一人は、幼い感じで、絶望的な顔をして俯いている。

もう一人は、少し年上に見えた。

暗い顔で、部屋の中央を睨み付けている。

そして、部屋の中央にそれは居た。

複数の男達に押さえつけられ、犯されているきゃしゃな体つきの少年。

目は開いているが、何も見ていない。

三人の少年は、全員同じ顔だった。

現実の世界では「もうダメ」とか言っている、あのアホだ。

これが実際に起こった事だとは思いたくなかったが、トラウマ映

像は、傷が深い程事実に近い形で出る。

自分のそれは、もう少し抽象的だとリンクを張った相手から聞かされていた。

これ以上見たくない。

目を閉じたかったが、ここまで来て無責任に放り出す事も、出来なかった。

何が「相当ひどい事になってる」だ。そんなレベルじゃない。

ふいに、部屋の中央に居る少年が、狂った様に笑い出した。

目の中に、暗い光が点った。

ざくりと口が耳元まで裂け、自分を犯している男の頭に、ぱつりと噛み付いた。

一瞬で辺りは血の海になった。

男達が次々と食い殺されて行く。

これ以上は耐えられなかった。早くリンクを張って終わらせたい。

三人の内のどれとリンクを張ればいいのか分からなくて、トリコは周囲を見回した。

俯いている幼い少年が、一番鯖丸に近い様に見えたが、感覚は違うと告げていた。

もう一人の、厳しい顔で部屋の中央を睨んでいる少年と目が合った。

たぶんこいつだ…と思って踏み出した時、少年は立ち上がり、首を横に振って部屋の中央を指差した。

よりによって、あれかよ。

それはもう、人間には見えなかった。

人をむさぼり食う化け物に変わっていたが、目だけが泣いている子供だった。

お母さん…お母さん…

「そうか…」

トリコは、部屋の入り口を、ちらりと振り返った。

「お前、自分がされた事より、母ちゃんをこんなにされた方が辛か

ったのか」

化け物の動きが、少し止まった。

「いい子だね。腹が空いてるなら、お食べ」
部屋の中央に進み出た。

ばかりと頭が食いちぎられた瞬間、視点が入れ替わった。

自分の血の味が口の中に広がった。

吐きそうだ。

どうにか踏みとどまって、視点を元に戻した。

繋がった。

鯖丸は、自分の体に覆い被さって、荒い息を吐いていた。

ぎりぎり、リンクを繋ぐまでは持ち堪えたらしい。

今の何？と、間抜けな事を聞いて来た。

こっちが聞きたいわ：と思ったが、あんなひどい記憶を抱えて、

こんなに脳天気生きて行けるとも思われない。

たぶん、本人は無理矢理忘れている類の記憶だ。

そっとしておく事にした。

「繋がったか」

聞いてみたが、首を横に振られた。

「分らない」

手応えはあった。

というか、こんなのとよくリンク張れたものだ。

ただ、リンクを張ったせいで連動する様になった力の大きさが実感出来た。

窓の外は、少し暗くなりかけていた。

めん吉が来ると言っていた夜には、少し間があるが、そろそろ準備した方がいいだろう。

「起きろ。何時か聞いてないから、支度した方がいい」

「だるい」

鯖丸は、ごろりとベッドに横になった。

それは、初めてリンクを張ったらけっこう疲れるが、こっちの方が重労働だった気がする。

「仕事だろ。起きろ」

トリコは、肩を掴んで揺すった。

「うん」

だらだら起き出そうとして、ふいに変な顔で壁の一点を見つめた。壁の向こう側には、廊下と階段があった。

その階段を、武器を手にした男達が、上がって来る。

「あれ…」

何で壁の向こう側が見えるんだろうという顔をして、目をこすった。

それから、男達のただならぬ雰囲気気が付いて、がばりとはね起きた。

肩に置かれた手が離れた瞬間、壁の向こうの映像は消え失せた。

「ああ、繋がってるな」

トリコは、急いで服を着始めたが、パンティーを履いてニットのノースリーブのブラウスを羽織った所で時間切れになった。

壁の向こうが見えなくても、もう気配で丸分りだった。

廊下を曲がり、ドアの前に立った男達が、こちらの気配を伺っている。

次の瞬間、乱暴にドアが開いた。

鯖丸は、ちらりと部屋の隅にある刀に目をやったが、間に合わない判断したらしく、素手で空中を薙ぎ払った。

刀を使った時程の威力はないが、空気の鎌がドアごと男達を吹き飛ばした。

魔力を溜める動作が、全く無かった。

先に技を溜め始めていた先頭の男が、為す術もなく壁に叩き付けられていた。

魔力が高いのは分かっていたが、ここまで強いとは思わなかった。

「速い…」

いきなり、背後で窓がぶち破られた。

飛び込んで来た異形の男が、振り返った鯖丸の脳天に、かけ声もろとも木刀で綺麗な一撃を入れた。

「でも、技を出した後、隙だらけだ。さすが、ダメなバイト」

廊下と窓から、男達がなだれ込んで来て、トリコと鯖丸を縛り上げた。

「分かっているなら助けてやれ。仲間だろ」

奥道後温泉と焼き印の入った木刀を腰に差して、異形の男は呆れた様に言った。

「あ：トゲ男」

これから探ろうと思っていた男が、自ら出て来ている。

何だか情報だだ漏れの予感がした。

全身トゲだらけで、額に第三の目を付けた緑色の皮膚の男は、三つの目で二人を見下ろした。

全裸で縛り上げられている鯖丸をしげしげ見て、驚いた顔で一步下がった。

「えっ？何でこいつ、政府の奴と」

知り合い？

こんなに極端な整形をしていては、外で知り合いだったとしても分からないだろう。

しかし鯖丸は素顔丸出しだ。

本名は知られてません様に：と、トリコは思った。

幸いなのかどうなのか、名前は呼ばれなかった。

木刀で頭を打たれて、すっかり意識が無くなっていたから、そこまでする必要も無かったのかも知れない。

「連れて行け」

トゲ男は、背後に居る男達に命じた。

ここで暴れる事も出来たが、事情を探る為に、トリコは捕まる事にした。

全裸で拉致された鯖丸は、少し気の毒だと思ったが、夏だし、風

邪もひかないだろうから、まあいいやと軽く流した。

四話 トリコ（後編）

高い位置の窓に鉄格子のはまった、絵に描いた様な石造りの牢には、月光が射し込んでいた。

お情けでもらった小汚い毛布の上に座って、鯖丸はぐすす泣いていた。

とうに夜半を過ぎて、日付も変わっていた。

全裸で拉致られて、牢に閉じこめられるというのは、お誕生日の迎え方としては、最悪の部類に入と思う。

別に、ケーキにロウソクを立てて欲しい訳ではないが、これはない、絶対ない。

折角城まで入れたのはいいが、どうやって脱出しよう、牢の周囲は結界がちがちだし…と、思案していたトリコは、イラッと来たので怒鳴りつけた。

「やかましい、泣くな」

「だって…」

トリコは、まだ何か着てるからいいよ…と思ったが、女の子がこんな格好で拉致されて平然としているので、ちよっと自分が恥ずかしくなった。

実際には、女の子と言っても溝呂木先生と同じくらいの年齢だが、ごしごし目をこすって、腕組みしているトリコを見上げた。

何だかっこいい。

所長と云い、こういう年上で豪快なタイプに弱いのだった。

「結界がひどい。どうにか破れないかな」

「ジョン太なら、簡単だと思うけど」

鯖丸は答えた。

昨日から姿が見えない。何やってるんだろう。

二人とも魔力が高いのが災いして、強力な結界に手が出せなかった。

「時間はかかるけど、反対側から解いてみる？」

鯖丸はたずねたが、トリコは首を横に振った。

「時間がかかり過ぎる。幸い床の結界は薄い。ぶち抜いて出よう」
床の結界が薄いのは、下がぎっちり地面だからじゃないのかと鯖丸は思った。

あと、こんな強力な結界が床にもかかっていたら、ある程度魔力の高い人間には拷問だ。

立っている事も座っている事も出来ないで、いずれ衰弱死するだろう。

牢を覆う結界は、以前トリコが捕まっていた重合結界より遙かに強力だったが、明らかに個人でかけた物だった。

これをおかけた奴は、絶対俺より魔力が高い。

「ぶち抜くって、どうやって」

鯖丸が聞くと、トリコはあっさり言った。

「お前、攻撃系得意だろ。どうにかしろ」

自分の得意な魔法は、重力操作を除けば、空気の流れを操る系統が多い。

鋭いが、地面の様な分厚い面に対しては、それ程破壊力はない。

たぶん、所長が使っていた、地面から壁を出す様な系統の魔法ならいけると思うが、人には向き不向きがあるのか、以前練習してみたら全く使えなかった。

「そんな、都合のいい事言われても……」

トリコが、攻撃系の魔法はそれ程得意ではないのは、何となく分かった。

リンクを張ったせいかも知れない。

「地道に結界解こうよ」

地道に空気系の魔法で床を削るより、絶対その方がいい。

結界解除の作業を始めようと、毛布を腰に巻いて立ち上がった鯖丸は「ぎゃー」とか言いながら毛布を牢の隅に放り投げた。

「どうした」

トリコは聞いた。

「かゆい」

ダニが居たらしい。地球のこういう所が嫌いだ。

「あ、本当だ。可哀相な尻に」

しげしげと覗き込まれた。

いい意味でも悪い意味でも、もうどうでも良くなった鯖丸は、前も後ろも隠すのはやめた。

何時間ぐらいかかるかなあ…と、結界の最後の結び目から手を付けようとした時、石畳で覆われた廊下の向こうにある木戸が開いた。月明かりと魔法発光の照明の中を、のんきな足取りで歩いて来たのは、昨日会った情報屋、うどんのめん吉だった。

「やっ、元気ーい」

「てめえ」

トリコは、触ると危ない鉄格子の、ぎりぎりまでにじり寄った。

「私らを売ったな。どっちの情報屋だ、殺すぞハゲ」
相変わらず口が悪い。

「別にいいじゃん、城には入れたんだから」

めん吉は、平然と言った。

「ほら、お前の刀」

鉄格子の隙間から、見慣れた刀が差し込まれた。

「あ…」

元々、こういう段取りだったらしい。

鯖丸は刀を受け取った。

「あのー、服は？」

一応聞いてみたが、予想通りの答えだった。

「そこまでは知らねえよ」

絶対、捕まる直前までナニゴトかしていた様子の二人を見比べて、肩をすくめた。

「ジョン太もすぐ来る。オレも色々立場あるんで、これでな」
立ち去りかけためん吉と入れ違いに、ジョン太が入って来た。

めん吉からホルスターに入った銃を受け取って、身に着けながら、こちらに走って来る。

「悪い、中々見張りが巻けなくて」

「何だ、お前も捕まっていたのか」

トリコは言った。

「捕まった方が、早く侵入出来るからな」

うどん屋で言っていた「いつものやつ」というのは、こういう事だったらしい。

めん吉は、城にも出入り出来るコネを持っていて、表向きなのか実際なのか、二重スパイの様な立場らしかった。

「先に言え、そういう事は」

トリコは、腕組みして文句を言った。

「ほんと…先に言つといてよ」

鯖丸も、肩を落としてため息をついた。

お前、知ってて捕まる演技なんか出来ないだろう…と言いかけて、ジョン太は二人を見比べた。

ええ…何、その一仕事終わってから捕まった感じの格好は。

「何やってたんだよ、お前ら」

「リンク張ってただけだ。少し手間取ったので、こんな格好だが」
一切後ろめたい事は無いと言った調子で、トリコは断言したが、鯖丸は少し恥ずかしいのか視線を反らせた。

「ええっ、こいつとやったのかよ。サキュバスに捕まってもギリギリセーフで童貞だったの、お前くらいだぞ。何でこんな、股の蝶番がゆるそうな女と」

「ジョン太は、俺をどっち方向に行かせたいの？人の部屋にデリヘル放り込んでおいて」

それを言われると、反論出来ない。

「どういうコンビなんだ、お前ら」

トリコは、二人を見比べて、たずねた。

「そうか：あのサキュバス相手に、ぎりぎりセーフ」

トリコは、ぐっと拳を握った。

「勝った！！」

エロ系魔女の間で、何かの目標にでもなっているのだろうか。

絶対、魔力だけならトリコが圧勝のはずなのに。

「しかし残念だな。お前、このまま三十まで童貞だったら、外界でも魔法が使えたかも知れないぞ」

「都市伝説だから、それ」

ジョン太は否定した。

「嫌だよ、そんな将来設計」

鯖丸も否定した。

「博士号を取ったら、宇宙船のエンジン開発関係に就職して、すかさず家庭を持って子供は三人ぐらい……」

大人の階段を二三段登ってしまったので、妄想が加速している。

「はいはい」

ジョン太もしんどいので、もういちいち突っ込まない。

「ここ出るぞ、どうせ逃げたのはいずれバレる。石を捜して、早く帰ろう」

「どうやって」

トリコは聞いた。

こうやって間近で言い合っているが、実際はがちがちの結界で隔てられている。

「大体、お前、どうやって逃げて来たんだ」

段取りからして、ジョン太も捕まっていたはずだった。

「別に、こうやって普通に」

言いながら、結界に両手を突っ込んだ。

そこまでは、この男の魔力の低さからして、予想していた範囲内だった。

しかし、猛獣を閉じこめておく様な太さの鉄格子に両手をかけ、ちよっと力を込めて飴の様にこじ開けたのを見て、トリコは顔色を

変えた。

「出て来たんだけど」

「普通じゃないから、それ」

魔法ではなく、単に腕力でねじ曲げている。何だ、こいつ。

鯖丸は、何の疑問も抱かないで、結界の利いている鉄格子に触らない様に、外へ出た。

これで普通らしい。

トリコも後に続いた。

木戸の向こうで、人の気配が近付いて来た。

鯖丸は、トリコの手を握ってから、目を細めて木戸の向こうを透かし見た。

「ジョン太、二人。得物は拳銃とナイフ。投げるやつ」

ああ、本当にリンク張ってる、こいつ。

ジョン太は、銃を抜こうとして止めた。

まだ、大きな物音は立てない方がいい。

トリコが気が付くと、ジョン太はいつの間にかドアの前に移動していた。

ドアが開いた瞬間、何か不思議な動作をした様に見えたが、きちんと分かったのは立ち上がる部分だけだった。

やって来た二人組は、床に倒れていた。

何がどうなっているのか分からない。こいつのやる事の方が魔法だ。

鯖丸には、何が起こったか見えていたらしく、相変わらずすげーとつぶやいていた。

周囲に聞き耳を立てて、まだ、他の追っ手が来ないのを確認してから、ジョン太は足元の二人をつま先で転がした。

「おい、こいつらのどっちか、服剥がして着とけ」

「あ…」

さっきまでぐすぐす言ってたくせに、もう自分が裸だということを忘れていたらしい。

どっちにしようかな…と、腕組みして考え込んだ。

「迷うなバカ。その股間の悪魔超人をさっさと仕舞え」

ジョン太は鯖丸の後頭部をどついた。

「何だよ悪魔超人って。ばりばり正義超人だってば。何度倒れても火事場のくそ力で立ち上がるって」

ぶつぶつ言いながら、服をはがし始めた。

若いのに古いマンガを良く知っていたものだ。

「いやいや、それM78星雲の人だから。すぐカラータイマー点滅するから」

トリコまでひどい事を言い出した。

ツッコミが二人になって、不利だと思ったのか、鯖丸は黙って素早く服を着た。

作務衣だが甚平だか良く分からない変な服で、おまけに丈が短い
が、少し手足を動かしてみても、けっこう動きやすいので本人は満足
したらしかった。

もう一人の小柄な方からズボンをはがして、鯖丸はトリコに差し
出した。

「着る？」

「いらん、そんな小汚くて生暖かいズボン」

トリコは断った。

「それより、どうするんだ。このまま闇雲に捜し回っても、いずれ
見つかるぞ」

「上へ行け」

ジョン太は言った。

「石はおそらく殿の周辺にあるって話だ。他にも色々な物を集めて
いるらしい」

理由は分からないが…と、言った。

「お前達はどうするんだ」

まるで、別行動をする様な言い方だ。

「ハデに暴れて敵を引きつける。石を捜しやすくなるだろ」

「バカな事を言うな」

トリコはジョン太を見上げた。

魔法整形の獣人と違って、顔に表情が良く出るが、それでも何を考えているのか分からない。

魔法も使えない民間人のくせに。

「この城に何人の敵が居るか、分かっているのか」

「六十人以上、八十人以下」

ジョン太はあいまいな数字を言った。めん吉の情報かも知れない。

「広い場所ならヤバイけどな。インドア戦で一度に多人数と当たる必要はない。大丈夫だ」

背中に刀を下げていた鯖丸は、うなずいた。

「俺ら、最近、こういうの慣れてるから」

二人の戦力が高いので、ここしばらく、荒っぽい仕事はほぼ百パーセント二人に回って来ていた。

どういうコネがあるのか、魔界に逃げ込んだ犯罪者を捕まえる様な仕事を、どこからともなく所長が取って来ている。

躊躇しているトリコに、ジョン太が言った。

「大事な物なんだろ。早く行けよ」

トリコは、言葉に詰まった。

ただのガラスのかけらが、どれくらい大事な物なのか、本当に分かってくれている様な気がしたからだ。

事情も知らない他人だ。そんなはずはない。

「分かった、後は任せた」

「じゃあ、先に行くね」

鯖丸は、こちらを見てから走り出したジョン太の後に続いた。迷いが無い。

信頼出来る相棒が居ると云うのは、いい事だなと思った。

昔は、自分にも：

廊下の先で、派手な銃声と叫び声が上がった。

しばらくタイミングを計ってから、トリコは石畳の廊下を走り始

めた。

城の内部は、大部分が木と石で出来ていたが、所々、骨の様な物質がむき出しになっていた。

城の外観を覆っていた、乳白色の壁面が、こんな風だった気がする。生き物っぽい、気持ちの悪い建材だ。

ゆるやかに傾斜した廊下を走りながら、ジョン太は鯖丸を振り返った。

特に変わった様子はない。

トリコとリンクを張ってしまったと云うので、少し心配していたが、大丈夫な様子だった。

角の向こうから飛び出して来た十人程の連中を軽く薙ぎ倒してから、鯖丸は変な顔をしているジョン太に聞いた。

「何？」

「お前、体は何ともないか」

「尻がかゆい。ダニに刺された」

鯖丸は言った。

「そうじゃなくて」

鯖丸の背後に、二三発弾丸を撃ち込んで、ジョン太は言った。背後で人が倒れる音がした。

「あの女とリンク張って、何ともないのか」

「えーと」

何か回想したらしく、ちょっと顔を赤くした。

「うん、別に何も」

「だったらいいけど」

ジョン太は、前方に向けて、短機関銃を連射した。

鯖丸は、少し目を細めて、変な顔で弾道を見た。

「何で聞くの」

「ランクS同士でリンク張る事なんて、あまり無いからだよ」
ジョン太は答えた。

「あいつは熟練度が高いからいいが、お前はどのようなか分からん」

「そうなんだ」

自分以外のランクSは、初めて見た。

「良く分からないけど、大丈夫だと思う」

鯖丸は答えた。

「これで童貞だという俺の唯一の弱点が無くなった。ふふふ、無敵だ」

全然大丈夫ではない発言だ。

「いや：お前の弱点はバカだからね。直ってないから」

ジョン太は釘を刺した。

どんどん敵が群がって来るが、当面、狭い廊下を進んでいるので、一度に来る相手はたかが知れている。

敵が群がっている方向に向かって、二人は走った。

騒ぎは大きくなっていった。好都合だ。

トリコはどうしているだろう：と鯖丸は思った。

無事なのは何となく分かる。

リンクを張っているせいだろう。

前方に、開けた場所があるのが分かった。

今まで、こんな事は分からなかった。

ジョン太は、魔力ではなく別の感覚で分かるらしく、二人は止ま
って、顔を見合わせた。

「何人くらい居る？」

鯖丸は聞いた。

「二三十人かな、増え続けてるけど」

空気の匂いを嗅いで、ジョン太は答えた。

「魔力の高そうな奴は居るか」

「四人くらい」

鯖丸は、少し目をつむってから、言った。

「じゃあ、行くか」

ジョン太は、両手に銃を持った。

鯖丸は、刀を抜いた。

廊下を抜けた先は、二階分が吹き抜けになった広い部屋だった。昔のカンフー映画とかで、たまに見る様な構造だ。

下の階の広場に、敵が群がっている。

「うわー、いっぱい居る、めんどくせえ」

ジョン太は、露骨に嫌な顔をしながら、魔法で先制攻撃を仕掛けようとした数人を、あっけなく倒した。

タメの要る魔法で銃の達人に対抗するのは、鯖丸くらいの速さがあっても無理だ。

「いいじゃん、暴れようぜ」

鯖丸は、悪い顔をして笑った。

一瞬、暁が出て来たのかとジョン太は思ったが、思い切り暴れるので、外界の性格が悪い武藤君に戻ってしまっただけだった。

あっという間に、鯖丸が視界から消えた。

重力操作と高速移動で飛び回り、魔法攻撃を避けながら天井に逆さ向きに着地した。

いくら重さがほとんど無くても、天井に座っていられるはずがな
いと思ったが、その時にはもう、姿が変化していた。

かまいたちの時に見た、鬼の様な外見だ。

あの時には普通だった足まで、かぎ爪の付いた人外の物に変わっていた。

天井を蹴って、すっかり変わってしまった鯖丸は、加速した。

いつもながら、地面に向かって頭から高速で突っ込んで来る思い切りの良さは凄い。というか、どこか壊れているんじゃないかと思う。

飛んでいる間の周囲の敵は、ジョン太が一掃した。

体を反転させ、着地した次の瞬間、一気に重さを加算した。

ずしん…という鈍い音と共に、床に亀裂が入った。

周囲が体勢を崩したスキに、重さを通常に戻して、回転しながら技を繰り出した。

円形に広がった衝撃波が、群れていた敵を一掃した。

「あー、取り返しが付かないくらい、強くなってる」

ジョン太は、頭を抱えた。

破壊された部屋の中心で、鬼の姿をした鯖丸が立ち上がった。

衝撃波を繰り出した時の空気の流れが、周囲で埃を舞い上げ螺旋を描いた。

どんどん人間離れして行く様で、ちょっと不安だ。

背後から、下の階の廊下を駆け抜けてきた敵が、襲いかかった。

銃撃と魔法を、刀で受け止め、あっさり片付けて上を向いた。

「ジョン太、終わったからそっち戻るね」

アホっぽい顔で笑ったので、少し安心した次の瞬間、背後の壁から湧き出す様に、人影が現れた。

まだ半分壁に埋まっているが、明らかに鯖丸を狙っている。

こちらからは、鯖丸の背後一直線上で、銃では絶対狙えないはずだった。

どうしてそんな事をしてしまったのか、ジョン太にも分からなかった。

ためらわず引き金を引いていた。

銃弾が、空気を切り裂くのが見えた。

素人には分からない、ほんのわずかな誤差だったが、明らかに銃弾は曲線を描いた。

紙一重で鯖丸を避け、壁男に命中した。

自分が何をしたか、分からなかった。

ジョン太には珍しい事だが、呆然と立ちつくしてしまった。

二階に飛び上がって着地した鯖丸は、元の姿に戻ってから駆け寄った。

「ジョン太、どうしたの！！」

背中の鞆に刀を収めて、ジョン太の両手を握った。

自分でも、何がどうなっているのか、分からない。

「ええと…」

曖昧な返事しか、出来なかった。

「どうしたんだろう、俺」

こんな頼りない感じのジョン太は見た事が無かった。

「魔法だから、それ」

鯖丸は言った。

「最近、弾道が変だと思ってたけど、自分で曲げてるよ」

「そうなんだ」

この業界は結構長いが、魔法を使う事に関しては、鯖丸の方が先輩だ。

そう言われるならそうなんだろう。

長年、魔法を使える様になれと言われ続けていたが、あまり嬉しくなかった。

というか、まずい。

普通に練習していて使えたならいいが、敵の真ん中で、持っている武器の性能が、自分の知らない物にがらりと変わるのに等しい事態だ。

困った事になったと思った。

トリコとリンクを張って、鯖丸の力が一気に上昇したので、自分も引きずられたのかも知れなかった。

「ううん、もうちょっと前から、微妙に曲がってた」

手を握っていて、考えが少し分かるのか、鯖丸は言った。

それから、気が付いて手を離れた。

「そうか」

まあ、これでやるしかない。

ジョン太は、ため息をついた。

「魔力は低いままだよな。お前、分かるか？」

鯖丸は、少し目を細めてジョン太を見た。

「うん、低い。前より少しは高いけど、そんなに変わってないよ」

魔力が低いと言われて、こんなに嬉しかった事は今まで無かった。もし、高くなっていたら、今までの様に攻撃に当たりに行って反

撃する事も出来ないし、戦い方自体、がらりと変えなければならぬ。

「じゃあ、このまま行こう」

ジョン太は言った。

「大丈夫？」

鯖丸は聞いた。

「さあ、分からんけど、まあ、今まで通りやれるよ」

ジョン太は答えた。

ジョン太は、どちらかというで見栄っ張りなタイプだが、自分を過大評価して仲間を危険な目に遭わせる様な真似は、絶対しなかった。

うかつにそういう事をしそうなのは、自分の方だ。

「分かった、行こう」

鯖丸は言った。

トリコは、入り組んだ廊下を移動していた。

その辺の部屋に侵入して、適当な布をスカート代わりに腰に巻いて、髪をくくっていた。

まだ、誰にも出くわしていない。

遠くで騒ぎが起こっているのが分かった。

本気で、あの人数を相手に、互角以上に戦っている様子だ。

目算では、城の半分以上を登っているはずだったが、確信はなかった。

廊下の向こうに、階段が見えた。

今まで、城の周辺を巻く様に登っていたが、ここから先は、明らかに様子が違う。

廊下の両脇には、灯りが点っていて、槍状の武器を持った男が二人、脇を固めていた。

下で起こっている騒ぎに、参加する気配もない。

トリコは、素足で廊下を踏んで、二人に向かって歩き出した。

明らかに怪しい女に向かって、二人は槍の先を向けた。

ふわりと床を蹴って、滑る様に二人の間に入り込み、両手を伸ばした。

思っていた以上に速く動けたので、自分でも少し驚いた。

指先から、糸の様な物が伸び、二人の男の顔に、ずぶずぶとめりこみ、融合した。

二人は、少し痙攣し、棒立ちになった。

しばらくそうやって、探りを入れていたトリコは、必要な事が分かったので、糸を引き抜いた。

二人はその場に、崩れ落ちた。

「上か…」

結局、この階段を上がらなければ、目的の場所に行けない。

階段の上には、分厚い木の扉が見えた。

向こう側に人影はない。

行くしかなかった。

トリコは、階段を登った。

ジョン太と鯖丸が階段まで来たのは、それから少し後だった。

襲いかかって来る連中を倒しながら走っていたら、ここに着いてしまった。

倒れている見張りの前に屈み込んで、調べていたジョン太は振り返った。

「意識はあるみたいだが、どっかに正気が行っちゃってるな。これ、あの女がやったんだと思うか？」

鯖丸は、膝に両手をつけて、肩で息をしていた。

今まで、魔界でこんなに長時間戦った事はない。

いくら普段から鍛えていても、普通の人間にはきついだろう。

「少し休むか」

ジョン太は聞いた。

「今やってる」

しばらく呼吸を整えて、こちらへ来た。

トリコがどんな魔法を使えるのか、いくらリンクを張っていても把握出来ている訳ではないが、痕跡は確かにあった。

倒れている男の顔に、指先で軽く触ってから、階段を見上げた。

「上に行ってる。こいつらの頭を探って、何か見つけたみたいだ」

「そうか」

ジョン太は、少し考えた。

「そろそろ合流した方がいいな。行けるか」

「うん」

二人で歩き出そうとした時、階段の上の扉が開いた。

「待て、この先は通さん」

扉の向こうは、昼間の様に明るかった。

声の主は、シルエットになっていて顔も分からない。

薄暗かった広い踊り場も、真っ直ぐに射す光に照らされた。

顔は分からないが、シルエットだけで誰だか分かった。

「あっ、トゲ男」

トゲ男は、階段を下りて来た。

背後から、二人の男が付いて来る。

どちらも、全裸で拉致られる時に見た憶えがあった。

「まさか、こんな所で会うとはな」

トゲ男は、鯖丸の方を見た。

「え、知り合い？」

それはまずいんじゃないかとジョン太は思った。

鯖丸は、魔法整形が苦手だ。

一度試した事はあったが、長時間整形した姿を維持出来なかった。鬼の様な姿に変わる事は出来るが、あれは実用本位で、顔はそのまままだ。

反対にトゲ男は、原型が分からないくらい自分を変えている。

本名を知られていたらヤバイ。

ジョン太は銃を抜いたが、もしかしたらこいつ、外界で鯖丸の友

達だったりしたらまずいと一瞬思った。

学生だと言っていたし、可能性はある。

少し迷ったのが災いした。

トゲ男の背後に居た二人が、両脇からジョン太を羽交い締めにしていった。

瞬間移動して来ている。

魔力が普通レベルの人間だったら、倒れている様な攻撃を仕掛けられていた。

無理矢理振り放し、肘撃ちと蹴りで倒したが、その間にトゲ男が移動して来ていた。

残りの階段を一足飛びに飛び降りて、鯖丸の目の前に立った。

どう考えても、刀で一撃を入れられる間合いだが、鯖丸は動かなかった。

トゲ男が、鯖丸同様素で強いのが分かった。

たぶん、同じ様な剣道の有段者だ。

得物は真剣な分有利だが、背中の剣より腰に差した木刀の方が早く抜ける。

バカ、さっさと魔法使え、絶対お前の方が強いから…と、ジョン太は思ったが、鯖丸はバカ正直に挑発に乗って、剣術で戦うつもりだった。

やっぱりバカだこいつ。

「ええと…誰」

更にバカ丸出しの質問をした。

「俺の顔を見忘れたか」

トゲ男もバカだった。分かる訳がない。

「武藤玲司、止まれ」

ああ、やっぱり本名知られてる。

固まった鯖丸の喉元に、木刀が突き付けられた。

単なる木刀だが、魔力を帯びていて、皮膚に触れれば焼き切られそうだった。

鯖丸は、固まったまま、普通に鬱陶しそうな口調で言った。

「だから、誰だよ」

「忘れたのか。貴様の永遠のライバル、秋本隆一だ。去年の地区予選での雪辱を今……」

自分で本名をバラしている。本物のバカだ。

トゲ男の姿が変化した。

普通の人間の姿に戻っている。いや……普通と言うには語弊がある。すごい男前だ。

「ああ、広大の秋本君」

鯖丸は、納得した様に言った。

「何でライバルなの、君」

金縛りをかけられていても分かるくらい、やれやれという顔ををした。

「弱いくせに」

武藤君、本気で性格悪い。

「何でお前、剣道やってる時の方が性格悪いんだよ。武道家として、どうなんだ、それ」

ジョン太は、溝呂木先生みたいな事を言い出した。

「勝てばいいんだよ、勝てば」

二人は同時に反論した。

「あ、やっぱり友達なんだ。俺、手出ししないから」

「友達じゃねえ」

更にハモっている。

「良かった……お前の友達って、山本と迫田の二人しか居ないと思ってた。見学するわ、俺」

ジョン太はその辺に座り込んだ。

友達じゃないのに……と二人はぶつぶつ言った。

「秋本隆一、束縛解除」

鯖丸は命令で自分の束縛を解いた。

更に、背中に背負った刀を外して、ジョン太の方に投げた。

「同じ条件でやってやるよ。木刀寄せ」

秋本は、もう一本挿していた木刀を抜いた。

「奥道後温泉と、厳島神社、どっちがいい？」

「じゃあ、温泉」

差し出した手に、木刀が渡され、二人は少し後ずさって間合いを取った。

秋本は、上段に構えていた。

鯖丸は、少し体をずらして、斜めに中段の構えを取っている。

どちらの構えが有利なのか、剣道は素人のジョン太には分からなかったが、それなりに色々な格闘技をかじっているので、どちらが強いのかはすぐに分かった。

秋本君、早く逃げた方がいいぞ…と、ちょっと思った。

鯖丸の足が、すうっと前に出た。

上半身は全く動いていない。

そのまま、目にも止まらない速さで、撃ち込んだ。

見事な抜き胴が決まった。

秋本は、その場に崩れた。

鯖丸は、ふん…と小さくつぶやいた。

「弱いよ」

文句を言った。

「もうちょっと強くなってから、出直して来い」

「くそっ、今年の地区予選こそ」

秋本は言った。

「二秒で倒す」

武藤玲司は、断言した。

「あの…ちよつといい」

ジョン太は、スポ根物の流れに、歯止めをかけた。

「俺ら、石を帰してもらえれば、それでいいんだけど」

「石って何」

秋本は、今までこっちがやって来た事を全否定する様な、へこむ

事を言い切った。

「ビーストマスターから盗んだ石だよ。お前が盗ったんだろうが。さっさと返せ」

「えー」

秋本は、鯖丸を見上げて、変な顔をした。

「お前、普通のプレイヤーとかじゃないよな。何やってんだ」

「バイト」

鯖丸は答えた。

「石は、殿が持つてると思うけど」

秋本は言った。

目新しい情報ではない。

「お前こそ、ここで何やってんだ」

鯖丸は聞いた。

「バイト」

秋本は答えた。

「そうなんだ」

あっさり納得してしまった。

似た様な二人だ。秋本の方が超男前だが。

「ビーストマスターが、ここを通ったと思うけど」

ジョン太は聞いた。

秋本は、自分に突き付けられた拳銃をちらりと見て、素直に吐いた。

「通した。殿が会いたって言ってたからな」

少なくとも、捕まったりはしていない様だが、それはそれでまずい気がした。

「殿って、何者だ」

前から気になっていたので、ジョン太は尋ねた。

「分らない」

秋本は即答した。

ジョン太は、銃口で秋本の頭をぐりぐりやったが、意外に頑固な青年で、口をつぐんだままだった。

「お前、そんな分からないもんに雇われてるのかよ」

「分からないが、悪い人じゃない」

秋本は、意外な事を言った。

「いや：人かどうかは、分からない」

「ええ？」

そんな答えが返って来るとは思わなかった。

「じゃあ、何だ」

ジョン太は怖い顔で聞いたが、秋本はもうしゃべらなかった。

踊り場の隅で、何かごそごそやっていた鯖丸は、ロープを見つけて戻って来た。

「ジョン太、これ」

「おお、お前にしちや気が利くな」

ジョン太は、踊り場の柱に、秋本を括り付けた。

「よし、行くぞ」

殿の正体については気になるが、トリコが一人で殿の前に行ってしまうのは、少し危ない気がした。

急い方がいい。

階段へ走り出そうとしたジョン太は、鯖丸が秋本の前にしゃがんで、何かやっているので止まった。

「え、何してるの、お前」

鯖丸は、秋本のズボンを脱がせ、更にボクサーパンツをひっぺがそうとしている所だった。

「秋本君には、全裸で拉致られる辛さを、ぜひ分かち合ってもらいたいと思って」

パンツをむしり取って、その辺に投げ捨てた。

「うわああ、やめろー。せめてパンツはー」

秋本は悲鳴を上げた。

「あー、魔界で写真が撮れたらなあ。試合の時外野できゃーきゃー

言ってる女の子全員に、転送するのに」

鯖丸は、ため息をついた。何げに、秋本の男前には、ちよつと悔しい思いをしていたらしい。

「お前、最近芸風黒いよ」

ジョン太は言ったが、別に秋本は助けしないで階段を登った。

階段の上は、全く様子が違った。

なぜ、ここが城と言われているか分かった。

昔の、日本の城にそっくりだ。

どこから光が来ているのか分からないのに、昼間の様に明るい空間を、板張りの廊下と襖が、ずっと先まで続いていた。

階段の終点で、一瞬靴を脱ぎそうになったジョン太を、鯖丸はちらりと見た。

「ジョン太って、本当はニセ外人？」

何の利点があって、そんな事するか二百字以内で簡潔に述べろコラ：と、ツツコミ文句は脳内にすらすら出て来たが、口に出すのはぐっと堪えた。

大体所長とコンビだった頃は、俺がボケだったはずだ。

「ばあちゃんが日本人」

普通に説明した。

「そうなんだ」

鯖丸は普通に納得した。普通って大事だ。

襖の所々には、トリコの痕跡が残っていた。

鯖丸には見えるらなかったが、ジョン太は元々匂いで痕跡が分かるので、二人とも同じレベルで追跡を続けた。

あちこちの襖を開けて、部屋の中を捜しているのが分かった。

何処にも、目的の物が無いのも分かった。

大半の部屋は、畳が敷いてあるだけで、何も無かった。

形式的に日本の城を再現しているだけで、使用目的は判然としなかった。

この城を造った奴は、何かおかしい。

時々、用心棒的な奴らが潜んでいる部屋があったが、弱い奴ばかりで、話にもならなかった。

「何だろう、ここ」

鯖丸は尋ねた。

「俺に聞くな」

ジョン太は答えた。

上の方にトリコが居るのが分かったらしく、鯖丸は走り出した。更に階段を登り、廊下を走り抜け、閉じられた襖を開け放った。畳を敷き詰めた、三間続きの大広間だった。

一段高くなった、奥の間に『それ』は居た。

外界で収集したがらくたに囲まれ、肘掛けにもたれて鷹揚に周囲を見ている『それ』。

人に似た姿だったが、人ではないのは、一目見て分かった。

何だこれ。

『それ』の面前に、トリコが居た。

哀願する様に、両手を差し出していた。

「返してくれ」

悲痛な声だった。

「たった一つの、夫の形見なんだ」

個人で民間に依頼してまで捜していた物の正体を、二人は初めて知った。

バカと言えばバカだ。

「俺は、そういうバカ、嫌いじゃない」

ジョン太は、鯖丸を振り返った。

「お前は どうする」

「ええと」

鯖丸は一瞬考え込んだ。

「ええ、夫って何だ。ああ、形見って死んでるんだ。どうする、どうするよ俺。うわー」

「うろたえるな、小僧」

ジョン太は、鯖丸の尻を蹴り飛ばした。

「お前、短期間で、あの女のどの辺のポジションまで狙ってたんだ」
「行ける所まで」

「勢いで暴走するな、ボケー」

結局ツッコミだ。

殿とトリコが、こちらに気付いた。

殿と呼ばれている、人ではない何かが、立ち上がった。

真っ黒な長いドレッドヘアに埋もれた、陶器の様に白い顔が、こちらを見た。

古びたぬいぐるみ、赤と白の初期のファミコン、田舎の場末でも見ない様な昔のパチンコ機、古本、折れた釣り竿、使い物にならない程酷使された野球のグローブ、壊れた大昔の一眼レフ、サッカーボール。

殿は、瓦礫の中から歩み出た。

一瞬で、鯖丸には分かった。

牢に結界を張ったのは、こいつだ。

自分より魔力が高いのは、当然だった。これは、人間じゃない。

「今宵は、来客が多いな」

殿は声を出した。

良く響く声だった。

普通に話すだけで、本名を押さえて命令を出すのと同等の力がある。

トリコが振り返った。

ひどい顔だ。怯えているのが、一目で分かる。

「逃げろ」

苦勞して、言葉を喉から吐き出した。

「予定外だ。あれは、この世界の物じゃない。契約は解除する。逃げてください」

「当日のキャンセル料は高いですよー、お客さーん」

ジョン太は、両手に銃を持って、踏み出した。

「お薦めはしませんけどねえ」

「そうだ。昔のダンナより俺の方がいいだろ。微妙にジャニーズ系だし」

鯖丸は、訳の分からない事を言い出した。

何を狙ってるんだ、このバカは。

「いや：お前は普通にあっさりした地味な顔だし」

ジョン太は止めた。

トリコは、振り向いて少し笑った。

「ありがとう。早く逃げろ」

「却下！！」

鯖丸は、刀を抜いた。

抜いた瞬間にもう、攻撃魔法が繰り出されていた。

たぶん、この手の攻撃魔法では、人類最速だ。

ただ、相手は人間じゃない。

光に飛んできた羽虫を追い払うより軽く、鋭い攻撃が柔らかく打ち払われた。

「乱暴なお客だ」

殿は、手に何か握って、進み出た。

鯖丸は、次に来る攻撃に備えようとしたが、殿が持っているのは、マイクだった。

「ようこそ、我が城へ。まずは一曲聞いてもらおう」

聞き間違いでなければ、瓦礫に埋もれた昔のカラオケセットのスイッチを入れる時、殿は小声で「ポチッとな」と言っていた。

昔の歌謡曲の、もの悲しいイントロが流れ始めた。

音に違和感があるのは、音源がモノラルだからだ。

鯖丸くらいの年齢だと、モノラル音源なんかめったに耳にした事はないはずだ。

イントロが流れ始めた瞬間、ジョン太が前に出た。

止めようとしたトリコは、ジョン太が二本目のマイクを掴むのを

見て、そのまま固まった。

殿とジョン太の目が合い、二人の間に何かのアイコンタクトが成立した。

兄弟で歌っていた古い歌謡曲だった。

「明日わたしは旅に出ます」

一瞬のアイコンタクトで、どっちが弟のパートをやるか決定したらしい。

ものすごく上手い。

異形の物とは思えない、切々とした歌声だ。

というか、ここまで上手いと、もうこれ、攻撃魔法の一種なんじゃないかと鯖丸は思った。

とりあえず、殿が歌に夢中になっている間に、トリコの手を引いて自分の近くまで避難させた。

ジョン太が兄のパートを歌い出した。

そうじゃないかとは思っていたが、やっぱり歌が上手かった。

おまけに、無駄にいい声だ。

さびの部分で、二人は完璧にハマった。

「何で、初対面の人とこんなにハマれるんだ…」
鯖丸はつぶやいた。

「いや、人じゃないから、あれ」

トリコは言った。

「じゃあ何」

人ではないのは分かっていた。

しかし、だから他の何なんだと言われると、全く分からない。

「穴の向こうに異界があるのは知っているな」
鯖丸はうなずいた。

いくらダメなバイトでも、それくらいは知っている。

「あれは、向こう側から来た何かだ。人ではないし、生き物かどうかはまだ分かっていない」

「いや…俺には分かる。あいつらはカラオケ好きなただのダメなお

っさんだ」

鯖丸は断言した。

「歌ってる間に逃げよう」

「嫌だ。やっそこまで……」

トリコは、鯖丸の腕を振り払おうとしたが、がちり捕まえられて出来なかった。

「お願いして返してもらえなかったんだろう。あれ相手に力づくは無理だ」

負けず嫌いのこの男には珍しい意見だった。

「こっそり取り返せなかったんなら、一旦引こう」

一旦引いてしまったら、もう取り戻すのは無理だろう。

諦めろという意味だった。

「だから、お前達だけで逃げろと言ってるだろう。あの歌ってるバカを連れて、早く行け」

そろそろ、八時丁度のあずさ二号で、ダメなおっさん二人が旅立ってしまう。

時間がない。

鯖丸は、トリコの手を放さなかった。

ごつい手だ。何をやっているか知らないが、相当鍛えている。

女の力で振り解くのは無理だった。

トリコの指先が、軽く震えた。

魔法を使っても、振り解くつもりだ。

「死んだ奴の形見より、生きてる人の方が大事だ」

鯖丸は言った。

「それでも、あいつとやる？」

トリコはうなずいた。

「分かった」

鯖丸は、トリコの手を放した。

「折角リンク張ったんだ。思い切り使おう」

背中にかけた刀を降ろして、左手で腰の所に構えた。居合いの構

えだ。

ここから抜けば、背中から抜くより更に速く攻撃を繰り出せる。間合いを計っていたその時、ジョン太が歌い終わった。

…と思ったのは一瞬で、瞬きする間もなく殿のこめかみに銃を突き付けていた。

「久し振りに気持ち良く歌わせてもらった後に、野暮な話だが」

まだ、左手に持ったマイクのスイッチが入っているので、その辺一帯に声が響いた。

「石を帰せや」

さすがジョン太…と、鯖丸は思った。

単に歌いたかっただけの様な気もするが、殿と距離を詰めて銃を突き付けている。

戦闘用ハイブリットの反射速度は、異界の物にも通用する様だった。

ただ心配なのは、異界の物に銃撃が通用するかどうかだ。

「やれやれ」

殿は、マイクのスイッチを切って、四角いアンプ状のカラオケセツトの上に置いた。

「本当に野暮な客だ。吾輩にその様な鉛の固まりが通用すると思つての所業か」

「思ってるさ。異界の奴らは、物理攻撃に弱いからな」

ジョン太は、引き金にかけた指に少し力を入れた。

「いかさま左様、この世界で言う物理攻撃には、我等は弱く出来ている」

殿は、笑った。

薄く開いた口の奥は、深淵の闇だった。

これは本当に、人でもなければ、どんな生き物でもない。

「吾輩にその弾を撃ち込めるかどうか、聞いておる」

「出来るさ。俺はこっち側でも、普通の人間じゃないんだ」

六連発の銃が、近距離から撃ち込まれた。

障壁が殿を守るのが見えたが、一発が腕に命中した。

殿の顔から、笑いが消えた。

黒い液体が、着物を纏った腕から流れ落ちた。

「血が出るなら殺せる」

ジョン太は、にやりと笑った。

「カリフォルニア州知事の名言だ」

「誰だよ、そんな奴知事を選んだの」

めずらしく、鯖丸がツツコミに回った。

「生きてる間に、石を返せ」

めずらしい鯖丸のツツコミはスルーして、ジョン太は殿を脅した。

「攻撃は当たるが、吾輩は殺せぬ」

殿は言い切った。

「なぜなら、お前達の基準で言う生命を吾輩は持つておらぬからな。生きていない物は殺せん」

「ジョン太、下がって」

鯖丸が、刀に手をかけていた。

「殺せないなら壊すけど、いいよね」

トリコの魔法が連動している。

鯖丸の魔法が空気系…というか、風属性だとすれば、トリコは水だった。

連動すればどうなるか、ジョン太にも想像はついていた。

たぶん、嵐になる。

「答えは聞かないけど!!」

「聞けよ、その辺は」

城の大広間を、ハリケーンが吹き荒れた。

殿が集めた瓦礫の山が、空中に吹き飛ばされ、部屋中を荒れ狂った。

意外な事にダメージがあった。

しかし、期待していた程のダメージではなかった。

大事な物を壊されて、怒っておられる。

反撃の方が、こちらから仕掛けた攻撃より大きかった。

三人は部屋の隅に吹き飛ばされた。

とっさにジョン太は二人を庇った。

「うわ、何するんだお前。無茶な…」

反論しかけたトリコは、ほぼ無傷なジョン太を見て、黙った。

部屋の隅まで吹き飛ばされたダメージはともかく、魔法攻撃の痛みはほとんど受けていない。

魔力が低いという事は、魔法の理の外に居るという事だ。

異界の物にも通用する。

「すげえジョン太。さすが最強の魔法無能者」

「嫌な評価だなあ、それ」

ジョン太は言った。

「誉めてる」

鯖丸は言った。

「その調子で魔法使わないで」

「うえ」

先刻、無意識で軽微な魔法を使ってしまった事を思い出した。

実は、意識して使うより使わない方がむしろかしい。

「分かった」

言ってしまった時点で、ゼロだった魔力が少し上がった。

鯖丸は、刺激しない様に黙った。

低いレベルとは言え、魔力がこんなに変動する人間を見たのは初めてだった。

「ジョン太の魔力って、実はあんまり低くない？」

鯖丸はトリコに聞いた。

「最初からそう言ってるだろ」

トリコは答えた。

「実際、どの程度」

「たぶんランクBの程度」

「充分高いな」

鯖丸は考え込んだ。

『実はジョン太、魔法使える』

いつの間にか、ジョン太に聞こえない様に、直接頭の中に意識を通して来ている。

『このままそつとしとくのと、二人で尻蹴飛ばして魔力を上げるのと、どっちがいい？』

『待て、何考えてるんだ』

殿が、瓦礫の向こうで立ち上がった。

物理攻撃に弱いと言う割に、意外と丈夫だ。

「三人でやったら、あれに勝てるかも」

殿を指差した。

可能性はある。

「やってみよう」

トリコは、ジョン太の方を向いた。

「お前、大変な相棒を持ったな。覚悟しろよ」

「えっ」

「簡易接続する。抵抗するな」

細い腕が首に回され、唇が重なった。

そのまま、意識の表層へ手を伸ばし、差し込んだ。

ジョン太は抵抗しなかった。少なくとも体は抵抗しなかった。

中身のガードはがちがちだった。

こんなにガードの堅い人間は、見た事がなかった。

魔法を使えない事と、何か関係があるのかも知れない。

こいつとリンクを張るのは、きっと鯖丸相手より大変だ。

表層を簡易接続するだけなので、ガードの高い中身は無視して、触った表面だけを掴み上げた。

そのまま、自分の方へ強引に繋いだ。

ぱちっとな音がする様なイメージがあった。

簡易接続は繋がったが、引き上げられない。何かが必死で抵抗し

ている。

「鯖丸、手伝え。私一人じゃ無理だ」

「ジョン太、ごめん」

鯖丸は、トリコとジョン太の手を握って、中継に入った。抵抗するジョン太の魔力が、ぐいぐい上に引っ張られた。

一瞬、抵抗している何かの姿が見えた。

自分をごんじがらめにして、檻の中に閉じ籠もっている獣。

あれをどうにかすれば、きっとジョン太は普通に魔法を使える様になるんだ：と、鯖丸は思った。

いずれどうにかしよう。今は時間がないけど。

引っ張り上げられた何かが、ずぶりと表層を突破した。

「よし、成功だ」

トリコは、ジョン太から離れた。

予想していたより魔力が高い。

ランクBの程度ではないかも知れない。

「簡易接続は長持ちしない。短時間で決めよう」

トリコは、ジョン太に言った。

「それと、お前もう、魔法無能者じゃないから、攻撃魔法には絶対当たるな」

「何するんだお前ら」

ジョン太は怒鳴った。

「どんくさいくせに、俺が盾にならなかったら、攻撃当たり放題だろ。特にトリコ」

鯖丸は、元々運動神経もいいし反射速度も速い。しかしトリコは、魔力が高いくだけで、身体能力はごく普通の女だ。

「お前、何で私がビーストマスターと呼ばれているか、分かってないな」

トリコは、身に着けていたニットのブラウスを脱ぎ捨てた。

白い体に、不気味なタトゥーが浮かび上がった。

薄い青緑の、腕が生えた蛇に似た怪物。足に巻き付いた、黒いト

カゲ。背中に浮かび上がった、コウモリに似た四枚の羽根。うっすらと笑って、トリコは腕を差し伸べた。

「おいで」

目の錯覚かと思った。

トリコの体の表面を、蛇に似た化け物はいずり回った。

そのまま、差し出した腕から、外に躍り出た。

「襲え」

殿に向かって、不気味な蛇が襲いかかった。

「鯖丸、追加！！」

トリコは叫んだ。

「おう」

攻撃魔法が重ね掛けされた。

不気味な蛇が、殿を飲み込んだ。

「ジョン太、ぼやぼやするな」

怒られた。鯖丸のくせに。

この時点で、自分に何が出来るのか、ジョン太には全く分からなかった。

魔力が低いままの方が、良かった気がする。

両手に持った銃を撃ち込んだ。

三発ずつ撃ち出された銃弾は、お互いの間をぐるぐると回りながら加速した。

威力を増しながら加速し、融合し、あり得ない軌道を描いて殿の体にめり込んだ。

当たると思った瞬間、力を込めた。

激しい爆撃が、辺りを薙ぎ払い、焼き尽くした。

自分の魔力が火炎系だと言う事すら、今まで知らなかった。

殿の体に、大穴が空いていた。

人間だったら死んでいるが、相手は生命も持っていないと言う異界の物だ。

一瞬で反撃が来た。

反射的に、今までの習慣で魔力の高い二人を庇っていた。

「バカ、止めろ」

「ジョン太、やめて」

背中に何か当たる感触はあった。

それだけだった。

ジョン太は無傷で立ち上がった。

「あー、何となく分かったわ」

両手に銃を構えた瞬間、ほとんど無くなっていた魔力のレベルが急上昇した。

「自分で調節出来るんだよな、これ」

「いや、たぶんそんな事出来るの、ジョン太だけだから」

鯖丸は言った。

「そうなんだ」

誰でも、それなりに自分の得意技という物を持っている。

鯖丸の重力操作や、トリコの魔獣召還だ。

しかし、魔力の出力調整というのは、初めて聞く能力だった。

「この状態は、長続きしないんだよな」

ジョン太は聞いた。

確かに、簡易接続は長続きしない。

「どれぐらい持つ？」

「人による」

トリコは答えた。

「お前なら十分くらいかな」

「充分長いな」

今まで反撃しかして来なかった殿が、ふわりと両手を広げた。

そよ風の様に優しい流れが、三人の前まで吹き寄せて、やにわに牙をむいた。

さすがに、腹に大穴を開けられて怒っておられるらしい。

鯖丸とジョン太は、一瞬目線を合わせてから、左右に飛び退いた。トリコが気が付くと、ジョン太に抱えられて天井の梁からぶら下

がっていた。

反対側の壁に、鯖丸が居た。

いつの間にか、鬼の様な姿に変わっている。

「よし、そのまま斬り込め。援護する」

魔法を使えば、銃口をターゲットに向けなくても、当てられる。

トリコを抱えた左手と、天井にぶら下がっている右手から、勝手な方向に打ち出された弾丸は、部屋中を飛び回り、全方向から殿に襲いかかった。

輪胴が開いて、葉莢が排出され、ベルトに付けた物入れから出て来た弾が、吸い込まれる様に宙を飛び、装弾された。

ついさっき魔法を使える様になったとはいえ、この業界は長いせいか、上達が早い。

トリコは、魔獣を呼び戻して、自分達の下に待機させた。

「乗れ」

ジョン太は、梁から手を離して飛び降りた。

「うわ、何かふわふわしてるな、これ」

驚いた様子で、魔獣の背中を撫でた。

トリコは、ひえっと変な声を上げた。

「あ、もしかしてこれ、体の一部？」

「違うけど連動してるから、触るな」

トリコは睨んだ。

「ジョン太、もっと弾幕張らないと、斬り込めない」

鯖丸が文句を言った。

「悪い。すぐやる」

短機関銃を抜いて、無造作に弾をばらまいた。

かまいたちの時に紛失して、レストアに出していたスコープオンだ。

ストックを外した上に、グリップも交換して、変わり果てた姿になっている。

アメリカ人のくせに、何でこんなに共産圏の銃が好きなんだろう

…と思うくらい、ここ一年で鯖丸も銃器に詳しくなっていた。

二十発全弾を撃ち込んでから、更に持ち替えた拳銃二丁の十二発を発射した。

三十二個の弾丸を、ジョン太は全て把握していた。

短機関銃の銃弾は、殿の周りを飛び回らせて、ランダムに一つずつちくちくと嫌な攻撃を加えながら、拳銃の十二発は、二手に分けて鯖丸とトリコの護衛に回していた。

マガジンを交換して、更に二十発撃ち込んだジョン太は、叫んだ。

「よし、行け」

鯖丸が、壁から離れた。

壁から天井へ、床へ、高速で飛び回りながら、殿の背後に着地した。

小蠅の様にまとわりつく弾丸に気を取られていた殿は、反応が遅れた。

すうと一呼吸置いてから、刀が振り下ろされた。

魔法ではない、全くの物理攻撃だった。

殿の体が、斜めに両断された。

ダメ押しで、空中に待機した弾丸を、全弾撃ち込んだ。

終わった…と、ジョン太と鯖丸は思った。

トリコは違った。

ジョン太の手を掴んで、魔獣から飛び降りると、命令した。

「食え」

悪夢の様な姿で、殿が立ち上がりかけていた。

生きていない物は、殺せない。

どんなに壊されても死なないのだ、こいつは。

死んでいなければ、魔法は使える。

魔獣が殿の下半分をばくりと飲み込んだ。

半透明なので、飲み込まれた体が透けて見える。

しかし斜めに切り取られた上半身は、まるで見えない体があるかの様に、普通に立った。

殿は、薄く口を開いて、にやりと笑った。

その手の中に、トリコが捜していた石があった。

トリコは、ジョン太の手を離して、前へ出た。

「やばい、トリコを」

止めろとジョン太は言いかけた。

鯖丸は、聞き終わる前に理解して、高速移動した。

殿に近付きかけたトリコを抱え、魔力を通して空中に飛び上がった。

殿の手の中から、何かが伸び上がった。

白熱した光の束が、周囲をめっちゃに切り裂いた。

離れていても体が痛い程の高温だった。

眩しくて、目を開けていられない。

見当を付けていた場所に、カンだけで飛び移って、足のかぎ爪で天井からぶら下がった。

体の表面が、熱に反応して変化し、目の上を色の濃い瞬膜が覆った。

やっと周囲が見える様になった鯖丸の視界に、光に飲み込まれるジョン太が見えた。

いくら魔力をゼロに調節していたとしても、耐えられるとは到底思えなかった。

ふと見ると、トリコが何かしていた。

魔獣がジョン太を守っている。

その体が徐々に小さくなっていた。

「もう限界だ。後、頼む」

抱えた体から、がくりと力が抜けた。

手の平より小さくなってしまった魔獣が、吸い込まれる様にトリコの体に戻った。

白熱した光の束が消えた。

辺りが真っ暗に感じられる。

視界を調節するのに少しかかった。

鯖丸は、トリコを梁の上に寝かせて、飛び降りた。

ジョン太は床に倒れていた。

あれだけの光を浴びたにしては軽傷だったが、毛皮の表面が焼けこげて、酷い有様になっている。

回復魔法を通したが、魔力を低いレベルにしたまま意識を無くしているのも、通りが悪い。

全力で魔力を通すと、ジョン太は少し身じろぎした。

トリコは、梁の上で気が付いて、下を見下ろした。

鯖丸が、不器用な回復魔法をかけて、一人で怒っている。

もう少し自分を回復させたら手伝ってやろうと思って、声をかけようとした。

「何でだもう、ジョン太のバカ。もうちょっと自分の身を守る事も考えろよ」

俯いた鯖丸の雰囲気は、突然変わった。

ふらりと立ち上がって、宙に浮いたままこちらを見ている殿を睨み付けた。

背中が刀が抜かれていた。

「許せねえな、俺のジョン太をこんなにしやがって」

ええ、ちよっと待て。いつからそれ、君のだ。

心の中で突っ込んでしまったトリコは、顔を上げた鯖丸が別人になっているのを見た。

見覚えのある顔だった。

リンクを張る時、左側に居た少年だ。

年月が経っているせいか、それなりに外観は大人になっていたが、見間違えるはずはない。

多重人格障害という単語が、頭に浮かんだ。

それで三人居なんだ、こいつ。

「覚悟しろ、てめえ」

殿に向かって斬りかかった。

「あ…バカは同じなんだ」

三人がかりでこの有様の相手に、どういうつもりだ。

殿はふわりと刃から逃れた。

さすがに消耗しているのか魔法での反撃はないが、つかみ所が無くてかすりもしない。

というか、鯖丸より動きが大雑把だ。

こいつは、別に剣術の達人ではないらしい。

ただ、ケンカは強そうだ。

明かな大振りで刀を構えた鰐丸は、いきなり殿に剣を投げつけた。武器を手放すとは思わなかったらしい殿は、壁に串刺しになった。

「きゃっほー、ええ感じい」

イカレた叫び声を上げて、助走を付け宙に飛び上がった。

重力操作ではなく、普通の跳躍だった。

足の先に魔力が集まっていた。空気系ではない。何もかも別人だ。ぶうんと空間がぶれた次の瞬間、鰐丸は数メートル先から、いきなり殿の目前に出現した。

「おりゃあ、死ねい」

殿の顔面に物凄い蹴りが入った。

えぐられた壁が、崩れ落ちた。

着地した鰐丸は、ジョン太を振り返った。

ジョン太は、自力で起き上がっていた。

焼けこげた皮膚が、どんどん再生している。

「あー、魔法使える間に気が付いて助かったわ」

体の表面から、黒こげになった毛皮を払い落として、上を向いた。堅く握り混んでいた手の平を開いて、上に居るトリコの方に差し出した。

「無事だ。さすが耐熱ガラス」

あのどさくさの間に、取り戻していたらしい。

「きゃー、ジョン太。無事だったのお」

鰐丸が駆け寄って、がばあを抱きついた。

「うわああ、何で居るんだお前」

ジョン太が悲鳴を上げた時、トリコの乗った梁が、みしりと嫌な音を立てた。

皆でさんざん暴れ回り、破壊し尽くされた城の梁は、一瞬を置いて落下した。

普段のジョン太なら避けられるが、さすがにまだそれ程は回復していない。

頭上注意！！頭上注意！！

嫌な単語が頭の中で繰り返された。

ぶつとい梁がトリコを乗せたまま、ジョン太の頭を直撃した。

次に気が付くと、トリコの膝枕で寝ていた。

Fカップの胸が視界の大半を占めていて、大変いい感じだ。

頭がずきずき痛んだが、一撫でされるごとに、徐々に痛みは引いていた。

周囲の様子を探ろうとしたが、魔法が使えた時の感覚は、すっかり消えていた。

まあ、嗅覚と聴覚だけで充分だ。

破壊し尽くされた広間の奥に、全員無事で揃っていた。

「てめえ、いつまでジョン太といちゃいちゃしてんだよ。さっさと回復させて離れろ、このエロ魔女が」

聞き覚えのある声が、あまり憶えのない口調でしゃべっている。ジョン太はぎくりと体を硬くした。

「うわ：鰐丸の奴、まだ居る」

こうなったら、全力で寝たふりだ。

「うるせえ、黙れオカマ。ケツからバールの様な物突っ込んでぐりぐり回すぞ」

トリコ姐さん下品。

「それは…」

さすがに鰐丸も黙った。と、思ったのは甘かった。

「ジョン太にならしてもらってもいいかも。お前は断る」

「あ、お前実は、そんな凶暴そうな顔してMだな」

「そうだけど、それが何か」

ああー、そうですねー。俺は別に関係ないけどなー。

もう、小一時間ぐらい寝ている事にした。

「言っておくが、ボールの様な物は、ぐきつと曲がってる方から突っ込む予定だ」

姐さん、ボールから離れて！！

「何のプレイだそれ。普通に死ぬだろ」

「だって、殺す気だもん。お前むかつくから」

トリコはしれつと言った。

「やめて、それ一応、体は鯖丸だから」

とうとう起きて間に入ってしまった。俺のバカ。

「ジョン太！！」

鰐丸は、本気で嬉しそうな顔をした。

「はいはい、ワニ君はそろそろ帰ってね。おっちゃん達も撤収するから」

鰐丸は、何か言いかけた。

「待て、キスは無し。触るのもダメ。飴ちゃんあげるから帰りなさい」

ジョン太は、ズボンのポケットからのど飴を出したが、熱で溶けていた。

ズボン自体、もうちょつとで無くなるくらい焼けこげている。

回復魔法でも、着ている物は直せないのだ。

「何だ、その二人は、同時に出て来られないのか」

少し離れた場所から声がした。

瓦礫の中に、殿が座っていた。

さっきまで着ていた豪華な着物は、ぼろ布になっているが、体は全くの無傷だった。

確か、鰐丸が顔面にすごい蹴りを入れて、頭まで潰されたはずだったけど…。

「ほら、もう一匹も出ておいで」

手招きをした次には、鰐丸の隣に鯖丸が座っていた。

二人はお互いに顔を見合わせてから、ぎゃっと叫んで飛び下がった。

「気持ち悪い」

同時に言った。

こうして並べると、似てはいるが本当に別人だ。

「さて、大切な話があるので、君達には揃ってもらった」

殿は言った。

先程の様に、攻撃を仕掛けて来る気も、そんな余力も無い様子だったので、三人：というか四人は、聞き耳を立てた。

「まず、如月トリコ。石を盗んだ事は詫びよう。済まなかった」フルネームを呼ばれて、トリコは意外そうな顔をした。

魔界出身なので、これが本名な訳ではないが、何で知っているという表情だった。

「しかし、吾輩にはそれが必要なのだ。くれとは言わない、貸してもらえないか」

「私以外には、何の価値もない食器の破片だ。どうして？」トリコはたずねた。

「お前達の言う、向こう側の我々の世界では、人の想いがこもった物は、大きな力を持つ」

殿は説明した。

「吾輩は、過去に過ちを犯した。そのせいで、不肖の我が弟子が、こちら側の世界を浸食しようと目論んでいる」

何の話か、鯖丸と鰐丸とジョン太には、理解不能だった。

トリコだけが、体を硬くした。

「お前は、あれの関係者か」

「左様、我が弟子の暴挙を止めねばならぬ。吾輩には力が必要だ。お前達四人に不甲斐なく敗れる様な状況を打破しなければ、我が弟子を止める事は叶わないだろう」

「ハンニバルという男が、あれを追ってお前達の世界に行ったはずだ。消息を知らないか」

トリコはたずねた。

殿は、少しの間何かを思案している様子だった。

「お前は、こちら側の人間で云う雌だな」

そんな事も、見ただけでは分からないくらいだから、本気で異界の人間なのだろう。

「ハンニバルの配偶者か」

「そうだよ」

トリコは答えた。

鯖丸は、けっこう複雑な顔をして二人の会話を聞いていたが、鰐丸が、口を挟むなと云う様に、肩に手をかけた。

同じ場所に並んでいなくても、二人の力関係は、大体こんな感じらしいと想像はついた。

「この、一連の困惑した事態を我々に報せたのは、ハンニバルだ」
殿は言った。

「その後彼は、我が弟子の手で、恒久的に活動を停止させられた」
死んだという意味らしかった。

トリコは、冷静にうなずいた。
たぶんもう、分かっていた事なのだ。

生きていると思うなら、石を形見とは呼ばない。

「さて、君達に頼みがある」

殿は、瓦礫の上で足を組んだ。

「我が城は破壊され、我が力となるはずだった品は四散した。君達は、対価を支払えば、様々な物事を引き受けると聞いているが」

「つまり、仕事の依頼か」

ジョン太はたずねた。

「そう思って、差し支えない」

殿は答えた。

「君達の言う外界から、代わりになる品々を集めて来て欲しい。必

要な量が集まるまで、特に期限は定めない。それから…」

瓦礫と化した広間を見回し、人間ならため息をつく様な動作をした。

「早急に、新しいカラオケセットを手に入れたい」

「魔界で作動するのなら、テープかレコードだな」

ジョン太はうなずいた。

「分かった。依頼を受けよう。後で契約書を持って来る」

「俺は別に、こいつらと組んで仕事してる訳じゃないんだけど」

鰐丸は言った。

「まあ、ジョン太がやれって言うなら、やるけど」

「私も、今一緒に行動しているだけで、便利屋ではないんだが」

トリコも言った。

「吾輩は、未来の話をしているのだ」

殿は、断言した。

「いずれ分かる」

「あの…」

今まで黙っていた鰐丸が言った。

「たぶん魔界を出れば元に戻ると思うけど、このままの状態は気持ち悪いから、戻してくれないかな」

「そうか、こちらの人間は、自分が複数居るのは好まないか」

殿はうなずいた。

「うん、それもあるけど、この体、何だかおかしい」

「それは表出幻体だ。魔法も使えるし、物にも触れるが、生きてはいない。吾輩がこちらで使っている体と、同じ物だ」

「そうか、殿の本体は、向こうにあるんだね」

「それは秘密だから、言えないね」

殿は、その部分だけは、妙に人間ぽいしゃべり方をした。

「では、一つに戻そう」

鰐丸と鰐丸の背後に、瞬間移動して来た。

「望むなら、三人を完全に統合出来るが、元の状態にするだけでい

いかね」

殿はたずねた。

「三人目は、君とほとんど融合している様子だが、もっといい状態で一人にする事も出来るのだよ」

「ああ、三人居る事まで分かるんだ」

鯖丸は、鰐丸の方を見た。

鰐丸の方が強気で強引な性格だが、実際に決定権のある主人格は、やはり鯖丸の方らしい。

首を横に振って言った。

「ううん、時が来ればなる様になる。元通りにしてください」

「分かった、お帰り」

殿は、鯖丸の背中をぼんと押した。

鰐丸の体に吸い込まれる様に、鯖丸が消えた。

それから、鰐丸の様子がふいに変わって、鯖丸に戻った。

「では、依頼の件、頼んだぞ。吾輩に連絡したい時は、トゲ男を通すがいい。外界での連絡先は、トゲ男本人から聞いてくれ」

殿は、辺りを見回した。

「そう云えば、先刻から姿がないな」

「あまり詮索しない方がいいと思うよ」

ジョン太は言った。

「助けられても、放っておかれても、どっちにしろ辛い状態になるから」

「出来れば明日の昼頃まで、そのままにしておいてください」

鯖丸は非道い事を言い切った。

魔界では、時計もあまり正確ではないが、三人が城を出て宿に戻ったのは、明け方の四時頃だった。

観光街は、まだ賑わっていた。

少し寝て、翌朝殿に契約書を書かせたら撤収と、ジョン太は言った。

以前うるさく言ったせい、夏場だから汗をかくせい、さすがに鯖丸も着替えを持って来ていた。

共同になっている浴室で体を洗って身形を整えると、やっと心地が付いた。

「トリコは、あれで良かったのかな」

タオルで体を拭きながら、鯖丸は言った。

殿に一筆書かせてから、トリコは石を渡していた。

ハンニバルの知り合いなら、返すという言葉信用するという事だった。

「本人がいいと言うなら、いいんだろ」

ジョン太は言った。

全身が毛深いせいで、宿に置いてあるハンドタオル一枚では、綺麗に拭ききれない。

何回か絞って、どうにか全身を乾かしていた。

「一度は取り戻したんだから、仕事は失敗じゃない」

「そうだけど」

鯖丸は、やはり何か納得出来ないらしかった。

「お前、あ女の事を気に入ってるみたいだけど」

ジョン太は釘を刺した。

「あいつは政府公認魔導士だし、この仕事が終わったら、たぶんもう、会う機会もないぞ」

「分かってるよ、それくらい」

分かっている割には、不機嫌な顔だ。

タオルを首に掛けた風呂上がりな格好で廊下を歩いていた二人は、階段の上の所にトリコが居るのを見つけた。

やはり風呂上がり者らしい格好で、頭にタオルを巻いている。

「ちよつといい？」

二人を見比べて、少し思案した。

「ええと、鯖丸の方」

「何？」

階段を登りながら、鯖丸は聞いた。

「あのね、変な事言う様だと思うけど、これからセックスしないか」
「ええ、何で」

鯖丸は驚いて聞いた。

リンクを繋ぐ時は理由があつたが、今は特に必要ではない。

「大きい魔法使った後は、したくなるんだよ。お前も魔力高いから、分かるだろ」

「ああ、そういう…」

納得した感じでうなずいた。

「分かるけど、そうなんだ。俺だけ変なんだと思ってた」

ジョン太には、全然分からない会話になって来た。

一瞬だが魔法を使える様になっていたが、そんな感覚は全くない。
「今までどうしてたの」

トリコは聞いた。

「ううん、そんな大技使う機会は少ないし、使っても自分で適当に処理して…」

「そうか、まあ皆大体そんな感じだよな」

トリコはうなずいた。

ちよつと後ろめたいのか、ジョン太の方を見て、すまんという感じで片手を上げた。

「悪いけど借りるよ。すぐ返すし」

「あー、はいはい」

ジョン太は、鷹揚にうなずいた。

「別に返さなくていいから、好きにしてくれ」

鯖丸に向かって、付け加えた。

「お前それ、サービス残業な。後はよろしく」

トリコの部屋が隣だったのは、完全に失敗だった。

何で鯖丸の方の部屋でやらないんだお前ら…と思ったが、鯖丸が借りていた部屋は、トゲ男の襲来で窓が割れてドアが破れている。

ただ、二人ともジョン太が通常の人間より聴覚が鋭い事は忘れて
いる。

最初は、初心者が微笑ましい範囲内で何かやってすぐ寝るだろう
と思っていたが、あつという間に常軌を逸した展開になって来た。

「いや：それ無理だから、待て、何する気だ。初心者がそんな大技
を。いやああ、ちよつと待って」

「大丈夫だから、俺体柔らかいから、これぐらい平気だから。あつ、
逃げちゃダメー」

ああ、聞きたくない事まで聞こえる自分の身体能力が憎い。

鯖丸が、光の速さで訳の分からない遠い世界に行ってしまう。

「俺はもう知らん。飲んで寝る」

ジョン太は、階下のバーに降りた。

「水割り」

断言した。

「ああ、そんなに入れるな、二ミリ。後は水」

人間社会では、それは単なる水と言うのだ。

溝呂木との付き合いで、多少は飲める様になったと勘違いしてい
るジョン太は、自己申告の水割りを飲んで、がつつり寝た。

翌朝、階下のバー兼食堂に、トリコが一人で座って、黄昏れてい
た。

そろそろ殿に契約書を持って行こうと思っていたジョン太は、声
をかけた。

「何だよ、不景気な面だな」

「昨日まで童貞だった奴に、二回もイカされた。プライドぼろぼろ
だ」

「正直言うけど、君らのエロ路線にはついて行けない。ツツコミは
放棄する」

ジョン太は言った。

「で、鯖丸は？」

「寝てる」

適当に備え付けのインスタントコーヒーをいれて飲みながら、トリコは答えた。

「起こすのも可哀相だから、放って来たけど」

「そうか、腹が減ったら起きて来ると思うよ。俺は殿の所に行くけど」

「待って、俺も行くから」

鯖丸が、服を着ながら階段を駆け下りて来た。

「じゃあ、私も行こうかな」

トリコは、プラスチックのコーヒークップを置いた。

「お前は、うちの会社の仕事とは関係ないだろ」

ジョン太は言った。

「そうだけど、殿とは無関係じゃないからな」

トリコは言った。

「どのみち、一人で待ってるのも閑だし」

三人は、城に向かった。

昨晚暴れたせいで、城の外観は微妙に変わっていた。

驚いた事に大広間は綺麗になっていた。

トゲ男は、救出されたのか、自力で脱出したのか、踊り場から居なくなっていたので、連絡先は聞けなかった。

「吾輩は魔界から出られないので、外界でのトゲ男の所在は、分からないのだが」

契約書に必要事項を書き込みながら、殿は言った。

異界の物には、それが限界だった。

こちら側の人間が、穴の向こうに行く事も出来るが、やはり、こちら側の法則が漏れ出している範囲内を越える事は出来ない。

越えれば、存在そのものが否定され、消えてしまうという話を聞いた事があった。

実際には、穴を抜けるだけでけっこうヤバイのだ。

こちら側に来て、平気な顔でカラオケを歌っているくらいだから、殿は向こうでも相当な力のある存在に違いない。

それを軽く負かしてしまう不肖の弟子というのは、どれくらい強いのか見当も付かなかった。

「あ、大丈夫です。あれ、知ってる奴だから」

鰯丸は言った。

「確か迫田があいつとメルアド交換してたし、連絡付かなくても、どうせ地区予選で会うから」

悪い武藤君になってしまっている。

「取り巻きの女の子が引くくらい、ぼっこぼこにしてやるわ」

「それ、結果的に引かれるの、お前だからね」

ジョン太は注意した。

「別に、モテたくてやってる訳じゃないからいいんだよ。勝てばいいの、勝てば」

童貞じゃなくなっても、武藤君は性格悪い。

「面白い子供だ」

殿は、笑いながら言った。

「それから、如月トリコ」

トリコは顔を上げた。

「どんな事になっても、希望を捨ててはいかん。そこに居る二匹と、もう一人が」

もう一人が、鰯丸なのか、全然別の何かなのか、トリコには分からなかった。

「お前の大事な物を救う。それまで達者で暮らせ」

殿は、その場からかき消えた。

「待て、判子かサイン」

ジョン太は、空中に手を差し伸べて叫んだ。

変な場所から突然腕だけが出現し、書類の適当な場所に『殿』と殴り書きして消えた。

帰りの道では、いつも通りの定食屋に入ったが、鯖丸は一杯しかごはんのお代わりをしなかった。

「もしかして、性欲が満たされると、食欲が減退するのかい、お前は」

ジョン太は聞いた。

「さあ：どうだろう」

本人も、分からない様子だ。

トリコには、少しだけ分かっていたが、言わないでおいた。

トラウマ映像で暴れ回っていたあの子供が、ほんの少し、飢えを満たされたのだ。

食われた私も、そこそこ満足したから、いいやと思った。

外界に戻ってからは、普通の日々が続いた。

どうと云う事もない平日の昼間、たまたま休みだったので、郊外のパチンコ屋で北斗の拳を堪能したジョン太は、景品を交換しようと店を出た。

「我が生涯に、一片の悔いなし」

悔いだらけのくせに、ラオウになり切っている。

近所のスーパーから出て来た、若いカップルが目に入った。

とっさに物陰に隠れてしまった。

鯖丸とトリコだ。

外界なので、すっかり女子中学生みたいな外観になってしまったトリコと、二十歳過ぎてるくせに高校生みたいな感じの鯖丸が、ええ感じで手を繋いで歩いている。

「えええ、それともやっちゃったの？勇者様ー！！」

つい、物陰に隠れて、様子を窺った。

いつも通り小汚いジャージ姿だが、頭に巻いているのが、粗品のタオルではなくて、小綺麗な手ぬぐいだ。

付き合いが長いので、奴なりのお洒落だと分かってしまうのが悲しい。

スーパーの隣にある児童公園で遊んでいた子供が、二人を見付けて駆け出した。

トリコに飛びついてから、鯖丸と三人で、手を繋いで歩き出した。トリコに、これくらい年代の子供が居るのは、知っていた。行方不明になったハンニバルの子供だ。

大体依頼状は読まない鯖丸は、知らなかったはずだが、特に気にしている様子は無かった。

というか、こいつ、今まで見た中で、一番幸せそうだ。

「おおーい、それでいいのか、お前の人生は」
軽く物陰からツツコミを入れた。

子供連れで歩いている二人は、すごく若い夫婦に見えなくもなかった。

「いいんだ…」

突っ込むのは止めて、帰る事にした。

数日後、現場から直帰するつもりだったジョン太は、所長に呼ばれたので事務所に戻った。

「新人入れたから、顔合わせししてもらおうと思ってな」
所長は言った。

「ええ、明日でいいじゃないですか」
ジョン太は、文句を言った。

「明日からお前と組んでもらうから、一応打ち合わせも兼ねて」
所長は言った。

「またですか。鯖丸のお守りだけで手一杯なのに、この上新人って」
「大丈夫だ。今度はあんな天然じゃなくて、ちゃんとこの業界ではキャリアもある人だから」

所長はちよいちよいと奥の方に手招きした。

殿に送る為に、最近ガラクタだらけになって来た事務所の奥から、トリコが出て来た。

「どうも、この度政府公認魔導士をばっさりクビになりました、お

世話になります。如月です」

皆に自己紹介して、頭を下げた。

「うわ、本気でクビになってたのかよ」

ジョン太は驚いた。

「まあ、大きな声では言えないが、あの城はずっと探りを入れてたからねえ」

トリコはぼやいた。

「それを独断でめっちゃにした訳だし」

言われてみればそうだが、政府の方でもトリコの扱いは、元々雑だった気がする。

ハンニバルの件が、何か係わっているのかも知れない。

「でもまあ、リストラされてむかつくので、政府の機密情報は、出来るだけついうっかりリークしてしまう方向で行こうと思います。よろしく」

「頼もしい」

所長、大喜びだ。

「君らには、鯖丸とトリオでやってもらうから。ああ、鯖丸は知ってるよな」

「知ってるも何も、こいつら付き合ってますよ。アホみたいな顔で手をつないでスーパ―から出て来たし」

何で知ってるんだという顔で、トリコは睨んだ。

「ええっ、付き合ってるって、その…清くない方のお付き合いで？」
所長は聞いた。

「まあ、そんな感じですよ。週休二日で同棲している様な状況で」
トリコは答えた。

「なぜ週休二日なんだ」

「たまにはゆっくり寝たいからに決まってるだろう」

トリコはぶつぶつ言った。

「うわ、鯖丸最低」

所長はうなった。

「そんな子に育てた覚えはないのに…いつの間にか童貞から悪魔超人に転生してしまったんですわ、あれ」

ジョン太は説明した。

溝呂木にだけはバレない様にしなければ…。

階段を駆け上がる足音がして、当の悪魔超人が入って来た。

「おはよーございまーす。あれ、何でもんな、変な顔してこっち見るの」

理由は聞かない方がいいと思う。

「じゃあ三人揃ったから、仕事の話だ」

所長は、三人を呼んで、依頼状を取り出した。

「中々危なくて楽しそうな依頼が来てるぞ。君ら三人で組めば、民間では日本最強だからな。これからどんどん稼いでくれ」

「やったー」

稼ぐという単語に弱い鯖丸は、完全に騙されている。

絶対、こいつの時給は、今までと同じだ。

「楽しくなくていいから、安全で楽な仕事がしたい」

ジョン太は言った。

「民間なら、危ない事はしなくていいと思ってた」

トリコも肩を落とした。

二人は、顔を見合わせてため息をついた。

それから所長に向き直った。

「で、今度は誰相手に暴れて来ますか」

五話 三匹（前編）

魔界の『穴』の周囲には、相変わらず風が吹き荒れていた。異界に繋がる深淵の中を、何かかゆつくりと登って来た。

穴の縁に手をかけ、体を引き上げて、立ち上がった。

長い皮のコートが風にはためき、ゴーグルをかけた日焼けした顔が、辺りを見回した。

男の顔に笑みが浮かんだ。

人間離れした笑いだった。

薄く開いた口の中に、闇が広がっていた。

それからふいに、男は人間の動作と表情に戻った。

懐かしげに辺りを見てから、歩き出した。

確信を持った足取りで、ゆっくりと魔界の外を目指して。

鯖丸は、ふかふかのベッドの中で目を覚ました。

綺麗に片付いた清潔な部屋の中に、朝日が差し込んでいた。

自分がこんな場所に居る理由が、毎朝ちよつとだけ分からなくなる。

隣をこそそ探って、誰も居なかったので本格的に目が覚めた。

布団から出るのが辛くなる季節だ。部屋には暖房は入っていない。

昨夜脱ぎ捨てた下着とパジャマを急いで着て、上からセーターを羽織った。

トイレに行って用を足して、顔を洗って歯を磨いてヒゲを剃るという一連の作業を片付けた。

寝癖の付いた髪の毛は、いつも通りそのままですルーした。

台所に行くと、もうすぐ朝ご飯が出来上がる所で、小さな子供が

もう、きちんと幼稚園の制服を着て、テーブルに着いていた。

「遅いよ、鯖くん」

子供に注意された。

「お早う由樹」

挨拶してシンクの方に行くと、出来上がった味噌汁を渡された。

「お早うトリコ」

「ああ、お早う」

外見は小柄な中学生、実は三十二才子持ちの未亡人、如月トリコと同棲を始めて四ヶ月経っていた。

毎朝大体こんな感じだ。

幸せを絵に描いた様な光景だなあ…と、毎朝思う。

「今日は資源ゴミの日だから出しとけよ。それと、買い物メモそこだから、忘れないで買つというて」

「はいはい」

味噌汁を運んでごはんを盛りながら、鯖丸は言った。

たぶん、彼の思う絵に描いた様な幸せは、通常と少し違う。

自分の分は大盛りにして食卓に並べ、席に着いた。

「いただきます」

三人で言って、食事 시작했다。

「トリコ、今日はジョン太と二人で魔界だっけ」

鯖丸は聞いた。

「そうだけど、日帰りだから晩ご飯作つというて」

「分かった」

「えー、またカレー」

由樹が文句を言った。

「仕方ないじゃん。俺、カレーしか作れないもん」

以前鯖丸が作った、カレー以外の何か得体の知れない物を思い出した子供は、黙り込んだ。

「いや…待て。たまには違う物を作ってみようかな」

「カレー大好きー」

トリコと由樹は、同時に叫んだ。

鯖丸が食器を洗っている間に、トリコは二人分の弁当を手早く詰めて渡した。

由樹の鞆に入れて「残さないで食べな」と言った。

それから鯖丸に弁当を渡して、言った。

「お前は、学校帰りに変なもん買い食いするなよ」

小学生の様な小言を言われる二十一才児だった。

「ええっ、まるまるバナナメープルシロップ味、まだ食ってないのに」

「禁止。ほら、素バナナとおやつ」

普通のバナナとジップロックに入ったおやつを渡された。

中身は出汁じゃこと炒り豆だ。

「母ちゃん。おれもおやつ」

「そうだねえ、由樹はいい子だから飴ちゃんも入れといてやろう。食ったら歯を磨けよ」

「はい」

鯖丸は愕然と、甘い物要素ゼロの自分の間食を眺めた。

こんなのおやつじゃないだろう、毎度の事だが。

「いや：いいんだけど。俺が自分で言い出した事だし。それはいいよ。でも、袋にマジックで鯖丸って書くのやめて」

「書いとかないと、由樹のと間違うだろう」

トリコは、自分も出掛ける支度を始めたので、鯖丸も部屋に戻って服を着替えた。

「普通に武藤って書けばいいじゃん。俺最近、部の後輩にまで鯖丸先輩とか言われてんだよ。外界でこんな名前、普及させたくないよ」

「じゃあ、その袋が破れたら書き直してやるよ。とりあえず破れるまで使え」

トリコは基本的に所帯臭い。

鯖丸も貧乏性の上に本物の貧乏なので、使える物は捨てられなか

った。

ジップロックの耐久性は、意外と高そうだ。

当分学校でも鯖丸として生きて行く事になりそうだった。

資源ゴミを出してから、由樹を連れて幼稚園のバス乗り場に向かった。

近所の奥さん達とも、すっかり顔馴染みになってしまったので、挨拶して子供連れの集団に加わった。

「由樹君、いつもお兄ちゃんに連れて来てもらって、いいわね」

中々美人の奥さんに言われた。

「ううん、鯖くんは兄ちゃんじゃないよ。母ちゃんの彼氏」

子供は、言わなくていい事実を、絶対口に出して言うてしまうのだ。

さすがに世間体は無頓着な鯖丸にも、周囲が音を立てて引くのが分かった。

うわ、俺超居辛い。

「あの：誤解してるかも知れないんですけど、俺、高校生とかじゃないですから。こう見えて、けっこういい年ですから」めずらしく言い訳を始めた頃にバスが来た。

「人付き合いは難しいねえ、迫田」

学食で弁当を食いながら、鯖丸は言った。

「何言ってるの。人を踏みつけてでも我が道しか行かないお前が」迫田は呆れた。

最近山本が休学して、外国の山に行ってしまったので、迫田しかお友達が居ない状態だ。

「俺ってそんな感じかなあ、やっぱり」

多少自覚はあるらしい。

しみみりした顔で弁当をつっている。

「わあ、美味そうだけど何か、ばあちゃんが作る様な弁当だな、それ」

迫田は弁当を覗き込んで、わざわざケータイで撮っている。誰に見せるつもりだ。

「うん、弁当はうまいけど、おやつは非道いと思う」

「出汁じゃこだもんなあ」

迫田もうなずいた。

「ああ、もうアイスとか買っちゃえ」

ポケットから小銭を取り出した鯖丸は、椅子を立ちかけた。

「いや、ダメだー。迫田、俺を殴って止めてくれ。手が勝手にアイス買っちゃう」

「何やってんだ、お前」

迫田は、止める代わりに自販機から出て来たアイスを取り上げた。「おい君ら、貧乏で有名な武藤先輩が、アイスおごってくれるって」

食堂の隅でたむろっていた後輩三人に、声をかけた。

「ええ、あの、貧乏でケチで性格悪い武藤先輩が。しかも三人で一個」

「嫌なら返せ」

「いえ、いただきます」

三人で、アイスに巻いた紙をむき始めた。

「お前、どういう事になってんの。健康診断で血糖値でも高かったのか」

「ううん、骨密度が普通より低い以外は、割と元気」

「まだ低いんだ」

迫田は、知らなかったという顔をした。

「ここ四ヶ月でだいぶ上がったから、もうちょっとで普通になるんだけど」

鯖丸は、辛い顔をした。

「食生活を完全に管理されてます。ああ、素じゃない方のバナナが食いたい」

「お前の彼女、すげえな。こんな言う事聞かない奴を…大変だろう

なあ」

迫田は、何か身に覚えがあるのか、ため息をついた。

「違うの、俺が自分でお願ひして、管理してもらってるの。」

次こそは完璧な状態に仕上げて、秋本をぼこぼこにしてやる」

「ああ、広大の秋本君、急にすごい強くなってたよねえ」

地区予選で武藤君が一本取られた事など、今まで無かった。

普段でかい口をたたいているだけに、面目丸つぶれだ。

「何かお前にだけ、殺すつもりみたいな気迫でかかって来たけど」

「全く、一体何があったんだろう」

「どうもこうも、自分が原因なのは、全然憶えていないらしい。」

素でひどい奴だ。

後輩三人は、秋本の事より、武藤先輩に彼女が居るという話に、普通に驚いていたが、迫田にケータイの写真を見せられると「うわっ、犯罪者」と叫んだ。

「先輩、捕まる前に早く別れて。不祥事を起こしたら、俺らまで出場停止に」

「うるせえ、今まで大丈夫だったんだから、平気だ」

何の根拠もない事を言い切った。

たぶん、いずれ捕まると思う。

トリコは、予定より少し遅い時間に帰って来た。

鯖丸は、台所のテーブルで、普通の学生らしく真面目に勉強していた。

「ただいま」と言って部屋に入ると「お帰りなさい」と言われた。

「由樹は？」

「さっき寝たよ」

椅子を立ちながら鯖丸は言った。

部屋中カレーの匂いがする。

「カレーにする？お風呂にする？それとも寝る？」

「三択かい」

他に選択肢はないのか。

「じゃあカレー」

カレーはすぐ出て来た。一応サラダらしき物が付いている。キャベツとレタスの千切りに、プチトマトが2個乗っているだけだが、まあ作ってくれるだけでありがたい。

「今日は良かった」

仕事の事を聞かれた。

「普通かな。魔界経由で密輸入して来たパチもんトカレフの回収。ヤクザ屋さんと、ちよつと撃ち合いになったけど、ジョン太が居るし、どうって事なかったよ」

最近、これくらいの乱暴な仕事は、普通になって来た。

「ジョン太、まだ魔法使えないの」

「うん、ありやダメだな。ガード堅すぎて」

トリコは、肩をすくめた。

「今度三人でやる仕事が入ったら、二人がかりで無理矢理犯っちゃおうか」

ひどい事を言い始めた。

「ジョン太相手に無理矢理なんて、二人じゃ出来ないと思うけど」
十人居ても無理かも知れない。

「いや、力づくじゃなくて、私の超絶テクでこう、骨抜きにする方向で」

何かいやらしい手つきをして見せた。

「そんなの俺にして欲しいわ。最近トリコ普通にするばかりで」
悪魔超人が、何か言い始めた。

「お前とは、一通り色々やったからなあ」

トリコは、遠い目をした。

「最近、普通が新鮮で」

ただれたカップルの会話になって来た。

カレーを食べ終わったトリコは、風呂に入ると来てと言って、部屋を出た。

普通は嫌とか言っていたくせに、鯖丸はうきうきした感じでパジャマに着替え始めたが、ふと止まった。

「いや、待て。どうせ脱ぐのに、何でこれ着るんだ。ああ、でも着てないと寒いし…」

貧乏性なので、エアコンのスイッチを入れるという発想はなかった。

トリコがゆっくり風呂に入って、髪の毛も乾かして出て来た時、考え過ぎて何かが一周半してしまった鯖丸は、一度着たパジャマを脱ぎ捨てて、コンドームだけ装着して、なぜか変なポーズで立っていた。

うわ、これ突っ込まないといけないんだろうな、めんどくさい。

「何やってんだ」

一応聞いた。

本音は、君とはもうやっとなれんわー、だった。

「ドラッグストアのワゴンセールで安かったから…」

鯖丸は、自分の股間を指差した。

「適当なの買って来たら、こんなだったのだから、
良く見ると、なぜか金色に光っている。」

「うわ、最低だな、それ」

売れなかったから、安かったに違いない。

「ゴールドクロスを装着した感じで、事なきを得ようとしてました」
「局部しか守れてないよ。何座だ、その悲しいセイントは」

バカとの付き合いが長いので、いいツツコミになって来た。

「一応、ダイヤモンドダストのポーズで」

「その子、ゴールドセイントじゃないから」

トリコは意外と詳しかった。

「ほら、ちゃんとゴールドセイントの技を出してみな」

鯖丸は、ちびっ子の頃に読んだマンガを、全力で思い出しているらしかった。

「ええと、積尸気冥界波ー!!」

なぜ、よりによってそれ。

「お前獅子座だろ。せめてライトニングボルトとかにしておけ」

一番の解決策は、聖闘士星矢から離れる事だと思うが、嫌でもゴールドクロスが目に入る。

まだ、普段の悪魔超人の方がましだ。

「もういい、やるならちゃっちゃとしよう」

さくさくパジャマを脱ぎかけた。

「ダメー、それ、ちまちま脱がしたいから、着てて」

いつも通り、細かい事を言い始めた。

「そうか、じゃあ、好きにしなさい」

トリコは、パジャマを着たままで、ごそごそ布団に入った。

「お前って、割とめんどくさいなあ」

その頃ジョン太は、やはりトリコと同じ時間帯に帰宅したので、風呂上がり者になっていた。

全身毛皮なので、中々乾かない。

自分用のバスタオルに使っているタオルケットを体に巻いて、ぼんやりテレビを見ながら茶を飲んでいた。

「乾かさないと、風邪引くわよ」

嫁のみっちゃん隣に座って、タオルケットを頭にかぶせてごしごし拭き始めた。

おまけに、貧乏性ではないので、エアコンのスイッチも入れられてしまった。

「平気だよ。ほら、俺ってシベリアンハスキーだし」

実際寒い方が調子がいいのだが、何の根拠もない話だった。

いや：雑種。この人絶対、原型はその辺の雑種犬。

みっちゃんは、内心思ったが口には出さなかった。大人の対応だ。テレビは、スポーツ中継が終わって、ニュースになっていた。

これが終わったら、みっちゃんの好きな、深夜の微妙なお笑い番

組になるので、見るつもりらしく、自分も茶を持って来て、座った。いつもの事だが、暗いニュースの方が多い。

相変わらず、あちこちで紛争が続いていて、宇宙でも地球の覇権争いがそのままロケットに乗せて撃ち出されている。

明るい話題と言え、まあ、世界中で色々やったせいで、多少は環境が回復している事くらいだ。

『では、次のニュースです』

国営放送のアナウンサーは、相変わらずしゃべり方が古くさい。民放のくだけ過ぎた感じより、ジョン太はこういうのが好きらしく、ニュースの時間は国営放送を見ている。

実際には、もうほとんどの情報はネット経由なので、わざわざテレビで見る必要はないのだが、時間つぶしには丁度良かった。

民放も国営放送も、情報弱者の為だという名目で、テレビでの放送を続けている。

ニュースが終わったらチャンネルを変えようと思って、みっちゃんはリモコンを手にとった。

『六年前に行方不明になっていた、政府公認魔導士、如月海斗氏（仮名）が、関西の魔界で発見されました』

どこかで聞いた名前だなあ…と、ジョン太は思った。

画面に、四角い顔をした男の写真が出た。

どこかで見た顔だった。

「ええと…如月。如月って、どこかで聞いた…」

「何言ってるのジョンサン。これ、トリコさんの旦那さんでしょう」
ジョン太は、飲みかけの茶を吹いた。

「ええ、ハンニバルか、こいつ」

なぜ、みっちゃんの方が情報通なのかは、謎だ。

無事発見され、元気な感じで帰還するハンニバルの動画が続いた。

「元気で帰って来て良かったけど」

「そうだなあ」

政府公認魔導士をクビになってまで、ハンニバルの遺品を取り戻

そうとしたくらいだ。

トリコは今でも、この男を愛しているに違いない。

「武藤君、どうなるのかしら」

「あっ…」

バカの顔が脳裏に浮かんだ。

バカだから、何をしでかすか分からない。

急いで鯖丸のケータイに電話したが、出なかった。

トリコも、圏内のはずなのに出なかった。

何だかとても嫌な予感がした。

ジョン太が心配して電話した頃、バカ二人は忙しかったので、テレビも見えていないし、ケータイもマナーモードで充電器に突っ込んだままだった。

鯖丸に押し切られて、三ラウンド目に突入してしまったので、トリコはすっかり諦めていた。

「何でそんなに元気なんだ、お前は」

生活態度から食事まで、全部改善してより元気になってしまったのが自分なのは、気が付いていない。

もうちょっと弱らせておいた方が、絶対良かったはずだ。

「だって、最近絶好調だもん」

いい調子で飛ばし始めようとしていた鯖丸は、あれ…という顔でドアの方を見た。

確か今、玄関の戸が開く音がした様な。

「今、玄関開いたよね」

トリコに聞いた。

「そんな訳ないだろ。うちの鍵持ってるの、お前と大家さんだけだ」
大家のばあちゃんが、こんな時間帯に起きている訳もないし、勝手に入って来る様な、変な人でもない。

「気のせいかな」

続きを始めようとしたが、廊下を足音が近付いて来る。

さすがにトリコにも聞き取れたらしい。

「うわ、由樹か？やばい、鍵締めてないよ」
鯖丸はうろたえた。

「ダメだー、入って来るな。子供が見るもんじゃありません」

「由樹じゃない。大人の足音だ」

トリコは言った。

言われて良く聞くと、その通りだった。

「じゃあ、誰」

「泥棒？」

自分で言うてから、怖くなったのか、トリコは鯖丸にしがみついた。

「どうにかして。お前、外界でも腕っ節は強いだろ」

実際、剣道の有段者で、魔法が使えない外界でも、結構強い。その点トリコは、魔力が高いだけなので、外では普通の女だ。

しかし鯖丸は、思い切り首を横に振った。

「俺、竹刀とか、棒的な物持ってないと、ケンカは超弱いんだけど」

「棒的なあれなら、股間に一本付いてるだろ」

「これで出来る事なんて、そう多くないよ」

鯖丸は、部屋中を見回したが、良く片付いた部屋の中には、棒的な物は一本も無かった。

仕方ない。ここは男らしくトリコの代わりに侵入者に殴られよう。殴られるの前提なのが情けないが、意を決して布団を出た時、棚の上にある物に気が付いた。

由樹が学芸会で使うと言って作ったハリセンだった。

お前の所の幼稚園は、お笑いタレント養成学校かーと、突っ込んだのを憶えている。

「よし」

ハリセンを手にとって、ドアの横で構えた。

かちりとノブが回り、ドアが開いた。

がっちりした体格の男が、部屋に一步踏み込んだ。

「誰じゃあー、お前」

天然ボケのくせに、いいツツコミだ。すぱーんと、ハリセンが男の顔を直撃した。

武器がハリセンなのに、男は廊下まで吹っ飛んだ。さすが武藤君。追い打ちをかけようと廊下へ飛び出した鯖丸を、トリコは止めた。
「待て!!」

廊下で男が起き上がった。

「痛て、ひでえな。何するんだ、坊主」

鼻血をぬぐって、男はぼやいた。

「海斗…」

トリコの表情が、ただ事ではなかった。

鯖丸は、トリコと侵入者を見比べた。

ええと…海斗って誰だっけ。如月海斗…。

「ああ、ハンニバル!!」

自分がぶっ飛ばした男を指差して、鯖丸は叫んだ。

「相変わらずだなあ、トリコ。また、こんな若い子引っ張り込んで六年間行方不明だったトリコの夫は、あまり驚いた様子もなく、笑った。」

トリコの彼氏から間男に格下げになった武藤玲司は、むすっとした顔で、台所のテーブルに着いていた。

何で、自分がテーブルのこっち側に一人で座っていて、向かいにトリコとハンニバルが並んで腰掛けているのか、訳わかんない。

俺のポジションは絶対そっちだと言わんばかりの目つきで、ハンニバルを睨んだ。

「ええと、何から話していいか」

ハンニバルは、古くさい名言を吐いた。

「恥ずかしながら、帰って参りました」

自分で言っておいて、照れて笑った。

四角い顔のおっさんのくせに、笑顔が可愛い。

別に、帰って来なくても良かったのに…。

「それで？」

鯖丸は、腕組みして鷹揚に聞いた。元々不利な立場なので、弱気になったら、絶対負ける。

というか、この状況で、まだ勝つつもりでいるこいつが凄い。

「今頃帰って来て、何のつもり？」

「いや…色々あったんだが、大体君は誰だ」

鯖丸が何か言う前に、トリコが説明した。

「今、民間で仕事してるんだ。彼はリンク張ったパートナーで、あと、もう一人とチームを組んでる」

「政府の仕事は辞めたのか」

ハンニバルは聞いたが、すぐにうなずいた。

「そうだな…俺があんな事したら、お前の立場が悪くなるのは分かってた。済まん」

ハンニバルが居なくなった時の状況は、聞かされていなかった。殿も関係していると思うが、そう言えば殿は、ハンニバルは恒久的に活動を停止させられたと言っていないなかったか。

人間界に慣れていない殿の言い回しは、時々おかしいが、普通に解釈すれば、死んだという意味だ。

死んだ人が帰って来ている。

何かおかしくないか、これ。

「君は、現在トリコのパートナーか」

ハンニバルは聞いた。

「はい」

鯖丸は答えた。

「名前を聞いていいかな」

「鯖丸です」

普通に、魔界での名前を答えた。

「いや…、そっちなじゃなくて、本当の名前を」

「武藤雄次郎です」

眉一つ動かさずに、ウソをついた。

ハンニバルが、本当にちゃんとした状態で外界に戻って来たなら、何バカなウソついてるんだ…と、トリコがツツコミを入れて来るはずだった。

トリコは、俯いて、自分の膝をぎゅっと掴んだ。

頼むから何か言って。

返事はなかった。

目の前のハンニバルは、とてもいい人に見えた。

しかし、外界で魔法は使えないが、自分の勘が、何かがおかしいと告げていた。

ふいに、リビングの向こう側にあるドアが開いた。

ばたばたしていたので、由樹が起きて来ていた。

「ええ、何。このおじさん誰」

目をこすりながら、こちらに歩いて来る。

「由樹のお父さんだよ」

鯖丸は、ちらりとハンニバルを見て、説明した。

ハンニバルは、何の興味もない物を見る視線で、由樹を見た。

こいつ…!!

それは一瞬で、次には形相を崩してにこりと笑った。

「そうか、あの時の。ごめんなあ、ずっと帰れなくて。今更だけど、パパって呼んでくれる」

「知らないおじさん」

由樹は、冷たい事を言って、鯖丸の隣に座った。

子供なので、言う事がひどい。

「お前の本当のお父さんなんだけど…」

それから気が付いた。

子供の方が、絶対こういう勘は鋭いはずだ。

「あの…二人で色々つもる話もあるだろうし」

自分でも、何を言っているのか分からなくなって来ていたが、どうにか必死でまとめた。

「今日は俺、帰るから。由樹は今晚家で泊めるけど、いいよね」
もちろん、答えは聞いてない。

トリコは、こちらを見た。すがる様な目付きだ。
しかし、これ以上の事は出来ないのは、分かっていた。

「うん、頼む」

「何かあったら電話して」

由樹と自分の、当面の着替えとか必要な物をデイパックに詰め込んで、鯖丸はトリコの家を出た。

同棲しているのに、なぜか強固に週休二日を主張して、以前住んでいたアパートを解約させないのは、何かあった時の為だったのだと、今になって気が付いた。

いつか、こんな事になると思っていたのか。
でも、そんなの辛過ぎだ。

由樹の手を握って、アパートの階段を下りた。

「鯖くん、痛い」

強く握っていたので、文句を言われた。

「うん、ごめん」

泣きそうだったけど、ここで俺が泣いたらダメだ。

「行こう、由樹」

子供を抱き上げて、走った。

「わあ、鯖くん早い」

由樹は無邪気に喜んだ。

五日振りに戻る部屋は、殺伐としていた。

「鯖くんの家、汚いねえ」

由樹は、正直な意見を述べた。

これでも、以前よりはだいぶ綺麗になっている。

「明日はどうするの」

幼稚園児に、現実的な事を聞かれた。

鯖丸は、少しの間考えを回らせて、答えた。

「明日はお休みだ。兄ちゃんどっか遊びに行こう」

「それでいいの」

ぎくりとする様な事を聞かれた。

「母ちゃんが色々彼氏を変えるのは、いつもの事だけど、あのおじさんは変だよ」

やっぱり、子供の目から見ても、変なんだ…。

返事が出来なくて、黙り込んでしまった。

しかし、言わない訳にもいかなないので、説明した。

「あの人は、由樹が生まれる前に行方不明になってた、本当のお父さんだよ」

「へえ」

軽い答えだった。

「おれ、鯖くんが本当のお父さんだった方が、良かったな」

涙が出そうな意見だったが、それ、物理的に無理…。

一瞬思ったが、逆算すると意外とセーフだった。

十五才かあ…物理的には可能だが、世間的に無理だな、これ。

「鯖くん、歴代母ちゃんの彼氏の中では、一番いいよ」

「誉めないで、辛くなる」

俺で一番いいなんて、一体どういう奴らとどんな事を…。

「寝よう。明日の事は、明日考える」

由樹を布団に押し込んだ。

「臭い、干してない布団の匂いがする」

由樹は、文句を言った。

「黙れ。悪い環境でも平気で寝られる様になってこそ、一人前だ」
変な理屈をこねて、鯖丸はあっという間に寝た。

由樹は呆れて鯖丸を見ていたが、やはり子供なのですぐに寝てしまった。

翌朝、鯖丸は、階段を登って来る足音で目が覚めた。

隣のお姉さんが、また朝帰りでもしたんだろうと、目をこすって

二度寝しようとした。

足音が、自分の部屋の前で止まっていた。

がちゃがちゃと、ドアノブを掴んで揺する音がした。

鯖丸は飛び起きた。

立て付けの悪いドアの隙間から、見覚えのあるコートの裾がのぞいた。

ハンニバルだ。

ドアがゆすられて、隙間が少し大きくなった一瞬、ハンニバルの顔がちらりと見えた。

早朝から、他人の部屋に押しかけてドアをこじ開けようとしているくせに、その顔には何の表情も無かった。

背筋が寒くなった。

自分と由樹の靴を掴んで、布団の所まで戻り、部屋の中で靴を履いた。

服は着たまま寝ていたので、ジャケットを羽織ってデイバッグを背負った。

由樹を抱き上げると、目を覚まして何という顔をした。

子供の幼稚園鞆と靴とセーターを、もう一方の手で掴んで、窓を開けた。

入り口のドア以外は、ここしか出口がない。

下は、コンクリートの駐車場になっていた。せめて土の地面だったら…。

子供の荷物を先に放り投げて片手を空け、なるべく低い位置から飛び降りられる様に、窓枠からぶら下がった。

「いいか、飛び降りた後、俺が動けなくなったら、一人で逃げて母ちゃんと…」

少し考えて、一番頼りになりそうな人を思い浮かべた。

「いや：ジョン太にすぐ電話して、助けてって言うんだ」

飛び降りた。

足が痛かったが、普通に動けた。

投げ降ろした荷物を拾い上げて、鯖丸は走り出した。
普通に走れる。

「うわ、すげえ。絶対どっか一本くらい折れると思ったのに」
まさか、二階から子供を抱いて飛び降りて、無事だとは思わなかった。

ありがとう、トリコ。もう、おやつが出汁じゃこでも、絶対文句は言いません。

背後の窓から、ドアが破られる音が聞こえた。

「ジョン太、大変だー。トリコのダンナが帰って来たー」

事務所に駆け込むと、ジョン太は机に向かって、普通にパソコンをのぞきながら茶を飲んでいた。

「知ってるよ。お前も色々大変だな」

のんきな口調で言ってから、鯖丸のただならぬ様子にやっと気が付いた。

「何やってんだ、お前」

うわー、バカがまた、何かしでかしてるぞ…と、内心思った。

「トリコのダンナが変なんだ。それで、由樹と逃げて来て…」

いや、変なのはお前だろう。

「お前、それ、下手すると誘拐なんじゃないのか」

「そうかも」

『西瀬戸大三年の武藤玲司（21）が、幼児誘拐の容疑で指名手配されました。』

同棲相手の如月トリコさん（32）との、痴情のもつれが原因と見られ…』

すらすらとやばいニュースの文面が浮かんで来た。

ああ、こいつの顔って、今気が付いたけど、指名手配の写真が似合うなあ…。

「そうかもじゃねえだろ。すぐ返して来なさい。また警察に捕まるだろうが」

「だって、ハンニバルがおかしいんだ」

あの、変な感覚を、言葉で説明出来ない。

「そうだ、トリコもヤバイかも。電話しないと」

「待て」

ジョン太は、鯖丸を止めた。

「俺が連絡してみる」

ジョン太はケータイを手を取った。

「おい、トリコ。鯖丸がお前んちの子を誘拐して、こっち来てるけど」

「由樹は無事なのか」

トリコの様子もおかしい。

何か、切羽詰まった感じだった。

「ああ、ちょっと眠そう」

鯖丸が抱いている幼児を見て、言った。

「何があった」

ばたばたと階段を駆け上がる足音がした。

乱暴にドアを開けて駆け込んだトリコは、壁にもたれて肩で息をした。

どの辺から走って来たか知らんが、姐さん絶対運動不足だ。

「海斗が…」

取り乱しているのか、まだケータイに向かってしゃべっている。

「いや、普通に聞こえるし」

ジョン太は、電話を切った。

「海斗がおかしいんだ」

鯖丸と同じ事を言っている。

「いや…あれ、海斗じゃない。体は同じだけど、中身は絶対違う」
中身だけ別人って事もないだろう…と、ジョン太は思った。

「多重人格とか？」

鯖丸の方をちらりと見て、言った。

「そんな普通の事じゃない」

トリコは、首を振った。

「普通か？俺」

「たぶん、人間じゃない。それにあいつ」

トリコは震えだした。

ビーストマスターのトリコ姐さんを、ここまで怯えさせるとは、ただ事ではない。

「外界で魔法を使ったんだ」

外界で魔法を使うのは、不可能だった。

魔法は、穴の周囲から漏れ出している、異界の法則の上に成り立っているからだ。

どんなに魔力の高い人間でも、魔界を出てしまえば、魔力はかけらも無くなる。

それだけは、絶対に変えられない事実だったはずだ。

「逃げないと…もうすぐここへ来るかも知れない」

トリコは言った。

「あいつ、急に由樹の行き先を気にし始めて、連れ戻して来るって止めようとしたら、魔法を使って眠らされてた」

良く見ると、額と頬に痣が出来ている。たぶん、他にも怪我があるだろう。

眠らせるとか、そういう次元ではない。

「由樹をあいつに渡したら、大変な事になる」

「早く言え、そう言う事は」

ジョン太は、いつも決断が早い。

あつという間にロッカーからダッフルバッグを出して、出掛ける支度を終えた。

「所長、急ですが今から有給取ります。あと、車貸して」

「そんな変な奴相手に、どこへ逃げる気だ」

所長は聞いた。

「あ、そうだ」

鯖丸は、急に何か思い付いたらしかった。

ポケットからケータイを出して、電話をかけ始めた。

「もしもし、秋本君。俺だけど」

自称永遠のライバル、秋本隆一に連絡を入れている。

この前地区予選でかつこ悪い負け方をした相手に、何の用だ。

「頼みがあるんだ。聞いてくれるか」

『お前が俺に物を頼むなんて、余程の事だな』

電話の向こうで秋本は言った。

『分かった、話せ』

「殿と連絡を取りたい。今すぐ」

『すぐは無理だ。相手は魔界だから』

「人の命がかかってるかも知れない。何とかしてくれ、頼む」

秋本は、少し黙り込んだ。

あの、自信家で傍若無人で、自分を柱に括り付けてから、パンツ脱がして放置して行った、悪魔の様な男が、必死で頼み事をしていく。

『西口のゲートまで来い。入り口で待ってる』

「ありがとう」

鯖丸は、電話を切った。

「殿にかくまってもらおう。たぶん、世界一安全だ」

異界の怪人に、子供を預けてしまおうという発想が、もう普通ではない。

しかし、確かに安全だ。

「ジョン太、有給は却下だ」

所長は言った。

「いつもの、殿の所への配達。お前らで行って来い」

「所長、男前」

鯖丸は叫んだ。

「いいんですか」

トリコは聞いた。

「ジョン太」

所長は、机の引き出しから、デジカメを取り出して、投げて寄越した。

「倉庫にある、入出ファイル、それで全部撮影してから、焼き捨てて来い。」

後で、再生するまで、メモリーカードはお前が責任を持って保管しろ。これから、セキュリティレベルを上げる」

個人情報が入っている入出ファイルは、確かに見られたらヤバイ。ある意味、倉庫に入っている武器の類より、持ち出されると危なかった。

所長は更に、あちこちに電話を入れ始めた。

「ああ、私だ。うちの会社のセキュリティを、三段階上げる。協力しろ。ええ、出来ないなら、あの件公表するけどいいのか…さつさとやれよ」

立て続けに次に電話した。

「あ、私。ちょっとお願いがあるんだけど。うん、いつも悪いね」

「所長って、どういう人？」

鯖丸は、ジョン太に聞いた。

「ああ、謎の人かな」

ジョン太は答えになってない事を言った。

それからふいに、顔を上げて、聞き耳を立てた。

「そこまで来てる。行くぞ」

戦闘用ハイブリットの身体能力は、魔界でも外界でも、同じ様に使える。頼もしい。

「俺、足止めた方がいいかい」

今日は、唯一事務所に残っていたハートが聞いた。

北斗の拳のハート様に似ているので、そう名乗っている巨漢だ。

「いや、無理するな。充分逃げられる。所長と斉藤さんを頼む」

由樹を抱いた鯖丸と、トリコを裏口に押し込みながら、ジョン太は言った。

事務の斉藤さんは、侵入者を煙に巻くつもりらしく、お茶を出す準備をしていた。

裏口から地下駐車場に降りて、車に乗った。

いつもの四駆は出払っているので、予備の軽四だ。

いつも通り鯖丸がハンドルを握って、ジョン太が助手席に座った。トリコは、由樹を抱いて、狭い後部座席に心許ない顔で座っている。

駐車場から道に出る時、階段を上がって行くハンニバルの姿が見えた。

後ろ姿をちらりと見ただけで、普通ではないのがジョン太には分かった。

一瞬、背中に通った視線に、ハンニバルが気付いた。

「気付かれた。その角を曲がれ」

変な裏道に、車を滑り込ませた。

「これ、どこ行きだよ」

鯖丸は文句を言ったが、元々空間把握能力が高いので、見当を付けて次の角を右に曲がった。

「ああ、次は左な。右は一通」

カーナビより裏道に詳しいジョン太は、指示した。

ハンニバルは、後ろが見えていた様な気がしてならなかった。

それから、自分以外は気が付いていないだろう事実には、愕然とした。

生きて元気に活動しているあの男から、かすかに漂っていたのは死臭だった。

魔界のゲートで、秋本は皆を待っていた。

中古の古い原付に乗って、ユニクロで買った様なダウンジャケットを着ているが、相変わらず男前だ。

「ええ、これトゲ男」

トゲ男の素顔を見た事がなかったトリコは、驚いた。

「何い、これがビーストマスター」

外界のちっちゃいトリコを見て、秋本も驚いた。

鯖丸が車の窓から首を出した。相変わらず憎らしい顔だ。

「悪いな、呼び出して」

武藤とは思えない、普通の事を言い始めた。

「いや…」

嫌味を言うつもりだったが、拍子抜けしたのでやめた。

武藤の相方が、外界でも同じ姿だったのも、ちよつと驚いた。

本物の先祖返りのハイブリットだ。

こんな奴相手に戦わなくて済んで良かった。

ビーストマスターが、小さい子供を連れている。

普通の状況ではないのは、すぐに分かった。

車と原付は、ゲートをくぐった。

NMCこと西谷魔法商会の倉庫は、割合ゲートの近くにあった。

倉庫に入るとすぐに、ジョン太は入出記録の撮影を始めた。

トリコは、奥へ行って、服を着替えている。

魔界に入ると体格が変わるので、同じ服は着てられない。

鯖丸は、自分の刀を装備してから、所長が使っている刀を取り出した。

「何かあったら使え。木刀じゃ頼りない」

今日は、琵琶湖と草津温泉の木刀を持って来ていた秋本は、真剣を受け取った。

どうやら、日本観光地焼き印入り木刀の収集が趣味らしい。

あまり観光地が北上すると、某有名な血糖値の高いお侍と木刀がかぶってヤバイな…と、何となく思った。

ジョン太が、ファイルを焼き始めた。

「真剣は重いから、左手も添えないで思い切り握って」

竹刀を使う時との違いを指示された。

「勝手に貸し出すな」

ジョン太は注意したが、それ以上は止めなかった。

大人四人と子供一人で乗ると、スズキジムニーは超狭かったが、割合順調に走り続けた。

隣に座った少女が、あっという間に巨乳のお姉ちゃんに変わるのを、秋本はびっくりして眺めたが、自分もダウンジャケットを脱いで、トゲ男に変わった。

着たままだと、折角ユニクロのバーゲンで買った暖かいジャケットが、穴だらけになってしまう。

トゲ男の変身を横目で見て、トリコはもったいない…と言った。

「折角綺麗な顔をしてるのに、どうしてそんな変な姿になるんだ」

「外見で評価されるのが嫌なんです」

トゲ男は答えた。

自分の男前に、変なコンプレックスがあるらしい。

こいつも割とややこしそうなタイプだ。

「大体、俺の方が前の大会までは成績悪かったのに、専門誌ではないつも写真の扱いが大きくて。芸能誌か、剣道ジャパン!!」

「別に、記事の扱いは、俺の方がページ数多かっただろ。三位以内に一回も入ってないのに、マイナーコロニー出身っていうだけで、大きい扱いにしゃがって。リハビリ大変だったでしょうとか聞くな、死ね」

二人で、意気投合してしまった。

「君ら、基本的には最後に親友になるタイプだよ。少年マンガとかでは」

ジョン太は指摘した。

「断る」

二人は同時に言った。

寝ていた由樹が、騒ぎで目を覚まして、辺りを見回した。

「うわー、変な緑色の人が居る」

トゲ男を見て泣きそうになった。

「分かった、元に戻るよ」

秋本君は、割合いい人だった。

「母ちゃん、あの人変」

言いかけた由樹は、トリコを見て更に驚いた。

「どうしたんだ母ちゃん。急に老けたぞ」

周囲の男三人には嬉しい巨乳が、子供にかかると単に老けたかい。

「うーん、魔界に入ると老けるんだよ」

トリコは言い訳した。

「そうかー。これで姉ちゃんと間違われなくなって、良かったな」

ふかふかの巨乳に顔を埋めた。

ああー、そのポジションはぜひ替わってくださいー。

野郎三人は、思わず心の中で叫んだ。

殿の城には、トゲ男が居たのですぐ入れた。

何回か、殿に頼まれていた品物を届ける仕事もあったので、もう顔も憶えられている。

殿は、相変わらず天守閣でガラクタに囲まれて、カラオケに興じていた。

「殿、今日はお願いがあって参りました」

ジョン太が言うと、殿はひらひら手を振った。

「ああ、無理に時代劇調にしなくていいから」

久し振りに会った殿は、意外と人間臭くなっていた。

「何の用事だね」

マイクを持ったままなので、声が辺り中に響いている。

「おお、鯖丸くん。先月のカラオケ大会は、楽しかったなあ」

殿は、ジョン太の知らない事を言った。

「お前、何時の間にそんな。俺も呼べー」

カラオケ大好きなジョン太は、鯖丸の首を絞めた。

「ジョン太、法事で居なかったじゃん」

鯖丸は、ジョン太を必死で振り払った。このおぢちゃんは、全く。

「じいちゃんの法事って、やっぱニセ外人かよ」

「嫁の方のじいちゃんだ。うちのはじじいば揃ってぴんぴんしとるわ」

ジョン太は怒鳴った。

ジョン太の家族構成も、何だか謎だ。

「迫田とまー君と、トゲ男も来てたよな。あと、所長とマダちゃんも」

「楽しかったなあ」

その辺の意見は一致するらしく、トゲ男は言った。

「お前は行かなかったの」

ジョン太は、トリコにたずねた。

「カラオケ嫌い」

トリコは答えた。

うなずいたジョン太は、ふと、変な名前が混じっていたのに気が付いた。

「まー君って、あのまー君か」

「そうでーす」

すっかりノリが変わってしまったまー君が、第二マイクを握って登場した。

「お前、あんな不良と付き合うんじゃないやありません」

「えー、前から時々会ってたよ」

鯖丸は言った。

「こいつも、昔は悪かったらしいぞ」

まー君は言った。

「悪かったのは鰐丸で、こいつじゃないから。そうだよな」

鯖丸は、えへと笑って、あさっての方を向いてしまった。

「ジョン太、こんな境遇で全然グレない方が、どうかしてるよ」

「悪かったんだ…」

初耳だ。

「怒るな、次は呼んでやるから」

殿は言った。

いいかげん、マイク越しにしゃべるのは止めて欲しい。

「で：今日ここへ来た用件を聞こうか」

「すいません。やかましいから、マイク離して」

ジョン太は言った。

ジョン太とトリコと鯖丸は、殿の前に座って、事情を説明していた。

背後では、トゲ男とまー君と由樹が、アニカラを絶唱している。

とても、真剣に話し合う雰囲気ではない。

「そうか、外側で魔法を：」

殿はうなずいた。

「心当たりはある」

「あるんだ」

三人は、聞き耳を立てたが、外野がうるさい。

「吾輩は、ずっと、互いの世界を、境界を越えて行き来する方法を
思案していた」

殿は言った。

「お前達の言い方では、そうだな、研究していた」

「殿は、向こうの科学者なんだ」

鯖丸は聞いた。

「その言い方は、正確ではないが、近い」

殿はうなずいた。

「君も、その様な方向を志していると聞いたが」

「細かい所は違うけど、大体そんな感じです」

鯖丸は答えた。

殿は、笑ってうなずいた。

「吾輩の：お前達の言い方で研究は、一通り完成したが、欠陥があった」

よくある話だ。

「まず、お前達の世界に出て行く為には、こちらの世界に住む思考能力の高い生体が必要だ。生体内に、我々の世界の法則を内包させ、外界へ持ち出す」

「当てはまるのは、人間か」

ジョン太はたずねた。

「その通り」

殿は答えた。

「ただ、我々と人間はかけ離れた物だ。融合は出来ても、長い時間は活動を維持出来ない」

「殿の言う、長い時間は、俺らのとは違うよね」

鯖丸は聞いた。

「左様、吾輩はお前達の時間軸で二千年程、この形態で活動している。それに比べれば一瞬だが、お前達の基準では、少し長いかも知れない」

「実際、どれくらい？」

「その生体が持っている、余命の半分くらい。お前達の平均寿命は、確か百五十年くらいだったな」

「そんなに長くないよ。毎年伸びてるけど、百二十年くらいだ」

「大して変わらん」

殿は言った。

人間にとつては、けっこうな違いなのだが。

「その間外側で活動する事は出来るが、融合した人間は死ぬ」

「どういう話か、だんだん分かってきた。」

「むごい話だが、有り体に言おう」

殿は、トリコの方を向いた。

「お前の配偶者は、我々の世界に来た時、死にかけていた。我が弟子は、それと融合して回復させたが、耐用年数が尽きかけている」

「じゃあ、あれは」

「記憶も肉体も引き継いでいるが、あれは吾輩の弟子だ」

殿は言った。

「我々の世界に戻れば、生き続けられるが、ひどい罰を受けるだろう。戻らない為には、新しい体が必要だ」

「そんな事…」

トリコは、両手を握りしめた。

鯖丸は、背後で無邪気にアニソンを歌っている子供を振り返った。
「遺伝的に近い方が、乗り換えやすいんだね」

ひどい事をさらっと言った。

「その通り。余命も長いし、あの幼体は最善だ。生きている間に繁殖すれば、次々体を乗り換えて行ける」

「貴様、よくもそんな事を」

トリコは、殿の胸元を掴んだ。

「最悪なのは、その事ではない。お前の配偶者は、なぜ危険を冒してまで我々の世界に来た？」

トリコは止まった。

「そんな人間が増えたら…」

世界が壊れるとハンニバルは言った。

向こう側の法則を引きずって、こちらに出て来る物が増えれば、二つの世界の境界は、どんどんあいまいになって行く。

その先が融合か消滅か、誰にも分からないが、今あるこの世界は終わるだろう。

だから、向こうに居る、話の分かる力のある物に、協力してもらわなければ、この事態は止められない。

「お前が…」

「そう、吾輩が、ハンニバルの要請を受けた」

殿は答えた。

「お前達の言い方で、自分のケツを拭く為に、老体に鞭打ってこちら側に出て来たのだ」

カラオケ大会から飲み会になってしまったので、酒に弱いジョン太は、早々に抜け出した。

大体、殿は人間ではない生き物かどうか分からないのに、一緒に酔っぱらっている。

どういう構造になっているんだ。

反対に、いくら飲んでも全然酔わない鯖丸は、やけになって一人で歌い続けていた。

無駄に音域が広いので、何でも歌えるが、残念ながら上手いとは言えない。

ぐだぐだな宴会だ。

廊下に出て夜風に当たっていたジョン太は、トリコが襖を開けて出て来るのを見た。

眠そうにしていた由樹を、寝かして来たらしい。

ジョン太と目が合うと、ちょっと片手を上げて挨拶して、広間に戻りかけた。

「あ、ちよつと待ってくれ」

ジョン太は呼び止めた。トリコは立ち止まった。

「頼みがあるんだけど」

「めずらしいな。何だ」

トリコは聞いた。

「いや…あの」

言いにくい話なのか、少し口淀んだが、言った。

「これからリンク張らないか」

「いいよ」

トリコは即答した。

「お前から言い出さなかったら、鯖丸と二人がかりで無理矢理やりちゃうつもりだったからな」

それは最悪の事態だ。絶対避けたい。

「急にどうしたんだ。今まで逃げ回ってたくせに」

トリコはたずねた。

ジョン太は黙り込んでしまった。

「まあいいや。こっち来な」

適当な空き部屋の襖を開けた。

殿の城には、使用目的の分からない部屋が無数にある。

作った本人も、城というイメージだけでたくさん部屋を配置したが、特に理由はないのかも知れない。

部屋の中は、どれも同じ様な仕様で、襖の反対側は障子戸になっているが、開けると単に岩肌が見えるだけで、何の意味もない飾りだと分かる。

部屋の隅には、座布団と座椅子、それに座卓が置いてあって、殿は、城と旅館を勘違いしているのが分かった。

座卓の上に麻雀セットが積んである所を見ると、以前誰かが使った部屋らしい。

押し入れには、布団が山積みに入っていた。どう見ても十組くらいある。

「何考えてるんだろうねえ、殿も。この城、修学旅行の団体が二校分くらい泊まれるぞ」

布団を引っ張り出しながら、トリコは言った。

「ほら、ちゃっちゃと敷いて。一組でいいか？ やっぱ二枚敷いく？」

「軽いなあ、お前」

ジョン太は、呆れた感じで言った。

「お前が深く考え過ぎだ。リンク張るだけだろ」

トリコは、ジョン太に布団を渡した。

ジョン太は、ええと：北があっちで：とか言いながら、床の間の方に頭を向けて敷き始めた。

何、北枕とか気にしてんだ、こいつ。

「一応枕も要るか」

トリコは、枕を二個放って寄越した。

広さと言い、内装といい、布団を敷き詰めて枕投げをしたくなる部屋だ。

ジョン太は、枕を受け取ったが、両手に持ったまま、その場に

ばらく立っていた。

それから畳の上に座って、頭を下げた。

「頼む、魔法使える様にしてくれ」

魔法が使えなくても、ジョン太は充分強い。

今までも、それでやって来れたはずだ。

「突然だな。お前は、魔法使いにはなりたくないんだと思ってた」
トリコは、ジョン太の向かいに座った。

「殿の弟子は、殿より強いんだぞ。今のままじゃ、何かあっても誰も守れない」

「それは、私の事情で、お前には関係ない事だと思うが」
今だって、本当は仕事の範疇を越えている。これ以上迷惑をかける訳には…。

「関係あるだろう、パートナーなんだから」

おっさんのくせに、何青臭い事を…と、トリコは思った。

マジでいい奴だな、こいつ。

「これ、照明落とせないのか」

どこに光源があるか分からないのに、昼間の様に明るい部屋の中で、服を脱ぎながらジョン太は言った。

「出来るけど…」

服を脱いだらどうなっているのか、一応見てみたいので、トリコはそこで言葉を止めた。

「お前は暗くても物が見えるじゃないか。不公平だ」
「そうだな」

納得している様子が気の毒なので、若干照明を暗くする事にした。
天井のスイッチを指差して回すと、部屋の中が薄暗くなった。

魔力の低いジョン太には、スイッチが見えていない。

脱いだ服を、すぐに着られる様に側に置いた。

枕元に置いたガンベルトは、グリップをこちら側に向けて、何時でも抜ける様になっている。

リンクを張っている間、普通にセックスしている時より無防備になってしまう事が、充分わかっていている玄人の対応だ。

対応は玄人だが、体の方は、全身毛皮で、筋肉質で強そうと云う以外は、割合普通の人間だった。

一応段取りとしてこちらを触って来たが、可もなく不可もない感じで、本気で普通だ。

こっちから色々仕掛けた方がいいのかな…と、考えていたら、変な顔をしていたのが分かったらしく、言った。

「ええとね、割と勘違いされるから言っとくけど、俺、あんまり遊んでないから」

「そうなんだ」

ずっと付き合うならともかく、こういうタイプのハイブリットに興味のある女は多いから、色々やっていると思い込んでいた。

「リンク張る以外で寝た女はこんだけなんで…」

指を三本立てて見せた。

「ああ、三十人だったら、少ない方だな」

トリコはうなずいた。

「いや…それ、単位違う」

ジョン太は言った。

「三百人なら少なくないぞ。私もそんなもんだ」

「お前の世界観はどうなってんだ」

ジョン太は頭を抱えた。三百人って、それ、何の修行だ。

「ええ、三人。それは何だ…何かの修行なんだ」

「修行はお前だー」

こんな時もツツコミは忘れない。

「普通なんだよ、俺は」

「そうか？」

普通の接点が互いにずれてしまっているが、リンク張るのには支障はない。

まあ、普通という事は、特に下手という訳でもない。

この程度の年齢で、嫁も子供も居る様な男だったら、こんな感じかなと思う。

ハイブリットの耐用年数は、普通の人間より長いので、肉体的にはもう少し若い気がする。

現在普及しているアンチエイジング治療も、元々ハイブリットの製造技術から派生した物だ。

全然普通だが、素肌に毛皮が触れる感触は、ちょっと普通じゃないくて気持ちいい。

繋げるまでは、本当に楽しかった。

以前の鯖丸の様な、リンクに関して全くの素人とは違って、やり方も知っているし、リンクを張るまでは行かなくても、経験もある。繋がった所で、トリコは迷子になった。

ジョン太は、吹雪の中に立っていた。

鯖丸から聞いていたので、これがトリコのトラウマ映像だと、すぐに分かった。

こういうプライベートな事を、べらべら喋ってしまうのも、どうかと思うが、戸惑わなくて助かった。

たぶん、気温はマイナス十度くらい。

自分的には、まだ、服を着ていなくても生存には全然支障がない温度だ。

赤い点が見えたので、雪をかき分けて近付いた。

ラッセルが必要だとは、聞いていなかった。

仮部員でもやはりワンゲル。ラッセルくらいは出来るらしい。

新雪を踏み固めながら、赤い点に近付いた。

あっという間だった。

赤いコートを着たトリコが、こちらを見上げた。

「悪いけど…」

ジョン太は言った。

「俺の方は、接続に時間がかかると思うから、少し待ってくれ」

トラウマ映像の、トリコの隣に座った。
赤いコートを着た少女は、同じように座って、膝を抱えた。

細かいトラウマが多過ぎ…と、トリコは思った。

どこから手を付けていいか、分からない。

微妙な道筋が、何本か付いていた。

一番明白な場所を選んで進んだ。

以前、ジョン太とリンクしようとして、失敗した人間が付けた痕跡だ。

学校の廊下の様な場所を、子供が走っていた。

子供には、絶対出せないスピードだ。

走っている子供は、普通の人間ではなかった。

原型に近いハイブリット…というか、むくむくでふわふわの、ぬいぐるみの様に愛らしい子供だ。

うわ、これジョン太か…これのどこをどういじくり回したら、今のふてぶてしいおっさんになるんだ。

子供は、何かから逃げていた。

追っているのは同級生らしい子供達だった。

いじめられてるのか？こんなに可愛いのに。

子供のジョン太が、振り返って何か言った。

追って来る子供達も、何かを言い返した。

トリコは愕然とした。

こいつ、思考言語が日本語じゃない。

良く考えれば当たり前なのだが、法事に行ったり、北枕を気にしたりする男が、日本人じゃない事を意識するのは難しい。

外界で高等教育を受けていないトリコは、英語が全然分からなかった。

これ、普通の意味とは別で、リンク張るのむつかしいかも。

以前来た人間が付けた痕跡を辿った。

おそらく高校生くらいのジョン太が、怖そうな黒人の男に、シヨ

ットガンを持って追い回される映像が過ぎった。

やはり、何を言っているのか分からない。

道筋は、色々迷って、ここで途切れていた。

残った一本だけが、もっと奥に進んでいる。

たぶん、この痕跡を付けたのは所長だな…と、思った。

変な場所にたどり着いた。

建物の中に見えたが、良く見ると明らかに違う。

木星の軌道上にあるコロニーだという知識は、トリコには無かった。

ただ、どこか宇宙にある人工的な空間だという認識はあった。

廊下にぼんやりと佇んでいるのは、ジョン太らしき物だった。

断言出来なかったのは、変わり果てた姿になっていたからだ。

痩せ細って、毛皮がぼろぼろになっている。

一体、何をどうやったら、頑丈なハイブリットがこんな事になってしまうのか、謎だった。

ジョン太の足元に、子供が一人倒れている。

鼻と口から血を流しているが、それ以外は綺麗な状態だった。

ジョン太は、明らかに普通ではなかった。

ぼんやりと、薄く笑いながら宙を見上げている。

それから急に、両の目に正気が戻った。

足元に倒れている子供を見て、体が震え始めた。

悲鳴を上げて逃げ出した。

三方から、取り囲んでいた狙撃兵が、銃弾を撃ち込んだ。

通常弾ではなく、麻酔弾だ。

何発も撃ち込まれて、やっと倒れた。

倒れてはいるが、まだ意識がある。

ふいに、倒れたジョン太の周囲に、何かが伸び上がった。

鉄で出来た頑丈な檻が、周りを取り囲み、結合した。

檻の中で起き上がったジョン太は、もう、人でもなければ、ハイブリットにも見えなかった。

ただの醜い獣だった。

檻の中央にうずくまり、そのまま動かなくなった。

檻の周囲は、いつの間にか景色が変わっていた。

鬱蒼とした森の中で、檻だけが、そのまま同じ場所にあった。

檻の中に、先刻見た獣が座っている。

背中を丸め、体を縮めて、何も見ない様に俯いたまま、微動だにしない。

もしかして、ここから引っぱり出さなきゃいけないのか、これ。

正方形の鉄格子で出来た檻は、格子の一本一本が、自分の腕よりも太い。

「おおい、出て来い」

普通に、声をかけてみた。

何の反応もない。

「お前、巨乳好きだろ。ほらほら」

服をはだけて、会心の色っぽいポーズを取ったが、微妙に肩が動いたか動かないかというくらいの反応しか無かった。

普段のジョン太なら「止めんか、この汚れ芸人がー」とか、的確なツツコミを入れつつ、胸の谷間だけはきっちり鑑賞するはずなのだが。

良く見ると獣の体は、檻の中に居るのに、細いが強そうな紐でぎりぎり巻かれて、その先は鋼鉄の床に打ち付けられていた。

それは、色々辛い目に遭ったのかも知れないが、ここまで自分を追い込んでしまう理由が分からない。

「何なんだよお前は。大体トラウマ映像も逃げてる場面ばかりじゃないか。いいかげんにして出て来い、このへたれが」

鉄格子を蹴り飛ばして叫ぶと、獣は少し顔を上げた。

こちらに向かって、小さな声で何か言った。

ダメだ。やっぱり何を言っているか分からない。

「くそっ、とにかく触るだけでも」

檻はあまり大きくない。

思い切り肩まで腕を突っ込めば、指先くらいは獣に触れるかも知れない。

鉄格子の間に差し込もうとした腕が、弾かれた。

格子は見る間に太くなり、隙間を塞いだ。

もう、檻ではなくスリットの入った鉄の箱だ。

「お前は引きこもりかー!!」

トリコは一步下がった。

こうなったらそこからたたき出してやる。

腕から滑り出た魔獣が、檻に襲いかかった。

鉄の檻くらいなら壊せる自信はあったが、余程頑丈なのか、ここがトラウマ映像の中で、現実魔法を使っている訳ではないせいか、びくもしない。

檻がダメなら中身だ。

水の魔獣なので、形はどうにでも変えられる。

細いスリットの間から鉄の箱に滑り込み、獣を飲み込んだ。

獣は、反撃もしなければ、檻を出て逃げる事もせず、無抵抗で食われるままになっていた。

あの、脊髓反射で銃を乱射するジョン太とは思えない。

魔獣の腹の中で、獣が少し身じろぎした。

やっと、反撃するか脱出して来ると思ったが、単に食われて苦しんでいるだけだ。

自分が、ジョン太を壊しかけている事に気が付いたトリコは、急いで魔獣を引かせた。

魔獣が離れる時、今まで分からなかった意識の断片が流れ込んで来た。

逃げなきゃダメなんだ。向かって行ったら、みんな殺してしまう。

「そうだったんだ」

魔獣を体に収納して、トリコは鉄の箱の隙間に指をねじ込んだ。

「いいだろ、そんな奴ら踏みつけて行けば。出て来い、リンク張る

って言い出したの、お前だぞ」

檻の中の獣は、顔を上げた。

ほんの少しだけ、現実のジョン太に近い姿に変わっている。
かすかに、笑った様に見えた。

「俺には無理だ」

初めて、こちらに分かる言葉をしゃべった。

それから、意識がぐいと引っ張られ、突然接続が切れた。

ジョン太は、トリコの隣で俯せに倒れていた。

うわ、壊しちゃったか、これ。

「おおい、生きてるかー」

背中に手をやって、軽く揺すった。

「何とか」

弱々しい声で、返事があった。

「良かった。けっこう乱暴な事したからなあ」

実際には、乱暴というより、ほぼ接続事故だ。

これだけ魔力に差があると、低い方に相当な負荷がかかる。

「大丈夫か？こっち向け。これ、何本に見える」

指を二本立てて、見せようとしたが、ジョン太はこちらに背を向けてしまった。

「どうしても、あそこから出られない」

低い声で言った。

「最低だ、俺」

背中が小刻みに震えている。

何だ、泣いてるだけかよ。

「お前なあ、いっぺんリンクに失敗したくらいで、泣くなよ」

トリコは、ぽんぽんと背中を叩いて、軽く言った。

一回や二回なら、こんなに悩む訳ないだろうが。

ランクSの魔女に出来ないんだったら、たぶんもう、誰にも無理だ。

「次は絶対いけるって」

次って何だ、次って。

「お前より魔力の高い奴なんか居ないだろ。どうやって…」

「居るじゃないか、近所に約一名」

トリコは断言した。

「同じランクSでも、あいつの方がちよっと魔力高いからな」

ええと…あいつって、あのバカの事ですか！。

ジョン太はがばと飛び起きた。

「ええっ」

「こうなったらもう、意地でもお前を魔法使いにしてやる。覚悟しとけよ」

トリコは、起き上がって服を着始めた。

「予定通り二人がかりで手加減無しだ。お前、前から後ろから、もう大変な事になるぞ」

「あのー」

ジョン太のダメっぷりが、姐さんの闘争心に火を付けてしまった。

「ふふふ、気の毒にね。あんなもんケツに突っ込まれたらお前、内臓が口から出ちゃうかもよ」

「お前は平気なのかよ。ちっちゃい状態であんな悪魔超人とやりまくって」

シヨックの余り、ツツコミにキレがない。

ああ、たぶんこの女、悪魔超人二号だ。

「とにかく、今日はもう寝る。おやすみ」

廊下に出たトリコは、挨拶してからぴしゃりと襖を閉めた。

ジョン太は、布団の上に座り込んで、深くため息をついた。

なんだかんだで、トリコが笑い事にしてくれたのは助かった。

今後の展望は、物凄く不安だが。

「待て、これ、鯖丸的にはOKな企画なのか？」

姐さんが暴走しているだけにも見えるが、最近のあいつは、ちょっと分からない。

いや：それくらいの覚悟を決めないと、本気で俺、ダメかも。

「くそ、もう何でもやってやらあ」

服を着て広間に戻ったジョン太は、殿がすすめて来た酒を一気に一口だけ飲んで、鯖丸からマイクを奪い取り『踊るダメ人間』をフルコーラス絶叫した後、その場にぶっ倒れて寝た。

翌朝、ジョン太は派手な物音で目を覚ました。

鯖丸とトゲ男が、向かい合って竹刀を構えている。

ケンカではない様子なので、起き上がって目をこすり、ぼんやり見物した。

二人とも魔法整形しているのは、防具の代わりなのだろうが、それ意外には魔法は使っていない様子だった。

ああ、単なる朝練か、若者は元気だなあ。

トゲ男が、以前に比べて、物凄く強くなっているのが分かった。

もう、ほとんど互角の勝負だ。

真剣を振り回して戦っている時と違って、鯖丸が本気で楽しそうだ。

お互い二本ずつ取った所で、二人ともジョン太が起きたのに気が付いた。

「あ、お早うジョン太」

「おはようございます」

二人は同時に挨拶した。

「んー、おはよう」

誰かがかけてくれた毛布を脇へやって、広間を見渡した。

部屋の隅に、マイクを握りしめた殿が、前のめりに倒れている。

「あれ、そのままでもいいのか」

不安になって聞いた。

「いいんですよ。殿は本体に戻って寝てますから」

トゲ男は言った。

「殿も寝るんだ…」

ぼんやりと座ってつぶやいている、テンションの低いジョン太を、鯖丸は少し心配そうに見た。

「昨夜変だったけど、何かあった？」

「ええと…」

ちよっと迷ってから白状した。

「トリコとリンク張ろうとして、失敗した」

「そうなんだ」

それ以上は聞かないつもりらしく、竹刀を構えてもう一度トゲ男と向かい合った。

ジョン太は、頭を掻きながらぼんやり二人を見て言った。

「鯖丸、お前な…」

「何？」

「上段から撃ち込む時だけ、一拍タメが入る。斬り合いじゃねえんだから、一撃を重くしなくても、当てりゃいいだろ。お前の取り柄はスピードなんだから」

「ええ、そうなんだ。気が付かなかった」

「くそ、永遠に気が付かないで欲しかったのに。唯一のスキが…」

「トゲ男は、無駄な動きが多い。こんな早いだけの奴なら、防御の上からでも撃ち込めるくらい力はあるんだから、もっと丁寧に動け」
「どっちの味方だ、ジョン太」

「別にどっちでも…」

テンション低いくせに、何で見る所はしっかり見てるんだ、このおっちゃんは。

「一旦外界に戻るから、準備してくれ」

言ってから、立ち上がって広間を出て行った。

「あの何者？」

トゲ男はたずねた。

由樹と一緒に、しばらく城に居ると言うトリコを残して、ジョン太と鯖丸は魔界を出た。

境界を抜けてすぐに、ジョン太は会社に連絡を入れた。
電話には所長が出た。

「ああ、別に何事も無かった。無事だよ」
所長は答えた。

「トリコと：何だっけあの子の名前」

「由樹」

「それそれ。行き先を聞かされただけだ」

「何て答えたんだ」

ジョン太は聞いた。

めずらしく、所長に対してタメ口になっている。

「トリコの実家に行ったって」

所長は答えた。

「ええ？実家って、それ何処？」

ジョン太は聞き返した。

「知らん」

所長は相変わらず大雑把だった。

「しかし、納得して帰った」

「おい、トリコの実家って、何処だ」

ジョン太は、鯖丸に聞いた。

「詳しく知らないけど、東北の方」

鯖丸は答えた。

確か、小さな穴があった。

年々規模が縮小しているので、今はもう、魔界とは呼べなくなっている。

こういう、変動する魔界は意外と多い。

トラウマ映像の、吹雪の風景を思い出した。

殿の弟子は、体と一緒に記憶も引き継いでいると言っていた。

ハンニバルは当然、トリコの実家くらい知っているだろう。

ちゃんと騙されてくれているかどうか、その辺は疑わしかったが。

「それと、仕事が入ってるから、早く戻れ」

所長は言って、電話を切った。

「仕事だって」

ジョン太は、鯖丸を振り返った。

「こんな時に……」

鯖丸はぶつぶつ言った。

トゲ男がこちらに来るのが見えた。

歩きだと時間が掛かるのか、ママチャリを転がしている。物凄く似合わない。

境界の手前で自転車を降りたトゲ男は、歩きで境界を越えて来た。境界がぐにやりと歪むのを見て、ジョン太は目をこすった。

「あれ……」

今まで、境界が見えた事は無かった。

リンクは失敗したが、ある程度は魔力が上がっている。

境界を出たトゲ男は、秋本に戻って原付の方に歩き出した。

「おおい、今から帰りか」

ジョン太は声をかけた。

「ええ、これから市内まで」

「お前、広大じゃん。何で市内に帰るの」

鯖丸は不思議そうに聞いた。

ちよっと待てえ。このバカ、しまなみ海道を渡らせて、秋本を呼びつけるつもりだったのか。

「鬼畜だな、お前」

ジョン太はぼやいた。

「うーん、何でこんなに早く来れたんだろうとは思った」

鯖丸は全く悪びれなかった。

「実家はこっちなんですよ」

秋本は言った。

「向こうに居たら、さすがに来るかあ、このバカ」

鯖丸に怒鳴った。

「ごめんね、バカで」

ジョン太が謝った。

とはいえ、広島ナンバーの原付に乗っていると言う事は、これを実家に帰って来たという事だ。

若者って、無謀でいいなあ……何時間ぐらいかかったんだろう。

「何か、悪かったね、面倒かけて。送ってくから、乗りな」

車を指差すと、秋本は首を横に振った。

「バイク置いてけないし」

「積みばいいよ、ほら」

自転車を扱う様に、軽々と原付を持ち上げて、キャリアに括り付けてしまった。

「うわー、何だこのおっさん」

秋本は叫んだ。

「ジョン太は大体、いつもこうだよ」

鯖丸は、もう慣れきっていた。

気の毒なのでメシはおごるからと言って、いつもの定食屋に入っ
た。

鯖丸の顔を見たパートのおばちゃんが「ごはん炊いて、早く」と
言っているのが聞こえた。

最近、以前ほど無茶な食いはしなくなったが、体育会系二人が
かりなので、テーブルの上が大変な事になっている。

トリコが厳しく指導したせいで、栄養のバランスはちゃんと考え
る様になったらしく、おかずのチョイスが以前と違っていた。

納豆とか、野菜の煮付けとか、今まで見なかった面子が混じって
いる。

ジョン太は、ガタイの割に小食なので、若いもん二人が食いまく
っている横で、簡素な朝定食をもそもそ食べていた。

ハイブリットは燃費がいいのだ。

「秋本、何でこんな時期に実家に帰ってるんだよ」

鯖丸は聞いた。

「冬休みだから帰るだろ」

秋本は答えた。

「俺だって、色々あるんだよ。家庭の事情とか」

「まあいいけど。その間に俺の方がさくっと強くなってるから」

鯖丸は、メシを食いながら言った。

「来年の春で、終わりだし」

「何だよ、それ」

秋本も、がしがしメシを食いながらたずねた。

「来年は学業に専念する。本当は春の大会も出ないつもりだったけど、勝ち逃げしたいからな」

サンマを、むしらないで丸食いしながら、鯖丸は言った。

秋本は、ショックを受けた様子だった。

「ウソだろ。俺は、お前をたたきのめすのを目標に……」

「そんなくだらん目標は忘れろ。お前、もっと上に行けるよ」

鯖丸は言った。

「どっちにしろ、俺、お前より一コ年上だぞ。学生の試合には、最後まで付き合えないだろ」

「ええーっ」

秋本とジョン太は、同時に驚いた。

「いや、ジョン太はいいけど、秋本驚くな」

鯖丸は言った。

「別に、年下のくせにタメ口利きやがって……とか、思ってないし」
絶対思ってる、こいつ。

「まあ、部活は止めても剣道は続けるよ。俺を負かしたかったら、お前も続けて一般の大会に出て来いや」

メシを食い続けながら、武藤玲司は言った。

「二度と見られない面にしてやるから」

「それは、こっちのセリフだ」

秋本は言った。

コンビニで買い物して、市内に戻った。

トリコに止められているせいか、鯖丸はまるまるバナナは買わないで、牛乳を買っていた。

秋本は、弟と妹にお土産と言って、自費でポテチを買っていた。コンソメ味だ。

国道を走り続けながら、牛乳を飲んでいた鯖丸は、突然車を止めた。

「やばい、腹痛い」

本気でやばそうだ。

「冷たい牛乳一気に飲んだら、腹壊すんだった。忘れてた」

「忘れるなよ」

ジョン太は、運転を代わる事にした。

「何で出汗じゃこ食わされてたか、本気で忘れてた。牛乳ダメなんだ俺」

「バカだろ、お前」

ジョン太は言った。

知ってたけど。

「ふはははは、気の毒にな。お前のライバルはバカ」

鯖丸は、偉そうに笑った。

そんな事言ってる場合か。ていうか、自分で言うな。

「次のコンビニまで、あと二キロ」

秋本は、冷静に言った。

「ライバルがバカでも、俺、泣かない」

言っただけど、微妙に嫌そうだった。

西口のゲートは、西谷魔法商会の関係者らしき三人が出て行っから、しばらく人通りが無かった。

平日の昼間としては、珍しい事ではない。

観光客の出入りする時間とも少し外れているし、魔界の住人が、外界に買い物や遊びで出掛けるにも、中途半端な時間帯だ。

ゲート近くまで運行している、本数の少ないバスも、到着まで随分時間があつた。

国道からゲートまでの道を、徒歩の男がやって来た。多少不審だったが、魔界に出入りし居てる様な奴は、大体不審な輩が多い。

こうして、正面からゲートを通ろうとしているから、少なくとも不法侵入のプレイヤーではないだろう。

最近、きちんとしたパスポートを取得して魔界に入った後で、無茶な事をする合法プレイヤーも居るが、それにしては年齢が高い。こちらでシノギをしているヤクザにも見えないし：と思案していると、パスポートを提示された。

政府公認魔導士しか持っていない、どんな場合にどんな場所でもゲートを通過出来るフリーパスだ。

「通っていいかな」

男は、人なつこい顔でにこりと笑った。
政府公認魔導士なら、多少不審な行動をしていても不思議ではない。

あの連中は、おかしい奴らが多い。むしろ、この男は好感が持てる方だ。

「どうぞ」

ゲートの係員は、バーを上げるレバーを引いた。

「お仕事、ご苦勞様です」

「ありがとう」

男は、片手を上げて挨拶し、ゲートの向こうに歩み去った。

所長は、二人が戻るのを待っていた。

本当は、トリコも一緒だと良かったんだが：と言った。

「本社からの応援要請だ。ハンニバルの確保を依頼されて、失敗したらしい」

そういう仕事なら、トリコも大急ぎで戻って来るはずだ。

「何で」

鯖丸は聞いた。

「普通、政府公認魔導士の方でやる仕事じゃないですか」

「はつきりとは言わなかったが、たぶん政府の奴らも返り討ちに遭ったんだろうな。」

お前らみたいにな、外界でも強い魔法使いなんて、あんまり居ないんだよ」

ジョン太と一緒にされる程は強くないけど…と、鯖丸はつぶやいた。

「本社でも怪我人が出た。断るなよ。お前が怪我した時、応援に来てもらってるんだから」

「はい」

たった一年前の話だ。

もつと昔の事のように思える。

「じゃあ俺、もう一回戻って、トリコ連れて来ますよ」

ジョン太は、上着を手を取った。

鯖丸のケータイが鳴った。

普段、仕事中に私用の電話に出たりする奴ではないのだが、着信画面を見て、顔色を変えて話しかけた。

「ええっ、どうやって電話してるの」

「トリコか」

ジョン太はたずねた。

「違う。殿だ」

「うそ。どうやって…」

何で魔界から電話して来れるんだ。

鯖丸は、耳元にケータイを当てたまま、外部スピーカー検索モードに入れた。

程なく、一番近くで起動していた所長のパソコンから、音声が出た。

「すまない、由樹が連れて行かれた」

外界で聞く殿の声は、奇妙な違和感があった。

「トリコが我が弟子を追っている。早く助けに行ってくれ。どんな無茶をするか、分からない」

「分かった。殿も無茶しないで早く戻って。そんな事したら、死ぬかも」

「境界の外に出てるのか？」

ジョン太は、鯖丸にたずねた。

「体半分出てるって」

相当危険な状態だ。

「かまわん。だいぶ痛んだから、この体はここで捨てる」

殿はあっさり言った。

そう言えば、本体は別の場所にあると言っていた。

「いいか、良く聞いてくれ。体の乗り換えは、こちらの世界では出来ない。この場所から戻れる我々の世界では、吾輩の味方が守りを固めている。

ここから一番近い別の穴に行くはずだ」

「関西だな」

ジョン太は自分のケータイを出してトリコにメールを打ち始めた。ハンニバルが六年振りに現れたのも、関西の穴だった。

「うん、すぐにトリコと合流するよ。ごめん、迷惑かけて」

「吾輩の問題でもある。気にするな」

そこで少しの間声が途切れた。

「この体では、発声が困難になって来た。もう切る。次は新しい体で会おう。さらば」

電話は切れた。

魔界の境界上に、何かがばさりと崩れ落ちた。

境界の外側にあった部分は、あっという間に灰の様になって、四散した。

内側に残った残骸の中から、何か形の定まらない物が飛び出した。

しばらく宙を舞ったそれは、かすかに発光しながら城に向かって飛び去った。

トリコからの返信が中々来ないので、業を煮やしたジョン太は電話をかけ始めた。

「待って、ハンニバルの後を付けてたりしたら、急にケータイ鳴ったらヤバイんじゃない」

鯖丸は止めた。

「知るか」

おっちゃん、ご機嫌が悪そうだ。

「あいつは大体、いつも一人で後先考えずに突っ走るんだ。チームを組んでる意味、分かってんのか」

バイトの鯖丸と違って、常勤のトリコとジョン太は、二人だけで組む事も多い。

天然ボケとはいえ、一応姐さんが暴走し始めたなら止めるポジションの鯖丸が居ないと、一人でがんがん突っ込みがちだと、ジョン太は普段からこぼしていた。

「仕方ないよ。単独でやってた期間が長いんだし」

この会社に来るまでは、政府公認魔導士として、単独の潜入捜査をしていたトリコと、単独の作戦行動はまずあり得ない元軍人のジョン太では、行動パターンが違いすぎる。

「それにきつと、ハンニバルの事で、他人を巻き込みたくないんだ」
鯖丸も、ちよつとご機嫌悪くなって来た。

「くそっ、他人じゃないだろ。ていうか、あのおっさん、何で帰って来たんだよ。」

このままじゃ、親子三人で仲良く暮らして行く予定が台無しだ」
「お前も、何もかも間違ってるぞ」

ジョン太は一応止めてから、くそ、出ねえと言ってケータイを切った。

次の瞬間、ジョン太のケータイが鳴った。

どこからそんな物搜して来たのか知らないが、レトロな音楽と共にストリップ劇場の呼び込み音声が始めた。

おっちゃん、トリコ専用の着メロを『うぐいすだにミュージックホール』に設定していらっしゃる。

本人が聞いたら、きつと殴られるだろう。

所長と鯖丸は、顔を見合わせた。

自分の着メロが心配になったのだ。

「遅い」

電話を取るなり、ジョン太は怒鳴った。

『黙れ。今、JRに乗ってる。本当はケータイ禁止だぞ』

昔の様に、電子機器やペースメーカーへの干渉は無くなったが、マナー違反なのは今も同じだ。

「ハンニバルを追ってるなら、無茶はするな。行き先を言え、すぐに合流する」

ジョン太のケータイは、古い機種なので、スピーカーの外部検索モードが付いていない。

鯖丸は、ジョン太のケータイに顔を近づけた。

「ハンニバル確保の応援要請が入った。仕事になったんだ。遠慮しないで何でも言って」

『このルートなら、瀬戸大橋経由で新幹線に乗り換えて大阪だ』

トリコは言うってから、急に訂正した。

『いや：途中で降りる。東予港からフェリーだ』

鉄道と違って、時間はかかるが途中下車の出来ない密室状態の移動だ。

飛行機よりもセキュリティチェックが格段に甘い上に、海上に相手を放り出してしまえば、証拠も残りにくい。

追っ手を返り討ちにするには、最適な乗り物だ。

「オレンジフェリーだ。時刻表調べろ」

ジョン太は言った。

「分かった」

鯖丸が、ケータイのweb機能に接続する前に、所長が机の上にあったタウン誌を開いた。

「二時発大阪南港行きの便がある。車で行けば間に合うぞ」
アナログ強い。

「関西本社出張でいいですね」

ジョン太は、念を押した。

「いいぞ。お前らの装備は、こっちで配送手続きしておく。希望はあるか…あれ？」

所長は、変な顔をして装備品一覧を覗き込んだ。

「武藤君、君、バイトなのに独断で備品の発注してるね。何だこの変換プラグと延長ケーブル十メートルって」

「あのー、これ魔界でも使えるってトリコが言うから」

鯖丸は、自分の首筋に付いたインターフェイスを指差した。

「使ってみようかなって」

「うわ、安物。もっと抵抗の少ないいやつ注文しろよ、相談してから」

所長は言った。

「これで充分行けますよ。繋がればいいだけだから」
鯖丸は答えた。

「何に使うんだ。そんな十メートルのケーブル引きずって戦うつもりかよ。汎用人型決戦兵器か、お前は」

ジョン太が、めずらしくオタク系のツツコミを入れた。おっちゃん、思いの外守備範囲が広い。

「違うよ。有線接続すれば、魔界で作動しない機械が動かせるはずなんだ」

元政府公認魔導士からの情報リークとしては、かなりいい部類だった。

ゆっくり試している閑がないのは残念だ。

「車は古い方使え。あっちの港は駐車料金要らないから、置きっぱなしでいいぞ」

さすが田舎、土地が余っているので太っ腹だ。

「じゃあ、行って来ます」

二人は、挨拶して事務所を出た。

港までは、高速を使えばあっという間だったが、三十年前のジムニーで高速に乗る事については、鯖丸はかなり不安らしかった。

「爆発するんじゃないの、この車」

「する訳ねえだろ。車検も通ってるんだから」

文句を言う割に、アクセルを床まで踏み込んでエンジンをぶん回している鯖丸を横目で見て、ジョン太は言った。

ケータイで、予約センターにアクセスして、空席を調べている。予約しなくても余裕で乗れそうなので、乗船券は現地で買う事にしたらしかった。

「うちのゼミの倉田教授なら、これくらいの悪条件が揃えば、八割方爆発させるよ」

「その教授、ぼさぼさの白髪で、白衣着てて、眼鏡かけてるだろ」
「何で分かるの」

鯖丸は驚いた。

うわー、絶対その教授、マッド系だ。

港に着くまで時間が空いたので、ジョン太はみっちゃんにメールを入れ始めた。

急な出張で大阪に行くという内容の英文を、すごい速さで打っている。

「ジョン太、メールはいつも英語なんだ」

横目でちらりと見て、鯖丸は言った。

「日本語は、変換がめんどくせえ」

ジョン太は言った。

「トリコは英語分らないから、日本語でメールしてくれたよね」
鯖丸は、一応聞いた。

「え…？あいつ英文読めないのか」

道理で、いくらメールしても、返信しないで電話がかかって来る
と思った。

「読めないどころか、全然分からないから。外界の学校に行つてないし」

「えーと」

そんなんでよく、リンク張る直前まで持って行けたなあ…と思った。

絶対、何がどうなっているか、分からなかったはずだ。

「トリコって、お前より魔力高い？」

ジョン太は聞いた。

本人は、鯖丸の方が魔力が高いと言っていたが、思考言語が理解出来ないのに、トラウマ映像の最深部まで潜れる奴は、普通居ない。自分は特にややこしい事になっているのは、知っていた。

「どうだろう…。攻撃力だけなら俺の方が高いけど、全体ではどっちが上か、良く分からない」

別に、どうでもいいし、そんな事…と言った。

車は、インターを抜けて、一般道に入っていた。

「この先、どっち？」

鯖丸はたずねた。

「ああ、そこを右」

人間カーナビのジョン太は答えた。

海が近付いてきた。

程なく車は、どこら辺からが乗船客用の駐車場なのか判然としな
い、雑な感じの港内に到着した。

ハンニバルの居場所は、すぐ分かった。

待合室の上にある食堂で、由樹と二人で丼物を食っていた。

由樹が少し不安そうな顔をしている以外は、ごく普通の親子連れに見える。

こうして見ると、よく似た親子だ。

絶対に他人から不信感は抱かれないだろう。

「良かった。ちゃんとごはん食べてる」

別に、ひどい目には遭って居なさそうだ。

「あー、でもカツ丼とチョコパフェと一緒に食うって、どうなんだ。それに薄着過ぎ。食堂はあったかいからいいけど、海の上は寒いじゃないか。何考えてんだ、あのおっさん」

どっちが実の父親か分からない様な事を言い始めた鯖丸をシカトして、ジョン太はトリコを捜した。

トリコは、土産物売り場の端の方で、食堂の入り口を窺っていた。近付いたジョン太を見ると、遅いと文句を言った。

「早いよ。高速で来たからな」

ジョン太は、周囲を見回した。

他に、不審な者は居ない。

「とにかく、お前が無茶しないで待っていてくれて良かった」

ほっとした顔で、ジョン太は言った。

三人で組んでも、二人でも、リーダーはジョン太だった。

昨晚、けっこうかっこ悪い別れ方をしたし、ジョン太の性格だと引きずってない訳はないのに、その辺はきっちり切り替えが出来るのは、さすがだと思う。

安心して、力が抜けた。

「殿がひどくやられたらしいな。お前は大丈夫か」

「どうにか」

殿の事を思い出すと、体が震えだした。

「私を逃がしてくれた。死んだかも」

「大丈夫だ。電話して来たくらいだから」

ジョン太は、出張用の財布をトリコに渡した。

「お前、まだ乗船手続きはしてないよな」

「ああ、海斗から目を離す訳にはいかないから」

トリコは答えた。

「代わるから、三人分の乗船手続きして来い。別に、身分証の提示

はないから、全員偽名でな。あと、隠れやすいから二等寝台取って」
「私は、中学生くらいに見えるから、お前か鯖丸に手続きしてもらった方がいいんだが」

トリコは言った。

「別に大丈夫だと思うが：鯖丸に行かせよう。お前も行け」

食堂の入り口近くに隠れている鯖丸に手招きした。

「ハンニバルに顔が知られてないの、俺だけだしな」
ちよつとため息をついた。

「もっと目立たない容姿なら、良かったんだけどね」

三人の中で一番目立たない容姿の鯖丸は、車から持って来たグラサンをかけてずさんな変装をしているせいで、かえって目立つ様になつていた。

たぶん、平田が車に置きっぱなしにしていたやつだ。

「うわー、人相悪いなお前。どこのヤンキーかと思った」

冬用の上着が、フードにフェイクファーの付いたジャケットなので、余計悪そうに見える。

この上着、仕事用の装備としてはどうよ：と、いつも思っていたが、本人は暖かいので気に入っているらしい。

「外せ、可愛くない」

「ハンニバルに顔知られてるのに：」

鯖丸は文句を言ったが、照明が本数の少ない昔の蛍光灯だけの港内では、割と見えにくかったらしく、サングラスをポケットに突っ込んで、乗船名簿に記入を続けた。

見て来た様な嘘の名前を、何のためらいもなくすら書き込んでいる。

そう言えば、海斗に名前を聞かれた時も、全くためらわなかったな：と、思い出した。

魔界関係で、やばそうな相手には、本名は名乗るなど教えていたが、あんなにさっくり嘘をつく奴だとは思わなかった。

「あ、名字同じなんだ。どういう設定？夫婦とかでいいの」

「トリコの見ただ目で、そんな無理な設定にする訳ないじゃん。兄妹だよ」

鯖丸は、案外冷静だった。

「冬休みに、二人でUSJに遊びに行く、閑な兄と妹。ジョン太は、親戚のおじさん。」

法事で四国に帰省してた、大阪のおじさんに誘われて、向こうで泊めてもらう予定」

そこまで細かい設定を付ける必要あるのか。

「これから人前では、俺の事をお兄ちゃんと呼びなさい」

何寝言言ってたんだ、このくそアニキは…。

文句を言おうとしたら、ポケットのケータイが軽く振動した。

「ハンニバルが動き出した。一階に移動する」

ジョン太だった。

「後でまた連絡する。お前らは、見つからない様に隠れてろ」

隠れるって、乗船客用の待合室と食堂兼土産物屋しかない、ただっ広い港内のどこにどうやって…。

とりあえず、階段から丸見えのこの場所はまずい。

チケットを買って戻って来た鯖丸の手を引っ張って、トリコは建物の外へ出た。

乗船案内のアナウンスが流れるまで、二人は車の中でじっとしていた。

周囲からは丸見えだが、大型トラックが停まっているので、目隠しになっている。

助手席で不安げに黙り込んでしまったトリコの手を握って、鯖丸は周囲を見回した。

乗船時間が近いせいか、外に出ている乗客は居ない。

「大丈夫だから。由樹の事は、ジョン太が絶対何とかしてくれるよ。ハンニバルだって、中に入ってる殿の弟子を追い出せば、元通りに

なるかも知れない。

魔界に入ったら、俺があいつを叩き出してやるよ」

「そんな事しても…」

殿は、海斗は死にかけていたと言っていた。

殿の弟子を分離出来ても、元通りになる保証はない。

「あいつがどれくらい強いか、お前は見てないだろ。殿が負けたんだぞ」

「俺は負けないよ」

どこからそういう強気な発言が出て来るのか、謎だ。

「ハンニバルが元に戻ったら、きっちり勝負付けてやる。トリコを六年も放ったらかしにする様な奴には、絶対負けない」

握っていた手に、少し力が入った。

ああ、こいつ何か大事な話をしようとしているな…と思った。

何を言われるか、少し想像が付いた。

「俺、絶対勝つから。そしたら」

ケータイが鳴って、話は中断された。

『ハンニバルが船に乗った。お前らも早く来い』

ジョン太は、短く言って、電話を切った。

「行こう」

鯖丸は、車を降りた。

トリコはうなずいて、後に続いた。

話の続きは、結局聞けなかった。

五話 三匹(中編)

長距離フェリーに乗るのは、初めてだった。

乗船口は、潮風に晒された鉄の階段に、ペンキを重ね塗りした無骨な船だが、エントランスホールは意外に豪華で、ホテルのロビーの様な作りになっている。

クリスマスが近いせいか、ホールにはツリーが飾られていた。

ジョン太は、出張で何度か乗っていると思っていたが、いつも新幹線か飛行機なので、この航路のフェリーは初めて乗ると言った。

思っていたより、船内はずっと広い。

車を積んで移動するカーフェリーなので、船自体大きい。

平日だが、冬休みに入っているせいか、乗客も多かった。

一般席は、場所の指定はきちんとあるが、遮る物のない広い所に毛布と枕が置いてあるだけだ。

何処にも隠れる場所がない。

寝台を取っておいて正解だった。

ハンニバルは逆に、周囲の見通しがいい方が都合がいいのか、一般席に場所を確保して、ゆったり缶ビールとか飲んでいる。

由樹は、近くに居た同年代の子供と、ゲームのカードを交換していた。

意外と楽しそうだ。

しばらくすると、ハンニバルは由樹の手を引いて、通路を歩き出した。

「トイレに行くかも。先回りしろ」

ジョン太は、鯖丸に電話で指示した。

「分かった」

仕事で魔界に入る時は、全く使えないので忘れていたが、ケータイって何て便利なんだろうと思った。

幸い、個室は全部空いていたので、中に入って待っていると、由

樹が一人で来た。

ハンニバルは外で待っている。

気付かれない様に、そっとドアを開けて、由樹に声をかけた。

「由樹、大丈夫か？」

「鯖くん、来てんだ」

由樹は嬉しそうに言ったが、鯖丸は口に指を当てて、黙る様に指示した。

「大きい声出さないで。トリコも来てるから」

由樹は黙ってうなずいた。

冷静な幼稚園児だ。

「平気。何か嫌な事とかされてない？」

「うん、別に」

平気そうに言ったが、すぐに泣きそうな顔になった。

「家に帰りたい。あのおじさん、何なの」

「長くなると変に思われるから、詳しい事は後で言うよ」

鯖丸は、しゃがみ込んで由樹に言った。

「お前の父ちゃんは、変な奴に体を乗っ取られてる。みんなで元に戻せる様にがんばるから、由樹も協力して」

「うん。どうすればいいの」

「普通にしてて。怖がったり泣いたりしたらダメだ。」

大阪に着いたら、ジョン太がお前を連れ出す。それまで大人しくしてるんだ」

「ジョン太って、あのおじさん？」

「そう。強そうなワンワン」

本人が聞いたなら、どうかと思う表現だ。

「ちょっと荒っぽい事になるかも知れないけど、怖がらないで」

「うん。平気だよ」

「そうか、由樹は強いな。じゃあ、戻って」

「待って、おしっこ」

トイレに来た本来の目的を果たしてから、由樹はハンニバルの所

に戻った。

鯖丸は、二人が立ち去るのを確認してから、トイレを出た。

強そうなワンワンは、ちょっと考え込んでいた。

トリコがどうしたのかと聞くと、あー、やっぱりこれしかないか……と言って、大阪本社に電話をかけ始めた。

「中四国支所のウィンチェスターです。実はフェリーで移動する事になりました……ええ、ターゲットが子供を誘拐して、フェリーに乗ったので、追跡する形で。」

入港直前に奪回して逃げますから、そっちで港まで車、回してもられます？

大阪南港、21時40分着です。十五分前までに迎えたのみます」電話を切ってから、ジョン太は少しため息をついた。

ジョン太が、本社の社長とあまり相性が良くないのは知っていた。魔法が使えないのに、中四国支所では所長の次に偉いポジションに居る事も、良くは思われていないらしい。

名刺には便宜上課長とか書いてあるが、実際には副所長だ。

というか、特に課が無いので中四国支所に課長は居ない。

営業的に、何か肩書きが有った方がいいからと、適当に名刺を作ったらしい。

ステキにええかげんな会社だ。

「奪回って、どういう事をするつもりだ」

不安になったのか、トリコは聞いた。

「港に着く直前に、由樹君を連れて強引に降りるだけだよ」

ジョン太は言った。

「いくら、外界で魔法が使えると言っても、外界じゃみんな魔力ゼロだからな。物理攻撃魔法じゃないと、当たっても意味がない。

そんなもん、全速力で走れば、二秒で射程外だ」

二秒もあれば、ジョン太がどれくらい移動しているか知っていたが、外界では銃を持ち歩けない。

「海斗の魔法は、物を操って来るぞ。お前は丸腰じゃないか」

缶コーヒーを三人分買って、鯖丸が戻って来た。

「由樹は無事。話も出来たよ。大阪に着くまで、大人しく待ってるって」

トリコは、安心したのか二段ベッドの下の段に座り込んだ。

寝台席は、一部屋にカーテンの付いた二段ベッドが八人分並んだ構成になっている。

特等船室や一等席と違って、それ程一般席と金額差がないので、夜間の便では予約が必要なくらい混んでいるが、昼間の移動でゆっくり寝たい人は少ないらしく、一部屋貸し切り状態になっている。

「まあ、拳銃は持ってた方がやりやすいけど」

缶コーヒーを受け取って、ジョン太は言った。

「逃げるだけなら、必要ない」

缶コーヒーを少し飲んで、何だ微糖じゃないのか：とか文句を言うってから、付け加えた。

「トリコ、お前足手まといだから、邪魔するなよ。鯖丸、こいつは

お前が責任持って保護しとけ」

「そうするけど、ジョン太、言い方ひどい」

鯖丸は反論した。

「いいよ、魔界に入るまで、私に出来る事はない」

トリコは言った。

「全部任せる。言ってる意味は分かんと思うけど」

「ああ、分かっている。由樹君には傷一つ付けないし、なるべく怖い目にも遭わせない」

ジョン太は答えた。

「ハンニバルは、少し痛い目に遭わせるかも知れないけど、いいか？」

「いいよ、あんな物に乗っ取られるなんて、海斗には少し、反省してもらわないと」

「ジョン太、俺も行く」

鯖丸は言った。

「いくら魔法使えなくても、トリコは俺が守らないといけない程、バカじゃないよ。

俺だって、魔法使えなくても、そこそこはやれるし」

ジョン太は、少し考えた。

普通なら断って一人で行く所だが、自信家の鯖丸が、そこそこか言っているという事は、本音はハンニバルと外界で互角にやれると思っているはずだ。

話半分でも、戦力の足しにはなる。

トリコだって、身体能力は、外界では並の女に劣るくらいだが、危ない仕事を続けて来たから、状況判断では、いい所まで行くだろう。

「分かったけど、足は引っ張るなよ」

魔界でも外界でも、強さは同じなジョン太は言った。

「向こうに着く時間が近付いたら教えるから、お前ら休んでおけ」

「お前は、休まなくて平気なのか」

トリコは聞いた。

「残念ながら、二三日飲まず食わずで寝ないでも、平気なんだよね、俺。原型のハイブリットは、もっと丈夫らしかったけど」

ハイブリットが、何の為に作られたか知っていたら、笑えないセリフだ。

人間もロボットも耐えられない、宇宙開発現場での重労働をする為に作られたからだ。

ジョン太の様なタイプは、戦闘用に特化されていて、普通の人間と混血が進んだ今では、能力を保持している者の方が少ない。

たぶん、地球よりハイブリットの人口比率が高い宇宙なら、もう少したくさん居るだろうけど。

「お前らは寝てろ。時間が来たら起こす」

ジョン太は言った。

「うん、寝る。一時間前には起こして」

鯖丸は、本気で寝た。

いつでも何処でも寝られるし、何でも食えるというのは、ある意味すごい強味だ。

魔界とか外界とか宇宙とか、関係無しに何処へ行っても生きて行ける。

「いや…本当に寝るんだ、こいつ…」

ジョン太は呆れた。

「そりゃあ寝るさ。こういう奴だから」

トリコは言った。

「大体すぐ寝るよ、こいつは」

付き合いが長い自分より、トリコの方が鯖丸の事を良く知っているというのは、変な感じだ。

まあ、四ヶ月も一緒に住んでいれば、そんなもんかも知れない。

仕事の時は変にあっさりした感じなので、こいつらが付き合ってる事、時々忘れるな…と、ジョン太は思った。

目が覚めた時には、外はもう暗かった。

部屋の奥にある小さな船窓から、暗い海が見える。

ケータイを出して時間を確認した鯖丸は、起き出して靴を履いた。入港予定時刻の一時前半前だ。

向かいの寝台を見ると、トリコが変な姿勢のまま眠り込んでいた。座っているつもりだったのが、いつの間にか寝てしまったのだらう。

きっと疲れてるんだろうなあと思ったが、そろそろ起こす事にした。

「トリコ、起きて」

軽く揺すると、少し目を開けた。

「ああ…もう朝？」

普段早起きだが、低血圧でけっこう寝起きは悪い。寝ぼけて、だいぶ変な事を言っている。

鯖丸も、知っていたので早めに起こしにかかったのだ。

「夜だよ。あと一時間半で南港に着く」

トリコは、少しぼんやりしてから、急に我に返って飛び起きた。

「しまった。寝てたのか、私」

立ち上がろうとしたが、寝起きに急に動いたせいか、その場に座り込んでしまった。

「大丈夫、まだ時間あるから」

トリコを抱き起こして座らせた所に、ジョン太が戻って来た。

一瞬、抱き合っている様に見えたので「あ、ごめん…」と言って部屋を出かけたが、状況が分かったらしく、後ろ手でドアを閉めた。

「ハンニバルは、今の所動きがない。土産物を見たり、雑誌を買って読んだりしてる。由樹君は、隣にいる子供と、ゲームやってる。携帯ゲーム機の、モンスター狩るやつ」

小さい子供が居るせいか、おじちゃん割と詳しい。

「港に接岸する直前に仕掛ける。鯖丸、お前どうにかしてハンニバルの注意を引きつけろ。」

その間に、由樹君を確保して逃げる」

「その役は私がやろう」

トリコは言った。

ジョン太と鯖丸は、驚いた顔をした。

「無理だろう、それは。気持ちちは分かるが」

「危ないよ。やめて」

二人は、同時に言った。

「考えてみたが」

トリコは、割合冷静な口調だった。

「あれが海斗の記憶を持っているなら、たとえ体に乗っ取れても、五歳の子供が一人で生きて行けない事くらい分かっているはずだ。

私は保護者として必要だ。だから殺される事はないし、回復出来ない様な怪我を負わされる可能性も低い」

二人の顔を交互に見て、言った。

「多少の無茶をしても、私が一番安全だ」

ジョン太は、ほんの少しの時間、考え込んだ。

「分かった。ハンニバルの注意をそらすのは、お前に任せる。鯖丸は、トリコのサポート」

「ジョン太、そんな危ない事、魔界でならともかく、こっちでトリコにさせるのはちょっと…」

文句を言い始めた鯖丸を、ジョン太は制した。

「お前には、もっと危ない役割がある。俺が逃げる時、ハンニバルが邪魔して来たら、止める。二、三秒でいい。いくら外界でも、それくらい出来るだろう」

「出来るけど…」

鯖丸は、ちょっと不満そうだったが、結局うなずいた。

ジョン太が指定した接岸直前の時刻には、乗船客の大半が、昇降口近くに集まっていた。

鯖丸は、甲板に出て、夜の港を見渡した。

なにわナンバーの乗用車が、少し向こうに待機しているのが見えた。

運転席から降りて、煙草を吸っている男が居た。

一年ちよっと前に、一度会っただけだが、上方ハルオ、ヨシオの、どっちかだという事は分かった。

車は、中四国支所では絶対使わない、速そうなスポーツカータイプだ。

関西の魔界は、市街地が主なので、オフロードタイプの車は、めったに使わない。

事前に連絡先は聞いていたので、一応電話を入れた。

「中四国支所の鯖丸です。ジョン太から連絡はあったと思いますが、これから動きます。よろしく」

「ヨシオや。了解」

ヨシオ兄さんが来ているという事は、本社の怪我人は、彼以外の

誰かだ。

ハルオ兄さんと、エンマ君以外に、本社の知り合いは居ない。出来ればあの二人でなければいいなと思った。

「武器になりそうな物、取って来る。ここで待ってて」

鯖丸が言うと、トリコはうなずいた。

十秒もしない内に、ジョン太から電話があった。

「ハンニバルは、お前らの真下だ。見えるか」

二階甲板の真下は、通路になっている。

昇降口に集まっている人混みから少し離れて、由樹の手を引いたハンニバルが、海を眺めていた。

こうして見ると、昔と何も変わらない。

殿の弟子に体を取られてしまったなんて、何かの悪い冗談じゃないのかと思えるくらいだ。

「ああ、居るな」

トリコは答えたが、冷静な声は出せなかった。

「声をかけて注意を引け。ハンニバルが気付いたら、すぐに後ろに下がれ」

「分かったけど、鯖丸が戻ってない」

トリコは言った。

「何やってんだ、あのバカ」

人混みの中に、ケータイを握ったジョン太が居た。

こっちを見上げて、むっとした顔をしている。

「何か、武器になりそうな物取って来るって：ああ、戻って来た」

棒的な物を持ってないと、ケンカは超弱いと自称するだけあって、

どこで見付けたのか、長い物を握っている。

良く見ると、デッキブラシだ。

こんな物でハンニバルと戦うつもりとは、いい根性だ。

「ジョン太が、海斗に声かけろって：」

「うん。こっちは準備いいよ」

鯖丸は、デッキブラシをゆるく握った。

魔界で真剣を扱っている時とは、全く違う構えだが、こちらの方が堂に入っている感じた。

二回程、部の練習を見に行った事がある。

素人目にも、あの中で一番強いのがこいつだという事が分かるくらいだった。

バカみたいに自信家なもの、それなりの努力を地道に積み重ねているからだと言う事は、四ヶ月も一緒に暮らしているので知っている。

ジョン太の様に、魔界で魔法使い相手に戦える程ではないが、外界の標準では相当強いはずだ。

トリコは、手すりから身を乗り出した。

声をかける前に、ハンニバルがこちらに気付いた。

「海斗：由樹を」

次の瞬間、体がぐいと後ろに引っ張られた。

鯖丸が、体ごと後ろにかっさらったのだ。

甲板に倒れ込んだのはトリコだけで、鯖丸は一瞬で体を反転させ、立ち上がった。

トリコは肘について半身を起こし、今まで自分が掴んでいた手すりが、あり得ない形に歪んでいるのを見た。

手すりが、生き物の様にうねったかと思うと、次々と根元から抜け、蛇の様に踊りながら下の通路に垂れ下がって行く。

階段の様に、手すりを登って来る足音が聞こえた。

ハンニバルの魔法は、固形の物質を操り変形させる。

所長が使う魔法と同系統だ。

魔界に居る時と違って、直接触れている狭い範囲の物しか操れない様子だったが、それでも火炎系や大気系と違って、がっちり触れられる固体を動かせるのは強い。

ハンニバルの頭の先が見えた。

片手で由樹を抱いている。

相手が見えているのに、鯖丸が全く動かないのに気が付いた。

しまったと思った。

背後に居る私を庇うつもりだ。

急いで起き上がり、移動しようとしたが、間に合わなかった。

ハンニバルが、ぽんと飛び上がって甲板に立った。

にこりと笑って、二人を見比べた。

「また会ったねえ、武藤雄次郎君」

違う、海斗はこんな話し方はしない。

分かってはいたが、リアルに別人だと思い知らされて、ぞっとした。

「外界で本名呼ばれたって、痛くも痒くもないよ」

鯖丸は、さらっと言った。

うわー、この嘘つき小僧。不審な挙動一切無しで、嘘の名前を押し通しやがった。

「由樹を返せ」

「嫌だね」

ハンニバルは、肩をすくめて口の端で嗤った。

「トリコ、こっちへ来い」

空いている片手を伸ばした。

「子供には母親が必要だ」

「行かせるかバカ」

鯖丸は、自分から離れようとしたトリコの腕を掴んで、背後に庇った。

「お前なんか、魔界で大人しく死んでろ」

ハンニバルの表情が、微妙に動いた。

ふうとため息混じりに笑った。

「てめえの女気取りか？遊ばれてるだけだぞ、坊主」

このしゃべり方、いつもの海斗だ。

「知るか！！俺は本気だ」

いつの間にか、ジョン太がハンニバルの背後に居た。

足音も気配も、全く無いまま移動して来ている。

「それから、最初に言っておく」

鯖丸は、デッキブラシを構えた。

「このブラシは、便所の掃除用具入れから持ってきた」

丁度、タワシ部分がハンニバルを狙っている。

良く見ると、緑色のナイロンで出来たブラシの毛から、ぽたぽたと水滴が垂れていた。何の水だあー！！

周囲の全員が、びくりと固まった。

鯖丸以外の全員に、精神的ダメージ10。

「ふふふ、これでびびるなんて、まだ人の心が残っているんだな」
鯖丸は、不敵に笑った。

いや：それ、心とか全然関係ないから。

ジョン太は、声に出さないで全力で突っ込んだ。

「行くぞおー」

「うわああ、振り回すなあ」

ハンニバルは、悲鳴を上げた。

「鯖くん、変な汁が飛んでるー」

おそらく、ハンニバルが攻撃を受けると、精神的には同等のダメージを受ける由樹が叫んだ。

背後に潜んでいた、ダメージ的には六割か七割のジョン太は、他人が同じパンツを二日履いていても許せないきれいきれい好きなので、とっさにその場に伏せた。

行きがけの駄賃に、注意が他へ向いてしまったハンニバルの手から、由樹を奪い取った。

デッキブラシが、ハンニバルのみぞおちに命中し、大柄ではないがごつい体が、物凄い勢いで後ろにぶっ飛んだ。

突きを入れた勢いで、最強のウェポンだったブラシ部分が外れてしまったただの竹の棒を、鯖丸は油断無く構え直した。

ジョン太が、低い姿勢から信じられないスピードで移動していた。由樹を抱きかかえたままた、飛び上がり、手すりを踊り越えて空中で体を捻った。

一瞬、海に落ちると思ったトリコは悲鳴を上げたが、ギリギリの場所を見切って、下の通路の手すりに着地し、更に飛んだ。

接岸の為に括られたロープの上を、二歩、三歩走り、コンクリートの湾岸に柔らかく着地した。

鯖丸が、魔界でやる様な事を、さらっと素でやっている。

さすがに、ハンニバルを乗っ取った弟子も驚いたらしく、一瞬だけ動作が止まった。

それから、我に返って動き出した。

垂れ下がった手すりを掴み、魔力を通す。

手すりが、空中を蛇の様に動き、ジョン太と由樹を追った。

ジョン太が走り出した。

異常に速いが、ハンニバルも、攻撃を仕掛けたまま、後を追おうとしている。

鯖丸は、上段から斜めにハンニバルに打ちかかった。

自分の持ち技の中では、出足は遅いが一番威力のある袈裟懸けだ。調子のいい時なら、畳を二枚重ねていても両断出来る自信がある。得物が竹の棒でも、人一人くらい、どうという事もないと思っていた。

ハンニバルが、攻撃を受け止めていた。

床からせり出した壁が補強していたが、間に合わなかったのか、デッキブラシの柄を直接受けたのは、利き腕だった。

いくら地球育ちのごついおっさんでも、絶対骨にひび入ってる、こいつ。

ハンニバルは、怯まなかった。

もう一方の腕で、竹の棒を掴むと、そのまま魔力を通して来た。竹が、節を残して一瞬ふくらみ、破裂した。

手の平に焼け付く様な痛みがあったが、通って来る魔法は、全く見えないし感じられなかった。

ジョン太が普段、どんな状態で魔法使いを相手にしているか分かって、愕然とした。

いつ攻撃が来るか分からない。

人間の反射速度では、避けられない。

ジョン太が、柵を跳び越え、赤いスポーツカーに飛び込むのが見えた。

ランサーエボリション：俗に言うランエボは、腹の底に響く様なエンジン音を上げて加速した。

元々速い車だが、ヨシオ兄さんめっちゃ運転上手い。

派手な動作もなく、ただ滑る様に加速した車は、あっという間に夜の闇に消え去った。

由樹が無事確保されたのを確認したトリコは、叫んだ。

「もういい、逃げろ、頼むから」

「俺も、そうしたい…」

丸腰になってしまった鯖丸は、後ずさった。

ハンニバルは、ゆっくりと一步踏み出し、それからやにわに体を回転させて蹴りを放って来た。

とっさに両手でガードして、自分から後ろに飛んで威力をそらしたが、着地した所に肘打ちを食らって甲板に転がった。

気が付いた時には、マウントポジションを取られていた。

やばいこれ。後は殴られ放題の、一番良くないパターンだ。

殴りかかって来たハンニバルの腕を、どうにか見切ってがっちり掴んだ。

動体視力も握力も、こっちの方が上のはずだ。

伊達に、振り下ろした真剣を、空中でぴたりと止められる訳じゃない。

次の瞬間、もう一方の手でがつんとぶん殴られた。

まさか、怪我をした方の手で殴って来るとは思わなかったので、まともに食らってしまった。

ハンニバルは、顔をしかめながら、にやりと笑った。

「なめるな、ガキが」

もう一発殴られたが、鯖丸は掴んだ腕を放さなかった。

「ナメてんのはどっちだあ」

そのまま、力一杯掴んだ腕を、逆向きにねじり上げた。

「こっちも折るぞ、てめえ」

「おう、出来るもんなら、やってみろ」

二人は、にらみ合った。

「トリコ」

鯖丸は、体を捻って後ろに居るトリコに言った。

「今しゃべってるの、どっちだ」

トリコは、はっとした。

「海斗だ。殿の弟子じゃない」

「そうか」

鯖丸はにっと笑い、強引に体を起こして、ハンニバルにがつんと頭突きを入れ、マウントポジションを振り解いた。

「じゃあ勝負だ。トリコも由樹も、お前には返してやんねえよ」

今度はこちらから殴りかかったが、どうやら武藤君は、棒以外で人を殴るのは苦手らしく、へろへろのパンチはあっさり避けられた。

「お前、強いのか弱いのか、どっちなんだー」

飛びかかって来たハンニバルに、蹴りが入った。

格闘技的には、全くダメな蹴りだったが、何しろハンニバルよりだいぶ背が高い上に、身長割に手足が長い。

これだけリーチに差があると、懐に入り込むしかないのだが、攻撃はダメダメでも、足さばきは剣道の達人だ。

本気になれば容易には近付けない。

二人は、距離を置いてにらみ合った。

「面白い」

ふいに、ハンニバルの表情が変わった。

如月海斗だった男の人格が、押し潰され、崩れ落ちた様に見えた。外見こそ変化しなかったが、その場に居るのは、殿と同じ、異界の物だった。

消え去る直前のハンニバルが、少し抵抗してもがくのが分かった。

こいつら、完全には同化していない。

「面白いぞ、お前。魔力が高いくせに、外界でここまで戦えるのか」
殿の弟子が、にやりと笑った。

口の中に深淵がのぞき、鯖丸はひるんで一步下がった。

すうっと、滑る様に移動して来た弟子は、耳元で低くつぶやいた。

「お前の方がいいな、もうぞ」

次の瞬間、ハンニバルの体は、甲板から身を躍らせていた。

暗い波間に、小さな水しぶきが上がった。

「何があっただ、君ら」

船の乗務員が、さすがに異変を感じて駆けつけていた。

トリコは、とっさに鯖丸にしがみついて、子供っぽい口調で叫んだ。

「助けて！！ お兄ちゃんが変な人に襲われた」

「大丈夫だから、大したことないから」

額から、何か暖かい液体が流れ落ちて来た。

手の甲で拭いて見ると、額がぱっくり割れて、血が流れ出している。

「うわー。俺、大丈夫じゃないかも」

「とにかく、医務室に来て。歩けるかい」

乗務員は、本気で心配して肩を貸してくれた。

「歩けます」

ポケットに入っていた手ぬぐいを取り出した鯖丸は、普通に額に当てて止血すればいいのに、ものすごく慣れた手つきで、防具の下に被る時のやり方で頭に巻いてしまった。

ああ、全然大丈夫じゃないな、こいつ…と、トリコは思った。

「大丈夫」

船員の後を付いて行きながら、全く大丈夫ではない鯖丸は、言った。

「たぶん、由樹はもう、襲われない」

「え…？」

トリコは、鯖丸を見上げた。

困惑した顔をしていた。

「俺、大変な事になっちゃったかも…」

警察に行った方がいいと言う乗務員をどうにか振り切って、船を下りた時には、入港してからずいぶん経っていた。

先ほどのランエボとは打って変わった、地味な小型の乗用車が、道端に止まっていた。

運転席のドアが開いて、見知った顔が待ちくたびれた様子で降りてきた。

「あ、エンマ君だ」

「遅いわ、君ら」

文句を言ったエンマは、頭に大げさな包帯を巻かれた鯖丸を見て、少し驚いた顔をした。

「色々あったみたいやけど、まあ乗り」

「うん、ありがとう。エンマ君久し振り」

後部座席のドアを開けた鯖丸は、トリコを先に乗せてから自分も乗り込んだ。

「ジョン太はどうしてる？由樹と一緒にのはずだけど」

シートベルトを締めながら、鯖丸はたずねた。

「ホテルで待つとるわ。君らも今日は早う休んだ方がええな」

ハンドルを握っているエンマの袖口から、包帯を巻いた手がちらりと見えた。

「怪我した本社の人って、エンマ君？」

鯖丸は聞いた。

「ハルオ兄さんや。俺は軽傷」

車を転がしながら、エンマは答えた。

それから、ルームミラーで、ちらりと後部座席を確認した。

「そっちの人がビーストマスター？」

「ああ、トリコだ。よろしく」

「エンマです。ちゃんとした自己紹介は、明るい所に着いてから、さしてもらいますわ」

エンマは、アクセルを踏み込んだ。

車は、ベイエリアを抜け、繁華な市街地を走り続けた。

ジョン太は、今晚泊まる事になっているホテルのロビーで、イライラしながら待っていた。

適当なビジネスホテルなので、大して広くはないが、二階にエントランスがあるので、通りからは離れていて、落ち着いた感じの音楽が流れている。

落ち着いていないのはジョン太だけだ。

ヨシオ兄さんは、ソファアーにかけてコーヒーを飲んでいた。隣にもう一人、キャバ嬢みたいな感じの女が、座っている。

エンマと一緒に鯖丸とトリコが入って来ると、ジョン太は遅いと文句を言った。

「うわ、お前また、そんな怪我して…」

頭に包帯を巻いて、口元と眉の端に絆創膏を貼られた鯖丸を見て、ジョン太はうなった。

「こいつ、海斗とガチでケンカしちゃって…」

トリコは説明したが、キャバ嬢っぽい女の膝の上で由樹がすやすや眠っているのを見付けて、駆け寄った。

「良かった…無事で」

「若い母ちゃんやなあ。ほら、ここ座り。大変やったな」

キャバ嬢風の女は、外見に似合わない、人の良さそうな顔で笑った。

いや…絶対この娘、トリコより年下だから…と、鯖丸は思ったが口には出さなかった。

「外界であれとガチでやるって、そんなんジョン太以外で出来る奴居ったんか」

ヨシオ兄さんは、驚いた感じで言った。

「まあ、剣道三段、こいつ」

ジョン太は説明した。

「足止めするだけで、いいって言ったのに」

鯖丸に、少し文句を言った。

「そんな、こっちに都合のいい所で、止められる訳ないじゃん」

鯖丸はぶつぶつ言ったが、面識のない人も混じっている状況なので、先に自己紹介から済ませた方がいいと思ったらしく、とりあえず初対面のキャバ嬢に挨拶した。

「中四国支所の鯖丸です。本社の方ですか」

「ええ、名前はサリー。よろしくね」

眠っている由樹をトリコに返して、サリーはエンマの隣に立った。エンマ君のパートナーらしい。

「上行って、ちよい打ち合わせしよか」

ごつつい灰皿で煙草をもみ消してから、ヨシオ兄さんは言った。

「あの一、宿泊されない方は、客室への出入りは…」

フロントに居た男が、止めに入った。

「細かい事言いな、今日中には帰るわ」

「どうせなら泊まったら、ヨシオ君」

サリーは、冷めた口調で言った。

「今から関空の近所まで帰るの、面倒やん」

ヨシオ君、意外と遠くから通っているらしい。

「後、あんたらも早よチェックインして」

仕切られた鯖丸とトリコは、顔を見合わせた。

上の階に上がるエレベーターの中で、エンマは鯖丸に話しかけた。

「変わったなあ、君」

「そうですか」

別に、変わったのは童貞じゃなくなった事くらいだと思う。

ため息つかれる程変わったか？俺。

それから、エンマ君も相当変わってしまった事に気が付いた。

「あの：エンマ君、何か小さくなってないですか？顔も可愛くなってるし、声も女の子みたいですよ」

「だって、女の子だもん、俺」

エンマ君は、さらっと言った。

「男なのは、魔界に居る時だけや。外界ではおなべやねん、俺」

「そうなんだ」

魔界関係は、変わった人が多いので、今更驚かないが、ちょっと意外だ。

「来年辺り、下の方も工事しよかと思うてんけど、ちょっと考え中」

「工事って、土木工事ですかあ」

思わず聞き返してしまった。

あんなかつこ悪いもん生やして、何が楽しいんだー。

「土木工事って、君」

エンマは、呆れた顔をした。

「そら、建設するけどなあ。魔界に入って、いつも通り生えて来たら、二本にならんか心配で、踏み切れんね」

「うちは二本でもええよ」

サリーちゃんが、更に建設的な意見を述べた。

「俺は嫌」

エンマ君は断言した。

六階の部屋に入って、全員が面子を揃えた所で、鯖丸は言った。

「実は、狙われてるの、由樹じゃなくて俺になっちゃって」

全員が、ええっという顔をした。

「どうしよう…」

どうもこうもないが、五歳の幼児が狙われているよりは、余程守りやすい。

ていうか、鯖丸囨決定。

「そうだなあ」

ジョン太は、納得した感じでうなずいた。

「遺伝的に近いから、乗り換えのリスクが少ないだけで、由樹君にはその他の利点が無いからなあ。俺がハンニバルなら、迷わずこいつを選ぶよ」

選ばれて、こんなに嬉しくない事は初めてだ。

「魔力は高いし、身体能力も高いし、年齢も若い。子供じゃないから、外界で行動の制限もない。最高だ、お前」

「最悪だよ」

鯖丸はぼやいた。

「でもまあ、由樹が狙われてるよりは、良かったかな」

「良かったんだ…」

エンマ君と並んでベッドに腰掛けていたサリーは、意外そうに言った。

「まあ、わしらの的にはその方が楽やけど」

向かい側のベッドで、あぐらをかいていたヨシオ兄さんは言った。禁煙ルームではないらしく、部屋にあった灰皿を手に持って、相変わらず煙草を吸っている。

隣に座った鯖丸が、ちよつと煙を避けたので、ああ、すまんと言つて、脇へ退けた。

「いえ：いいですよ。ここ三年程禁煙してるから、たまに吸いたくなるんで」

「三年前は、君、未成年やろ」

ヨシオ兄さんは言った。

「どないしたら禁煙できるん」

「貧乏です」

鯖丸は断言した。

「いや、子供が居るから消せ」

ベッドの端で寝ている由樹に、布団をかけ直してから、トリコはヨシオ兄さんを睨んだ。

「喫煙者には辛いご時世やのおー」

ヨシオ兄さんは、素直に煙草を消した。

「ところで」

エンマ君は言った。

「俺ら何で、こんな狭い部屋に、七人もみっちり詰まっとんのや」
ツインルームとは云え、ビジネスホテルなので、部屋は狭い。

「魔界関係のややこしい話、フロントのおっちゃんとか、他の客に聞かれたないねん」

ヨシオ兄さんは言った。

「特に今度は、政府筋からの依頼やしな」

話し方からすると、今度の仕事を仕切っているのは、ヨシオ兄さんらしい。

通常、この面子ならジョン太が仕切る事になるのだが、元々本社で受けた仕事だし、支所からの助っ人なので一歩引いているのだろう。

壁に作り付けられたデスクに置いてある椅子に、反対向きに掛けて、背もたれに両手を乗せたジョン太は、皆を見回した。

「で、最初はどういう話だったんだ」

「如月海斗を確保せえ……ちゅう話や」

ヨシオは言った。

「まあ、政府公認魔導士なんぞ、魔法使えんかったらもやしっ子みたいなもんやし、どいつもこいつも、何の足止めも出来んで、あっさり逃げられたらしいわ」

「無事に帰って来たハンニバルを、強引に確保しようとした理由が、分からないんだが」

ジョン太は言った。

「理由なら分かる」

トリコが言った。

「依頼者は、浅間龍祥という男だったはずだ。魔界名はクイックシルバー」

「ああ、そいつや。大体、魔界名にかっこええ名前を付けるのは、いけすかん奴と相場が決まっとんねん」

ヨシオ兄さん、ネーミングにはこだわりがあるらしい。

「政府公認魔導士の魔界名は、自分で付ける訳じゃないんだけど…」
トリコは、意外な事を言ってから、続けた。

「海斗：ハンニバルと組む前に、私のパートナーだった奴だ。」

出世の為に殿の弟子と取引して、事実を隠蔽する為に、ハンニバルに罪を着せて追放した。どうしようもない曲者だよ」

初めて聞く話だった。

「事実関係を知っているハンニバルが戻って来たら、たとえ中身が殿の弟子でも、都合が悪い」

「どういう取引だったのか、分かるか？」

ジョン太は聞いた。

「異界の情報をもらう代わりに、異界の物がこちら側に出て来るのを黙認するという内容だ。どんな情報をもらったのかは、分からない」

異界の情報が欲しい者は、政府にも民間にも、山ほど居る。

お手柄でさぞ出世した事だろう。

「殿の弟子が、ハンニバル以外の奴の体に入ってれば、丸く収まってたんだなあ」

ジョン太は、鯖丸をちらりと見た。

「嫌な目でこっち見んな。いっぺん手に入れたハンニバルの記憶は、分離しても消えないんだろ。手遅れだよ」

「実は、その辺が曖昧なんだ。試した奴も居ないし」

トリコは、更に嫌な事を言った。

「鯖丸が狙われてる事は、隠した方がいい。あいつ、海斗の記憶が無くなるなら、鯖丸を殿の弟子に差し出すと思う」

鯖丸は、うつむいてちよっと考えていたが、顔を上げた。

「ううん、その浅間って奴には、俺が狙われてるって言おう。でないと、由樹が同じ目に遭うかも知れない」

狭い部屋に詰め込まれた皆は、ベッドの端ですやすや眠っている子供を見た。

「囧なんだから、狙われてる方が好都合だ」

「君、だいぶキャラ変わったけど、相変わらずかつこええなあ」
エンマは言った。

「でも、アホやろ。死ぬかも知れんで」

「その辺は…」

鯖丸は、ベッドの上に正座して、両手を合わせて皆を拝んだ。

「お願い、守って」

「かつこ悪っ」

サリーちゃんがつぶやいた。

由樹の保護先については、サリーちゃんが手配してくれた。

「キャバ嬢とか、もうちょっとダークな仕事してる娘とか、あと、不法滞在のお姉ちゃんらの子供、預かってくれる所があるねん」

「ああ、表には出ないから、そういう場所の方が安全だな」

トリコはうなずいた。

「あんたの所も、そこで預かってもらってるの？」

サリーちゃん、子持ちには見えないが、女同士だとそういうのは分かるのかも知れない。

「うん、前はね。うち、こんなやから、元ダンナに子供取られてん」
色々大変らしい。

「助っ人呼んだのは、依頼者にも言うとするからな」

ヨシオ兄さんは、話題を切り替えた。

「君ら明日、呼び出されるはずや。今日はもう、ゆっくり休み。わしらは帰るわ」

「うん、ありがとう」

鯖丸は言ったが、出かける用意を始めた。

「何や、どこぞ行くんか」

ヨシオ兄さんは、聞いた。

「晩ご飯食ってないから、何か買って来る。腹減って寝れないもん。後、着替えとか全然持って来なかったし」

「ああ、そんならメシ食いに行こか」

ヨシオ兄さんは、ジャケットを手に持って立ち上がった。

「四国の田舎と違って、夜中までどこも空いとるでえ」

「私は残るよ。由樹も寝てるし」

トリコは言った。

「抱っこして連れてけや。皆と離れん方がええし、どうせその子もメシ食うとらんのやろ」

「そうだけど、こんな夜中に」

トリコはぶつぶつ言ったが、結局皆に付いて来た。

食い倒れの街に、鯖丸を放牧する危険について、皆は全然意識していなかった。

はっと気が付くと、両手の全部の指の間に、串カツを挟んで、変なポーズを決めている。

「何だそれは」

ジョン太は一応聞いた。

「えーと、何か悪魔召還士的な感じで」

両手を、胸の前でクロスさせて、変なポーズを決めた鯖丸は、何時の間に買ったのか定かではない串カツを食い始めた。

ああ、ゲームのあれか…と、ジョン太はうなずいた。分かるものかどうかと思うが。

「食うな、バカ」

トリコは、串カツを取り上げた。

「ええーっ、仕事の時くらい、好きなだけ食べてもいいじゃん」

鯖丸は、文句を言った。

「もちろんいいが、夜中は別だ。お預け!!」

鯖丸は固まった。

「良く舐けてあるなあ」

ジョン太は、感心するというより呆れた。

「当たり前だ」

取り上げた串カツを、周囲の皆に配りながら、トリコは言った。

「こいつの食生活って、アスリート失格。何で誰も突っ込まないんだ」

「それは、アスリートじゃなくて、武道家だから」

言い訳した鯖丸の後頭部に、がすつとチョップが入った。

「一緒じゃ、ボケー」

姐さん、いい突っ込み。

「ええなあ、強力な突っ込みがおって」

ヨシオ兄さんは、羨ましそうに言った。

「どうやら兄さん、ボケらしい。」

「お前も、突っ込んで欲しいか」

トリコは聞いた。

「基本的にお断りするけど、たまにはお願いします」

ヨシオ兄さんは、複雑な事を言った。

居酒屋風の店で、色々と食事や酒を注文して、ホテルに戻ると翌日になっていた。

割と郊外に住んでいるらしいヨシオ兄さんは、終電が出たので泊まる事に決めてフロントで手続きをしている。

エンマ君とサリーちゃんは、近くの家に戻ると言うので、微妙な面子になってしまった。

ヨシオ兄さんが、部屋割りに悩んでいたら、ジョン太が強引に鯖丸とトリコを一部屋に放り込んだ。

「あ、それでええのん」

「いいの。こいつらすっかり出来ちゃってるから」

二人と由樹を、一部屋に放り込んだジョン太は、にやーと笑った。

「一緒に泊まるの、久し振りだねえ、ヨシオ君」

「嫌あああ」

兄さん泣きそうだ。

「わし、ハルオともそういう意味のリンクは張ってないんや。かん

べんしてええ」

「冗談だよ」

ジョン太は冷静に言って、さっさと部屋に入った。

「お前の冗談は、笑えんわ」

ヨシオ兄さんは、肩を落とした。

「あんたも芸風変わったなあ、ジョン太」

「あんなバカと連んでたら、変わるわ」

ジョン太は、ぶつぶつ言った。

「あー、それはそうと、サインしてもらっていい？」

どこで買ったのか、色紙を出して来た。

「うちの嫁が、微妙なお笑い芸人、大好きで」

「微妙言うなあ」

兄さん、本気で泣きが入った。

翌朝、頭の包帯を外して顔を洗っていた鯖丸は、血が止まらなくなつて、結局病院で四針縫われる事になった。

「ケンカで頭突きしたって…君。こんな怪我する程」

医者には、呆れて言った。

「普通なら、とつくに脳震盪で倒れて、救急車に乗ってるはずなんだけど…」

「食生活の改善で、頭蓋骨まで頑丈に…」

鯖丸は、ガッツポーズを決めた。

「さすがだ、トリコ。これからは、頑丈人間鯖丸と名乗る事にしよう」

「お前は、元々頑丈なんだよ」

ジョン太は、釘を刺した。

「頭蓋骨はともかく、中身が雑だからなあ」

「雑じゃないよ。割と賢い方だよ」

鯖丸は、反論した。

こんなで、学校の成績も悪くないらしいのは、謎だ。

「文武両道のバカ」

ジョン太は言った。

いいキャッチフレーズが出来てしまった。

病院を出て、トリコとサリーちゃんが合流した。

由樹を預けて来た所らしい。

「エンマとヨシオ兄さんは、ハンニバルを捜してるから」

サリーちゃんは言った。

「そろそろ連絡入ると思うけど、先に公認魔導士の事務所に行こか」
鯖丸とジョン太は、うなずいた。

トリコは、少し複雑な表情をしている。

まあ、それはそうだろうなあ…と思った。

元同僚も、たくさん居るだろうし、ハンニバルの事では、色々わだかまりもある様子だ。

公認魔導士の事務所は、阪急梅田からほど近いオフィスビルの五階だった。

泊まっていた天満からは、たった一駅で、鯖丸だったら迷わず走って行ってしまう距離だ。

淀川の向こうに広がる、日本最大の魔界が一望出来る。

驚いた事に、魔界の中を通り抜けて、電車が走っていた。

オフィスビルまで三人を案内したサリーちゃんは「うち、あの人が苦手やねん」と言っ、て、近くの喫茶店で待っている事に決めてしまった。

「だったら別に、ここまで送ってくれなくても良かったのに」

ジョン太は言った。

サリーちゃん、早起きは苦手らしく、さっきから欠伸をしている。

「だって、四国の田舎から来た人らだけで、電車にちゃんと乗れるか心配で」

「どんだけ田舎者じゃ、俺ら」

ジョン太は突っ込んだが、自動改札機でもたもたしていた鯖丸を思い出して、そこで止めた。

地球に来て以来、修学旅行と部活の試合以外で地元を離れた事がない鯖丸は、めずらしそうに辺りを見ている。

「大阪って都会だねえ」

とか、当たり前的事を感慨深げに言っている。

「まあ、都会だけど」

アメリカの都会に、けっこう長く住んでいたジョン太は、別に何の感慨もないので、宇宙の田舎者を引率して、さっさとエレベーターに乗った。

トリコは、何度も来た事がある場所なので、慣れた感じで後に続いた。

三人を待っていたのは、トリコの予想通り浅間という青年だった。「久しぶりだな…」と、トリコに一言云って、後の二人に目をやった。

「西谷魔法商会では、一番腕利きのコンビだと聞いたが…」

三人に、向かいに掛けるよう勧めて、自分も座った。

仕立てのいいスーツをかつちり着込んでいるが、荒っぽい事を生業にしている雰囲気は、消せていない。

けっこう男前だが、魔法使いでなければ、ヤクザに見えるタイプだ。

「君が鯖丸か。民間のランクSは、今の所国内で四人だけなんだが」四人の中には、もちろんトリコも含まれている。

「我々の組織に加入した経歴がないのは、君だけだ。学生だと聞いているが、どうだね、三年ならそろそろ就職活動に入っているはずだが」

「お断りします」

椅子にかける前に、鯖丸は即答した。

「魔界関係の仕事に就く予定はありません」

「まあ、気が変わったら、何時でもおいで」

浅間は、その話は一応終わらせて、三人を見た。

「依頼の内容は聞いていると思うが、トリコが居るのでは、話が変わる」

顔の前で組んでいた両手を、ぐっと握った。

両手の指に、シルバーのリングがはめられている。

お洒落もあるだろうが、明らかに魔力を増幅させるアイテムだ。

「めんどくせえんだよ、トリコ。何時まで俺の邪魔をする気だ」

「別に。貴様にやましい所があるから、邪魔だと思うだけだろう」
クッションの効いたソファーに深くかけて、トリコは鷹揚に言い放った。

「それより、仕事の話をしようや、龍ちゃん」

姐さん、かっこいいー。

ジョン太と鯖丸は、同時に思った。

浅間は、舌打ちしたが、話を続けた。

「ハンニバルを確保しろ。中身も同時にだ。生きていても死んでもかまわんが、確実にだ。」

ただし、トリコから聞いた話はオフレコだ。情報が漏れたら、只では済まないと思え」

「ええー、何の話ですかあ。俺、バカだからわかんないー」

鯖丸は、憎らしい感じで言った。

こっちの仲間じゃなかったら、殴り倒したくなる口調だ。

「挑発すんなよ。大人の対応で行こうぜ」

ジョン太は、その気もないのに一応なだめた。

「まあ、そっちが法規を越えて仕掛けて来るんなら、こっちもそれなりの対応はさせてもらうけどね。昔のコネも色々あるし」

浅間は、少しの間、黙り込んだ。

「何で、お前みたいな奴が、ここに居るんだ。魔法も使えないくせに。」

木星戦争の英雄も形無しだな、ウィンチェスター中尉」

「そんな大昔の話、持ち出すなよ」

ジョン太は、浅間の言葉をさらっと流した。

「依頼者の秘密は守る。仕事もきちっと片付ける。それ以外に何か希望があるか」

ジョン太に睨まれると、けっこう怖い。

「特にないが、契約書にサインしろ」

浅間は一瞬怯んだが、テーブルの上に置かれた書類を差し出した。ジョン太は、さっと雑に目を通してから、首を横に振った。

「十四行目と三十六行目を書き直せ。ふざけてるのか、お前ら」書類を投げ返した。

「依頼者にそういう態度は、良くないと思うが」浅間は言い返した。

「このまま通すなら、出る所出るぞ。告訴社会で育ったマイノリティーをなめるな。たちの悪い人権擁護団体や弁護士なら、山程知り合いが居るぞ」

はったりかも知れないが、本当に居そうで怖い。

「くそっ、ハイブリットがいい気になりやがって」

浅間はうなった。

「はい、今の録音しちゃった」

ジョン太は、ケータイをかざしてにやーと笑った。

「訴えたら、勝てるよ？」

「相変わらず、詰めが甘いなあ、龍ちゃん」

トリコは、気の毒そうにため息をついた。

「ま、仕事はちゃんとやるから」

ジョン太は言った。

「口出しはしないで、金だけ出せや」

物凄く悪い笑顔だ。

根性の悪さでは自信のあった鯖丸も、ちょっと引いた。

やっば、ジョン太ってすげえな…と、思った。

公認魔導士の事務所を出た所で、ジョン太はあーとため息をついた。

「やっぱり、繊細な俺には、こういうの向いてないんだよなあ」

「繊細という言葉の意味を、今ちよつと考えてる」

鯖丸は言った。

「お前の百倍くらいは繊細だよ」

ジョン太は反論した。

「大体、あの部屋の中、全員トリコの穴兄弟じゃねえか。引くわ、そんな設定」

「穴とか言うなー、棒のくせに」

トリコは、言い返した。

「そうだったのかー」

鯖丸は、今頃気が付いた。

「どうせ、てめえの男の数え方は、一本、二本だろうが」

最低な反論をしたジョン太は、鯖丸がまた、変な方向へ暴走し始めたのに気が付いた。

「じゃあ、あいつもライバル決定でいいんだね」

「誰彼構わずライバルにするな。あんな奴、とつくの昔に切れてるよ」

トリコは言った。

「昔は私もさ…若かったから、あんな奴でも、ちよつと男前だというだけで、いい気になってたんだ」

「俺だって、そこそこかっこいいよ」

バカは、張り合うつもりだ。

「うん。お前は、スタイルもいいし、背も高いから、遠目にはかっこいいよ」

トリコは、妥協案を出して来た。

遠回しに、顔が残念だと言っている。

「よーし、かっこいい俺参上」

変なポーズまで決めている。ていうか、人の話は最後まで聞け。バカは放っておいて、トリコはちよいちよいと合図して、ジョン太をかがませ、耳元で言った。

「浅間の動きには、注意してくれ。仕事の事もだが、あいつ鯖丸を強引にスカウトするつもりかも知れん」

ジョン太は、ちらりとバカを見た。

「欲しいか？あんなバカ」

言ったものの、自分が政府公認魔導士の要職にあったら、絶対欲しい人材だ。

「トラブルを起こして学校に居られなくしたり、就職先つぶして回ったりくらいは、平気でやる奴だ」

「まあ、あれもバカだけど、その辺はけっこう機転が利くから、大丈夫だと思うが」

ジョン太は、振り返って鯖丸の肩をぽんと叩いた。

「色んな奴に狙われて、人気者だなあ、お前」

「え…何が」

バカは怪訝な顔でたずねた。

喫茶店には、エンマ君とヨシオ兄さんが来ていた。

他にもう一人、ねずみ色の「背広」としか表現しようのないスーツを着た、小柄で地味な男が座っている。

髪の毛をびっちり七三に分けて、黒縁の眼鏡をかけている。

あまりにも没個性なので、かえって目立つ男だ。

若いのか年寄りなのか、それさえ分からない。

「こっちや、こっち。早よ座り」

サリーちゃんが、立ち上がって大げさに三人を呼んだ。

まだ若いのに、動作がすっかりオーサカのおばちゃんだ。

席に着いたジョン太とトリコは、コーヒーとカフェオーレを注文した。

鯖丸は、メニューを広げて思案している。

「ええと…ホーレンソウとベーコンのパスタと、エビピラフと、それから…」

テーブルの下で、トリコに向こうずねをがすつと蹴られた鯖丸は、

我に返って言い直した。

「あ、今のなし。ミルクティー。アッサムで」

お上品な注文に変えて、残念そうにメニューを閉じた。

「ジョン太は知ってる思うけど、二人は初対面やな。こちら、マイティーマウスの海老原さん」

ヨシオ兄さんが紹介した。

「どうも」

地味な男は、軽く頭を下げた。

トリコと鯖丸も、それに習った。

「トリコです。こっちは鯖丸」

「海老原です。本名やないから、魔界でもこの名前で呼んでください」

「海老原さん、本社で社長の次に偉い人だから」

ジョン太が小声で二人に教えた。

とてもそうは見えない。

今度の仕事は、ヨシオ兄さんが仕切っていると思っていたが、海老原さんが出て来ているという事は、本気の大仕事だ。

「ハンニバルが、今朝九時頃、十三大橋のゲートを通過して魔界に入りました」

海老原さんは言った。

新しい情報だ。

「正規のルートですか？どうやって」

ジョン太はたずねた。

「公認魔導士やった頃のパスポートを所持していた様ですね。外界の国際パスポート程、チェックは厳しくないですから」

トリコの様に、正式に辞める場合は、公認魔導士のパスポートを返却して、一般で取り直す事になるが、行方不明になっていたハンニバルは、当時のパスポートをそのまま所持しているらしい。

たいがいのゲートでは、係員はパスポートの詳細まではチェックしないのが常だ。

「私らも、午後から魔界に入ります。皆さん、十二時までに準備を整えて、ゲートの前に来てください」

カップの底に残った紅茶を飲み干して、海老原はクラッチバックを片手に、席を立った。

「昼食は、打ち合わせを兼ねて、向こうで取りますんで」
鯖丸の方を、ちらと見た。

「それまで、あんまり買い食いとか、ひらい食いとか、せんようにいくら食い意地の張った鯖丸でも、ひらい食いはしなと思う。

海老原は、その場で何秒か立ち止まっていたが、ため息をついて伝票を手にとった。

「田舎の人は、誰も突っ込んでくれん」

「ええ？今の、突っ込む所だったんですか」
鯖丸は驚いた。

ここで驚いたら、普段日常的にひらい食いしてるみたいじゃないか：と、ジョン太は思った。

いや：それに近い事は、しているかも。

「すいません、こいつ天然ボケなんで」

どうして、オーサカ本社の人間と付き合うには、お笑いのスキルが必要なんだ：と、釈然としないままジョン太は言い訳した。

アメリカ人に関西のお笑いを強要する、本社の芸風が、理解出来ない。

そこそこ付き合えている時点で、もうすっかり同類：：というか、本社の誰も、ジョン太が日本人じゃない事なんか、認識していない事実を、本人は知らなかった。

関西人にとって、関西人以外は、外人と同じなので、些細な問題だ。

「あ、海老原さん。病院行くなら、僕も行きますから」

ヨシオ兄さんは、あわてて席を立った。

「病院って：？」

今朝既に、病院のお世話になった鯖丸は聞いた。

「ハルオ兄さんと、キャットさんが、入院してるから」
エンマ君が、説明してくれた。

「キャットさんは、海老原さんの相方で、奥さんやね」
本社の怪我人は、軽傷のエンマ君を除けば、その二人らしい。

「僕らも行けど、君らはどうする？」

「ああ、行きます。ハルオ兄さんは、俺が怪我した時、応援で来てくれたから、挨拶くらいはしておかないと」

鯖丸は言った。

ジョン太もうなずいたので、ハルオとは全く面識のないトリコも、同行する事になった。

病院は、梅田から三駅離れた場所にあった。

十キロ以内は徒歩圏内だと言いつける鯖丸には、公共の交通機関を使わなくても行ける、全然近所だ。

「田舎の人は頑丈やねえ」と、サリーちゃんは言った。

「頑丈なのは、こいつだけだから」

ジョン太は、説明した。

「普通の田舎人間は、車がないと生活出来ないから、些細な移動にも車を使い続けて、足腰弱ってる。

都会の人の方が、駅まで歩くから、まだ丈夫だ」

徒歩五分の場所にも、車を出すのが田舎人間の特徴だ。

エンジンをかけて、車を出して駐車場に入れる手間を考えたら、絶対、歩いた方が早いのだが。

「うちの嫁なんて、最近十分以上、歩いた事ないと思う」

「歩けや、十分くらい」

ヨシオ兄さんに怒られた。

「ナースだから、仕事中はいっぱい歩いてると思うよ」

ジョン太は言い訳した。

「お前ん所の嫁はん、ナースやったんか」

ヨシオ兄さんは、意外そうに言った。

秘密ではないが、誰も聞かないから、特に公表はしていない。

病院関係には詳しくそうなジョン太と、地球に来て以来、低重力症と、解離性同一性障害の治療で、病院からは縁の切れなかった鯖丸は、病院内の構造に慣れているらしい。

初めて来る病院内で、迷わず受付で聞いた場所に近付いた。

ヨシオ兄さんは「わし、ダンジョン苦手やねん」とか言って、何度も来た場所で迷いそうになっていた。

近付いた所で、鯖丸は顔をしかめた。

重症患者しか扱わないエリアに、入ってしまったからだ。

そんなひどい怪我人が出たとは、聞いていなかった。

「あの：これ、集中治療室：」

「集中せんと、治るもんも治らんやろ」

気合いを入れればカメハメ波が出せると言い切る小学生と、同じレベルの事を、ヨシオ兄さんは言い切った。

賛成してあげたいが、集中治療室に入る様な人に、精神論は通用しない

「ええかげんにせえや。わしをピン芸人にするつもりかあ」

ヨシオ兄さんは悪態を付いたが、ベッドの上で寝続けている男は、何の反応も無い。

ハルオさんって、こんな顔だったかなあ：と、鯖丸は思った。

全然記憶がない。

海老原さんが、別の病室から出て来た。

普通の入院患者が居る部屋だ。

キャットさんとかいう人は、ハルオ兄さん程重傷ではないらしい。皆で見舞いに顔を出そうとしたが、海老原さんは止めた。

「うちの奥さん、人見知りでしてね。お気持ちだけありがたいいただきますわ」

じゃあ行きましようかと言って、病院の廊下を、先に立って歩き出した。

ハルオ兄さんが、思っていたよりひどい状態だったので、鯖丸は少しショックを受けた様子だった。

危険な仕事をしている自覚はあったのだが、今まで、周囲で死にそうな怪我人が出た事は無かったし、魔法でどうにかなると思っていたのだ。

海老原さんに、電車で行くか、車に同乗して行くか聞かれた時も、ぼんやうなずいていたので、電車組に組み込まれてしまった。

本人的には、きっと歩いて行くつもりだったに違いない。

電車は、魔界の中で降りるチケットだけ、通り抜けて向こう側の外界に出るチケットと、購入方法も手続きも違っていた。

手続きが終わるのを待っている間に、トリコは「ちょっと…」と云って、駅中のテナントを見に行ってしまった。

けっこう有名なブランドや、老舗の菓子屋等も入っている。

「女性の買い物は、長いですからねえ」

海老原さんはため息をついたが、トリコは五分くらいで戻って来た。

ドラッグストアの袋と、可愛いリボンの付いた、クリスマスっぽい紙袋を持っている。

紙袋の方を鯖丸に「はい」と言って渡し、ドラッグストアの袋は、自分のショルダーバッグに仕舞った。

「えーと、何」

渡されたうすっぺらい袋を、鯖丸は怪訝そうに見た。
軽くて柔らかい。

「お前、いつも薄着で、襟のない服ばかり着てるだろう。巻いとけ」

袋を開けると、芥子色のマフラーが入っていた。

「わあ、もしかしてクリスマスプレゼント？初めてもらった」
すごく嬉しそうな顔で、首に巻いている。

通常の女は、ドラッグストアに買い物に行くついでに、五分でクリスマスプレゼントを買ったりはしないと思う。

単に、勘違いでラッピングされたんじゃないのか：と、ジョン太は思ったが、トリコのやる事なので、本当の所は分からない。

「ええ品ですね。カシミヤやないですか」

海老原さんは誉めてから、関西人が必ず言うセリフを口にした。

「で：なんぼしました？」

「50パーオフから、更に千円引き」

トリコは、勝ち誇った様に言った。

「そゆこと、もらった本人の前で言うなよ」

ジョン太は止めたが、本人は気にしていない様子なので、生暖かく見守る事にした。

電車は、川を越えて魔界の外縁に入った。

四国の魔界と違って、都市部にある為か、出現したのが二十数年前と、比較的新しいせいか、随分様子が違う。

外界には持ち出せない武器や備品の保管は、倉庫にあたる様な建物は無くて、普通にビルの一部を借りているらしかった。

別に、魔界関係の業種がテナントに集まっている訳でもなく、上下をお好み焼き屋と美容院に挟まれた、良く分からない構成になっている。

鍵を開けて中に入ると、十畳間二部屋程の室内は、様々な荷物や備品で半分方埋まっていた。

「狭っ」

土地が余っている田舎の倉庫の様には、いかない様子だ。

入り口近くのスチール机に、中四国支所からの荷物がきちんと乗っていた。

陸路を来たので、船に乗った人間より先に届いている。

ジョン太は、箱を開けて荷物のチェックを始めた。

鯖丸の刀がかさばるので、嫌に縦長い段ボール箱から、見慣れた装備が取り出された。

一通り点検したジョン太は、普段地元で仕事をする時と違って、

服は着替えないで装備だけ身に着けた。

「おーい、所長が延長ケーブルまで送って来てるぞ。お前これ、持って行くのか？」

どちらかというと、送ってくれたと云うより、詰め物の代わりにされていたケーブルの束を、ジョン太は取り出した。

「ううん、必要だったら取りに戻るよ。変換プラグだけ持ってく」さすがに十メートルもあると、ケーブルも相当かさばる。

変換プラグの入ったケースをポケットにねじ込んで、鯖丸は刀を背負った。

海老原さんは、特に装備品は使わないタイプの魔法使いらしく、入り口の近くで待っていた。

トリコが、奥で着替えて来ると言う「では、外で待っとなりますよ」と、出て行った。

中々紳士的だ。

ジョン太と鯖丸も外の廊下で待っていると、身支度の早いトリコは、すぐに出て来た。

「ほな、下の店に行きましょか。みんな待っとなります」

海老原さんは、先に立って階段を下りた。

一階のお好み焼き屋に、サリーちゃんとエンマが席を取って、既に何か焼いていた。

ヨシオ兄さんの姿が見えない。

「兄さん、先に行って痕跡を見付けて来る言うてな」

「ああ、彼は追跡系の特殊スキルを持ってますから」

ジョン太は知っていたが、海老原さんは鯖丸とトリコに説明してくれた。

「お昼を食べて、吉報を待ちましょ。ああ、お姉さん、ネギ焼きお願いします」

「俺もネギ焼き」

ジョン太は、便乗した。

「豚キムチ焼きそば」

トリコは言った。

「えーと、豚玉そば入り。大盛りって出来るの？」

「出来ますよー」

店のお姉ちゃんは答えた。

「じゃあ、それとごはん」

鯖丸、食う気満々だ。

「ごはんは普通でいいからねー」

そんな事、別に念を押さなくても…。

「相変わらず食うね、君」

エンマ君はばやいた。

「何言ってるんだ。君、弱った怪我人の状態のこいつしか、見てないだろ」

ジョン太は言った。

「これでも最近、少し小食になったんだよ」

「うわー、体育会系って、怖っ」

「普通だよ、これくらい」

鯖丸は、ぶつぶつ言った。

腹が減った状態で、目の前で焼いていると、けっこう待ち時間は長い、いい塩梅だと云う感じで、海老原さんは打ち合わせに入った。

「ヨシオ君が痕跡を見付けて来たら、追跡に入りますが…」

中四国支所からの助っ人三人を、一人一人見て、話を続けた。

「正直、ハンニバルの確保は、君ら三人でやってもらわんとあきません」

その為に呼ばれたのは、充分に分かっていたので、三人はうなずいた。

「あれは、ハンニバル本人の物質系魔法と、殿の弟子とか云う異界人の、空間操作魔法を同時に使います。

どない早よ動いても、距離を詰められて、お手上げですわ」

海老原さんの二つ名、マイティーマウスは、伊達ではない。

破壊力では鯖丸の方が上だが、純粹にスピードだけなら、海老原さんが圧勝だ。

魔力ランクはA3（ランクA中、五段階で）だが、スピードのある魔法使いは使い勝手がいいので、ランクSと互角に戦えるランクAとして、けっこう有名だ。

それが、お手上げだと言っている。

船の上で、すべる様に移動して来たハンニバルを思い出して、鯖丸はぞっとした。

外界では、魔法が使えなくても対処出来る範囲内だったが、魔界であれが、どの程度の距離を操作して縮めて来るのか、予想が付かない。

たぶん、ジョン太なら対応出来るだろうけど…。

目が合うと、ジョン太は少し、居心地の悪そうな顔をした。

ジョン太はジョン太で、何か考えている事があるらしい。

「あのー、こんな時、悪いんだけど」

皆を見て、ジョン太は言った。

「今の戦力じゃあ、收拾がつかない様だったら、俺、魔法使える様にするから」

ジョン太が魔法を使えない事は、皆、知っていた。

この業界内では、けっこう有名だ。

「ちょっと時間くれ」

「ジョン太、自分の言ってる事、分かってる？」

鯖丸は聞いた。

「まあ、お前が分かってる程度にはな」

ジョン太は答えた。

先にごはんが来たので、一緒に来た漬け物と、ほぼ焼けた部分のそば入り豚玉をおかずにしながら、鯖丸は言った。

「トリコ抜きでリンク張ったら、絶対^{アキラ}暁が出て来るよ」

「出すな。本気になれば止められるだろ？お前」

「まあ」

本当に、止められるらしい。それを聞いて安心した。

「何で、この娘とリンクせえへんの。その方が楽やろ」

サリーちゃんが聞いた。

「一回失敗してるし、急ぐなら、今はちよつと…」

トリコは、ぶつぶつ言った。

「本当は、あと四五日余裕あるはずだったんだけど、なんか急に生理になっちゃって」

一緒に暮らしている鯖丸はともかく、嗅覚が犬並みのジョン太にも、もれなく知られてしまうのが、ちよつと嫌だ。

まあ、ジョン太も別に知りたくないのは分かっているので、仕方ないと思うが。

ていうか、おぢちゃん排卵日まで分かっちゃおうらしく、今回ちよつとずれ込むのも、事前に知らされてた。

便利だが、釈然としない。

「日程に余裕があるなら、終わってから…」

「無いよ」

ジョン太は言った。

「だってあいつ、段々腐って来てるから」

恐ろしい事を言われて、トリコは固まった。

体を取り換えたがっているのは分かっていたが、乗っ取られているとはいえ、ハンニバルが本当に死んでいると宣告されたからだ。

じゃあ、時々出て来るあの海斗は、誰なんだ…。

いや…痕跡なのは、ちゃんと分かっていた。

認めたくなかっただけだ。

とにかく、ヨシオ君の帰りを待ちましょつと、海老原さんは言つて、上品な仕草でネギ焼きを食べ始めた。

皆が一通り食い終わる頃、ヨシオ兄さんが戻って来た。

「見付けたでえー。おっ、わしの分も焼けてるやんか」

席に着こうとしたヨシオ兄さんを止めて、海老原さんは立ち上がった。

「行きますよ」

「殺生な、食わしてくれえ」

「おっちゃん、これ包んで。それとおあいそ」

サリーちゃんが、鉄板の隅に焼き上がっているお好み焼きを指差した。

「まいどおおきに」

サリーちゃんから、五千円札を受け取ったおっちゃんは、小銭を寄越した。

「はい、おつり三十万円」

大阪のお金の単位が分からない。

刀を手にとって店を出かけた鯖丸は、ヨシオ兄さんに捕まった。

「わし、これ食うよって、君が運転してくれや」

ランエボの鍵を渡された。

スポーツカータイプの車は、運転するのも乗るのも、初めてだ。

「はい…」

外へ出ると、赤いスポーツカーと、丸っこい小型車が、道端に堂々と路駐してあった。

周囲は大半がそんな感じで、道路の半分が埋まってしまっている。外もそこそこひどかったが、魔界の中なので警察が居ないせいかな、無法地帯だ。

いつも座席の高い四駆にばかり乗っていたので、低い位置の運転席に乗り込もうとした鯖丸は、入り口でしこたま頭をぶつけた。

普段ならあいたた…で済む所だが、今朝額を縫われたばかりなので、超痛い。

「いやー、君は本当に、おいしいとこしっかり押さえとるなあ」

ヨシオ兄さんは、頭を抱えて悶絶している鯖丸に言った。

「天然はズルいで、ほんま」

欲しかったら、こんなポジション、いくらでも代わってあげるのに……と、涙目になりながら鯖丸は思った。

どうやら、後ろの小型車は、運転手がエンマ君に決まっているらしく、迷わず運転席に乗っている。

残ったメンバーをざっと見たヨシオ兄さんは、二つの車に人を振り分け始めた。

「えーと、ジョン太とわしとサリーちゃんはこっち。海老原さんとトリコ姉さんは向こう」

きちんと中四国支所からの助っ人のデータには目を通していろいろ、トリコが実際は子供ではない事は、分かっているらしかった。姉さんと呼んでいるから、意外とヨシオ兄さん、見た目より若いのかも知れない。

「いや、トリコこっち乗れ」

ジョン太は、トリコとサリーちゃんを取り替えた。

「魔界に入ったら十キロちょっと重くなるだろ。サリーちゃんと海老原さんの方が軽い」

車の馬力に合わせて、メンバーを振り分けていたらしい。

「お前は、私の個人情報をも、何だと思っているんだ」

トリコは、ジョン太を睨んだ。

「太ってるとは言ってねえよ。乳が重いだけだろ」

更にいらん事を言ったジョン太は、殴られた。

皆で車に乗り込んで、元々は結構広いはずなのに、路駐と不法投棄や変な屋台でごちゃごちゃした道を走り出した。

四駆と違って、けっこうシビアな設定になっている車を楽々と転がしている鯖丸を見て、安心したらしいヨシオ兄さんは、助手席で好み焼きを食い始めた。

後部座席では、携帯が通じる間にと、トリコが由樹に電話をかけている。

「そうか、もう友達出来たんだ。良かったな。……うん、しばらく電話通じないけど、あんまりゲームばかりして、夜更かししない様

にな。：分かった。いつもごめんな」

電話を切って、ケータイの電源も落として、ポケットに仕舞った。境界が目の前にあった。

人によって、見え方には差があるが、四国の魔界と、基本的には変わらない。

ただ、市街地を横切って広がっているので、見た目にはかなり違って見える。

車が境界を突き抜けた。

いつも通り、トリコの外見が変化した。

ジョン太と鯖丸は見慣れているが、ヨシオ兄さんは、おお…という顔で、後部座席を振り返った。

「トリコ、頭痛いから、ちょっと治しといて」
車を運転しながら、鯖丸は言った。

「うん」

後部座席から手を伸ばして、後頭部に触れた。

鯖丸は、頭に巻いた包帯とガーゼをむしって、その辺に放り出した。

それから、車を運転しながら、ポケットから病院で処方してもらった薬を取り出した。

「鎮痛剤入ってるけど、使う？俺、もう要らないし」

「ああ、もらっとこうかな」

トリコは、薬の袋を受け取って、ちょっと顔色を変えた。

「お前、本名が書いてある袋とか、魔界に持って来るなよ」

「あ、しまった」

ジョン太が、横から袋を取り上げた。

中身だけ出してトリコに渡し、手の中で薬局の紙袋をぐしゃりと握りつぶして、ちよっと力を込めた。

手の平の上で、小さな紙の固まりが燃え上がった。

あっという間に灰になったそれを窓から捨てて、ジョン太はため息をついた。

「気を付けろよ。ハンニバルに本名知られたら、洒落にならんし」

「いや：ジョン太。あんた今、魔法使こてなかったか」

ヨシオ兄さんが、驚いた顔で言った。

魔法が全く使えないのが、ジョン太のいい所でもあるし、欠点でもある。

「本社には報告しとらんやろ。どういう事になってん、あんた」

「微妙」

ジョン太は言った。

トリコとリンクを張るのに失敗して以来、本当に微妙な程度の魔法は、使える様になってしまった。

魔力のランクとしては、最低なので、百均のライターを使った方が大きな火を起こせる程度だ。

別に、使えても使えなくても、大勢に影響はない。

「微妙でも、魔法使えたら、社長の態度も変わるのに」

ヨシオ兄さんは言った。

「微妙なら、使えない方がましだ。その分魔法防御が下がってるからな」

うんざりした感じで、ジョン太は言った。

五話 三匹（後編）

車は、市街地を走り続けた。

助手席でお好み焼きを食いながらナビゲートするヨシオ兄さんの指示で、ランエボはどんどん、魔界の深い場所に近付いていた。

うっかり、普通に運転していて、後から気が付いたが、後ろに居る丸っこい小型車が、普通にランエボに付いて来ている。

「何だ、あのちっちゃい車。速っ」

鯖丸はつぶやいた。

「そら速いわ。あれ、アバルトやで」

ヨシオ兄さんは言った。

「カリオストロの城で、ルパンがカーチェイスしとったやろ」

「ああ、あれ」

なぜか鯖丸は知っている。

マイナーコロニーでは、娯楽が少ないせいか、昔のマンガや映画やアニメが、けっこう配信されているのだ。

リアルタイムの通信と違って、配信に時間がかかっても特に不都合はないので、意外と普及している。

「あの、ターボみたいなやつは、付いてるの？ まくるぞーとか言う時の」

「それは、宮崎監督の創作やないかなー」

ヨシオ兄さんは言った。

「よう知らんけど」

関西人定番の言い訳を口にした。

創作なのか改造なのか分からないが、後ろにいるアバルトは、別にターボブースターを発動したりはしないで、それでもランエボについて来る。

魔界の深い場所に入ると、周囲の風景が変わった。

もうここは、普通の街ではない。

見捨てられ、廃墟になった住宅街と、胡散臭い連中が住み着いた繁華街が、モザイクの様に道路の両側に展開していた。

外縁部に居た観光客も、もう見えない。

胡散臭いプレイヤーと魔界人だけの、本当の魔界都市だ。

「この辺や」

ヨシオ兄さんは、指示を出して車を止めた。

境界からは、もう十キロ近く移動している。

普通の魔界なら、中心地に入っている頃だが、日本最大の魔界では、まだ中間地点だ。

ハンニバルの痕跡は、ジョン太にも分かった。

船で会った時より、ひどい状態になっているが、魔界に入って魔力でコントロール出来る様になったせいかな、想像していた程は、腐敗が進んでいない。

ヨシオ兄さんの特殊能力「追跡」は、ジョン太の様な匂いを追う物理的な物とは違うらしく、左右に逸れているジョン太を無視して、直線コースを辿った。

ジョン太も、ヨシオ兄さんの能力は分かっているらしく、自分の感覚はとりあえず無視して、後に続いた。

後ろの車から、海老原さん達が降りて、追いついて来た。

グレーのスーツを着た海老原さんと、キャバ嬢っぽいサリーちゃんが並んでいると、どここの同伴出勤かと思ってしまう絵面だ。

魔法陣で車を隠していたエンマ君は、後から走って来た。

以前魔界で見た、男のエンマ君になっている。

外では、ざっくり着ていたワンサイズ大きい革ジャンが、ぴったりになっていて、中々かっこいい。

「この辺におるんか？」と、聞いた声も、外とは全然変わっている。

「そのはずやけど…」

ヨシオ兄さんは、腕組みした。

「近距離の特定は、精度が落ちるから、後はジョン太に任すわ」
「分かった」

ジョン太は、しばらくその辺をぶらぶら歩いていたが、ふいに手で合図して皆を止めた。

「見つかる。バラけて隠れろ」

「ううん、うちが隠す。集まって」

サリーちゃんに手を握られたエンマ君と海老原さんの姿が、あっという間に視界から消えた。

見えない場所から伸びてきた手が、トリコを掴んであっという間に消し去った。

おろおろしていた鯖丸は、ぐいと後ろに引っ張られた。

自分の体が、どんどん見えなくなっていく。

「ジョン太も、早よ」

見えない手がジョン太を触ったらしかったが、微妙に半透明になってから、元に戻った。

「やっぱ、ジョン太は無理やったわ」

近い場所から、声だけ聞こえた。

ジョン太は、そんな事最初から分かっていたという顔をして、すっと物陰に隠れた。

目線の先に、ハンニバルが居た。

道端にごつい大型バイクを停めて、ぼんやりと空を見上げている。何が目的か分からなかったが、こちらに気が付いている様子もないし、寛いでいる感じだった。

もう少し近付いてみたかったが、自分の体が見えないと、意外に行動が不自由だ。

おそらく、サリーちゃんから離れると、見える様になってしまうのだろうが、肝心のサリーちゃんが何処に居るのかも、分からない。ハンニバルは、周囲をゆっくりと見回した。

こちらに視線が来た時、ぞっとしたが、視線はそのまま素通りし、ぐるりとビル街を一巡りした。

それで納得したのか、近くの店で、水と食料を少し買い込み、バイクに跨ってエンジンをかけた。

死んでいても食事は必要なんだろうかと、鯖丸は思った。

殿が、酒を飲んだら酔っぱらっていた様に、何か概念的に必要なのかも知れない。

ハンニバルが走り去ると、サリーちゃんは皆のステルスを解いた。青い顔をして、かすかに震えている。

ハルオ兄さんが重傷を負わされた時、近くで見ているのだろう。怯えた表情だ。

「穴の方に行ったな」

ヨシオ兄さんが、緊張した顔で言った。

「俺を乗っ取るのに、都合のいい場所を探してるのかも」
鯖丸は言った。

「何か、操れる様な物や障害物が多くて、穴に近い場所」

「この先にあるなあ」

ヨシオ兄さんは、答えた。

「行ってみるか？」

あまり気は進まない口調だった。

更に奥へ進んだ所に、その場所があった。

既に大阪府から兵庫県に入っている。

何か、大きな建造物を建てようとした形跡はあったが、全てが途中で放棄され、積み上げられた資材と、放置された重機が、組み上げられた鉄骨の周辺に点在している。

目と鼻の先に、異界へ通じる穴があった。

関西魔界の中心部だ。

この地域が魔界に飲み込まれた時、工事が中断したのだ。

魔界の周辺部なら、それなりに住民も居るし、観光価値もあるのが、工事は続けられただろうが、こんな穴の間近に残っている人間は、ほとんど居ない。

普通の人間には、住めないからだ。

魔力の高い人間の方が、魔法防御は低い、異界に対する耐性は

高い。

それでも、かなりの違和感があった。

このメンバーの中で、一番魔力が高いのは自分とトリコだという事は、分かっていた。

自分が違和感を感じるという事は、他の人達は、もっと異常な状態にあるという事だ。

一番魔力が低そうだったサリーちゃんは大丈夫だろうか：と、振り返って、本気で並外れて魔力が低いのは誰だか、やっと思ひ出した。

ジョン太が大変な事になっている。

元コンビニだった建物の壁にもたれて、変な感じで斜めになっていた。

「何だ、これ。真っ直ぐ立てねえ」

重力が、異界の穴にある様な姿勢になっている。

そのままずるずる、穴に向かって微妙に引きずられていた。

ジョン太の魔力が低い事は、もちろん分かっていたが、いつも魔力が高い人間以上の事を、さらっとやってのけるので、気を使ったり心配したりする習慣は無かった。

「大変だ」

ジョン太の腕を掴んだが、ほんの少しずつ、じりじりと穴に向かって引きずり込まれる力は、止められなかった。

魔力を通して、重力操作で引き戻そうとしたが、全く別の力が働いているのか、ジョン太の体は軽くなったが、止められない。

「トリコ、簡易接続って、どうやるんだ」

ジョン太の体を抱えたまま、鯖丸はたずねた。

一時的に魔力を上げれば、こんな状況は、楽に突破出来る。

「私がやろうか？」

トリコは聞いた。

鯖丸は、ちょっと考えた。

実は、生理中の方が、魔力が上がるのだが、動作が安定しない。

不慣れな自分が接続するのと、どちらが安全か分からない。

「どっちがいい？」

一応、聞いてみた。

「それは、鰐丸わにまるにやらせるのが一番確実だが」

トリコは、ジョン太にとって大変都合の悪い結論を出した。

「鰐丸だと腰が引けちゃうかも。私がやると、事故る可能性がゼロじゃないし」

「ダメだあ。トリコでお願いします」

ジョン太は泣きを入れて来た。

「安全第一。鰐丸、お願い」

鰐丸は、がしっとジョン太を抱き留めたが、次の瞬間鰐丸に変わっていた。

「いやーん、ジョン太から呼んでくれるなんてー」

「呼んでねえー」

叫んだ次の瞬間に、唇を塞がれた。

鰐丸の存在を知らなかった本社の人達は、呆然と二人を眺めた。

鰐丸と鰐丸の記憶は、どの範囲までだか分からないが、ある程度共通らしい。

簡易接続した時の、トリコとジョン太の状況は理解しているらしく、同じ状態を再現している。

当時の鰐丸は、理解していなかった様な事まで、鰐丸が把握しているのは、ちょっと驚いた。

表層に接続して、繋いで引き上げる。

やっている事は、トリコと同じだが、感触が全然違う。

というか、同性に抱きかかえられてキスされているという、嫌な状況さえ無ければ、接続自体はトリコより簡単だ。

あっという間に、以前殿と戦った時より高いレベルまで引き上げられていた。

世界が一変した。

穴に引かれる引力が消失し、周囲の空間に対する感性が、格段に

鋭くなった。

ジョン太は立ち上がろうとしたが、その場に膝をついて座り込んでしまった。

両手で自分を抱えて、体をくの字に曲げたまま、俯いている。

「どうした、ジョン太」

鰐丸が、ジョン太の肩に手をやって、顔を覗き込んだ。

毛皮のせいで顔色は分からないが、辛そうな表情だ。

「気持ち悪い……」

ジョン太は言った。

「そこまで？ 傷付くなあ」

鰐丸はつぶやいた。

「お前のせいじゃねえよ。魔力が上がったから、たぶんすぐ治る」
鰐丸に肩を借りて、無理に立ち上がった。

「大丈夫か？ 気持ち悪いなら吐いた方が楽になるけど」

肩を貸したまま、ジョン太の背中をさすりながら、鰐丸は言った。
何時になく嫌がられないでジョン太に触れるので、ワニ君大喜び
なはずだが、本気で心配そうな顔になっている。

「断る」

おぢちゃん見栄っ張りなので、これ以上人前でかっこ悪い所は見
せたくないらしい。

鰐丸の手を振り払って、普通に立ち上がり、周囲を見回した。

「二キロくらい向こうに、ハンニバルが居る」

何だか把握出来ない状況になっていたので、呆然としていた本社
の人は、はっとした様子だった。

「あのバイクなら、二三分で来る。安全圏に出て、隠れよう。ここ
なら……」

ジョン太は、周囲を見回し、離れた場所にある廃ビルの一つを指
差した。

「あれがいい。先に行ってくれ。俺は、この辺ちょっと調べて追
いつくから」

「ジョン太が言うならそうするけど、大丈夫なんか」

ヨシオ兄さんは聞いた。

「行きましょう」

海老原さんが皆をうながした。

「急がな、二三分ではあの場所まで行けませんよ。君も…」

変わってしまった鯖丸を、どう呼んでいいのか分からないらしく、そこで言葉を止めた。

「一緒に来なさい」

「嫌だね」

鰐丸は、ジョン太の腕をぎゅっと掴んだ。

「俺は、ジョン太と一緒に、後から行く」

「ハンニバルに見つからないで追い付けるなら、それでもええですよ」

海老原さんは言って、皆を促して歩き出した。

実際には、マイティーマウスの能力を使えば、二三秒で廃ビルまで着けるだろうが、全員を運ぶ力はないので、皆に合わせて歩いている。

瓦礫や廃材で、周囲の地面は荒れている。

直線距離を行けないので、本当に二三分かかりそうだ。

ジョン太は、穴の周辺を素早く移動して、時折屈み込んで何かしていたが、ふいに立ち止まって聞き耳を立て、鰐丸の所まで戻って来た。

「すぐ来る。行くぞ」

鰐丸を抱え上げて、移動しようとした。

「ジョン太、無理しちゃって」

鰐丸は、自分からジョン太の手を離して、地面に降りた。

「普通なら、まともに立ってられないだろ、それ」

心配そうな鰐丸の表情の向こうに、鯖丸がちらりと見えた様な気がした。

意地を張るのは、止める事にした。

「腹の中掴んでかき回されてるみたいだ。けっこうひどい」
普通に、状況を説明した。

「でも、お前一人ぐらい連れて移動するのは、無理じゃない。魔力が上がってる間に、これも回復出来る」

「分かった。でも、こっちの方が楽だろう」

いきなり、抱き上げられた瞬間、加速した。

鰐丸の魔法が、鯖丸とは全く違う事は、何となく分かっていたが、どう違うのかは理解していなかった。

こいつの魔力は、ハンニバルや所長と同じ、物質操作系だ。

個人的な特能としては、瞬間移動が使える。

殿と戦った時には、まだ技術的に荒削りだったのか、普通に速い攻撃にしか見えなかったが、一緒に移動すると、空間がスキップさ
れているのが分かる。

あつという間に、先行していた皆に追いついた。

皆の少し後ろでジョン太を降ろした鰐丸は、瞬間移動でちょっと
変な風にねじれてしまった服を整えた。

遠くで、大型バイクのエンジン音が聞こえた。

もちろん、ジョン太にはとくに聞こえていたのだが、普通の人間に聞き取れる距離になったのだ。

けっこう近いはずだ。

「早く行こう」

鰐丸は、ジョン太の手を取って、歩き出した。

魔力が上がっているせいか、鰐丸の考えや感情が、微妙に繋いだ
手から伝わって来る。

ちよつとエロい事を考えている様子だが、大半は無条件の好意と
信頼なのが意外だった。

自分が、そんなに他人に好かれるタイプだとは思った事も無かつ
たし、大体、鰐丸とはそこまでの接点もない。

そんな事をぼやぼや考えていたら、歩みが鈍くなってしまうたら
しい。

追い越して、顔を覗き込まれた。

「何、やっぱり抱っこして連れて行って欲しい？」

「絶対断る」

ジョン太は、走り出した。

「もう、意地っ張りなんだから」

鰐丸は、ジョン太の後を付いて走った。

「そこが可愛いんだけど」

「可愛いとか言うなー。お願いします」

早速泣きが入った。

皆で廃ビルに身を隠したほとんど直後に、ハンニバルが現れた。

「帰ってください、ほんとに」

ジョン太は、鰐丸を拝んだ。

元何かのオフィスだったらしい、二階の部屋で、皆はジョン太と鰐丸を囲んでいた。

ハンニバルは、穴の近くにバイクを停めて、のんびりした感じで寛いでいる。

キャンプ用のカセットガスストーブで湯を沸かして、わざわざ豆を挽いて入れたコーヒーを飲んでいる。

くつろぎ過ぎていて、何となく憎い。

こっちは、こんな場所で何時間も過ごす予定は無かったので、皆軽装だ。

食料どころか、飲み水もほとんど持っていない上に、サリーちゃん、タイツは履いているとはいえ、ミニスカートでハイヒールだ。関西魔界での仕事は、普段なら冬場でも、これで事足りるのだから。

「いっぺん戻った方がええな。少なくとも、ここでハンニバルを長時間見張るのは、無理や」

ヨシオ兄さんは言った。

「我々が、いずれは接触せざるを得ないのを知って、待っとなるんで

しょうが」

海老原さんは、言った。

「もうちょっと離れたいですね。暗なったら、移動しましょうか」
それから、鰐丸に向かっていつも通りの冷静な口調で言った。

「早よ鯖丸君に戻ってもらわんと、困るんですが」

「勝手に呼んでおいて、用が済んだらすぐ帰れかよ」

鰐丸はぶつぶつ言った。

「どうせ、ジョン太の簡易接続は、あと五分ぐらいで切れるから、それからでいいだろ」

「あ、しまった」

トリコが、急に気が付いた様子で言った。

「簡易接続が利いてる間に、ここから離れないと、ジョン太がまた、大変な事になるぞ」

「早く言え、そう言う事は」

一時的に魔力が上がって、違和感も不快感も感じなくなったせいで、本人もすっかり忘れていたらしい。

「車を隠してある場所に戻る。近くに会社の常宿があっただろ。あそこで連絡取れる様にしとくから」

「俺も行く」

鰐丸が、刀を掴んで立ち上がった。

「囃のお前が別行動して、どうするんだ。皆と一緒に居ろ」

ジョン太は、命令口調で言った。

鰐丸は、ちえっという顔をして、あっという間に鯖丸に戻った。

「えーと」

皆が注視しているのに気が付いた鯖丸は、開き直った。

「まあ、大体こんな感じなんで、俺」

「魔力が高いと、色々大変なんや」

エンマ君はうなずいた。

「魔力の高さとは関係ないよ」

同じランクSのトリコは、否定した。

ジョン太が一人で、穴の周辺から離れてしまったので、皆はハンニバルの様子を見ながら、移動するチャンスを窺っていた。

魔法を使えば、物音を立てないで移動する方法はいくらでもあるが、ハンニバルに感知されるだろう。

魔法も使わないで、マンガの忍者みたいにほいほい移動出来るのは、ジョン太くらいだ。

「ちょっと困った事になりましたねえ」

海老原さんは、腕組みした。

「夜になったら、移動出来るやろ。幸いあいつ、身体能力は普通やし、夜は寝るからな」

本社の人間だけで追跡している間に、それくらいの事は調べが付いているらしい。

逆に言えば、多大な被害を出して、その程度しか分からなかったという事だ。

「移動手段の事やないです」

黒縁の眼鏡を指先で押し上げて、海老原さんは言った。

「この場所にハンニバルが留まり続けたら、ジョン太が戦力外になつてしまいます」

ちよつとどころではない大問題だ。

「彼抜きで、あれと戦えますか？」

「無理」

鯖丸とトリコは、同時に言った。

「四になってあいつをこの場所から引き離すか、ジョン太の魔力を上げるか…どっちにしろ、お前がやるしかないが」

トリコは聞いた。

「どっちがいい？」

どっちも、出来ればやりたくない。

鯖丸は、俯いて考え込んだ。

「ええんですよ。君一人でそない無理せんでも。出来んのやったら、

皆で対策を考えますから」

海老原さんは、鯖丸の肩をたたいて、妙に優しい口調で言った。

「出来るよ、どっちでも」

鯖丸は即答した。

海老原さん：何で今朝会ったばかりの、こいつの操縦方法を把握してるの…。

トリコは、愕然として地味で小柄な男を見た。この人、ただ者じゃないな。

「では、気の毒ではありますが、ジョン太には魔法使いになってもらいましょ。その方が、全体の戦力も上がります」

「よっしゃー、一発びしつとやって来るぜ」

鯖丸は、ガッツポーズを決めた。

「あーあ、海老原さんにええようにあしらわれて…」

サリーちゃんはつぶやいた。

「想像を遙かに超えるアホやな、こいつ」

エンマ君はため息をついた。

冬の日が落ちるのは早い。

外界の都市部と違って、暖房を入れている駅や商業施設が周辺にないので、昼間から普通に寒かったが、夜になると急激に気温が下がった。

田畑や森林のある田舎の方が、まだ気温の変化がゆるやかだ。

穴を越えた神戸側の方向に、奇妙な灯りが点り始めた。

ちらちらと瞬き始めたそれは、徐々に空へ向かって広がり、様々な色の光が、闇の中に絵を描き始めた。

「え…何、あれ」

何か、不測の事態が起こったのかと思った鯖丸は、地元の人達にたずねた。

「ルミナリエ」

ヨシオ兄さんが答えた。

「昔、震災があつた年の年末に、外界でライトアップとか始めたんやけどな…」

関西の魔界が出現するより前の話だ。

「街が魔界に吞まれてから、魔界側でもやろ云う事になって。電氣が使えんから、魔法でやつとつたら、どんどん変な方にエスカレーターして、あんな事に…」

遠くの夜空に、魔法の打ち上げ花火が、次々と展開して行く。

「観光客もようさん来とるし、離れてハンニバルを見張るなら、あっち側がええんとちゃいますか」

「そうですね」

海老原さんはうなずいた。

「鯖丸君、一人でジョン太の所まで行けますか？」

「場所が分かれば」

鯖丸は答えた。

車を隠した場所は分かるが、関西の魔界は初めてなので、会社の常宿が分からない。

海老原さんは、紙の地図を出して、ボールペンで印を付けてから寄越した。

ネットの検索サイトが提供している地図に、後から魔界独自の情報を、手動で綿密に書き込んだ魔界地図だ。

現在地と会社の常宿と車の位置が、丸で囲まれている。

「合流地点は、芦屋の常宿と言えば、ジョン太が知ってます」

鯖丸は、地図を受け取った。

「あの…」

気になるらしく、地図を持ったままたずねた。

「囹の俺が居なくなって、大丈夫なんですか」

「その辺は、少しの間ならどうにかするわ」

エンマ君が、指の先で鯖丸に触った。

見る間に、着ている物はそのままで、姿だけが鯖丸に変わった。

「おお、そっくり」

本人だけはそう言ったが、周囲の人間には、少し違和感がある。
鏡像なのだ。

鏡でしか自分を見た事のない本人には分からないが、微妙に本物とは違っていた。

それでも、ガチで殴り合ったとはいえ、大して付き合いのないハ
ンニバルを騙すには充分だ。

鏡像をコピーしたエンマ君は、一体どの辺まで正確にコピーして
いるのか分からないが、他人になってしまっただけなのに違和感
があるらしく、部屋の隅に行って、何かごそごそ確認していた。

それから戻って来て、微妙な表情でへらっと笑った。

「いや：すごいね、君」

「何が？」

「ジョン太、気の毒に：」

「うわ、それかよ」

一応自覚はあるらしく、叫んだ。

「止めろ、どこまでコピーしてんだー」

「一応、外観は全部」

エンマ君は答えた。

「悪いけど、調節は出来ん」

声まで同じになっている。

「そうなんだ：」

鯖丸は、がくりと肩を落とした。

「えーと、エンマ君って、外界では女の子だったけど、中身は男で
いいんだよね」

一応聞いた。

「うん」

「じゃあ、いいか：まあ」

「いいんだ」

エンマ君はうなずいたが、鯖丸はびしっと振り返った。

「でも、俺が居ない間に、勝手に使うなよ、それ」

「ちっ…」

「ちっ…て何だあ。何かする気だろ。トリコ、見張っててこいつ」
「別にいいじゃないか」

トリコは、めんどくさいので大雑把な事を言った。

地図の通りに行こうとしたが、勝手の分からない薄暗い街では、難しかった。

いいかげん迷った頃に、車を隠してあった場所にたどり着き、現在地を確認出来たので、やっと会社の常宿に着いた。

入り口で尋ねると、ジョン太は出かけていると言うので、しばらく待った。

三十分以上待った所で、ジョン太は戻って来た。
両手に荷物を持って、割合ご機嫌な感じで歩いて来る。

荷物が、アサルトライフルと延長ケーブルだという事は、すぐに分かった。

ゲートまで戻っていた様子だ。

入り口で鯖丸の姿を見付けると、え…？何で、という顔をしたが、すぐに、こいつがこんな所まで一人で来ている理由が分かったらしい。

何だか諦めた感じでため息をついてから、まあ、こっちに来いやと手招きした。

さんざん道に迷った挙げ句、一人で待たされていて心細かったのか、鯖丸は嬉しそうな顔で駆け寄った。

うわあああ、何そんな楽しそうにしてんだ、こいつ。これから何するか分かってんのかよ。

道に迷った事も、三十分待たされた事も知らないジョン太は、満面の笑みのバカを見た。

「バカって無敵だなあ」

「え…俺って無敵だけど、それが何か」

最近、自分に都合の悪い事実は、聞き流す習慣が付いている。

ジョン太が持っていた延長ケーブルを取って、肩から下げた。
自分の荷物は自分で持つ事に決めているらしい。

「ここで泊まるんではないの？」

入り口の狭いカウンターで、宿帳を出してもらった鯖丸は、もう
ペンを握っている。

「ああ、いいけど…。俺もまだチェックインしてないから、書いと
いてくれ」

「分かった」

特に、住所や電話番号は必要ないので、魔界で使っている名前と
会社名を書き込んだ。

「部屋は一緒にいいんだけど、なるべく上の方の階にしてください」
カウンターの中に居る、置物みたいなじいちゃんに、変な注文を
付けている。

普通なら、何かあった時に下の階の方が逃げやすいのだが、込み
入ったビル街なら、重力操作で移動出来る。

いつの間にか、自分に有利なポジションまで、ちゃんと考える様
になっているなあ…と、ジョン太は少し感心した。

「じゃあ、ちゃっちゃと済ませて、晩ご飯でも食べに行こうか」
部屋の鍵を受け取った鯖丸は、先に立って階段を登り始めた。

「軽い。お前最近、トリコ並に軽いぞ」

ジョン太は、後を追った。

「こんな事、重く考えてて出来るかよ」

「あ…ごめん」

全然平気という訳でもないらしい。

「何か、迷惑かけて悪いね」

「だから、空気を重くするなあ」

おぢちゃん、若造に怒られてしまった。

部屋は十階にあった。

薄暗い廊下の一番奥で、非常口の真ん前だ。

あのじいちゃん、こっちが魔界の便利屋だと知っているので、ゴ

ルゴがチョイスする様な部屋をあてがってくれている。

ジョン太は、一応習慣で、非常口が開くか確認した。

非常口には嫌な思い出のある鯖丸は、更にドアを開けて階段があるか確認し、壊れないかどうか踵でがつつ踏んで確かめている。

そこまでせんでも、何かあったら飛んで逃げればいいだろうに…。

「もういいだろ。鍵開けてくれ」

ジョン太が言ったので、鯖丸は部屋の鍵を開けた。

入り口に、魔法をチャージすると灯る明かりのスイッチがあるので、指先で触った。

魔力が高過ぎるのか、微調整が下手なのか、部屋の中は思い切り、パチンコ屋並みに明るくなった。

狭いがござっぱりした部屋の奥に、ダブルベッドが一個だけ置いてある。

鯖丸の肩から、ぼとりとケーブルが床に落ちた。

「何勘違いしてんだ、あのじじい」

暴言を吐き始めた。

「いや…勘違いはされてないだろ」

どちらかというと、ジョン太の方が諦めはついているらしい。

荷物を置いて、ガンベルトを外し始めた。

「嫌だー、この部屋チェンジ」

「もういいだろ。めんどくさい」

バスルームがちゃんとあるのを確認したジョン太は、明かりを付けて風呂にお湯を溜め始めた。

ああ：ジョン太も照明くらいは点けられる様になったのか…と感心しかけた鯖丸は、風呂に入る気満々のジョン太を見て、我に返った。

「ええっ、風呂入るのかよ。もういいじゃん、嫌な事は早く済ませようぜ」

言い切りやがった、こいつ。

「うるせえな。綺麗好きなんだよ俺は」

ジョン太は反論した。

「まずお前から入れ。昨夜ちゃんとした外界のホテルに泊まったのに、何で風呂に入ってないんだ。いつもあれだけ言ってるのに、またパンツも履き替えてないし」

「いいじゃん、冬なんだから。ジョン太、細かい」

鯖丸は文句を言った。

「お前、時々洗ってない犬の匂いがする」

ジョン太はぼそつと言った。

鯖丸はうつとうなつて固まった。

普通に言われても厳しいが、犬型ハイブリットに言われると、よりへこむ。

「犬が言うな、犬が」

お互い追いつめられているせいか、黒い部分が丸見えになっている。

二人はにらみ合ったが、風呂が満杯になってあふれ出したので、ジョン太はあわてて止めに走った。

「もういいや、じゃあジョン太先に入って」

鯖丸は妥協案を出した。

「湿った大型犬と色々やるのは、嫌だから、俺」

「どんだけ嫌な事は早く済ませたいんだ、お前。それくらい乾くまで待てや」

ジョン太はその場で投げやりに服を脱ぎ、風呂に入ってしまった。鯖丸は、刀をベッドの背もたれに立てかけてから、ため息をついて座った。

「えーと、良く考えたら、何でこんな事になっちゃったんだ」

それは、今まで何事も良く考えなかったからだ。

「暁が出て来なけりゃいいけど…」

うろんな事を言い始めた。

「まあ、いいか。どうにかなるだろ」

その場のノリだけで生きて行くのは、止めた方がいいと思う。

ジョン太が聞いていないのは、幸いだった。

相変わらず、あっという間に風呂から出て来た鯖丸は、頭からタオルを被ったまま、ベッドの上であぐらをかいて、腕組みして何か考え込んでいた。

バカなんだから考えるな…と、ベッドの端っこに小さくなって腰掛けたまま、ジョン太は内心想った。

大体、何で前も隠さないで普通に座ってる訳、こいつは。

元通り、きっちり服を着てしまっている自分の方がおかしい事に、おっちゃん気が付いていない。

「何でまた服着てるの」

鯖丸にも指摘されてしまった。

「ええと…何となく」

答えてから、付け加えた。

「脱がせて欲しいかな…とか」

「ジョン太の冗談は、笑えない」
真顔で嫌そうだ。

「それ、ヨシオ君にも言われた」

諦めたのか、とりあえず自分でシャツを脱いだ。

「それで、どうする」

鯖丸は聞いた。

「え…」

「やる方とやられる方、どっちがいいの、ジョン太は」
どっちも無理っぽい気がする。

「お前、決めてくれ」

おっちゃん、相棒に決定権丸投げだ。

「じゃあ、俺やられる方ね」

鯖丸は、あっさり即決した。いいのか、そんなで。

「お前、大丈夫なのかよ」

バスタオルで、頭をがしが拭いている鯖丸を、ジョン太は見た。

たぶん、暁の事を言っているのだなと云うのは分かった。

「逆は気の毒かなと思って。ジョン太、男と寝た事なんかないだろう
お前はあるのかよ…と言いかけてから、気が付いた。」

あるんだ、そう言えば。記憶があるのかどうかは、分からないが。
「暁が出てる時の事は、あんまり憶えてないんだけど、あいつたま
に、相手が気に入らなかったら、途中で帰ったりするからなあ」
うわ、それ普通にひどい。

何でそんな事、さらっと話せるんだと思ったが、良く見ると表情
が微妙になっている。

いつも脳天気なので忘れていたが、そういえばこいつ、割と想像
を絶するひどい目に色々遭って来ているはずだ。

「よし、じゃあさくつと終わらせて、何か美味しい物でも食いに
行くか」

極力軽い感じで言っつて、残った服を全部脱いだ。

「それで、この後どうしたらいいんだ？」

「普通でいいよ、普通で」

「分かった、普通な」

普通には、割と自信がある。

とりあえず、相手が男だとか天然ボケのバカだとか言う事は、あ
まり考えない様にして、普通に抱き寄せて体に触って、キスをした。
首の後ろに手を回すと、プラグの接続ソケットに触れた。

一見、青緑っぽい金属光沢の縁取りが、人工皮膚で覆われた差し
込み口の周囲を巻いていて硬そうに見えるが、触ると周囲の皮膚と
同じ感触で、柔らかい。

軍用とは、少し仕様が違うが、船外作業のプロが使う様な高性能
ソケットだ。

大体は同じ仕様なので、中央の人工皮膚解除キーを押して、差し
込み口を露出させてから、舌の先で軽く触った。

微電流が通る時の、ちよつと痺れる様な感触があつて、鯖丸は妙
に色っぽい声を出して、びくりと体を震わせた。

ええっ、これ、エロい事にも使えるのかよ…。

ていうか、ジョン太、普通とか言ってたくせに、何、マニアックなプレイに走ろうとしてるんだ。

接続部分に異物が入ったくらいでトラブルが起こる様な安物じゃないし、まあいいかと思ってされるままに任せる事にした。

大体、普通って言ったのは、雑にちゃっちゃと済ませてくれという意味なのに、マジでキスまでしちゃって、このおぢちゃん…。

普通って、人それぞれで難しいなあ…と考えていたら、こっちを触りながら、照明を落とそうとして、スイッチの方に意識を向けていたジョン太が、急にイライラした感じでガンベルトへ手を伸ばした。

「ああ、もう。何だ、このスイッチうざい」

照明を操作出来る程は、魔力が高くないらしい。

いきなり、銃を抜いてスイッチをぶち抜いた。

狭い部屋の中に、銃声が響いて、鯖丸は両手で耳を塞いだ。

普通から危ない人にジョブチェンジしてしまっている。

「ジョン太、普通は？」

一気に暗くなった部屋の中で、鯖丸は聞いた。

「知らん」

ジョン太は即答した。

「こんなくそ明るい所で、お前の顔見てたら、勃たねえんだよ」

「当たり前じゃん。ゲイでもないのに、これでええ感じになってたら、引くわ」

それじゃあ、けっこうええ感じになってるお前は何なんだ思ったが、接続部に触ると、変な感じの刺激があるのは知っていてやったので、反論はしなかった。

普段の悪魔超人が、更に進化してしまっている。

「お前、悪魔將軍じゃねえか、それ」

つい、口に出してしまった。

「何だそれ。俺的には、魔界のプリンス、アシユラマンだったのに」

絶対、悪魔將軍の方がカッコいいのに…。

その辺は、キン肉マン芸人同士で後々争う事にして、リンクを繋ぐのに専念する事にした。

「ジョン太は、こういうの慣れてないんだから、要らん事しないでこっちに任せて」

鯖丸的に普通な感じで触られた。

そうじゃないかとは思っていたが、やっぱりお互い普通じゃない。

「お前、それは違うだろ。やめてやめて…あつ、口でするのとかマジで止めてー」

「うるさい、ちょっと黙れ」

また怒られた。

まあ、こんなもんでいいか…とぶつぶつ言った鯖丸は、また何か考え込んでしまった。

「まいったな…来る途中で薬局あったのに。ローションとか買ったきゃ良かった」

リアルに嫌な話になって来た。

しばらく考えていた鯖丸は、聞いた。

「ジョン太、ファーストエイドキットにワセリン入れてたよね。あれ出して」

「分かった」

手を伸ばして、ベッドの背もたれに掛けてあるガンベルトの物入れから、赤地に白い十字が入ったポーチを取り出した。

お前の方が近いんだから、自分で取れや…と思ったが、そう言えば照明を壊していた。

窓から街の明かりが入っていて、充分明るいと思っていたが、普通の人間には物がはっきり見えない暗さらしい。

ポーチからチューブ状のワセリンを出して、渡した。

添加物も防腐剤も入っていない、普通の薬局とかでは、あまり見ないタイプだ。

「ジョン太、何でこんなのいつも持ち歩いてるの」

「お肌が弱いから」

おっちゃん、変な事を言い出した。

「添加物が入ってるハンドクリームとか、ダメなんだ。アレルギーで」

体は丈夫だが、お肌は弱いらしい。

それ以前に、普通はハンドクリームとか持ち歩かない様な気がするが。

「ジョン太って、変な所で繊細だよね」

鯖丸は、ごそごそ起き出して、ベッドから少し離れた。

「あ、それ塗るんだったら、俺がやろうか…」

何となく、全部お任せにしてしまうのも悪い気がして、ジョン太は聞いた。

「うるせえ、こっち見るな」

めずらしく、鯖丸の方に泣きが入っている。

「ごめん」

平気な訳はないか…と思った。

暁が色々やってるとはいえ、本人はノーマルなんだし。

背中を向けて、しばらく待つ事にした。

「よし、準備オツケー」

意外と軽い感じで、鯖丸は戻って来た。

「じゃあ、さくつと終わらせて、串カツ食いに行こう、串カツ」

昨夜トリコに取り上げられていたが、余程食いたかったらしい。

ジョン太は、ちらっと時計を見てから、時間を逆算した。

ええと…今からリンク張って、その後出掛けるとしたら、十時は過ぎるし、夜中にそんなこってりした物食いたくない気がする。

出来れば鍋がいい。水炊きとか湯豆腐とかであっさり終わらせた
い。

まあいいか、先に串カツ屋に行って、十本くらいあてがっておけ
ば…トリコには内緒で。

「分かった。串カツな」

変な予定だけ、先に立ってしまった。

接続までは、本当に簡単に済んだ。

男相手に出来るのかとか、そういう心配以上に、こんなややこしい奴とリンクを張れるかの方が、実際は心配だった。

鯖丸の方でも、ジョン太相手にセックス出来るかどうかより、魔力の接続が出来るかどうかの方が大きな問題だったのだ。

今まで散々、リンクを繋ぐのに失敗しているという話を聞いていたので、もっと大変だと思っていたが、最初に表層を繋ぐまでは、トリコと初めてリンクを張った時より楽なくらいだ。

何だか、見た事のない人の手が、表層に触れてから入り込んで来た。

普通の人間の手に見えたが、ジョン太だという事は分かった。

感触が柔らかくて、何の抵抗もない。

あつという間に通り抜けて行ったので、全体は見えなかった。

気が付くと、学校の廊下の様な場所に立っていて、前にここへ来た人が付けた道筋が、微妙に見えていた。

「ええと…所長とトリコと、後は、誰だ、これ」

知らない感じではないが、魔界では見た事がない人の痕跡が付いている。

けっこう魔力が高い人間の痕跡だ。

背後から足音が聞こえたので、脇へ避けた。

これ以上プライバシーを詮索するのも悪いし、中断して、周囲を確認した。

異常に可愛いテディーベアの様な物が走って来る。

何で、ぬいぐるみが生きて動いてるんだと思って良く見ると、毛色がジョン太と同じだった。

うわー、昔はこんな可愛いかったんだ。時間の流れてひどい。

「こっち来るなー」

ぬいぐるみ状の子供は、走りながら振り返って叫んだ。

「やめて、もうやめて」

後ろから、同級生らしい子供達が追いかけて来る。

「お前こそ、もう学校来るな」

「犬は、首輪付けて犬小屋に居ろよ」

「帰れー」

ああ、子供って、けっこうひどい事言うよなあ…と思った。

自分も、子供の頃、地球から来た転校生をいじめた事があるので、あんまり責められない。

「やめてよう」

普通の子供には追いつけないスピードで逃げているので、距離はあっという間に開いた。

絶対強いはずなのに、何で反撃しないんだろう。

「やり返せよ、あんな奴ら」

声をかけてみた。

子供のジョン太は、走るのを止めて、ぐずぐず泣きながら歩き出した。

「だって、僕が叩いたら、あの子達死ぬって、お父さんが…」

立ち止まって、こっちを見た。

「ええ、おじさん誰？」

ジョン太におじさん呼ばわりされるとは思わなかったが、ここでリンクを繋ぐ訳でもないのに、係わるのもまずい気がしたので、先に進む事にした。

小さい頃に、何をされても反撃しない様に、厳しく躰けられていたらしい。

何やってんだ、ジョン太のオヤジ…と思ったが、力の加減が出来ない子供の頃に、もし何かあって相手を殺してしまう様な事があつたら、この程度のトラウマでは済んでいない。

まあ、これはこれで、どうにか最善だったのかも知れなかった。

いきなり、縄手山の山中に居たので、ジョン太は驚いた。

鯖丸のトラウマ映像に潜ったら、絶対コロニーをテロリストが襲撃したあの事件に遭遇すると思って、覚悟を決めていたのに、周囲は見慣れた風景だ。

何でここに…と思った目の前に、かまいたちが居た。

当社比で実物の十倍くらいのスケールだ。

「うわ、何だこれ」

振り返ると、一年ちょっと前の鯖丸が居た。

切り落とされた腕を押さえて、怯えた表情でこっちを見ている。

思った以上に印象が子供っぽい。

そういえば、最初はこんなだったな…こいつ。

これ、俺が助けた方がいいのか？それとも、別の俺が助けに来る段取りになってるのか…

決断する前に、視点が入れ替わった。

鯖丸の視点に入ってしまったている。

体中が痛くて怖い。

目の前に居るごつい男が、銃を乱射してから、こちらに走って来た。

ものすごくかっこいい犬だ。

何だー、この当社比で十倍男前の俺は。

抱き上げられて走り出した。

記憶として辻褄は合っているが、俺はそんな、ドッグショーに出る様なびしっとした犬じゃないし、お姫様抱っこかしないで、普通に肩に担いでたし…ああ、何か微妙にいたたまれない。

「やめてー、この場面パス」

叫んだ瞬間、暗闇の中に突き落とされた。

良く考えたら、魔法を使い始めて四ヶ月しか経っていない素人が、あんなひどい目に遭ったら、トラウマ映像に加わっていても不思議ではない。

ないけど、あれはないだろ…。めっちゃ恥ずかしい。

軌道上の宇宙空間を落ちて行きながら、ジョン太は考えた。

その割には、普段全然尊敬されてないよな、俺。別にいいけど。

現在は完成している大規模コロニーが、建造中の姿で見えて来た。じゃあ、やっぱり行き先はR-13だ。

下手に宇宙へ出た経験があるので、裸で宇宙空間に居るのは、怖かった。

服くらいは着ているが、宇宙服ではなく、普通にさっき脱ぐまで着ていた服だ。

息が出来なくてパニックになりそうだったが、ここは現実じゃないんだからと自分に言い聞かせて、どうにか正気を保った。

R-13が近付いて来て、エアロックも通らず、中に吸い込まれた。

一瞬で、光学兵器と血の臭いと、人が発する恐怖の匂いが漂って来た。

ジョン太が、可愛い黒人の女の子と、ベッドで抱き合って眠っていた。

これのどこがトラウマ映像か分からない。

ジョン太本人も、女の子と大して変わらない年齢に見えた。

たぶん、高校生くらいか。

目を覚ました女の子が、にこりと笑った。すごく可愛い。

どちらかと言うと、幸せな記憶だ。

「何だよ、ガキのくせに生意気だぞジョン太。おじさんそーゆーのは良くないと思う」

さっきおじさん呼ばわりされたのが、尾を引いている。

がつんとドアが開いて、幸せな光景が一瞬で地獄絵図と化した。

普通なら、不届きなガキが娘に手を出したのを、オヤジが怒っている様な光景だが、オヤジ、ショットガンを装備している。

「えええーっ、マジでそれ撃つのかよ」

本気で発砲された。

さすがジョン太、全弾除けながら、服と靴を拾って、全盛期のジエット・リーの様なアクションで、窓の外に飛び出した。

「このバカ犬が、うちの娘に手え出しやがって。死ねえ」

本気でショットガンを乱射して来た。

トラウマ映像だという事を差し引いても、これはひどい。

普通の人間だったら死んでいると思うが、たぶん普通の人間だったら、オヤジはここまでキレなかったんだろうなと思う。

「うわー、可哀相に。何だよこれ」

窓の外を本気のジョン太が逃げて行く。

物凄い速さだ。

戦闘用ハイブリットが、全盛期にどれくらい速く動けるか、トラウマ映像の中とはいえ、確認してしまった鯖丸は、愕然とした。

反則だ、あれ。

考えている間に、別の場所に放り込まれた。

コロニーに居るのは分かったが、居住目的で造られた、地球の周回軌道上にある物とは、明らかに様子が違った。

たぶん、木星の研究者コロニーだ。

記録映像で見た事はあったが、思ったより照明も薄暗くて、何もかもくたびれて見える。

廊下に、壊れた機械が放置されていたり、破れた壁が補修されていなかったり、けっこうひどい有様だ。

のろのろと働いている人間も、くたびれた様子だった。

怪我人も多い。

かなりの期間、周辺宙域で戦闘が行われていたのだ。

何度かは、コロニーの内部にも侵入されたはずだった。

国連宇宙軍の記章を付けた兵士達が、慌ただしく走って来た。

通路の向こうで止まって、一斉に銃を構えた。

周囲の雰囲気から、戦闘状態は、もう解除されているはずだけど…と、ゆるくカーブした通路の奥を覗き込んだ鯖丸は、息を呑んだ。

「ひどい…」

その場にぼんやりと立って、銃口を向けられているのは、何か、人に見えなくもない生き物だった。

骨と皮だけになった体に、ほとんど抜け落ちてしまった白い毛皮の痕跡が、所々残っていた。

バカみたいな顔で、うつすら笑ってこっちを向いているが、たぶん何も見ていない。

ジョン太だという事は分かったが、ここまでひどい状態だったとは、思っていなかった。

三叉路になった通路の両側から、狙撃兵が来た。

十人以上のプロの兵士が、こんな死にかけの男を、用心深く遠巻きにしている。

「撃ちますか？」

この集団の隊長らしき男に、隣に居た青年が聞いた。

「いや：残念だがあの子はもう、救出の必要が無くなった。出来れば説得したい」

ジョン太の表情が、ゆっくりと正気に戻った。

自分の足元に、視線を落とした。

うわ、ダメだあのおっさん。重症のジャンキー見た事ないのかよ。もういいから、撃つなら早くやって楽にしてやれ。

足元に、子供が倒れているのが見えた。

小さな体をくの字に曲げて、横になって眠っている様にも見えるが、鼻と口から、大量の血が流れ出している。

ジョン太は、しばらく子供を見た。

それから、突然状況を把握したらしい。

悲鳴を上げてその場から逃げ出した。

狙撃兵の一人が、命令を待たずに発砲した。

いい判断だが撃ち出されたのは麻酔弾で、効き始めるまでにタイムラグがある。

当然、狙撃兵の囲いは、一瞬で突破された。

負傷しているのか片足を引きずっているが、それでも速い。

背後から、何発も麻酔弾が撃ち込まれ、やっと倒れた。

ジョン太相手に実弾使わないなんて、ぬるい奴らだと思った。

回復魔法の使える魔界でばかり戦っているの、鯖丸の考え方は、ちょっとおかしくなっている。

倒れてくれて良かった：これ以上はもう、ひどい目に遭わなくて済む。

ほっとして気を抜いた所に、いきなり暁の意識が割り込んで来た。意識を接続するまでの間に、一度も現れなかったので、大人しくしていてくれると思っていたのに…。

今頃何しに来たんだ、こいつ。

「てめえ、何で助けに行かないんだ。ジョン太が：ジョン太が死んじゃう」

暁が、マジ泣きしながら、強引に表へ出て来ようとしている。

「お前が助けないから、俺がやる。そこ退け」

いやいや：死なないから。ジョン太、今でもお元気に生きてるから。

暁って、そこまでジョン太の事好きだったのかと、ちょっと驚いた。

今まで、色々男遊びは繰り返して来ていたが、マジでお付き合いしていたのは、一昨年鉄砲玉に殺されたヤクザの幹部くらいだ。

それだって、何処まで本気だったかは、良く分からないし、真面目に治療していたせい、外界で暁が出て来る事も無くなってしまった。

ジョン太の事は、俺の記憶でしか知らないはずなのに、一体何なんだよ、こいつ。

実は、その辺が一番の原因なのだが、鯖丸本人は気が付いていない。

何しろ、普段はカラオケ好きのダメなおっさんとか思っているくせに、本人が気が付いていない深層の記憶では、当社比で十倍男前

の犬だ。

暁を押さえ込むのに集中すると、接続が途切れる。

両方のバランスを取るのが手一杯になってしまつて、鯖丸はその場で固まつた。

R-13の内部には、無数の死体が転がっていた。

生きて動いている者の気配は、もう、奥の方にしかない。

いくら、宇宙船を大きくしたただけの様なマイナーコロニーでも、意外に内部は広い。

テロリストの集団は、雑に小型艇ごと壁を破つて突入し、手当たり次第に人と物を壊しながら、奥へ向かっていた。

たぶん、テロリスト側にもそこその被害が出ている。

普通の作戦行動ではなく、特攻だ。

無秩序な暴れ方から見て、恐怖心を麻痺させる類の薬を使っている。

軍でも、似た様な効果のあるドラッグは、何度か支給された。

思い出しただけで、吐き気がする。

鯖丸が、人格が分裂してしまふくらいひどい目に遭つたのも、相手が正気ではなかったからだ。

そうでなきゃ、あんな可愛くもならないガキを、寄つてたかつて犯したりはしないだろうなあと思つた。

それとも、あいつバカだから、余程相手を怒らせる様な事を、やっちゃつたのか…。

どっちにしても、これから見る事になる状況を考えると、気が重い。

ちよつとため息をついて、歩き出した。

ふいに背後から腕を掴まれて、ジョン太は振り返つた。

暁だった。

まだ、十代半ばの少年に見えるが、見覚えのある顔だ。というか、まあ鯖丸と同じ顔だが。

反射的に殴り倒しそうになった腕を、どうにか止めた。

「何でここに居るんだ、お前」

現実の鯖丸の様子が、明らかにおかしい。

接続が途切れそうだ。

「この先はダメだ」

暁は、ジョン太の腕を掴んだまま、言った。

「頼むから、この先は見ないで」

「そう言う訳にもいかないんだが」

歩き出そうとしたが、華奢な少年の腕が振り払えなかった。

普通なら、そのまま引きずって行ける重さのはずなのに、根が生えた様に動かない。

「何やってんだ、くそっ」

現実の方の鯖丸が怒鳴った。

接続が突然切れて、ジョン太は現実に取り戻された。

こう何回も魔力の高い奴相手に接続事故起こしてたら、俺、頭壊れるんじゃないのか…と、ジョン太はベッドの上に座り込んで、ぼんやり思った。

またダメだったのか…と考えたが、頭がぼーっとして、何の感情も湧いて来ない。

あ、俺今、ちょっとやばいな。

ゆっくり、状況を確認しようとして、鯖丸がもつとヤバイ事になってるのに気が付いた。

倒れたまま、全身が小刻みに痙攣している。

急速に、正気が戻った。

「おおい、大丈夫か」

伸ばした手が、凄い力で振り払われた。

「畜生、二度と出て来んな。帰れ!!」

暴れ回る鯖丸を押さえ込んだジョン太は、しばらくじっと落ち着くのを待った。

「止められると思ったのに……」

ひとしきり暴れて、少し気が済んだのか、鯖丸はジョン太にもたれ掛かって来た。

「いいから、ほら、落ち着け。な」

ゆっくり両手で抱き寄せて、頭を撫でた。

「うん」

こうして見ると、意外と可愛い様な気がして来た。

それから、ふいに我に返った。

いや、待て。何、ええ感じのゲイのカップルみたいになってんだ、俺ら。

ジョン太は、慌てて鯖丸から離れた。

「やべえ。何か新しいステージが開きそうだった、今」
「何が」

いきなり突き放されて、不満そうな顔で鯖丸は聞いた。

良かった：いつも通りのバカにしか見えない。

当面、怪しい世界へ行ってしまうのは止められたが、肝心の問題が全然解決していない。

ちよつとため息をついて、肩を落とした。

「やっぱり、無理だったな。リンク張るのは」

「何言ってるの」

鯖丸は、ジョン太の正面に座り直した。

「そんなの、リンクが繋がるまでやるに決まってるじゃん」

ええっ、何言い出すの、この子は。

「今のはちよつとヤバかったから、ポジション逆にしてみよう。いいよね、この際」

まあ、その辺は最初から覚悟していたから、別にいいけど、実物の悪魔將軍を見た後だと、けっこう引く。

「大丈夫、優しくするから」

本気で嫌々な事を言われた。

「お前は、存在自体が優しくくない。特に下半身が」

ジョン太はぶつぶつ文句を言った。

意外と本当に優しくされたので、かえって辛い気分になった。そうか、嫌な事は雑にちゃっちゃと済ました方がましだな。おまけに、なんだかんだ言っても、結構上手い。

この間まで、彼女居ない歴と年齢が一緒だったくせに、本当に何なんだ、こいつ。

その辺から、さっき使ったワセリンのチューブを手探りで捜して、キャップを開けている。

鯖丸がキレそうになっていた理由が、良く分かった。

いや…本気で恥ずかしいわ、これ。

「もういいから、それ、自分でやるから寄こせ」

「ダメ」

断られた。

「ジョン太じゃ、無理」

無理って、何がと思ったが、何かコツがあるらしい。

自分でも触った事がない様な奥の方まで、ゆっくり指を差し込まれた。

ああ、俺、何か客観的にひどい事になってる…ここまでひどいと、もう、どうでもいい気がするけど。

「無理って何だ。いや…それ使い切るな。必要だから持ち歩いてるんだ」

空になったチューブをその辺に放り捨てた鯖丸は、変な顔をした。

「明日、その辺の薬局で買えばいいじゃん」

「売ってねえよ。普通の薬局には置いてないから、ネット通販で買ってるのに…。冬場はそれが無いと、指先の微妙な感覚が…」

おぢちゃん、どこまでデリケートだ。

鯖丸は、ちょっと呆れた顔をしたが、もういいから黙れという感じで、唇を塞いだ。

それから、さっき暴れていた時に、八つ当たりしていた枕をあて

がつて、少し腰を浮かせてから、ゆっくり入って来た。

絶対無理だと思っていたが、意外とやれば出来るもんだなと感心した。

けっこう痛いけど、我慢出来ない程でもない。

後は、さっき途切れた接続を繋ぎ直すだけだ。

こちらから手を伸ばして接続をやり直そうとしていた途中で、がつんと意識が持つて行かれた。

胸ぐらを掴んで、絞め落とされたのに近い感覚だ。

うわー、全然優しくないぞ。まあ、その方がお前らしいけど。

一瞬で、先刻接続が途切れた場所まで突き落とされた。

上手く繋げなくて、最初からやり直す事になるかも知れないと思っていたが、先刻と同じ場所に居たので、少しほっとした。

いや：場所は同じだが、風景は全く変化してしまっている。

鬱蒼とした森の中に、正方形の檻があった。

檻の中に、何かが居た。

殿と戦った時、簡易接続したイメージの中に居た獣。

あの時ははつきり見えなかったが、こうして間近で見ると、ジョン太本人とは全然違う。

毛羽立った汚い色の毛に覆われた、醜い獣だ。

それはまあ、百歩譲って、ジョン太の事が嫌いな他人に、こんな風に思われているなら、まだいい。

自分で自分を、こんなひどい姿で認識しているなんて、一体どういう事なんだ。

「出て来いよ。これは、ちょっとひど過ぎる」

獣は、狭い檻の中にうずくまっていた。

体中を、細いワイヤーで巻かれて、鋼鉄の床に括り付けられている。

「何で、こんな事になってんだよ。自分でも、これは違うって、分かっているだろ」

檻の中の獣は、少し顔を上げた。

「うん、分かっている。でも、誰も俺を責めなかったから」
獣は、言った。

「だから、俺は、ここに居るしかないんだ」
獣を縛っているワイヤーが、どんどん増えながら、体を締め上げていた。

「バカだろ、お前」
いつも言われている事を、言い返してやった。

「責められなかったなら、ラッキーじゃないか」
獣は、こちらを見た。

「ガキを一人殺した事くらい、チャラにしてもらえるくらい、すごい事をしたんだよ、ジョン太は。だから、胸を張ってそこから出て来い」

そんな事は、たぶん出来ないだろうと言うのは、分かっていた。
出来るなら、とつくにやっけるはずだ。

「出来ないなら、その檻、壊すからな」
今まで意識していなかったが、いつも通り背中に刀を背負っていた。

ゆっくりと抜いて、構えた。

さっき追い返した暁の気配が、微妙に背後に在ったが、この状況なら、邪魔はして来ないだろうという確信があった。

もしかしたら、協力してくれるかも知れない。

「大体、初対面ならともかく、知り合いでジョン太の事嫌いな奴なんて、居ないだろ。普通はそうじゃないんだ。自分がいい人だって、ええかげん分かれや、バカ」

この場所で魔法が使えるのかどうか、分からなかった。
それでも壊せる自信はあった。

渾身の力で斬りつけると、檻の上半分が吹き飛んだ。
残った鉄格子にヒビが入り、がらがらと崩れ落ち始めた。
駆け寄って、獣を巻いているワイヤーに手をかけた。

獣は、顔を上げてこちらを見た。

指にワイヤーが食い込んだが、構わずに引き千切った。

檻の中で自由になった獣は、しばらく戸惑って、それから立ち上がった。

さっき居た廊下に立っていた。

鰐丸はもう居なくて、嫌な気配だけが、奥から漂っていた。

廊下の奥に、女が一人倒れていた。

半ば入り口を塞ぐ様に、体を斜めにして倒れていたが、頑丈な扉は、既にこじ開けられた後だった。

気の強そうな女だ。

体格や筋肉の付き方は、どう見ても宇宙育ちの人間だったが、地球人のテロリスト相手に、死ぬまで立ち向かって行ったに違いない。体ごと、服まですたずたに切り裂かれて、辺りは血に染まっていた。

見慣れた顔に、何となく似ているので、誰だか分かった。

両親共殺されたと言っていたが、母親は確実に目の前で惨殺されている。

ダメだ、これ。思った以上に、ひどい事になってる。

扉の向こうに、その、テロリストらしき集団が居た。

半数は、軽装宇宙服も脱ぎ捨てて、アンダースーツになってしまっている。

軍でも、テロ組織でも、敵陣でそんな事をしていたら、バカ呼ばわりされるだろう。

明らかに、様子がおかしい。

こいつら、たぶん支給された薬の処方を間違えてる。

皆、二十歳前後から二十代前半くらいまでのガキで、指揮官らしき人間も存在しない。

全員素人だ。

その、素人集団の間から、逃げようともがいている子供の手足が

見えた。

「やっぱり、来たんだ」

突然、隣で声がした。

はっとして横を向くと、鰐丸が立っていた。

暗い顔で、それでもこちらを真っ直ぐ見ている。

「ジョン太には、絶対見られたくなかったのに」

その辺はお互い様だから、まあ仕方ないんじゃないかと言おうとして、鰐丸が、全然別の話をしているのだという事に、気が付いた。何か、まずい事が起こるという意味だ。

自分もそうだが、鯖丸も、リンクを張るのはそうとうむずかしい状態になっているはずだ。

トリコだから、何事もなくやってのけたが、俺に出来るのか…。

「玲司の記憶が戻るかも知れない」

鰐丸は言った。

「それでも、このまま続ける？」

去年、かまいたちの事件で聞き込みをしていた時、鯖丸が言っていた言葉が甦った。

『思い出せるうちに思い出そう。俺みたいになったらダメだ』

「そうか、お前が玲司を守ってたんだな」

鯖丸を本名で、それも下の名前で呼ぶのは初めてだった。

「でも、あいつはもう、子供じゃないし、充分強い」

強過ぎて、ちよつと勘弁してほしいくらいだ。

「分かってる」

鰐丸は、俯いた。

「でも、記憶が戻ったら、俺達が居る意味は無くなる」

鰐丸の隣に、子供が居た。

やはり見慣れた顔だが、まだ幼い姿で、鰐丸の手を握って、じつところらを見上げている。

三人居るとは聞いていたが、こんな子供だとは思わなかった。

「待て、記憶が戻ったら、お前達が居なくなるみたいない方だが」

その方がいいに決まっているのに、何だか寂しい気がした。

「どうなるか分からない。何事もなくこのままかも知れないし」

暁は言った。

「最後まで見てれば、分かるよ」

「最後まで…」

薬物の過剰摂取で、明らかにおかしくなっている連中に囲まれて、手足をばたつかせながら泣きわめいている少年を見た。

やめてとか、許してとか言う類のセリフは、一切なかった。

辛うじて聞き取れたのは「お前ら全員殺してやる」だ。

昔から、こういう性格だったらしい。

一人目か二人目辺りまでは、暴れながら叫び続けていたが、もう、そんな力も無くなったのか、ぐったりと動かなくなった。

「いや…無理」

暁と、もう一人の子供を押しつけて、ジョン太は前へ出た。

「もう終わった事だって云うのは分かっているけど、こんなの最後まで見てられるかよ」

助けるのは簡単だ。

ただ、ここでそんな事をしたら、どうなるのか本当に分からない。もう一回接続事故起こしたら、俺、本気で壊れるだろうなと思った。

無事に済んでも、リンクに失敗したら、鯖丸本人にめっちゃ怒られる。

いや待て、リンクが繋がるまでやるとか言っていなかったか。

そうになったら、悪魔将軍様に、やり殺されるー。

「くそっ、後の事なんか知るか」

現実と同じ速さで動けた。

子供を囲んでいる人垣を振り払い、両手を押さえつけている二人を、壁に投げ飛ばした。

ああ、本気でひどい事になってる。

寄って集って、薬物の処方ミスでオーバードーズになった連中に

レイプされて、もう、現実を把握するのも諦めた子供が、虚ろな目で天井を見上げていた。

いや、待て。こいつ、どんなひどい目に遭っても、そういうキャラじゃないだろ。

ぼんやりと、宙を見上げていた鯖丸と、目が会った。

ふいに、虚ろだった目に、暗い光が灯った。

子供とは思えない様な、凄い表情で笑った。

無防備になっているテロリストの背後で、中身が空の重装宇宙服が自立していた。

開いたシールドの中から伸びたケーブルが、いつの間にか子供の首筋に繋がっている。

確かに、トラブルがあった時の為に、ケーブルは在る程度伸ばせる仕様になっている。

操作に慣れた者なら、着用していなくても、有線接続していれば、動かす事は出来る。

こいつまさか、ケーブルを拾う為に暴れてたのか？何てガキだ。惨殺が始まった。

今の今まで、テロリスト達を殺したのは、暁だと思っていた。

本人も、周りの人間も、皆そう思っていたはずだ。

実際は違った。

有線接続のロボットと化した宇宙服が、格闘家の様な動きで、愕然としている男達を床に叩き付けた。

熟練した動作だ。

普段、子供同士でこういう遊びをしていたに違いない。

悪ガキが好みそうなゲームだ。

がつんと脇腹に衝撃があった次の瞬間、体が天井まで持って行かれた。

背骨が折れる、嫌な感触があった。

テロリスト側に視点が移ってしまったのか、玲司が見境無く暴れているせいなのか、もう分からない。

床に叩き付けられた目の前に、滑り止めのラバーが付いた重装宇宙服の足の裏が迫った。

頭蓋骨が潰れるのが分かった。

まだ意識があるのは、現実ではないからだ。

暁が、こちらに来ようとしていた。

「来るな。いいから、好きなだけ暴れさせてやれ」

自分の体が、どこにあるのかももう分からない。

床に座り込んで、狂った様に笑い続けている子供の姿が、全方向から見えていた。

生きて動いている、最後の一人が倒れても、有線で繋がった重装宇宙服は、暴れるのを止めなかった。

血の海の中で、もう生きていない相手を、引き裂いている。

「お前ら、よくもよくもよくもよくもよくも」

もう、正気では無くなってしまった玲司が、俯いたままぶつぶつと唱え続けた。

「みんな死ね！」

暴れるだけ暴れて、重装宇宙服が、やっと止まった。

子供の視線が、入り口の方に向いた。

「お母さん…」

動かなくなった女と、目が合った。

「嫌だあ、独りになるのは、嫌だよう」

呟いて、その場にばたりと倒れた。

一瞬だったが、意識が途切れていた。

次に目を開けると、視点が元に戻っていた。

目の前に鯖丸が居た。

もう、子供の姿ではなくて、現実の武藤玲司と同じ外見になっている。

暁と、もう一人の子供がそばに居たが、二人とも、同じだけ年月を経た姿に変わっていた。

「そうか：お前達、一人じゃ現実に耐えられなかった玲司が創った、兄ちゃんと弟だったんだな」

辛かった時に、兄弟が居たらいいなと思った事はある。

一人っ子なら、たいがい一度くらいは思う事だ。気持ちは分かる。

「暁は俺の兄ちゃん、ミツオは弟なんだ」

鯖丸が言った。

「俺、ひどいよね。都合の悪い事は、全部暁に押しつけて忘れてたのに、暁なんか居なくなればいいと思ってた」

「忘れた方がいい事の方が、多いんだよ」

暁は言った。

「お前が思い出したいなら、止めないけど」

鯖丸は、うなずいた。

「うん、記憶は全部戻して。もう平気だから」

暁が、優しい顔で笑うのを、初めて見た。

「じゃあ、行け。もう、戻って来るなよ」

鯖丸は、ジョン太の手を握った。

「うん、今までありがとう、お兄ちゃん」

獣の姿が、いつの間にか変化していた。

ジョン太と、ほとんど同じ姿で、こちらを見ている。

「出て来なよ」

鯖丸は言った。

「それとも、俺が引きずり出さないとダメ？」

「いや：」

ジョン太は、首を横に振って、床だけが残った鉄の檻から、ゆっくりと外へ出た。

森の中のやわらかい下草を踏みながら、二歩、三歩と歩いた。

「こんな暗い所、早く出よう」

鯖丸は、先に立って歩き出した。

前方に、明るい空が見えている。

「けっこう好きな場所だったんだけど」

辛い事がある度に、ここへ来て泣いていた子供の姿が見えた。

「さすがに長く居過ぎて、飽きたな」

少し歩くと、突然視界が開けた。

森を抜けて川辺に出ている。

明るくて、気持ちのいい風が吹いていた。

「そうか、現実ではこの場所、もう無かったんだよなあ」

懐かしそうな口調だ。

鯖丸は振り返った。

ダークブロンドの白人の男が、眩しそうに目を細めて川を見ていた。

一見してハイブリットだという事は分かるが、普通の人間とあまり変わらないタイプだ。

体格以外、外見に共通点は無かったが、ジョン太だという事は分かった。

そうか、何かの具合で原型に近いタイプにならなかったら、こんな外見だったんだな。

鯖丸は、ジョン太の方に手を伸ばした。

「リンク繋いで、戻ろう」

「ああ」

ジョン太は、鯖丸の手を取った。

すうっと、変わっていた外見が、元の姿に戻った。

何の抵抗もなく、きれいにリンクが繋がって、二つの空間にリンクが通った。

接続事故とは全く違う、柔らかな抵抗感があって、二人は現実に戻った。

現実で、自分がどういう状態になっているか、ジョン太はすっかり忘れていた。

身体感覚が分からなくなる程、深い場所まで潜らなければ、お互

いリンクを張れなかったのだ。

鯖丸も、忘れていたらしく一瞬戸惑ったが、すぐに何事もなかった様に続きを始めてしまった。

「いや…待て。リンク張り終わったのに、続ける意味あるのか、お前。嫌ーやめてえ」

鯖丸が、全然お願いを聞いてくれないので、仕方なく終わるまで付き合う事にした。

くそっ、調子に乗りやがってこのガキ。あとで絞める。

普通に腕力で振り払って逃げればいいのに、おっちゃんもだいたい変だ。

結局最後までやって、二人で仲良くベッドに横になった。

どう見ても、ええ感じのゲイのカップルだ。

「どんな感じ？」

鯖丸は聞いた。

「最悪だ」

ジョン太は答えた。

「魔法使えそうか、聞いてるんだけど」

おぢちゃん、最初の目的も忘れるくらい、心身共にダメになっている。

「うーん」

手の平を目の前にかざして、ぎゅっと握り込んで力を入れてみた。奇妙な手応えがあった。

「何となくやれそうだが、ここで思い切り使ってみるのも危ないしなあ」

「別に、攻撃魔法使ってみなくてもいいじゃん。回復系とか」

「何が悲しゅうて、魔法使いになって一発目に魔法使う相手が、自分のケツなんだよ」

ジョン太は、怒鳴った。

「ごめん、ついノリで」

鯖丸は言った。

「嫌なら逃げるかと思って」

「そうだった…」

今頃気が付いて、呆然としている。

起き上がって、何か首をかしげながら一点に意識を集中した。

暗い部屋の中で、魔法が発動する時の軽い振動があった。

ジョン太は、ほっとため息をついた。

「ああ、使えるみたいだな」

使えなかったら、バカがもう一回とか言いかねない。

「後は、明日確認しよう。今日はもう寝るよ、俺は」

よろよろベッドを降りて、バスルームのドアを開けた。

明かりは、さっき点けた時の様に力を入れなくても、指先で触っただけで簡単に灯った。

ええー、晩飯は？とか文句を言っていた鯖丸は、ドアを閉めかけたジョン太に忠告した。

「中までよく洗ったときだよ。後でえらい事になるから」

「嫌な忠告、ありがとうな」

げっそりした気分でシャワーのハンドルを捻って、言われた通りによく洗っておく事にした。

回復魔法をかけたので、痛みはないが、まだ異物感があって嫌な感じだ。

もう一回乾かすのは面倒だが、全身に熱いシャワーを浴びて、さっぱりしてから寝たい。

赤いマークの付いている方にハンドルを回した。

いつまで経っても、ぬるま湯しか出ないので、熱い方に全開にしたが、温度が変わらない。

外界と違って、安定してお湯を出すシステムが使えないのだろうが、今は、もうちょっと熱いお湯を使わないと、落ち着かない感じだ。

そう云えば、俺の魔法って火炎系だったな…と、ジョン太はいらん事を思い付いた。

温めればいいんじゃないのか、これ。

シャワーを浴びながら、壁に付けられた金属の配管パイプを握った。

ちょっとだけ…。

力を込めた瞬間、失敗したのが自分で分かった。

微調整が出来ない。

いきなり熱湯が噴き出した。

うぎゃーというジョン太の悲鳴が聞こえたので、鯖丸は飛び起きた。

一体、何しでかしてるんだ、あのおっちゃん…。

手探りでバスルームのドアを開けると、眩しいくらいに明かりが点いていた。

狭いユニツトバスの中は、水蒸気が充満して、煙っていた。

慌てて、ハンドルを捻って、水を出そうとしている男と目が合った。

「お湯にしたかったのに。熱い、最悪だ」

壁に蹴りを入れて怒っている男を、ぼんやり見た。

「ええと、ジョン太…？」

疑問形で言ったのは、見た事もない男が目の前に居たからだ。

金髪で青い目の中年男が、水の出始めたシャワーを浴びて、ほっとした表情で肩を落としている。

微妙に北欧系の顔立ちで、けっこうハンサムだ。

初めて見る顔だが、なぜか見覚えはあった。

ついさっき、リンクを繋ぐ時に見た、別の姿になってしまったジョン太だ。

現実でもう一回見る事になるとは、思わなかった。

そうか…拓真って、みっちゃんにあまり似てないと思ったら、父親似だったんだな。

「ああ、何かもうちょっと微調整出来ると思ったんだけど…」

「慣れたら出来るよ」

鯖丸は言った。

「それより、ちょっと鏡見てみな」

ジョン太は鏡を覗き込んだ。

知らない奴が居たので飛び下がったが、様子を見て、鏡に向かって手を振ったり、変なポーズを取ったりして、鏡の中の男と自分が連動しているのに気が付いた。

「ええと…」

しばらく考えた。

「疲れてるんだな、俺。幻覚が見える」

バスタオルを持って、風呂を出た。

無かった事にするつもりらしい。

体を拭きながら、暗い部屋の中を二三歩あるいて、何かにぶつかって転んだ。

「ええ？何でこんなに暗いんだ。どうなってんだよ、これ」

それは、自分で照明を壊したからじゃないかと言いかけて、鯖丸は止まった。

確かに、普通の人間には暗いが、この程度ならジョン太には見えていたはずだ。

まさか、身体能力まで普通になっちゃったのか？

「まあいいか、一晩寝たら元に戻ってるかも知れないし」

こんな暗い所でごちゃごちゃもめるのも面倒くさいので、自分もちゃっちゃとシャワーを使って、バスルームを出た。

照明の点くバスルームのドアを開けっ放しにして、脱いだシャツとトランクスを拾った。

「ジョン太、ちょっとそこ避けて。俺ももう寝る」

「お前、晩飯は？」

ベッドに座り込んで、ぼんやりしていたジョン太は聞いた。

「眠いから、もういい」

一年中愛用している、一週間大丈夫なTシャツを着込んで、さっ

さと布団に入ってしまった。

あつという間に寝息が聞こえ始めた。

きつと、急に魔力が上がったから、何か変な感じがするんだな。

うん、そうだ。そう言う事にしよう。

ジョン太は、鯖丸の隣にごそごそ潜り込んで、寝る事にした。

たぶん、中々寝付けないだろうと思っていたのに、意外なくらい早く、眠りに落ちた。

翌朝、鯖丸はジョン太の叫び声で目を覚ました。

自分の隣で、ジョン太がベッドの上に体を起こして、自分の両手を見つめたまま、英語で何か怒鳴っている。

ああ、やっぱり昨日のままだなあ…と、眠い目をこすりながら、鯖丸は思った。

大体、ジョン太の奴、何で全裸で寝てるんだよ。

絵面的には、本気でええ感じのゲイのカップルになって来た。

「どうなってんだ、これ。毛皮がねえ。お前か？お前が刈ったのか」
「そんな訳ないだろ」

鯖丸も、ごそごそ起き出した。

「まあ、顔でも洗って、落ち着いたら？」

昨夜から照明が点きつ放しのユニットバスに入って、洗面台を覗き込んだジョン太は、悲鳴を上げた。

「うわー、夢じゃなかったー」

鏡の中をしげしげと見てから、自分の全身を確認した。

東洋人に比べれば毛深いが、全然毛皮ではない。大体、毛の色も違う。

「えらい事になったなあ、若い頃のじいちゃんそっくりじゃねえか」
何か、集中して元に戻ろうとしている様子だったが、鯖丸の方を見た。

「お前、あの鬼丸からさくつと元に戻るやつあったろ。あれ、どうやってるんだ」

「勝手に変な名前、付けるなよ」

ズボンとトレーナーを着込んでいた鯖丸は、ぼやいた。

「ええと、何て言うか、内側に折りたたむ感じ…？」

そんな説明じゃ、全然分からん。

バカに聞くんじゃなかった。

「まあ、自分で出来なかったら、後でトリコがどうにかしてくれるんじゃないの」

そうかも知れないが、この姿でいきなり出て行って、俺だって分かるか？

ジョン太は、とりあえずこの場は諦めて、顔を洗って歯を磨き始めた。

だから、何で裸なんだよ、このおっちゃんは。

色々ショックな事があって、気が回らなくなっているのか、普段の生活が丸出しになってしまっている。

顔を洗って出て来たジョン太は、鯖丸を見て、あれ…という表情をした。

「お前、そんな顔だったかな」

「こんنادよ。ジョン太、昨夜暗い所で見えてなかったじゃん。目も悪くなったんじゃないの」

「いや…前より良く見える。何か、物が鮮明に見える。特に、近くの方がはっきりしてて、気持ち悪い」

見慣れた顔を、しげしげと近くから見た。

「お前、抜糸しないで回復魔法かけるから、額の傷が変な事になってるぞ」

鯖丸は、自分の額に触った。

「ええ、どうしよう」

「後で糸抜いてやるよ」

そうか、遠距離射撃能力や暗視能力を上げる為には、視覚の別の部分が犠牲になっていたのかも知れないな…と、思った。

鯖丸が、変な顔をしているのに気が付いたジョン太は言った。

「お前、俺が時々眼鏡かけてるから、老眼だと思ってただろう」

「うん、実は思ってた」

鯖丸はうなずいた。

「ところでジョン太、そろそろ服着たら？」

ジョン太が身形を整えて居る間に、鯖丸はいつも通り、素早く顔を洗って歯を磨いてヒゲを剃った。

部屋に備え付けの安全カミソリを、ジョン太の方に寄越した。

「その、微妙な無精ヒゲは、剃っとく？」

ジョン太は、自分の顔をなでた。

顔の形が変わってしまったので、けっこう違和感はあるが、顔の毛の事は、自分では気にならない。

「どうだろう。見苦しいならそうするけど、後で元に戻った時、この辺だけ毛が無くなったりしないかな」

「うーん、分からないけど、見苦しいという程でもないよ」

「じゃあ、いいか」

髪の毛は、少し気になるのか、手櫛でかき上げてちょっと整えている。

全体として、まあきっちりしているとは言えないが、だらしない程でもない。

ハリウッド映画に出て来そうな、ちょっとくたびれた感じの刑事とか、そんな感じだ。

ガンベルトを手早く装備して、いつもの格好になったが、姿形が違うので、全然印象が違う。

「皆は、芦屋の常宿だと言ってたけど、場所知ってる？」
鯖丸は聞いた。

「ああ、何度か泊まってる。けっこう距離があるから、車使おう。
お前、ランエボのキー、持ってたよな」

ヨシオ兄さんから、預かったままになっている。
鯖丸はうなずいた。

「じゃあ、出よう」

いつも通りに支度を終えて、二人は部屋を出た。

受付には、若い娘が居た。

置物の様なじいちゃんと交代したらしい。

照明のスイッチ、壊したんだけど…と言うと三千五百円請求された。

何を基準にした値段か、全く分からない。

一応、領収証をもらってベルトの物入れに仕舞ったジョン太は、入り口の戸を開けて、外へ出た。

あっという間に、まるでバリヤーにはじき返される様に、戻って来た。

「何だ！」

鯖丸は、刀に手をかけて、外へ飛び出した。

何事もない朝の光景があった。

魔界とはいえ、けっこう都会なので、普通に出勤したり、仕事を始めている人々が行き交っている。

クリスマスの飾り付けが所々にあるのも、外界と同じだ。

出現したのが二十数年前なので、四国の魔界の様に、古いスタイルの生活は残っていない。

「何もないよ、ジョン太」

鯖丸は振り返った。

「寒い」

ジョン太はうなった。

「毛皮が無い奴って、こんなに寒いのか」

そりゃあ、寒いだろう…と、鯖丸はジョン太の服装を見た。

夏も冬も、全く同じシャツとズボンを身に着けているだけだ。

おまけに、習慣でシャツの袖をこち亀の両さんみたいに捲ってしまっている。

「今年は寒波が来てるらしいよ」

白い息を吐きながら、鯖丸は歩き出した。

一年中適温のコロニーで育っていても、地球に来て六、七年も過ぎれば、暑さ寒さには慣れて来る。

この場合の慣れるというのは、体が慣れるだけではなく、服装で温度調節する技術の向上だ。

「その辺で服買えば？」

「そうする」

近所に、高架下の商店街があった。

まだ、半数以上の店は開いていないが、早朝から営業している店も、ぼつぼつあった。

昔ながらの、いかにも用品店という感じの店で、ジョン太は、サラリーマンのおっちゃんがスーツの下に着そうな、暗い灰色のセーターを手を取っている。

もつと考えて選べよ…と思ったが、サイズが合うのはそれだけらしく、色は何色でも、どうでもいいらしい。

「上着も買えば？セーターだけじゃ寒いだろ」

「なるほど」

世間体以外の理由で、服を着た事のないジョン太は、忠告に従った。

地味なジャケットしか売ってないので、本格的に、うらぶれた渋い刑事物の主役みたいになって来た。

じゃあ行こうか…と鯖丸は店を出ようとしたが、ジョン太は、下着関係のワゴンをじっくり見ている。

「なあ鯖丸。腹巻きって暖かいかなあ」

うろんな事を言い始めた。

「知らないよ」

ダメだ、こいつ本物のおっさんだ。

おまけに、店のオヤジが、今時ステレオタイプのコントでしか見かけないパッチとシャツを出して来た。

全部着用したら、立派なバカボンのパパが出来上がる仕組みだ。

「ジョン太：それはちょっと引く」

某ユニクロのヒートテックタイツ（黒いやつ）でも着用は躊躇われる若者は、言った。

「うるせえ、俺は今人生一寒いんだよ」

おっちゃん、世間体とか気にしている余裕がない。

「そう：朝からあれだけど、うどんとか食って行く？ぬくいし」
鯖丸は聞いた。

服を重ね着して、きつねうどんをすすったせいか、ジョン太は急速に元気になった。

走っている間に、車の暖房も効いて来たので、快適だ。

うどんでは当然足りないらしく、いつの間に買い込んだのか、串カツをくわえたまま運転しながら、鯖丸は聞いた。

「ジョン太も要る？」

袋の中に、ソースをかけた串カツが紙に包まれて無造作に入っている。

「お前、朝からよくそんな脂っこいもん食えるな」

ジョン太は呆れたが、一本だけもらうわ：と言って、袋に手を突っ込んだ。

さっくり揚がっているので、意外と食える。

「蓮根かよ。肉食えよ、肉」

袋ごと寄越して来た。

運転しながらなので、衣のかすをぼろぼろ食いこぼしている。ラ
ンエボ台無しだ。

ヨシオ君が見たら泣く：と思ったが、そう言えばあいつもお好み
焼き食ってたなあ：と、思い出した。

ダッシュボードと後部座席には、包み紙やコーヒーの空き缶が放
り出されているし、灰皿には吸い殻が満杯になっている。

だらしないなあ、本社の奴らは。掃除しろよ：。

ため息をついて、車内に落ちていたコンビニ袋にゴミを拾って入

れているジョン太を、鯖丸は横目で見た。

動作も言動もジョン太なので、特に違和感はないが、外見だけ見ると別人だ。

「やっぱり、変かな」

本人の方が違和感があるらしく、聞いた。

「うーん、変じゃないけど、何て言うか」

鯖丸は言った。

「ジョン太、本当に外人だったんだなあ」

「最初からそう言ってるだろ」

ジョン太はぼやいた。

「ちよっと聞いてもいい」

指示された通り、穴の周辺を避けて、遠回りで芦屋方面に向かいながら、鯖丸は言った。

「何だ」

「何で、国連宇宙軍に居たのに、四国の田舎で便利屋やってるの。元々日本人だって言うなら、分かるけど」

「ばあちゃんが日本人だから」

それは、前にも聞いた。

説明になってないという表情をされたので、ジョン太は諦めて事情を話した。

「ほら、俺って退役する時、けっこう酷い状態になってただろ」

リンク張ったんだから、見たはずだという口調だった。

「面倒見てくれる人が居ないと、日常生活もまともに出来ないから、じいちゃんとはあちゃんが居る所に移されたんだよ」

「あ：ご両親は居ないんだ」

悪い事を聞いたという感じで、鯖丸は言った。

「居るよ。まあ、忙しい人達だから、あちこち飛び回ってるけどな」
今まで、突っ込んだ話を聞くのも何だか悪い気がしたので、その辺の話題に触れるのは止めていたのだが、そろそろ付き合っても長いし、リンクも張ったので、もういいだろうと思って、聞いてみた。

「ジョン太の両親って、何やってる人なの」

「うーん、バイオ関係の会社やってる。子会社もいっぱいあって、色々大変らしいよ」

予想もしない事を、言い始めた。

「俺は、そういうの興味ないし、向いてないから家業は継がなかったけど」

「えええ、お坊っちゃまかよ、ジョン太」

強面っぽく見えて、実はすごくいい人だったり、すれている様に見えてへたれだったり、微妙なキャラクターの理由が、ちよつと分かった。

「まあ、そこそこ育ちはいいかな」

社長の御子息が謙遜していらっしゃる。

「オヤジとお袋とは、もう何年も会ってないなあ。美織が生まれた時に、見に来てくれたのが最後かなあ」

「そうなんだ」

どうコメントしていいか、分からない。

「お前こそ、何で四国に居るんだ。宇宙からの帰国子女が定住するには、微妙な場所だろ」

逆に、ジョン太に聞き返された。

「叔父さんが居たから」

言いにくい事らしく、微妙な表情になっている。

「父さんの弟で、親戚って、他に居なかったんだけど…俺もあの頃は悪かったし、暁も遠慮無く出て来てた頃だし」

手に負えなかったらしい。

「高校までは、寮に入ってた、生活費も学費も、出してもらってたんだけど、もう面倒見きれないって言われて」

「よくそんなに進学しようと思ったなあ、お前」

何となく呆れた。

「どうにかなるかと思って」

うちに面接に来た時には、ほぼどうにかならなくなってただろう

が：この子は全く。

「お前って、何か将来大物になりそうな気がして来た」
ジョン太は言った。

「ならないよ。普通に就職して、普通に家庭を持って、平穏に暮らす予定だから」

大物が小市民を目指すと破綻するぞ：と内心思ったが、気の毒なので言わない事にした。

「そうか。まあ、無理はするなよ」

自分の事を普通だと思い込んでいる、変なおっちゃんに言われたくないなあ：と、鯖丸は思った。

お互い様だった。

五話 三匹（完結編）

芦屋の常宿に近付くと、街並みが変化した。

放棄されて荒れた穴の周辺から、人が生活している暖かみのある風景に切り替わった。

上品な感じの街で、現役で使われている様子の古い家も多い。

昔から住んでいる愛着のある場所を、魔界になっても離れなかった人がけっこう居るらしい。

フロントで部屋を聞いて階段を上がると、皆は一部屋に集まっていた。

地形が高台になっている事もあって、窓からは穴が一望出来る。

小さな点の様な状態だが、ハンニバルらしき動く物が確認出来た。

「ただ今戻りました」

挨拶して部屋に入ると、皆がこちらを向いた。

「ご苦労様です。意外に早かったですね」

海老原さんが、テーブルの上のポットから、紅茶を注いで渡してくれた。

「それで、どうなったんだ」

トリコは、心配そうに聞いた。

鯖丸は、にっと笑ってピースサインを出した。

「きっちり魔法使える様にして来た」

「すごいな、お前。大変だったろう、あいつとリンク張るの」

「うん、一回じゃ無理だったんで、リバーズで二回」

周囲がどん引きする様な事を、平気で言っている。

「うわー、さすがに引くわ、それ」

自分と同じ顔のエンマ君に引かれると、ちょっと微妙だ。

「それで、ジョン太は？」

鯖丸は、廊下の方を振り返った。

「実は、ちょっと変な事になって…」

背の高い、ごつい男が普通に部屋に入ってきた。

「誰？」

全員が聞いた。

「ジョン太」

「え……？」

さすがの海老原さんも、手に持ったカップを取り落としそうになっている。

「鯖丸、君なあ、なんぼあんなごっついもん見せられて、ジョン太が逃げたからゆーて、その辺のおっさん代わりに拾て来るなや」

ヨシオ兄さんが、言った。

ごっついって何がだ。見たのかよヨシオ兄さん。

「こんな変なおっさんが、その辺に落ちてる訳ないじゃん。ジョン太だよ、これ」

一見弁護している様で、実は酷い事を言っている。

「誰が、その辺に落ちてるおっさんじゃー」

ジョン太は、鯖丸の首を絞めた。

「あ……ジョン太だ」

「うん、ジョン太やな」

それで分かるのもどうか……。

「うわー、これ、ほんまもののジョン太か？外人やん」

ヨシオ兄さんは、しげしげとジョン太を見た。

「最初からそうだよ」

あんなに何回も言ったのに、人の話聞いてないのか、このお笑い芸人は。

「目え青いやんか。気色悪ー」

「それも最初からだ。殴るぞ、お前」

「えっ、そうだっけ」

鯖丸にまで言われた。がっかりだ。

「もういい……トリコ、これ元に戻せないか」

「何だ、自分で戻れないのか」

トリコは、ジョン太を眺めた。

「魔法使ったら、こんなになって。鯖丸は折りたたむとか、訳分からん事しか言わないし」

「うーん、折りたたむよなあ、あれ」

「うん、たたむねえ」

サリーちゃんもうなずいている。

「そのままじゃダメなのか」

トリコは聞いた。

「ダメに決まってるだろう。寒いわ、暗い所で物は見えないわ、鼻は利かないわで、もう散々だ」

「いやあ、かつこええわージョン太」

サリーちゃんは、ため息をついた。

「そのままでええやん」

「うん、ビジュアル的には、一人ぐらい男前が居た方がいいな」
女性陣には好評だ。

「何い、ジャニーズ系の俺より、そんなくたびれたおっさんがいいのか」

「わしも、お笑い芸人の中では男前や。勝負したるで」

「ホストクラブでバイトしても、全然バレなかった俺が相手になつたるわ」

ああ、バカが増殖している…。

ていうか、エンマ君、外界では女だろ。ホストクラブでバイトするんな。

「すいません、海老原さんお願いします」

バカ三人と男前大好きな女二人は諦めたジョン太は、海老原さんに頼った。

「僕も、昔は美少年やったんですけどねえ…」

海老原さんは、ため息をついた。

「オジサンになっても男前とは、羨ましい話です」

「あの…海老原さん？」

「しばらく、そのまま困ってなさい」

「ひどい、海老原さんまで。トゲ男があんな変な姿になってる理由が、今分かった」

「冗談ですよ」

ティーカップをテーブルに置いた海老原さんは、ジョン太の顔を両手で押さえて、五つ数えた。

「はい、終わり」

「おお、本当にたたむんだ」

感心しながら、あちこち点検して確認している。

トリコとサリーちゃん以外は、全員ほっとした顔をした。

「大丈夫か？あれ」

暑くなったのか、部屋の隅で服を脱ぎ始めたジョン太を、トリコは指差した。

「何か、微妙に弱ってないか」

「まあ、その辺は色々大変だったし」

鯖丸は、ぶつぶつ言った。

「俺の事も心配してよ。本当に大変だったんだから」

「うん、分かるよ。大変だったろ、あれ引っ張り出すの」

仕事中は、プライベートは持ち込まないのが暗黙の了解になっていたのに、何だか今日は変に絡んで来るなあ…とトリコは思った。

「それもあるけど…」

トリコの手を握って、口ごもった。

普通になっているが、肩が震えている。

「悪いけど、ちょっと外すな」

皆に断って、鯖丸の手を引いて部屋を出た。

隣の部屋のドアを開けて、入った。

女の子二人部屋になっているらしく、トリコの上着と、サリーちゃんを着ていたフェイクファーのコートが放り出されて、荷物が散乱している。

「どうした」

トリコは聞いた。

「本当に、大丈夫か？ お前」

ドレッサー兼机の前に置かれた椅子に座って、鯖丸は俯いた。
「全部思い出した。けっこうきつい、これ」

リンク張っているの、何をどう思い出したのかは分かる。

屈み込んで肩を抱いた。

「そうか、辛いな」

「忘れたままにしとくより、マシなんだけど」

鯖丸は、トリコにぎゅっとしがみついた。

「ごめん、ちょっとした間甘えていい」

「いいよ」

鯖丸は、トリコの胸に顔を埋めて、しばらく泣いた。

肩を抱いて、頭を撫でていたトリコは、ふいにぴしゃりと後頭部をはたいた。

「こら、ついでに乳揉むな」

「だって…」

外界では、散々エロい事をやり尽くして来たが、実は仕事中にいちやいちやしている訳にもいかないの、大きい方のトリコに触る機会は、あんまりない。

「お前もやっぱり、こっちの方がいいか？」

トリコは聞いた。

ロリ属性がない奴なら、大体そうだろう。

「別に、やればどっちでもいいよ」

ああーそうですか。

「最低だな、お前」

「どっちも好きだって、言ってるのに」

鯖丸は、手の甲でごしごし顔をこすって、椅子を立った。

「顔洗って来る」

洗面所に行って、水を出している音が聞こえた。

ちよっと泣いたら気が済んだらしい。

強い奴だなあと思った。

「先に戻ってるよ。落ち着いたらおいで」

トリコは、ドアを開けた。

「そこにある焼き饅頭、食っていいから」

魔界で駅を降りた時、買っておいた菓子を指差した。

サリーちゃんと二人でつまんだが、まだ半分残っている。

「やった。全部食っていい？」

「いいよ」

トリコは、部屋を出た。

洗面所から、タオルで顔を拭きながら出て来た鯖丸が、嬉しそうに饅頭に手を伸ばしているのがちらりと見えた。

後ろ手でドアを閉めた次の瞬間、ガラスが破られる凄い音が背後で聞こえた。

うぐつという、くぐもった叫び声が続いた。

あいつ、一遍に二個以上口に入れやがったな…。

「鯖丸っ！」

振り返って、今出て来たばかりのドアを開けた。

部屋の真ん中に、ハンニバルが居た。

窓ガラスの破片が散乱した部屋の中で、見慣れた皮のコートを着た、見慣れた顔の男が、全く見た事のない表情で立っていた。

長く伸びた髪が、生き物の様にうねりながら、鯖丸の首を締め上げていた。

一昨日の晩見た時は、短かった髪が、メドゥーサの様に伸びて動いている。

こちらを見てにやりと笑うと、鯖丸を捕らえたまま、窓から空中に身を躍らせた。

ハンニバルを見張る為に、見晴らしのいい部屋を選択したので、ホテルの最上階に近い階層だ。

やばい。

魔界でなら、この程度の高さから落ちても、鯖丸なら怪我もしな

いだろうが、それは、重力操作の魔法を使える状態での話だ。

あのまま絞め落とされて意識を失ったら、いくらランクSの魔法使いでも、たぶん死ぬ。

トリコは、窓に向かって走り、身を乗り出した。

隣の部屋から、ジョン太が同じ様に身を乗り出していた。

一部始終を聞いていたのだろうが、アサルトライフルと短機関銃まで身に着けた、フル装備の姿で、鯖丸の刀を左手に握っている。

トリコと目が合った瞬間、一瞬のためらいもなく窓から空中に飛び出した。

「バカ、間に合わない」

いつもながら、判断が速過ぎて、ついて行けない。

魔獣を出して空中で拾えと云う事なのだろうが、あれは、鯖丸の攻撃魔法みたいで、一瞬で出せる物じゃない。

割れた窓から飛び降りて、落下しながら魔獣を放った。

飛び降りたジョン太は、鯖丸に向かって刀を投げた。

牽制するハンニバルに、拳銃を抜いて撃ち込んだ。

張られた結界は、立て続けに五発、全く同じ弾道で撃ち込まれた弾丸で緩んだ。

ジョン太にはめずらしく、六発目は外した。

投げた刀を、鯖丸が受け取ろうとして、手を伸ばした。

紙一重の差で、刀は弾かれて下に落ちた。

ハンニバルと鯖丸の姿は、地面に激突する直前に、かき消えた。

追尾して来た魔獣が、空中でジョン太を拾った。

魔獣に支えられて無事に着地したジョン太は、落下して来るトリコを見て、顔色を変えた。

「トリコ!!」

いくら何でも、あの高さから落ちた人間は拾えない。

それでもやるつもりらしく、手を伸ばして落下地点に駆け寄った。トリコの背中から、真っ黒で巨大なコウモリの羽根が伸び上がった。

ばさりと風切り音を立てて、羽ばたいた。

地面に墜落する直前で体勢を立て直し、空中に舞い上がった。そのまま、しばらく上空から周囲を確認して、降りて来た。

「そんな事も出来たのか」

巨大な羽根が畳まれて、背中に消えるのを、ジョン太は驚いて眺めた。

「行動速過ぎだ、お前」

魔獣を袖口から仕舞いながら、トリコは言った。

「この子はそんなに速く動けないんだから」

「すまん」

ジョン太は、屈んで刀を拾った。

「見失った。穴に行っただろうが、早く追いつかないと…」

また掠われやがった。どこのお姫様だ、あいつ。

「私が先回りしましょう」

何時の間に居たのか、海老原さんが横合いから刀を手にとった。

「救出までは無理かも知れませんが、これを渡すくらいならやれま
すんで」

外界でも魔界でも、何か棒的な物を持っていないと、鯖丸の攻撃
力は格段に下がってしまう。

今の状態では、捕らえられたまま手も足も出ないはずだ。

「お願いします」

言い終わらないうちに、海老原さんの姿が消えた。

一瞬遅れて、音速を突破する時の衝撃波が、周囲を薙ぎ払った。

後を追って走り出そうとするジョン太を、窓から身を乗り出した
ヨシオ兄さんが止めた。

「待てや。なんぼジョン太でも、車のが速いわ。今行く」

窓の中に引っ込んだヨシオ兄さんに向かって、トリコは魔獣を出
して飛ばした。

上の方から、ヨシオ兄さんの「食われるー」という叫び声が聞こ
えた。

そのまま、腹の中に兄さんを収納した魔獣が降りて来た。気の毒に、兄さんよろよろだ。

「姉さん、氣い短いわ、ほんま」

ポケットから、ランエボのスペアキーを出して、車の結界を解除しながら駆け寄った。

「急ぐんだ」

トリコは、めずらしく、後部座席ではなく助手席に滑り込んだ。

「分かつとる」

ジョン太が、後部座席に乗るのを確認して、ランエボは走り出した。

カーアクション映画の様な、派手なタイヤの空回りも無ければ、テールスライドもさせない地味な走りだが、あっという間にスピードメーターが100キロオーバーに入った。

「お前が本気で車転がしてるの初めて見たけど」

ジョン太は、感心した様に言った。

「マジで速いな」

「昔、六甲で走り屋やってん」

いつになく真剣な顔でハンドルを握りながら、ヨシオ兄さんは言った。

「実家は豆腐屋」

たぶん、これはボケだ。

「藤原豆腐店か、お前んところ」

一応突っ込むと、ご満足な顔をしたので、ボケていたらしい。

「一応、レーシングライセンスも持ってたんやけどな」

魔界関係者のご多分に漏れず、この人も何か色々あるらしい。

一応免許は持っているが、車について何の興味もないトリコは、もつと急げとか無茶を言い始めた。

いや：これ以上急げる奴なんて、WRCとか、フォーミュラ何とかに出てくる人くらいだと思うが：。

この凄さを分かってももらえないとは、ヨシオ君気の毒に：：と思

ながら、ジョン太はベルトの物入れを開けた。

使ってしまった弾を装弾して、更にごそごそ探っていたが、くそっ昨夜落として来たのか…とか言って物入れを閉じた。

「トリコ…ヨシオ君でもいいや。絆創膏持ってないか。出来れば指先に貼るやつ」

普通は持ち歩いてないと思う。

「怪我でもしたのか」

トリコは、後部座席を振り返った。

「いや、トリガー引く指に、ヒビが入っただけだ。どうって事ないんだけど、微妙な感覚が…」

さっき、一発だけ少し外していたのを思い出した。

「見せて」

100キロオーバーで疾走する車内で、トリコは後部座席に身を乗り出した。

手の甲まで毛皮に覆われているが、指先と手の平は無毛で、皮膚が露出している。

あまりじっくり見た事はなかったが、爪の形は普通の人間と同じだ。

その、爪の周りと手の平が、ひどい事になっていた。
がさがさに荒れて、爪の回りが何カ所かぼっくり割れている。

何だ、この、お肌が弱いベテラン主婦みたいな手は。

「ちゃんとハンドクリームとか塗っとけよ」

トリコは呆れた感じで言った。

「いや…添加物入ってるやつ、アレルギーで」
ジョン太は言い訳した。

「無添加のワセリンは、鯖丸が使い切っちゃおうし」

「何に使ったんだよ」

分かっているくせに、トリコは意地悪で聞いてみた。

「後で鯖丸に聞け」

不機嫌に言ったジョン太の指先を、トリコは手を伸ばしてぎゅっ

とつまんだ。

ヒビの入っている指先をつままれたジョン太は、痛てえと文句を言った。

回復魔法が通って、あっという間にひび割れていた指先が、つるになった。

「自分でやれよ、これくらい。魔法使える様になったんだろ」
「あ、そうか」

長年の習慣は、中々変えられない。

指先の微妙な感覚が戻ったのか、ジョン太は窓から身を乗り出して、アサルトライフルを構えた。

建設途中で放り出された鉄骨の向こうに、ちらりと人の姿が見えた。

この距離から狙うのかと思う間もなく、銃声が響いた。
道がカーブしている上に、路上に障害物が落ちている。

ヨシオ兄さんは、ほとんどスピードを落とさないで避けたが、体が遠心力で思い切り振られた。

トリコは、ドアの方に叩き付けられた。

「姉さん、シートベルト！」

ヨシオは叫んだ。

後部座席のジョン太は、何事もなかった様に踏み堪えて、更に撃った。

鉄骨の間をすり抜けた銃弾が、かろうじて見える人影に吸い込まれて行く。

誰をどう狙っているのかすら、普通の人間には分からない。

銃弾は、当たった瞬間にはぜた。

小さな爆発がいくつも起こり、人影は二つに分かれて飛んだ。

一方が長い物を持っているので、鯖丸だと分かった。

もう一人は、コートを着ている。ハンニバルだ。

海老原さんが居ない。

資材と重機を回り込んで、やっと穴の全容が見えた。

鯖丸の背後に、海老原さんが倒れている。

見た目の外傷はないが、動かない。

穴の縁に立った二人は、油断無く睨み合った。

鯖丸の上着が、何カ所も切り裂かれて、風に煽られている。

首にはまだ、切り離れた髪の毛が巻き付いている。

ハンニバルが、ふいに腰の後ろに回していた腕を振り出した。

ブーメランの様に湾曲した刃物が、変形しながら襲いかかった。

鯖丸が空中に逃れ、反転して斬りかかった瞬間、ハンニバルの姿はかき消え、一瞬で背後に現れた。

銃声が響き、ハンニバルの手から刃物が落ちた。

走る車の中から、ジョン太が飛び降りていた。

あっという間に体勢を立て直し、片膝を付いた姿勢で、両手に構えた拳銃を撃ち込んだ。

「ジョン太!!!」

振り返った鯖丸は、飛び下がり、海老原さんの襟首を掴んだ。

魔力を通して軽量化し、思い切りジョン太に向かって投げつけた。

いくら重力操作で軽量化しても、鯖丸の手を離れた時点で、元の重さに戻る。

普通に受け止められるのは、ジョン太くらいだ。

一瞬で銃を仕舞って、海老原さんを受け取ったジョン太は、振り返った。

突っ込んで来たランエボが、めずらしくタイヤを滑らせながらジョン太の背後に回り込んだ。

さすがヨシオ兄さん。良い位置にびたりと止めた。

いいタイミングで、トリコが後部座席のドアを開けている。

放り込んでから、今度はスコープオンを抜いて、鯖丸に向かってフルオートで弾をばらまいた。

味方に向かって発砲して、どういうつもりだ…と、トリコとヨシオ兄さんは思ったが、短機関銃の弾は、全弾命中せず、鯖丸の周囲に留まった。

刃物を拾って、斬りかかったハンニバルの周囲で、空中に浮いた弾丸がはじけた。

空中に待機した弾が、盾になって鯖丸を守っている。

ハンニバルは、一旦後ろに下がり、ブーメランの様な曲刀を片手に提げて、思案した。

「海老原さん：大丈夫ですか」

トリコは、座席に放り込まれた海老原さんを抱き上げ、回復魔法をかけた。

黒縁の眼鏡を飛ばされ、びっちり七三に分けた髪の毛が乱れて、額に落ち掛かっている。

あれ：この人、こうして見ると、意外と綺麗な顔立ちをしているな：と思った。

自称、昔は美少年だったというのも、案外本当かも知れない。

「大丈夫です」

海老原さんは、目を開けた。

「僕の事はええですから、早う鯖丸君を」

残ったダメージは、あつと言う間に自分で回復し、背広の内ポケットから、予備の眼鏡を出して来て掛けた。

「何回も斬られとるはずです。自力で回復するのも、限界や」

「あいつ、回復魔法は苦手だからな」

トリコは、車の外に飛び出した。

「回復させる。そいつ、もう：」

「分かってる」

二人とも、鯖丸とリンクしているので、どの程度のダメージを受けているか分かる。

よく、まともに立って動き回れるな：と感心した。

体に乗っ取るのが目的なら、それ程痛めつけないだろうとタカをくくっていたが、死なない程度にはやるつもりらしい。

「俺がやる。援護しろ」

ジョン太が、どの程度魔法を使えるのか分からなかったが、信用

するしかない。

鋭利な水の壁が、ハンニバルの前に地面から噴き出した。間髪入れず、魔獣が背後から襲った。

ハンニバルは、全く意に介さず、前に踏み出した。

水の壁を蹴散らし、背後の魔獣を後ろ手に叩き付けた。

魔獣は、水滴になって四散した。

海斗の記憶を持っているので、手の内はほとんど知られている。

魔獣が打ち碎かれた瞬間に、トリコは後ろに飛び下がった。

追撃は、来なかった。

ジョン太が、鯖丸を抱えて移動していた。

本気で、魔力を使わない身体能力だけでの移動だったので、魔法使い以外相手にした事のない殿の弟子は、反応が遅れた。

たぶん、ハンニバルも同様だ。

戦闘用ハイブリットというのは、その辺に普通に居る様な存在ではないし、魔界でうろろしている奴なんて、更に稀少だ。

魔法を使っていないので、追尾出来ない。

味方まで、二人の存在を見失った。

しばらく間を置いて、背後に佇む重機の向こうから、気配があった。

回復魔法が発動した。

熟練度は低いが、魔力は高い。

あつという間に回復した鯖丸が、重機の運転席に飛び乗った。

「ヨシオ兄さん、ケーブルこっちに投げて」

えええ、今のジョン太か？そんな魔力高かったんか、あいつ。

後部座席に放り出されたケーブルの束を、車のドアを開いて投げつけた。

運転席に座った鯖丸は、ポケットから出した変換プラグをインパネに差し込み、ケーブルに繋いだ。

束ねたケーブルを解しながら、もう一方の端を、自分の首筋に差し込んだ。

首に穴が空いている様な奴は、大体デジタルジャンキーだと思っていたヨシオ兄さんは、放置された重機が起動するのを見て、愕然とした。

「あいつジャンキーやのうて宇宙人か。あんなごつつい体して」
魔界の深部では作動しないはずの重機が、有線接続で動いた。

ジャックインプラグから、直接魔力を通して二十数年振りに起動した重機が、腕を振り上げてハンニバルに襲いかかった。

地面がえぐられ、砂埃が舞い上がった。

後ろへ逃れるハンニバルに向かって、トリコが水滴に四散した魔獣を集めた。

「姉さん、そのまま」

車から走り出たヨシオが、四散した水の魔獣に冷気を放った。
鋭利な氷の刃物になった魔獣が、ハンニバルに襲いかかった。
ハンニバルは、障壁で防いだ。

惜しい。ヨシオ君とリンク張っとけば、もっといい感じで攻撃出来たのに。

一瞬思ったが、相方が死にそうになっている奴相手に、そんな事出来る訳がない。

ダメだこれ、職業病かも。

重機が、更にハンニバルを襲った。

鯖丸が、有線接続したまま、ケーブルを捌いて背後に回り込んでいる。

こうして見ると、十メートルは短い。ぎりぎりだ。

振り下ろされたパワーショベルの腕を、ハンニバルが片手で受け止めた。

人間業ではない魔力が、金属を伝わって重機を浸食して行く。
運転席まで伝わった魔力が、ケーブルに達した。

ケーブルが、どんどん変形しながら浸食されて行く。

首筋に届く直前で、鯖丸はケーブルを首から抜いて投げ捨てた。

「くそ、やっぱりこんなじゃダメか」

もう少しくらいは、足止め出来ると思っていた。

引き抜いたケーブルが、先端まで浸食され、空中を蛇の様にうねった。

背後から斬りかかろうとした鯖丸が、弾かれて倒れた。

立ち上がろうとした体に、ぎりぎりケーブルが巻き付いて行く。ケーブルを通して、魔法が来た。

ハンニバルの使う、物質系とも全く違う、見た事のない力が、発光しながらケーブルごと鯖丸を焼いた。

魔力の高い人間が、障壁も張らないでまともに攻撃魔法を食らったら、ひとたまりもない。

ジョン太が、重機に手を伸ばした。

指先が近づいただけで、体ごと弾かれた。

しまったという顔をして、魔力レベルを一気に下げ、運転席に飛び乗ってケーブルを引き抜いた。

ケーブル沿いに攻撃魔法を通され、悲鳴を上げていた鯖丸は、ぐたりとその場に動かなくなった。

まだ、魔力の通っている重機を投げ捨てて、ハンニバルが倒れた鯖丸に駆け寄った。

トリコが、滑空しながら鯖丸を拾い上げ、上空へ飛び上がった。

さっき見たコウモリだ。

水の魔獣より、圧倒的に動きが速い。

魔法だから、空力学的に飛んでいないのは分かっているが、70キロ以上ある人間を抱えて飛べるとは思わなかった。

それでも、限界の重量はあるらしく、明らかにスピードが落ちた。ある程度離れた場所まで逃れたトリコは、羽を畳んで魔獣に乗り換えた。

「邪魔をするな」

ハンニバル：殿の弟子が叫んだ。

「そいつの体を寄越せ。それとも、お前の息子を代わりに差し出すか？」

トリコは、地面に降りた。

鯖丸を乗せた魔獣を、後方に引かせて、ハンニバルの前に立った。

「二択は嫌い」

三択も、もちろん嫌いだ。

「海斗の体で、そんな事言うな」

トリコの周囲に、何本もの渦が巻いていた。

地中と空中から集められた水が、竜巻の様に長く伸び上がって、獲物を狙っている。

「お前こそ、その体を出て、異界に帰れ」

水の竜巻が襲いかかった。

トリコが、魔獣以外の攻撃魔法を使うのはめずらしい。

魔獣を出して鯖丸を確保したままなので、他に方法が無いのかも知れないが、さすがランクS、攻撃系は苦手なはずなのに、かなり強い。

とは言え、殿相手に圧勝する様な異界の物に、勝てるとは思われない。

鯖丸を逃がす為に、無茶をしている。

乗っ取られたら終わりだ。

身体能力と魔力の高い体に、殿の弟子が入ったら、この場に居る全員が瞬殺されるだろう。

いつの間にか、ジョン太が、トリコの隣に立っていた。

重機からここまで、一瞬で移動して来ているが、魔法ではない。

身体能力だけで移動して、制止した瞬間に、一気に魔力を上げた。

両手に、32口径と44口径の、標準装備の銃を構えている。

ガンベルトの物入れから、弾丸が次々に飛び出して、空中で螺旋を描きながら装弾を待っていた。

殿の弟子が、魔法を使った。

周辺二十メートル近い地面が発光し、全体に魔力が通った。

白い光が、無数に地面から噴き出し、穴の周辺を飲み込もうとしていた。

本気でヤバイ。

攻撃を仕掛けようとしていたジョン太は、一瞬の判断で止めた。殿の弟子がハンニバル：いや、如月海斗に戻ろうとしている。

何度も、綱引きの様な力のやり取りがあつて、瞬間、異界の物が人間に戻った。

「逃げるトリコ。これ以上押さえるのは無理だ」

如月海斗が叫んだ。

殿の弟子が出しかけた攻撃魔法が、キャンセルされていた。

ジョン太は、トリコの襟首を掴んで、全速力で魔法の攻撃範囲から逃げた。

後方で、行き場を失った魔法が暴発した。

これ、当たったら本気で死ぬ。

「うおおお、マジでヤバイー」

ここまで死にそうな目に遭ったのは、軍を退役して以来だ。

トリコを抱えて、100メートル七秒台の走り逃げ出した。ていうか、この年になってまだこんなに速く走れたのがびっくりだ。

安全圏まで逃れた時には、背後の地表が、深くえぐられたクレーターになっていた。

鯖丸が目を開けると、建物の中に居た。

見慣れた構造なので、遺棄されて荒れ果てていてもコンビニだと分かる。

「あ：ローオン」

「店名が分かる程、コンビニに通うな」

こちらを覗き込んでいたジョン太が、的確にツツコミを入れた。飛び起きようとする鯖丸を、トリコが押し止めた。

「立つな。ゆっくり起きて座れ」

言われた通りにして、全身を点検した。

魔法で受けたダメージと、刃物で斬られた感触は、まだ残ってい

たが、もう外傷も痛みも無かった。

ああ、やっぱりトリコの回復魔法は効きが違うな……と思ったが、トリコは無言で隣に居るジョン太を親指で指した。

ええ、これやったのジョン太かよ。

「回復系、得意なんだ」

何となく、そんな気はしていた。

「そうかも」

ジョン太は言った。

「ちょっとぐらい練習させろっての。いきなり本番だよ、全く」

文句は言っているが、冗談を言っている口調なので、だいぶ自分の能力は把握出来たらしい。

気を失ってもしっかり握っていた刀を鞘に収めて、立ち上がろうとした所を、もう一度トリコに止められた。

「だから立つな。向こうに姿を見られたら、また距離を詰められる」宿の部屋で、いきなり襲われた事を思い出した。

こちらからは、ハンニバルの姿が、辛うじて確認出来る程度だった。

当然、向こうからもうどうにか見えていたのだ。

「お前が一人になる瞬間を狙って来た。済まん、不注意だった」

空間操作で距離を詰めて来るとは聞いていたが、あれほど離れた場所から移動して来るとは思っていなかった。

「ううん、俺も油断してた」

改めて周囲を確認した。

コンビニの、レジカウンターの向こうに、

バックヤードと、反対側にある、壊れたドリンク用冷蔵庫の向こうに、皆が居る。

後から追い付いたらしく、エンマ君とサリーちゃんが、奥から手を振った。

「俺達がここに居るのは分かってるはずだけど、攻撃して来ないの」
鯖丸は聞いた。

「ああ、空間操作は、相手が見えてないと出来ないらしい。奴の攻撃魔法は、威力があり過ぎて、お前の体ごと何もかも壊しちゃうかな。

お前が離れた瞬間に使って来たが……」

ジョン太は、トリコの方をちらりと見た。

「殿が使う魔法に似てるな。威力は桁違いに高い」

「ハンニバルの魔法を使えばいいじゃん。物質操作で、こんなコンビニぶっ壊せるんじゃないの」

「海斗が止めてるんだ。たぶん、私が居るから」

トリコが、ちらっと辛そうな顔をした。

「それに、これだけ魔力の高い人間が揃ってたら、うかつに手は出せない」

ふうんと、鯖丸はうなずいた。

「じゃあ、俺とトリコにつかず離れずの位置が、安全圏なんだ」

バカが何か考えているが、安全圏と言うには、だいぶ危険だ。

それでもまだ、比較的危険が少ない位置ではある。

「ハンニバルの相手は、俺がやる。皆は安全圏内でサポートお願いします」

バカなりに考えた結論がそれかい……と、ジョン太はツツコミかけたが、海老原さんが先にうなずいた。

「分かりました。好きな様にやってみてください。全力でサポートしますから」

ああ、海老原さんまでバカになっている……。ジョン太は、ぼんやり考えた。

「ただ、あれの狙いは君ですから、この中では一番安全やけど、乗っ取られたらたぶん、死ぬよりひどい事になりますよ」

今現在の、ハンニバルの状況がそれだ。

「そんな簡単には乗っ取られません。頭の中に自分以外の奴が居るのは、慣れてるから」

異界の物が浸食して来るのと、人格が分裂しているのは、全く別

の話だと思うが、妙に説得力はあった。

「お前一人前に出す訳にはいかない。私も…」

トリコが言った。

魔力が高い割に、今までトリコが積極的に前衛に出て来た事は無かった。

同じチーム内に、鯖丸とジョン太が居れば、普通なら前へ出る必要もないだろうが…。

「トリコはダメだ」

鯖丸は、即座に却下した。

「ハンニバルとはガチでやれないだろ。絶対ダメ」

「出来るよ。仕事だからな」

トリコは言い返した。

「俺は無理」

鯖丸は、トリコの手を取って引き寄せた。

そのまま抱きしめて唇を重ねた。

トリコは、少し驚いた表情をした。

人前で…と云うか仕事中にこんな事する奴じゃなかったはずだけど。

「この仕事は、私情抜きじゃ出来ない。だって俺、トリコの事大好きだから」

はい…？ いや、知ってたけど、今する話か、それ。

「だから、ええと…」

「考えてからしゃべれ、バカ」

トリコは、鯖丸にデコピンを入れてから、ちよっと考え直して軽くキスを返した。

「後で聞くよ、その話は」

「今聞いてくれよ。簡潔に二十文字以内にまとめるから」

バカがぶつぶつ言いながら、文字数まで数え始めた。

「後でいいだろ」

後頭部をぴしゃりと叩くと、あー三十二文字とか言っていた鯖丸

が、きつとこちらを睨んだ。

「だって、今言つとかないと、俺、殿の弟子に乗っ取られて、戻って来れないかも知れないじゃないか」

「戻って来ない奴の話なんて、聞きたくない」

トリコは言つた。

「しつかりしろよ。無敵なんだろう、お前」

鯖丸は黙り込んだ。

根拠のない自信だけで勝てる相手ではない事は、ちゃんと理解しているらしい。少し安心した。

「私も、お前が好きだ」

そんな事を口に出して言うのは、初めてだった。

自分で気が付いて、ちよつと驚いた。

鯖丸の方が、もっと驚いた顔をしている。

繋いでいた手を、ぎゅつと握られた。

「うん：俺今、無敵になった。誰にも負けない」

繋いだ手から、様々な感情と力が流れ込んだ。

好意と愛情と欲望と、それから、孤独な人間だけが知っている、もつと切実で、身を切られそうな感情が…。

寂しくて死にそうだ：誰か、誰か、助けて。

結局同じなんだな：私らみたいなもの：と、トリコは思った。繋いだ手を振り払う事も、握り返す事も出来なかった。

コンビニの窓から向こうを窺って、数時間が過ぎた。

遠方の視界が確かなので、見張りを買って出ていたジョン太は、肩をすくめた。

「動かないな：何かまた、コーヒー飲んでる。ジャマイカだ。一杯でいいからそれ寄越せ」

「缶コーヒーならあるよ」

トリコは、上着のポケットから、自販機で買ったコーヒーを取り出した。

「微糖だけど」

「ああ、ありがとう」

ぬるいコーヒーを飲んで、ジョン太はため息をついた。

「消耗戦になるのか…これ」

「海斗の体がダメになる程、こっちは有利になるだろうけど」

トリコは言った。

「そこまで持ち堪えられないだろう、こっちも」

俺は出来ると言いかけて、ジョン太は黙った。

俺一人出来ても、意味がない。

「お前、どうするんだ」

ジョン太は聞いた。

トリコは、こちらを見上げた。

「鯖丸だよ。あいつ、自分の将来設計に、がつつりお前を組み込むつもりだぞ」

「知ってるよ、そんな事」

トリコは答えた。

「何て言うか…思い込み激しいからなあ、あいつ」

「そろそろどっちかに決めろよ」

ジョン太は言った。

「いや…、どっちもダメでもいいけど、何か結論出しとけ」

「私だって、考えてるよ」

トリコは、意外な事を言った。

「あんなバカと付き合ってたら、命が幾つあっても足りないって言うか…」

言葉を止めて、ちょっと笑った。

「一生退屈だけはしないな」

「人生は九割退屈くらいで丁度いいと思うけど」

七割方退屈でない人生を送って来たジョン太は、忠告した。

「まあ、あれ、将来大物かも知れないから、今の内に確保しとくのも得策かもな」

一応、付け加えた。

「退屈じゃないけど、幸せとは限らないぞ」

「どうでもいいよ、そんな事」

トリコは言った。

「私はただ…」

ジョン太は、ため息をついた。

「お前、あんなバカと本気で付き合ってたんだ」

「悪い？」

「いや…意外だったただけだ」

ジョン太は言った。

「バカの暴走は、止める方向で行かないとな」

トリコは、鯖丸の方をちらりと見た。

いつも通りと言えそうだが、この状況で熟睡している。

確かに大物だ。

「あいつは甘い考えでいるけど、ハンニバルは壊すからな」

トリコは、はっとしてジョン太を見た。

「穴に突き落として、うやむやにする事も考えたけど、どうせすぐ戻って来る。今入ってる体を、使い物にならないくらい壊して、異界に逃げる前に捕まえるしかない」

「うん」

「だから、お前は前へ出るな。たぶん俺、お前のダンナの体、ぐちゃぐちゃにするぞ」

「魔法使いになって一日も経たない奴に、そんな事出来るのか」

トリコは聞いた。

「多分な、鯖丸と二人でやれば。俺、自分で思ってたより、魔力高いみたいだし」

それはトリコも気が付いていた。

魔力の高さが変動するので、上限がどの辺なのかは分からないが、かなり高い事は確かだ。

「さすが、トラウマだらけの元ジャンキー。伊達に暗い過去は背負

ってないな」

「嫌な事言うなよ」

ジョン太は、肩をすくめてちよっと笑った。

それから、目を細めて遠くを凝視した。

「ハンニバルが動く。皆を呼んでくれ」

トリコは、皆に声をかけてから、振り返った。

「二人じゃダメだ、三人で行こう。だって私らはチームなんだろう」
ジョン太は黙ってうなずいた。

ハンニバルが立ち上がって、こちらへゆっくり歩いて来るのが、窓から見えた。

穴から離れない方が有利なのに、自分からやって来るのは、余程自信があるのか、或いはタイムリミットが近いのか、どちらなのか分からない。

たたき起こされた鯖丸は、窓から外を窺いながら刀を抜いて、鞘をその場に投げ捨てた。

「縁起悪い事すなや」

ヨシオ兄さんが、眉をひそめた。

「それやった奴が、巖流島で負けとるやろ」

「飛ぶ時、邪魔」

鯖丸は即答した。

「帰りに拾うから、いいんだ」

エンマ君とサリーちゃんが、持って来た荷物をバックヤードに広げていた。

ジョン太は、50発入りの弾丸の箱を、無造作に四つ程掴んで、立ち上がった。

本気で暴れるつもりだ。

普段の仕事でこんなに弾を使っていたら、絶対所長に怒られる。確か、一発あたりの単価が、パチンコ玉の十倍くらいするとか言っていたはずだ。

「正面にコンクリートの塀があるだろ」

ジョン太は、窓の外を見張りながら、皆に言った。

鉄骨が組まれたまま放置された建造物の横に、半分崩れた低い塀があった。

「あの場所に昨日トラップを仕掛けてある。ハンニバルがあのライオンを越えたら出るから、皆、自分のタイミングで付いて来てくれ。無理はするな」

この仕事を仕切っているのは海老原さんだが、いざガチでやり合う場面では、元職業軍人に任せた方がいいと判断したらしい。

指揮権がジョン太に移っている。

皆は無言でうなずいた。

エンマ君が、バックヤードからこちらへ来た。

自分の革ジャンを脱いで、鯖丸に差し出した。

「君の服と交換や。一瞬くらいは目眩ましになるやろ。俺は、危ななったら、サリリーに消してもらおうし」

「君もバカだろ。ちょっと間違ったら死ぬよ、それ」

鯖丸は、以前言われた事を言い返した。

それからふと、気になっていた別の事を聞いた。

「エンマ君、何でヨシオ兄さんまで、俺の悪魔將軍の事、知ってるの」

とうとう自分で悪魔將軍だと認めやがった。

エンマ君は、へらっと笑った。

「使うな言うてたけど、見せるなどは言わなんだやろ。みんなのリスクエストにお答えして、ご開帳を…」

「はい上着」

鯖丸はあっさり、ぼろぼろになったジャケットをエンマに渡した。

「俺の代わりにボコられて来い」

「そんな、怒らんでも…」

一度コピーした相手は、触らなくても再現出来るらしく、鯖丸の姿になって上着を着ながら、エンマ君はぼやいた。

「別に怒ってないよ」

絶対怒ってる。

受け取った革ジャンを着ようとした鯖丸は、サイズが合わないの
で諦めた。

身長がそれ程違う訳ではないのだが、スリムなエンマ君と、それ
なりにごつい鯖丸では、体型が全然違う。

着られなくはないが、これで刀を振り回すのは無理だ。

代わりに、ヨシオ兄さんが予備で持っていたフリースを、勝手に
着込んでしまった。

「ごめん、たぶんこれ、破くと思うけど貸して」

ジャケットの下に着ていたトレーナーと、一週間大丈夫なTシャ
ツも、ハンニバルに斬られてぼろぼろになっている。

「まあええけど。ユニクロで千円やったし」

ヨシオ兄さんはうなずいた。

フリースジャケットのファスナーを上までびちつと閉めてから、
鯖丸は刀を構え尚した。

ハンニバルが境界線を越えた。

踏み出した足元から、砂埃を舞い上げながら、ロープが飛び出し
た。

びしつと何かが切れる音がした次の瞬間、頭上から鉄筋の束が降
り注いだ。

ジョン太が、窓から飛び出しざまに、発砲した。

手に持った弾丸の箱を、無造作にその辺に放り投げ、両手に持っ
た銃が空になるまでハンニバルに弾丸を撃ち込んだ。

地面に放り出された箱から、弾丸が空になったシリンダーに吸い
込まれて行く。

鉄骨を障壁で防ぐ事に気を取られていたハンニバルの体に、十二
発全弾が命中した。

鯖丸が窓から飛び出し、トリコが後に続いた。

海老原さんの姿は、衝撃波と共に消え去り、ハンニバルの背後に

出現した。

エンマとサリーが、姿を消したまま、右から回り込み、ヨシオ兄さんが左側に回った。

あつという間に囲まれたハンニバルは、誰から先に倒すべきか、一瞬思案した。

魔力の高い奴から減らして行くなら、鯖丸とトリコだが、鯖丸の体は、回復不能な程壊す訳にはいかない。

トリコは、鯖丸にぴたりと付いているので、彼女だけを攻撃するのは、むずかしい作業だ。

背後に居る動きの速い小柄な男か、正面の犬型ハイブリットか。

一般的に速い奴の方が手強いので、背後の男に向かって魔法を繰り出そうとした瞬間、目の前のハイブリットがぐいと力を込めるのが分かった。

やばいと感じて、体に食い込んだ弾丸を物質操作で排出したが、全部は手が回らなかった。

体の中で弾丸が爆発し、胸の下辺りで、体が二つに割れた。

上半身が、ぼとりと地面に落ちた。

まさか、こんなに速い展開になるとは思わなかった。

いや：こんな事で終わる訳はない。

油断無く身構える皆の前で、吹き飛ばされた肉片が物質操作でかき集められ、元の形に固まった。

上半身と下半身を繋ぎながら、ハンニバルは立ち上がった。

殿と同じだ。

生きていない奴は殺せない。

鯖丸は、トリコの手を取って、ジョン太の前へ出た。

「ふん、いいざまだ」

悪い顔をして、鼻で嗤った。

「どうせもう死んでるんだろ、お前」

左手で、トリコの腰に手を回して抱き寄せた。

「トリコは俺がもらうから、そのまま死んどけ」

抜き身の刀を、片腕で中段に構えた。

わざと挑発しているのが分かったので、トリコは鯖丸の首に両手を回した。

「悪いね。何時までも戻って来ない奴を待ってる程、閑じゃないんだ、私も」

ハンニバルの体が、微妙にぶれた。

殿の弟子を押し退けて、如月海斗が出て来ようとしている。

いくら、殿の弟子と融合しているとは云え、異界の物を相手にするより、如月海斗の方が余程勝ち目がある。

怒らせて、海斗を表に出すつもりだ。

「ああ：戻って来れなかったのは、悪いと思ってるよ」

ハンニバルは俯いた。

何処から取り出したのか、あの曲刀を後ろ手に握っている。

「だからって、そんなバカそうなガキが俺の代わりかよ。考え直せ」顔を上げて怒鳴った。

完全に、海斗が前に出ている。

二人に向かって、一步踏み出した。

曲刀が変形する事を計算に入れば、完全に間合いに入っている。こちらの刀の長さとリーチの差を考えると、攻撃範囲はほぼ拮抗していた。

「だって、仕方ないじゃないか」

トリコは、海斗に向かって言った。

「こいつ、バカで食い意地が張ってて、すけべで性格も悪いけど」姐さん、いくら本当でも、それは言い過ぎ。

さすがに鯖丸も、微妙な表情をしている。

「でも、一緒に居てくれるんだ。帰って来れない様な所に、一人で行ったりしない」

気が付いたら涙が出ていた。

ダメだ、挑発するつもりなのに、これじゃあ逆効果じゃないか。鯖丸は、自分の首に回されていたトリコの手を掴んで、ゆっくり

解いた。

それから、背後に回して、両手で刀を構え直した。

「お前、トリコを泣かしたな」

洒落にならない構えだ。

スキが全くない上に、魔法を使わなくてもたぶん、相手を両断出来る。

それが、魔力を全開にして、刀の切っ先まで力を通している。

「三枚に開いて天日に干すぞ、コラあ」

こういう脅し文句だ、それ。

鯖丸が斬りかかった。

ハンニバルは、紙一重で避けた。

こいつも、魔法使いには珍しく、何かの格闘技をかじっている。避けられた一撃が、轟音を立てて地面をえぐった。

これだけの攻撃をかわされたら、普通はスキが出来そうなものだが、一瞬のためらいもなく、次の攻撃に移った。

空中に飛び上がり、落下しながら頭上から斬り込んだ。

空間操作で相手の背後に出現しようとしたハンニバルは、足止めされてその場に固まった。

ヨシオ兄さんが、地面ごと、ハンニバルの足元を凍らせて、その場に釘付けにしている。

重力操作で威力を増した一撃が、ハンニバルの頭上に振り下ろされた。

ハンニバルは、曲刀で受けた。

剣の湾曲度を変えて、そのまま攻撃を受け流した。

鯖丸は着地し、刀を構え直した。

「偉そうな事言って、七人がかりかい、坊主」

ハンニバルは、小馬鹿にした感じで言って、凍り付いた足を、地面から引きはがした。

バカが挑発に乗りません様に：と、ジョン太は心の中でお祈りした。

鯖丸は、意外に冷静だった。

「ハンデくれよ、こっちは生身の人間なんだから」

最近、だいぶ人間離れして来たくせに、自分が普通の人みたいな事を言い切った。

攻撃を受けた曲刀が、ぱきりと折れて、地面に転がった。

「いやー、やっぱ要らねっか、ハンデ」

鯖丸は、にやーと悪い顔で笑いながら、左足を一步前へ出した。完全に舐めた態度だが、踏み出した左足に体重が乗っていない。ジョン太にはフェイクだと分かった。

一步下がったハンニバルの指先に、先刻の鉄骨が触れた。

一瞬で、鞘から引き抜く様に、曲刀が鉄骨の中から取り出された。元々こんな刀を持っていた訳じゃない。物質操作で、金属を変形させていたのだ。

新しい刀が、空中で変形しながら斬りかかった。

曲刀の上に、形が変化するので、太刀筋が読めない。

鯖丸は、姿勢を低くして紙一重で避けた。

そのまま、一気に懐に入り込んだ。

これをやられたら、通常の人間なら、対処のしようがない。

低い位置から、伸び上がる様に胴を斬りつけられたハンニバルは、ぐらりと体勢を崩した。

がちゃんと堅い音がして、鯖丸は、しまったという顔で飛び下がった。

肉を切った感触が、全く無かった。

切り裂かれた服の下から、金属片の混じった地肌が見えた。

体を再生する時、近くにあった金属を取り込んでいる。

「悪かったね、生身じゃなくて」

曲刀が、長く伸びながら襲いかかった。

完全に、斬られているタイミングだ。

空中に逃れようとした鯖丸が、地面に落ちた。

ジョン太が、更に斬りかかろうとする刀を、弾幕で反らせた。

長く伸ばして厚みを失った曲刀は、簡単に弾かれた。

一瞬の隙をついて、海老原さんが鯖丸を攻撃範囲から引きずり出した。

「君、見た目より重いですね」

回復魔法をかけながら、海老原さんは言った。

「大丈夫か」

ジョン太が駆け寄った。

「あれだけ伸ばしたら、刃も軽いし、大して切れてないよ」

鯖丸は、起き上がった。

ハンニバルの両手に、曲刀が握られている。

ジョン太が、両手の銃を撃った。

弾丸は、全て体に吸い込まれたが、爆発は起こらなかった。体に取り込まれ、支配下に置かれている。

舌打ちしたジョン太が、普通に魔法を使った。

手の平から繰り出された、白熱した火の玉が、ハンニバルに襲いかかった。

ハンニバルは、障壁で防いだが、前に出していた曲刀が、真っ赤に焼けている。

慌てて投げ捨て、新しい刀を補充した。

「次、合わせるぞ。行けるか」

一発だけ取り出した弾丸を指先で摘んで、魔力を込めている。完全に変色した弾を、込め直して、かちりと撃鉄を上げた。

「いいよ」

鯖丸は、刀を構えた。

撃ち出された弾丸を追尾する様に、空気の鎌が放たれた。

魔法の初心者だった頃に、自分で食らったかまいたちの技を、見よう見まねで使い始めた物だが、もう、本家も足元にも及ばない様な威力だ。

それが、火炎系の魔法を込められた銃弾と同時に飛んで、融合した。

リンクを張っているから使える、重合魔法だ。

すさまじい爆発が、辺りを薙ぎ払った。

爆心地にハンニバルが居た。

障壁に包まれて、涼しい顔で立っている。

シャボン玉の様に、ゆらゆらと表面が変化する障壁は、攻撃を防ぎ切ってから、ぱちんと割れた。

いくら、魔力の高い政府公認魔導士でも、ここまで完璧な障壁を張れるはずがない。

殿の弟子の魔法だ。

ちよつとヤバイ気がして来た。

ハンニバルは、一步下がった。

少し思案して、腕を振って何かを確かめてから、いきなり手の平をこちらに向けた。

ジョン太が撃ち込んだ銃弾が、手の平から撃ち出され、襲いかかった。

ジョン太は、鯖丸を抱えて、人間には出来ない速さで、移動した。避けたと思ったのは一瞬で、銃弾は追尾して来た。

ジョン太は、飛んで来る弾丸に向けて発砲した。

両手に持った銃から飛び出した弾が、追尾する弾丸を正確に捕らえ、撃ち落とした。

ハンニバルは、なる程という顔をした。

それから、左手に握った曲刀に、魔力を通した。

曲刀を構成していた金属が、全て弾丸に変わるのを、ジョン太は呆然として見た。

あれ、全部飛んで来るのかよ。

いや：周りに金属はいくらでもある。あれだけじゃ済まない。

ハンニバルが、物質操作で作り出した弾丸を飛ばした。

ジョン太は、鯖丸を後ろに突き飛ばし、両手に構えた銃を撃った。44口径と32口径の銃が、地面に放り出された予備の弾丸を吸い上げながら、マシンガンの様に弾を吐き出し続けた。

ハンニバルは、背後の鉄骨に手を伸ばし、更に弾を作り上げた。魔力を込められた弾丸同士が、大量に空中で激突し、きなくさい匂いと共に、周囲に煙幕がたちこめた。

いくらジョン太が射撃の名人でも、ここまで来るともう、魔法を使わなければ不可能だ。

自分の魔力レベルをどんどん上げながら、無数の銃弾を操作し、弾を空中からたたき落とした。

双方の動きが止まり、煙幕が晴れた。

手の届く範囲の金属を使い切ったハンニバルが、よろけて膝をついた。

ジョン太が、戦っている最中に呼吸を乱しているのを、初めて見た。

魔力を上限ギリギリまで引き上げたせいで、外見が普通の人間バ―ジョンに変化している。

数カ所被弾したらしく、シャツの脇と腕に、血が滲んでいた。

鯖丸は、立ち上がろうとして、その場に座り込んだ。

落とし切れなかった弾丸が、腹に食い込んでいる。

自分でも驚いたが、鬼に変身した時の装甲が、内臓まで届くのを食い止めていた。

他の部分は、人間のままだった。

とっさに、必要な場所だけ無意識で強化していた。

刀を杖にして立ち上がり、構え直した。

「トリコ、ジョン太が撃たれた!!」

背後に向かって叫んだ。

「後、頼む」

「当たってねえ。全部かつこ良く打ち落としただろうが」

ジョン太が、寝言を言いながら銃を構えた。

一瞬で、大量の弾丸が空中に浮き上がり、装弾を待って待機した。

「いや…当たってるから。俺も当たってるし」

人間バ―ジョンのジョン太が、どの程度の身体能力なのか分から

ない。

敵が目の前に居る状態なら、嗅覚が衰えても不都合はないし、明るい状態での視覚なら、かえって今の方が鮮明なはずだ。

ただ、聴覚と、反射速度と力が、どうなっているのか、判断が付かない。

魔力を高い状態に保つ為には、今の姿で居るしかない様子だが、いくら鍛えたごついハイブリットのおっさんでも、戦闘用ハイブリットに比べたら、子供みたいなものだ。

「ジョン太、それで今まで通り動けるのかよ」

「やってみないと分からん」

心細い事を言われた。

「とりあえず寒い。腹巻きとパッチを脱がないで良かった」

うわー、男前台無し。

トリコが、どの辺に居たのか知らないが、上空からぶっ飛んで来て、強引にジョン太の前に着地した。

腕を掴んで、容赦なく回復魔法をかけた。

普段なら普通に回復させる所を、ハザマが使う様な根本治癒の魔法に切り替えている。

内部損傷の治療はむずかしいので、時間をかけないで強引に回復させるつもりだ。

「痛てえ、自分でやるから放せ」

文句を言った時にはもう、完璧に回復していた。

魔力が上がっているの、回復魔法の効きが、劇的にいい。

弾丸が体内に残ったままなのは、後でどうにかするしかない。

「次、お前」

トリコは、羽を畳みながら、鯖丸に手を伸ばした。

「そんなの後だ」

ハンニバルが弱っている間にたたみ掛けたい鯖丸は、トリコの手を振り払って前へ出た。

「行くぞ、変身!!」

特撮ヒーローの様なポーズを決めて、鬼の姿に変わった。

「お前、時々風呂場で練習してたの、それか」

トリコは呆れた。

「それやらないと、変身出来ないのか」

「ううん、単にかっこいいから」

寝言を言いながら、まだ膝についているハンニバルに斬りかかった。

ハンニバルが、地面から壁を出して返した。

鯖丸は、壁を足がかりに宙へ飛び、工事半ばで放置された鉄骨を、重力操作で駆け上がった。

ハンニバルが、空間操作で後を追った。

ビルの骨組みだけで取り残された鉄骨の中を、二つの人影が、縦横無尽に飛び回った。

「バカが、あんな狭い所飛び回られたら、近付けないだろうが」

トリコは、空中に飛び上がった。

羽根が邪魔で、中に入れない。入り組んだ鉄骨から、少し距離を置いて、加勢する機会を窺った。

海斗の魔法が物質操作系だと分かっている、あんな中に飛び込むなんて、バカじゃないのか、鯖丸の奴。

いくら、重力操作で飛ぶには、足場が必要だとは云え。

いや…バカなのは知ってたけど、こういうタイプのバカじゃないはずだ。

絶対何か企んでる。

鉄骨の中を飛び回っていた鯖丸の姿が、一瞬かき消えた。

入り組んだ鉄骨の中を、物凄いスピードで真上に飛び上がり、余った勢いを手足で殺しながら、てっぺんに取り付いた。

ハンニバルが上を見上げた。

目視してから距離を詰める空間操作は、一瞬のタイムラグが出来る。

更に、体を縮めなければ通り抜けられない場所を、一瞬で飛び上

がった鯖丸の後を追うのは、躊躇した。

空間操作は瞬間移動ではないので、障害物には普通に当たる。まだ、使い物にならない程この体を壊す訳にはいかない。

横に移動して、良い位置から距離を詰めようとした。

その間、約4秒。

鯖丸が、掴んだ鉄骨に魔力を通した。

「喰らえ！！十倍だ」

ずしん…と、にぶい地響きがあった。

巨大なビルの骨組みが、かすかにゆらいだ。

風雨にさらされて劣化した土台に、亀裂が入り始めた。

ビルの骨組みもろとも重力操作を食らったハンニバルは、その場に硬直した。

自分の重さが十倍になって、いきなり動ける奴は居ない。立っているだけ、大したものだ。

鯖丸は、自分だけ軽くしているのか、それとも補強しているのか、普通に立ち上がった。

鉄の塊が崩壊を始めている。

崩れ落ち始めた鉄骨の上で、両手に持った刀に力を通し、巨大な空気の刃に変えるのが見えた。

そのまま、重量増加を解き、空中に飛び上がった。

巨大な刃が、崩れ落ち始めたビルの骨組みを、真っ二つに切り裂いた。

崩壊を続ける鉄の塊と、地面に転がった重機を足場に、鯖丸が着地した。

少しよろけながら体勢を立て直し、瓦礫の山と化したビルの骨組みを、油断無く睥んだ。

「出て来るぞ」

ジョン太が、銃を構えた。

「分かってる」

肩で息をしながら、鯖丸は言った。

重力操作で狭い場所を飛び回るのは、かなりの重労働だ。

トリッキーな動きを続けている間は、ほぼ息継ぎ程度にしか呼吸も出来ない。

「持久力ねえぞ、お前」

どうにか呼吸を整えようとしている鯖丸に、ジョン太は言った。

「溝呂木に、もっとびしびし鍛える様に言っとかないと:」

骨密度が低いので、あまり無茶なトレーニングは出来ないと以前溝呂木から聞いていた。

全国大会でベストエイトに入っても、それ以上行けないのは、たぶんそのせいだ。

最近、だいぶ普通に近付いたので、以前より五割り増しでしごいていると言っていたが。

「うるさいな、もう」

鯖丸は、刀を構え直した。

どうにか、武道関係の奴が使う、実戦の時の呼吸法に戻っている。持久力はないが、回復は割と早い奴だ。

瓦礫の山が振動した。

一瞬、止まってから、いきなりはじけた。

大量の瓦礫を巻き上げながら、ハンニバルが来た。

鯖丸が空中に逃れるのを確認して、ジョン太は飛び交う鉄骨を避けて移動した。

変身前と、ほぼ同じ速さで動ける。

「囲みを崩すな。そろそろ弱って来てる。攻撃は鯖丸に任せて、捕まえるぞ」

瓦礫の崩壊を避ける為に、範囲は広がっていたが、皆はまだ、ハンニバルを包囲していた。

上空で、トリコが結界の起点を作り始めていた。

いくら異界の物が乗っ取った体でも、これだけ魔力の高い人間が寄って集って重合結界を巻けば、止められるはずだ。

結界の中継点を次に渡す為に、トリコが空中で静止した。

そこを狙って、攻撃が来た。

まさか、意識がハンニバルの状態で、最初にトリコを狙って来るとは、誰も思っていなかった。

重量鉄骨の直撃を食らったトリコが、短く悲鳴を上げて、落ち始めた。

当然だが、この面子で、他に空中戦が出来るのは鯖丸だけだった。飛び上がり、トリコの腕を掴んだ。目の前にハンニバルが居た。

曲刀が振り下ろされた。

鯖丸が落下を始めた。

咄嗟に重力操作を使ったのか、風に煽られて軌道が変わった。

木の葉の様に変則的な軌道を描きながら、二人が地面に落ちた。

落ちて来た軌道に、大量に吹き上げられた血が、重力操作を離れて、雨の様に降り注いだ。

本気でヤバイ。

次の瞬間、鯖丸とトリコが、その場から消えた。

「バーカ、こっちだよ」

背後で声がした。

振り返ったハンニバルの目の前に、鯖丸が居た。

憎らしい顔で笑って、ふいと消えた。

斬りかかった空中で、奇妙な手応えがあって、何かの魔法が使われている気配があった。

地面に落ちる血痕だけが、じりじりと後ずさって行く。

視覚では鯖丸に見えたが、感知される魔力が別人だ。

ハンニバルは、元居た方向に向き直った。

鬼の様な姿になった鯖丸が、その場に膝をついていた。

こんな姿になっていた事を、忘れるくらい追いつめられていたのか。

今までさんざん、空中を飛び回っていた奴が、地面にうずくまって腹を押さえている。

「てめえ、トリコを囚に…」

少ししゃべってから、咳き込んだ。

腹を押さえた腕の間から、内臓の一部がずるりと漏れ出した。

少し、ダメージを与え過ぎたかも知れないが、異界人の魔法を使えば、回復出来ない程ではない。

「お前が、庇いに出て来るのは、分かっていたからな」

ハンニバルは、冷静に言った。

「もう諦めろ。その体は、俺が大事に使ってやるから」

「お前にやるくらいなら、ここで壊すわ」

鯖丸は、刀を支えにして立った。

体の一部を覆っていた鬼の装甲が、全身を浸食して行く。

ばきばきと音を立てながら、開いた腹部の装甲が、漏れ出した内臓を拾い上げて、収納した。

あまにりえぐい光景に、見えない場所で短く息を呑む声がした。

斬られたエンマと一緒に消えていた、サリーちゃんだ。

自分の内臓を拾い上げて収納した鯖丸は、その場で鼻と口から血を吐いてよろけた。

駆け寄ったジョン太が、肩に手をかけた。

常識では考えられない様な、回復系の魔法が発動し、周囲の空気が震えた。

回復系の魔法が得意な人間は、割合多いが、重傷を負った、自分で体感出来ない他人の体を回復させるには、特殊な技術か医学知識が必要だ。

リンクを張っていれば、ある程度体感の共有は可能だが、重傷を負った人間とそんな事をするのは、かなり危険だ。

鯖丸が、咳き込みながらもどうにか立った。

傍目にはもう、戦闘不能なダメージだ。

何度か息継ぎしながら、ジョン太の肩を借りて体勢を立て直した。

鬼の装甲が、ダメージを負った場所を、どんどん補強しながら、全身を覆って行く。

もう、人間には見えない。

最後に、ホッケーマスクに似た、骨の様な外装が、完全に顔面を覆った。

「よし、まだ行けるな」

ジョン太は、鯖丸の背中を押した。

「うん」

もう、人の姿をしていない鯖丸が、うなずいた。

「止めたれ。お前相方を殺す気か」

ヨシオ兄さんが叫んだ。

「ここでこついが引いたら、殿の弟子が出て来て、俺ら全滅するぞ」
ジョン太は言った。

「行け。いくらでもフォローしてやるから、女取り合って、ガチでケンカして来い」

「分かった」

鬼の姿が、目の前から消えた。

以前よりも動きが速くなっている。

一瞬で、ハンニバルの前に出現した。

凄まじい攻撃と防壁が、その場でぶつかり合った。

周囲を薙ぎ払う爆風の中で、ジョン太は倒れているトリコの襟首を掴み、拾い上げた。

「何時まで寝てんだコラ、ちゃっちゃと結界巻くぞ」

意識を取り戻したトリコが、子猫の様に吊されたまま、少しうめいた。

「何、この扱い。私って、ヒロイン的なアレじゃなかったのか」

「寝言云うな、こんな汚れオーラの出てるヒロインが居るか」

トリコは、ジョン太の腕を掴んで、地面に降りた。

自分で立ち上がったが、掴んだ腕は放さず、ジョン太を見上げた。

「お前、あんまり無茶するなよ。壊れるぞ」

「いや、無茶してるのは、あっちだから」

爆風の中心で、風圧が螺旋状に巻き上がっていた。
人外に変わってしまった鯖丸が、空気を圧縮して、ハンニバルを

地面に押しつけている。

爆風が、逆方向に吹き戻り始めていた。

「まあ、お前がそう言うなら、いいけど」

トリコは、ジョン太から手を離れた。

「ちよっと飛び上がる自信がない。あの辺まで放り投げてくれ」

上空を指差して言った。

「仕切り直しだ」

「構わんが、落ちて来ても拾ってやれんぞ、たぶん」

見慣れない顔が、見慣れた表情で笑った。

「分かってるよ」

自分より、遙かに魔力の高い相手とリンクして、限界まで力をぶ
ん回しているのだ。

無事な訳がない。

もう一度、首根っこを掴まれて、空中に放り投げられた。

翼を広げて滞空し、再び結界の起点を作った。

今度は、時間をかけずに結界を展開する為に、周囲の五人に向か
って、一度に中継点を渡した。

空中を飛びながらここまで出来るのは、魔力の高さもあるが、相
当な熟練度だ。

それでも、まだ余力を残している。

何をやるつもりなのか、大体の予想は付いていたが、もう誰も止
めなかった。

無茶な戦い方を見過ぎて、感覚が麻痺して来ているのかも知れな
い。

ハンニバルが、空気の塊を押し返そうと、力を込めた。

脱出しようと身をよじった時、上空で結界の起点を渡し終わった
トリコと目が合った。

一瞬、意識の中に根を張っていた殿の弟子が完全に引いて、クリ
アになった。

「それはダメだ、トリコ。止めろ」

如月海斗が叫んだ。

鯖丸が作った高圧帯を突き抜けて、上空に手を伸ばそうとした。五つに分割された結界点が、発光しながら地面に五芒星を描いた。描かれた線から、空中に向かって、光の束が伸び上がり、それから落ち始めた。

無数のひも状に変化しながら、結界の対象物を巻き取ろうと、うねった。

結界の起点を完全に手放したトリコが、光の束よりも先に落下を始めていた。

頭から地面に突っ込んで来る奴なんて、鯖丸以外に居るとは思わなかった。

翼を畳んで加速し、墜落すれすれで巨大な羽根を広げた。

そのまま鯖丸の腕を掴んで強引に羽ばたき、転がる様に結界の外へ逃れた。

結界の中で、ハンニバルが立ち上がろうとしていた。

結界が完成する前に、出て来る。

鯖丸を救出するタイミングが早かった。でも、これ以上遅れたら…。

「俺ごと封印すれば良かったのに」

鯖丸が言った。

地面に倒れたまま、刀を握った。

まだやるつもりだ。誰が見ても、もう絶対無理なのに。

トリコは、ハンニバルを振り返った。

結界の中心には、まだ圧縮された空気の塊がゆらいでいる。

ほんの一瞬迷ってから、言った。

「燃やせ」

炎の塊を飛ばしたのはエンマだった。

ダメージを負ったまま、魔法を使ったせいかわ、元の姿に戻っている。

結界の内部で、圧縮された空気が一気に燃え上がり、爆発と障壁

が同時に展開した。

爆炎自体は障壁で防いだかも知れないが、確実に足止めは出来た。ハンニバルが、その場で倒れるのが見えた。

成功したと思った瞬間に、何かが体から飛び出した。

明らかに人の形をした物が、ぼろぼろになった体を捨てて、結界から出ようとしている。

完成寸前の結界から、何かが外へ這い出した。

「ずらします。協力して」

海老原さんが言った。

そのまま強引に、自分の結界点を引きずったまま移動した。

見かけによらず、とんでもない力業を使う人だ。

いびつに変形した五芒星の中心に、異界の物が入り込んだ時、結界が完成した。

全員が、倒れる様にその場へ座り込んだ。

五芒星はもう消えて、残った中心部の五角形だけが、異界の物を閉じこめていた。

少し離れた場所に、ハンニバルが倒れていた。

着ている物も体も、見る影もない姿になっていたが、まだ、かすかに動いている。

殿の弟子から分離した今は、もう敵ではないかも知れないが、皆はびくりと緊張した。

鯖丸は、倒れたまま目を開けた。

鬼の装甲は、もう無くなっていて、自分を庇う様に倒れ込んでいるトリコの、柔らかな感触が分かった。

手足に力が入らない。

それでも、これで終わったと思って口を開きかけた時、トリコが自分から離れて立ち上がった。

少しふらつきながら、倒れているハンニバルに駆け寄り、しがみつくのが見えた。

「あ…」

ハンニバルが、ゆっくり手を伸ばして、トリコの背中を抱いた。

「済まん、こんな事になって」

今まで、聞いた事のない口調だった。

「お前が無事で良かった」

「いいよ、帰って来てくれただけで、もう…」

背中に回されていた腕が、だらりと落ちた。

死んだ体に残っていた意識が、急速に消えて行く。

トリコはしばらくその場にぼんやりと座り込んでいた。

それから、声を上げて泣いた。

気が付くと、ジョン太に抱き起こされて、回復魔法をかけられていた。

ジョン太も、元の姿に戻っている。

「大丈夫か」

聞き慣れた、安心感のある声だった。

どっと緊張が緩んだ。

「ああ…負けたんだね、俺」

鯖丸はつぶやいた。

「いや、ギリギリで勝ったから」

ジョン太は言ってから、鯖丸の視線の先を見た。

「そうか。お前、最初からそういう勝負だったな」

鯖丸は、小さくうなずいた。

「何だろう、これ。何も考えられない。頭がぼーっとする」

それはいつもだろう…と、ツツコミを入れかけて、ジョン太は止めた。

「少し休め。お前は良くやった」

背後で、何かの気配が動いた。

振り返った時にはもう、ジョン太は銃を抜いて撃ち込んでいた。

相変わらず脊髄反射だが、魔法を使い始めて時間が経っていないせいか、とっさに普通の銃撃になってしまっている。

結界の中で、殿の弟子が立ち上がった。体を歪めながら、ずるりと結界から踏み出した。

一見、人間に近い姿の、華奢な若い男に見える。

それが、空間操作で目の前に出現し、まだ放心状態の鯖丸を軽々と抱き上げた。

次の瞬間には、穴の縁に居た。

ジョン太が魔法弾で弟子の頭部だけを狙い撃ちにした所で、やっ
と皆が事態に気付いた。

「油断したね」

殿の弟子が笑った。

「随分痛んでしまったけど、治せば当分使えそうだ。もらって行くよ」

ひらりと、穴の中に身を躍らせて消えた。

やばい、本気で乗っ取られる。

今までさんざん、鯖丸の人間離れした暴れっぷりを見て来た皆は、凍り付いた。

あれが、本当に人間辞めて襲って来たら…。

ジョン太が、銃を構えたまま走り出した。

穴の縁まで、障害物を跳び越えて一直線に突っ切り、何のためらいもなく穴に飛び込んだ。

「うわ、いい年して後先考えられないのか、あいつ」

トリコは、呆然と穴の方を見た。

動かなくなったハンニバルに、視線を戻した。

そっと膝の上に抱き上げて、開いた瞼を指先で閉じて、地面に寝かせた。

それから、急いで立ち上がり、セーターの袖でぐいと涙を拭った。背中から、コウモリの羽根が伸び上がった。

「いいか、私が十分経っても戻らなかったら、穴の周りに結界を張って、全速力で逃げろ。」

浅間に要請して、この辺一帯を封鎖させるんだ。最悪、関西魔界

全体を立ち入り禁止にするしかない」

鯖丸、とうとう怪獣扱いだ。

「後は任せたぞ」

言うなり飛び立ち、穴の中へ消えた。

「姉さんこそ、後先考ええや。戻って来れんやろ、それ」

ヨシオ兄さんが、穴に駆け寄って覗き込んだ。

「言われた通りにするしかないんか？」

エンマ君が、足を引きずりながら、穴に近付いた。

あつという間だった。

壮絶な決意を固める閑もなく、穴の中から派手な人影が飛び出て来た。

「待たせたな、皆の衆」

小脇に、ジョン太と鯖丸を抱えた殿が、相変わらず演歌歌手の様にど派手な着物をはためかせて、穴の縁に着地した。

困惑した顔のトリコが、あとからぱたと飛び上がって来た。

「新しい体の調整に手間取ったが、吾輩が来たからにはもう、安心しなさい。見たまえ、この魔力を極限まで高める、特製の体を。車で言えばF-1……」

さすがに、異界の物でも、周囲の白い空気が読めたのか、そこで止まった。

「何？ お呼びじゃなかった」

周囲を見回した。

「我が弟子は、どこで悪さをしておるのかな」

「それやそれ。お前がぶら下げとる奴」

さすがに初対面でも、殿が人間ではない事は一目で分かるので、事態を把握したヨシオ兄さんが、鯖丸を指差した。

「えっ……」

殿は、鯖丸とジョン太を、同時に取り落とした。

「確かに気配はあるが、薄い。本当か？」

「俺は、入る所見た」

ジョン太が、頭を押さえながら立ち上がった。

もう一方の利き腕に握られた銃口が、鯖丸に向いている。

鯖丸が目を開けた。

周囲をきよろきよろ見回し、立ち上がって、ぼろぼろになった服を、ちよつと引つ張って整えた。

ダメだ、こいつ鯖丸じゃない。お終いだ。

鯖丸だった物が、皆を見回して言った。

「あの…初めまして」

「うわ、行儀良うなっとなるで、こいつ」

ヨシオ兄さんが、一步下がった。

「どうせ、そしてさようならとか言うんやろ。嫌な悪役の見本や」

「僕、殿の弟子じゃないです」

鯖丸だった何かが言った。

「ええと、もしかしてミツオ…」

ジョン太がたずねた。

「そうだけど、本名で呼ばないでください」

ミツオが言った。

言葉遣いは丁寧で礼儀正しいが、明らかに動作が子供っぽい。

元々鯖丸も、実際の年齢より若く見えるが、今は外見と雰囲気ギャップがある。

「いいよ、ここに居るの俺らだけで、誰も聞いてないから」

ジョン太は言った。

「名前あるんだったら、そう呼ぶけどな」

「考え中です」

小学生か！！ 確か、中学生くらいの設定になっていたはずだが。

「うんうん、中二ぐらいの奴って、色々悩んだ挙げ句、変に凝った痛い名前とか付けるよな」

「それ、オンラインゲームの話でしょう」

ミツオは冷静に言った。

ジョン太は黙り込んだ。

ツッコミは、ツッコミ返されると弱いのだ。

「殿の弟子は、どこへ行ったんですかね」

相手が子供だと判断した海老原さんが、優しい口調で聞いた。

「ここに居ます」

ミツオが、自分の頭を指した。

「今、兄ちゃん達が二人がかりで、押さえ込んでる所です」

兄ちゃん達というと、鯖丸と鰐丸だ。

どういう事になっているのか、少し飲み込めて来た。

殿の弟子も、まさか乗っ取った相手が三人居るとは、思わなかっただろう。

「そんな事が出来るのか」

トリコが尋ねた。

魔力の高い人間が、七人がかりで結界に閉じこめた相手だ。

いくら怪獣二匹でも、そんな事が可能なのか…。

殿が、ちよつと肩を揺すった。

人間なら、ため息をつくのに近い動作だ。

「我々の弱点を公表するのは、気が進まないのだが」
一応前置きして、言った。

「魔法を使うには、物理的な媒体が必要だ」

「魔法って、体がないと使えないのか」

「そうとも言う」

魔法を使えなくなった、きゃしゃな異界の物が、凶暴な二人組にフルボッコにされる気の毒な映像が浮かんだ。

きっと二人とも手加減しないだろう。特に暁が。

ミツオが武藤玲司の体を使っている限り、三人とも肉体はない状態だから、たぶん、殿の弟子に勝ち目はない。

「弱らせたなら、殿に渡すって言ってます」

ミツオは、伝言した。

「鰐丸兄ちゃんは、めんどくさいからもう殺すって言ってるけど」

「そうか」

ジョン太はうなずいた。

「鰐丸に、無事で良かったなって、伝えといてくれ」

「そういう事言うから、オカマが付け上がるんだぞ」

トリコは、ちよつと止めた。

弟子を、見た事もない形の小さな箱に閉じこめた殿は、異界へ戻って行った。

帰る前に、トリコを呼び止めた。

「返す約束だ」

自分の胸に、ずぶずぶ手をつっ込んで、石を取り出した。

「そうだったな」

トリコは、石を受け取った。

しばらく見つめて、手の中に握った。

「これが何だか、分かっているんだろう」

殿に聞いた。

「只の耐熱ガラスだな」

殿は言った。

「その通りだ」

トリコは、うなずいた。

「海斗の遺品は、これだけしか残らなかったんだ。後は全部、証拠を消す為に、浅間が処分したから」

「良い思い出が入っていたな」

殿が言った。

「初めて、二人で買ったマグカップ」

トリコは、驚いた顔で殿の方を見た。

「お前は、人間の事を良く理解しているな」

「どうだろう。吾輩は人ではないし、そう見えるだけかも知れないぞ」

殿は、空中に踏み出して、穴の上に浮いた。

トリコは、小さな石を殿に差し出した。

「これは、お前が持っていてくれないか」

殿は、怪訝な顔をした。

「それは、力を増幅するのに使えるから、有り難いが」

「私はもう要らない。大事な物は、他に沢山あるから」

「そうか」

殿は、もう一度石を受け取った。

「では帰る。達者でな。たまには我が城に遊びに来なさい」

殿は、弟子が閉じこめられた箱を、大事そうに抱えた。

そう言えば、殿と弟子がどんな関係だったのかは、結局分からなかった。

単なる師弟関係ではない様な気がするが、異界の物の事は、人間には理解出来ない。

殿もきつとそうだろう。

「君の息子にも、よろしく言ってくれ。時々はいいちゃんの所に遊びに来てくれとな」

「はいちゃんだったんだ…」

トリコはつぶやいた。

殿は、そのままずっと異界へ消えた。

如月海斗の遺体は、その日の内に回収された。

トリコは、皆と別れて、ずっとそれに付き添っていた。

遺体を診た外界の医師は、この人は何日も前に亡くなっていると言った。

魔界で、回復魔法をかけたにも係わらず、皆、外界で医師の診断と治療が必要なくらい疲れ果てていた。

幸い、入院が必要な程重傷では無かったが、その日は死んだ様に倒れ込んで眠った。

後始末のごたごたを片付けて、仕事はそれで終了だった。

ジョン太が本当に、たちの悪い弁護士を呼びつけていて、浅間の悪事は表に出る事になりそうだった。

「相手の弱みにつけ込んで、金をゆすり取るのに最適な知り合いなら、いっぱい居るからな」

「何て言い草だ」

自称、弱い者の味方の弁護士は言った。

「もうけ話があったら、また呼べよ」

全然、弱い者の味方じゃない。

「学生の頃からの知り合いで：法学部に居た時の」

ジョン太は言った。

おっちゃんの経歴も、今更だが謎だ。

鯖丸は、魔界を出てからも、基本的にぼーっとしていた。

話しかければ返事はするが、後はただ、黙って座っているだけだ。それなりに、色々な事は考えている様子なので、放っておく事にした。

全部片付いて、撤収の日が来た。

ずっと別行動だったトリコが、由樹を連れて戻って来た。

帰りの新幹線では、皆無言だった。

由樹も、色々な事があって、子供なりに少しは状況が分かっているらしく、大人しく座って、車内販売の弁当を黙々と食べていた。

岡山で在来線に乗り換えて、四国内に入ってから、皆は無言だった。

新居浜が近付いて来る頃に、やっとジョン太が言った。

「俺、港に置いた車回収するから、ここで降りて各駅に乗り換えるわ」

「ああ、そうだね」

鯖丸は、やっとうなずいた。

「俺も行くよ」

持って来たデイバッグに手を伸ばしかけた鯖丸を、ジョン太は止

めた。

「なあ、由樹」

屈み込んで、子供に話しかけた。

「お母さんと鯖丸は、大事な話があるから、おっちゃん二人で海辺をドライブして帰ろうか」

由樹は、しばらく考え込んだ。

それから、無言で首を縦に振った。

由樹が、ジョン太に連れられて途中下車してからも、二人はしばらく黙り込んでいた。

最初に、トリコが言った。

「話があったんだろ。今、聞くよ」

「うん」

鯖丸は、視線をそらせて、窓の外を見た。

めずらしい。

普通なら、大事な話がある時は、正面切って話しかけて来るのに。

「結婚しよう」

窓の外を見たまま言った。

そんな話をされるのは、前から分かっていたけど、きっとこの先は違う話になる。

「そう言おうと思ってたんだ。でも、ダメなんだろう」

トリコは、黙ったままだった。

「何で、もっと早く言わなかったんだろう、俺。あの時なら、うんって言ってもらえたのに」

「そうだな、たぶんそう言ったと思うよ」

トリコは答えた。

二人はまた、しばらく黙り込んだ。

景色が後ろに流れて行く。

冬の海は、綺麗だが寒々しかった。

「俺じゃダメなんだ」

「分からないけど」

トリコは、少し間を置いて続けた。

「たぶん私は、自分で思ってた程、軽くも器用でもなかったんだ」
「知ってたよ」

鯖丸は、やっと窓の外から目を離して、こちらを見た。

いつもすぐ泣く奴なのに、涙も出ていないのが、余計辛そうに見える。

「ごめんな。私も、お前の事は好きだけど、でも…」

あの時とっさに、海斗の方に駆け寄ってしまったのは、本心だった。

そんな事、気が付かなくても良かったのに。

「いいんだ」

鯖丸は言った。

無理矢理笑おうとするな。余計辛いだろうが。

「地球に来てからずっと、毎日こんなに楽しかった事なんてなかったよ」

きっと、毎日辛い事の方が多かったんだろうなと思った。

いつも脳天気な顔をしているくせに。

「今まで、ありがとう」

駅に着いてから、トリコは電車で帰った。

鯖丸は、いつも通り歩いて戻るつもりらしく、そこで別れた。

調子に乗っている時なら、余裕で家まで走って帰る距離だが、背中を丸めるとぼとぼ歩いている。

電車が鯖丸を追い抜いた。

トリコは、窓からずっと、見送った。

鯖丸は、こちらには気が付かないで、地面に視線を落としたまま歩き続けて、視界から消えた。

元通りの毎日が始まった。

バイトして、学校に行って、部で練習して。

普通に過ごせているのが、自分でも割と不思議だった。

あれから、魔界の仕事はまだ入って来ないので、トリコにもジョシ太にも会っていない。

その日は、数日前から始めたガテン系のバイトで、帰りは夜になっていた。

体を動かしていると、何も考えなくていいから、楽だった。

さすがに少し疲れたので、走らないで歩いていった。

小雨がぱらつき始めた夜の街を、ぼんやりと何も考えずに歩いた。街がいつもより賑やかだ。

十二月に入ってから飾られ始めたクリスマスツリーも、今日は少し華やかに見える。

街を、サンタがうろうろしている。

ああ、クリスマススイブだったのかとぼんやり思った。

特に、何の感情も湧いて来ない。

明日から、ケーキが安売りだから、一個買おうかと考えた程度だった。

何も考えずに歩き続けていた鯖丸は、気が付いて立ち止まった。ぼーっとしていたので、トリコの家の方へ歩いて来てしまっていた。

「何やってんだ、俺」

引き返そうと角を曲がった場所から、路地の向こうに見慣れたアパートが見えた。

この方向から見える台所の窓に、灯りが点っている。

きっと、フライドチキンとケーキか何かが、テーブルに乗っているんだろうなと思った。

由樹は現実的な子供だから、たぶんサンタなんかは信じてないけど、プレゼントに何かもらえるのは、楽しみにしているだろう。

トリコは、どうしているだろうか。

あんな事があった後だから、そんなに元気じゃないかも知れない

けど、こんな日くらいは楽しく過ごせる様に、小さなツリーを飾っているかも知れない。

二人とも、笑っていたらいいなと思った。

自分が泣いているのに気が付いた。

どれくらいその場所に立っていたのかも、思い出せない。

走り出した。

通い慣れていた道を、全速力で突っ切った。

ガソリンスタンドから、ここ数十年、クリスマスになるとヒットチャートに上がって来る、定番のクリスマスソングが流れてくる。

歌の通りに、小雨が雪に変わっていた。

楽しかった事を、色々思い出した。

近所の公園で遊んだり、変な料理を作って嫌がられたり、一緒に洗濯物を畳んだり、買い物に行ったり。

浮かんでくるのはなぜか、日常の些細な事ばかりだった。

賑やかな通りを過ぎて、薄暗い線路脇の路地に入った時には、ほっとした。

家賃が安い代わりに治安も少し悪くて、ライトアップしている様な洒落た住宅も無い地域だ。

古い木造アパートの階段を、一気に駆け上がった。

まだ壊れていて、鍵がかからなくなっているドアを開け、布団の上で倒れ込んだ。

本当に、毎日が楽しかった。

今まで、こんな事は無かった。

ああ、そうかと気が付いた。

彼女が居ないとか、それ以前に、俺、今まで誰かを好きになった事、一度もなかったんだ。

こんなのが初恋なんて、あり得ないだろ…。

物凄く辛い。

どうしていいか分からない。

布団に突っ伏したまま、声が出なくなるまで泣き続けた。

「鯖丸が掴まらないんだけど」

その日、ジョン太が出勤すると、めずらしく一番早く来ていた所長が、声をかけた。

クリスマスから数日が過ぎて、世間はもう正月モードに変わっていた。

事務所の棚にも、そろそろ付けようかという注連飾りが置かれている。

「ああ、そう言えばメールも返信がないですね」

しばらく、そっとしておこうと思っていたので、それ以来特に連絡はしていない。

「年明けに、二三日入ってもらおうと思ってるんだが」

所長は、ジョン太の方を見た。

どうにかして連絡を付けろと言う意味だ。

「分かりました」

もう一度、メールを入れる事にした。

送信が終わって、普通に仕事を続ける内に、昼前になっていた。

仕事のメールなら、割合返信は早い奴なのだが。

学校はまだ、冬休みだろうが、部活かバイトかも知れない。

どちらにしても、この時間帯ならたぶん大丈夫だと思って電話をかけた。

呼び出し音がしばらく続いてから、留守電に切り替わった。

「ジョン太です。年明けに仕事があるから、連絡下さい」

短く用件だけ吹き込んで、電話を切った。

夕方まで待ったが、何の連絡もなかったので、もう一度電話をかけた。

今度は、留守電に切り替わる直前に、電話を取った様子だが、無言のままだ。

しばらく、そのままの状態で、いきなりがたんという変な音と共に電話が切れた。

「何やってんだ、あいつ」

背後で、遮断機の警笛がかすかに聞こえていた。確か、線路の近くに住んでいたはずだ。

「家には居るみたいです」

ジョン太は言った。

「帰りに、様子見に行ってみますよ」

口も利けないくらい落ち込んでるのか、あいつ。

まあ、ショックだったのは分かるけど。

「済まんが、そうしてくれ」

所長は言った。

実は鯖丸は、もっと大変な事になっていた。

先日から体調が悪くて、ふらふらしながら帰って来て、そのまま寝てしまっていた。

今朝になって起きようとする、頭がくらくらする。

「ああ…辛過ぎて目が回って来た」

そのまま倒れ込んで、もう一回眠った。

次に目を覚ました時には、確実に事態が悪化していた。

起き上がれない。

頭ががんがんする。

水が飲みたいのに、目の前にある流しまでたどり着けない。

もうダメだ。

俺きつと、失恋のショックで、死んでしまうんだ。

それ、たぶん風邪かなんかだと、的確に突っ込んでくれる人が居ないので、倒れたまま一人でボケ続けている。

元々頑丈なので、実は、生まれてこの方、一度も風邪をひいた事がないのだ。

さすが、最強のバカ。

何度か、携帯が鳴っているのは気が付いていた。

何度目だか分からないが、どうにか手を伸ばして、適当な場所を

押した。

ジョン太の声が聞こえて来た。来年がどうか言っているが、内容が頭に入って来ない。

「おおい、お前生きてるのかー」

どうにか、そんなセリフが聞き取れた。

死にそうだから助けてと言おうとしたが、声が出なかった。

そのまま、携帯を取り落として、力尽きた。

アパートの階段を、大きな荷物を背負った小柄な人影が登って来た。

「おおい、レイジ居るかあ」

ドアを叩いてから、鍵が壊れているのを見て、ドアを開けた。

「もう寝てるのかよ。お土産持って来たのに」

鯖丸の、数少ない友達、山本弘が部屋に入って来た。

入り口で少しもたついて、靴の紐を解いてから、勝手知った他人の部屋に上がり込んだ。

以前より少し綺麗になっている部屋の中に、久し振りに会う友人がぶっ倒れている。

何をどうしようとしていたのか、なぜかズボンは半脱ぎのままで、上半身だけ上着とフリースを巻き付けて、伸ばした手の先には、開いたままのケータイとコップが転がっている。

ズボンは脱げかけだが、どう見ても、これから一発抜こうとか、そういう楽しい状態ではない。

「お前、何やってんだよ」

子供ぐらいなら入りそうなザックをその場に下ろして、山本は屈み込んだ。

「あ：山本の幻覚が見える」

ひどい声だ。聞き取るのがやっとだった。

「本物だ。お前これ、すごい熱じゃないか。医者行ったのか」
返事がない。

「薬は：飲んでないな、たぶん」

「水：」

飲むという単語に反応したらしい。

コップに水を汲もうとして、力尽きていたのか：と、山本は状況を把握した。

とりあえず、水を飲ませてから、部屋を見回した。

どうせ、体温計なんか持っていないだろう。

布団に押し込もうとして、少し呆れた。

この布団、いつから干してないんだ：ていうか、毛布とか持っていないのか、こいつ。

押し入れを開けたが、思った通り毛布や、もっと暖かそうな布団は入っていないかった。

代わりに、キノコが生えた少年ジャ○プが出て来た。

熱のせいとか、体中汗びっしょりで、ズボン半脱ぎにしたまま、布団被らないで寝てたら、それは確実に悪化するだろう。

押し入れに、無造作に放り込まれていたTシャツとジャージを引っ張り出して、無理矢理着替えさせた。

ザックから、シュラフを取り出して、中に押し込んだ。

「暑い：」

「我慢しろ。お前、何か食ったか？」

返事はないが、水も飲めないくらいだから、メシは食ってないだろう。

「薬あるけど、飲む前にちよつとでいいから何か食え」

ザックから、非常食と、薬の入った袋を取り出した。

湯を湧かそうとしたが、ガスが出ない。

週二でしか戻っていなかったので、止めてしまっていたのだ。

「まさか、平地の室内で、こんな事する羽目になるなんて」

絶対、室内では使わないでくださいと書いてある小型のバーナーに火を付けて、コッヘルで湯を湧かして非常食を調理した。

鯖丸のくせに、半分も食べられなかったが、それで良しとして、

市販の風邪薬を飲ませた。

「明日、絶対病院行けよ」

山本は、念を押した。

「土産渡しに来たんだけどなあ、俺」

ジョン太が、鯖丸のアパートまで来た時には、もうすっかり辺りは暗くなっていた。

市内電車の駅を降りて、人しか通れない急な坂を下ると、アパートはすぐあった。

目の前を、線路と河川敷の土手が、二方向から塞いでいて、日当たりは悪いが、駅から徒歩一分で、繁華街も近い、便利な場所だ。

「何だ、けっこういい所じゃないか」

場所は知っていたが、来るのは初めてだった。

建物はぼろいが、思っていた程ひどくはない。

アパートの階段を、降りて来る人影が見えた。

小柄な青年が、自分より一回り大きい人間を背負って、急な階段を、確実な足取りで降りて来る。

背負われているのが、ぐったりした鯖丸だという事は、目で見る前に匂いで分かった。

体調が悪そうだ。

落ち込んでるんじゃないくて、寝込んでたのか、こいつ。

小柄な青年は、初めて見る顔だったが、山本だというのは、何となく分かった。

休学して、外国の山に登りに行っているとか聞いていたので、もつとごつい男だと思っていた。

「山本君？」

一応、声をかけてみた。

「あ、ジョン太だ」

何で呼び捨てなんだよ、こいつ。前に電話で話した時も、そうだったな。

まあ、こんな名前にさん付けされてもなあ……と、思い直した。
本名はたぶん、知らないだろうし。

「鯖：武藤君、どうしたんだ」

「熱がひどいんです」

山本は答えた。

「風邪だと思ったから、薬飲ませて様子見てたんだけど、悪くなってるみたいだから、病院に連れて行こうと思って」

川の向こうにある救急病院が、まだ開いていて、診てくれるという話だった。

歩いて十分くらいだし、救急車を呼ぶ程でもないと思ったので、連れて行く事にしたと説明した。

何で、自分より重い奴を担いで、十分も歩こうと思ったんだ、山本君は。

「俺が連れて行くよ。そいつ、見かけより重いだろう」

手足が長いので、細く見えるが、筋肉質なので意外と重い。

「もっと重い人を担ぎ下ろした事もあるし、大丈夫ですよ」

山本は言ったが、素直に鯖丸をジョン太に渡した。

本当に、ひどい熱だ。

「心が弱ると、体も弱るタイプだったのかなあ」

ジョン太はつぶやいた。

山本は、ジョン太を見上げた。

しっかりしていて頼りになりそうな青年だ。

「こいつ最近、ちょっと辛い事があってね」

ジョン太は言った。

「めんどくせえ奴だけど、まあ、よろしく頼むわ」

山本はうなずいた。

「ジョン太って、レイジのお父さんみたいだなあ」

やっぱり、そういうポジジョンだったのか、俺は。

「その割には、扱いが軽いんだよなあ」

ジョン太は少し愚痴を言った。

病院に連れて行かれた鯖丸は、インフルエンザと診断されて、そのまま数日入院する事になった。

「こんなになるまで放っておいて…すぐくしんどかったはずだよ」

内科の医者は、首をかしげた。

点滴されて、座薬の解熱剤をつつこまれた鯖丸は、ベッドに寝かされてぐったりしている。

人間ここまでぐったりすると、座薬を入れてくれたのが、若くて中々かわいい看護師だったのも、特に何の感慨もない様子だった。

「しんどいのは、心の問題かと思って…」

どうにか、声ぐらいは出る様になっている。

気になったジョン太は、一応聞いてみた。

「お前、大阪の病院で、しばらくはなるべく安静にして過ごせとか言われてたけど、ちゃんと休んでたか」

「そうだった…」

顔色を変えた医者が、大阪の病院から電子カルテを転送して持って来た。

「…で、その後帰って来て、剣道部の練習と、道路工事のアルバイトを…」

ため息について、ジョン太の方を見た。

「彼はバカなんですか」

「バカです」

ジョン太は言い切った。

年明けに、所長から連絡が入った。

すっかり元気になった鯖丸は、一応縁起物だということで、病院で出された雑煮を、物足りない顔で食っていた。

「お代わりって、もらえないのかなあ」

看護師に聞いてみた。

「カロリー計算しているから、ダメです」

断られた。

「ケチ」

文句を言っている所へ、所長からメールが入った。連絡をくれと短い文章が入っている。

看護師のお姉さんに睨まれたので、パジャマの上から上着を着て、人気がない廊下の踊り場まで出た。

最近のケータイは、病院でも問題なく使えるのだが、人前で話している、あまりいい顔はされない。

電話をすると、所長はすぐ出た。

「武藤君、あけましておめでどう」

一応、新年の挨拶をしてから、たずねた。

「どう、調子は」

「随分良くなりました。明日退院です。色々、ご心配かけました」

だいぶ、大人の挨拶が出来る様になって来ているが、新年の挨拶を忘れてるのが片手落ちだ。

あわてて、後からおめでどうございますと付け加えた。

今年もよろしくと返してから、所長はちよつと声のトーンを落としました。

「実は、あまりおめでたくない話なんだが」

仕事の話だと思っていたので、鯖丸は怪訝な顔で聞き耳を立てた。

「本社のハルオ君ね、今朝亡くなったんだ」

「え…」

集中治療室で寝ていた、ハルオ兄さんの姿を思い出した。

それから、ヨシオ兄さんの事も。

「明後日葬式なんだ。私とジョン太は、明後日大阪に行かなきゃならんのだが、新年早々から、仕事が入っててね」

自分が呼ばれている仕事は、まだ一週間程日程があるので、それまでにはインフルエンザも完治するだろうと考えていた。

さすがに、明後日は無理だと思うが。

変な間があいてしまったのは分かったらしく、所長は言った。

「いや：魔界に入ってくれと言ってるんじゃないよ。明後日と明後日の四時から七時まででいいから、事務所で電話番号頼めないか。」

斉藤さんは四時までだし、皆、仕事で出払ってるんだ」
鯖丸は、少し考えた。

三時間座っているだけでいいなら、出来そうだ。

「分かりました。やります」

「悪いね。行き帰りは、タクシー使っていていいから、領収証もらって
いってくれ。暖かくして、大事にするんだぞ。辛かったら、ソファ
で寝てていいから」

所長とは思えない様な、優しい言い方だ。

俺、そんなひどい状態で、皆に心配かけてたんだなあ：と思った。
電話を切ってから、何となく重たい気持ちは拭えなかった。

別に、面識がある程度の知り合いだけど。

そういえば、去年、縄手山で屋根の上に放り投げられていた時、
声をかけてくれたのは、ハルオさんの方だったな：と、急に思い出
した。

なぜ、今になって思い出せたのかは、分からなかった。

世間でも仕事始めの四日に、鯖丸は久し振りに事務所へ出勤した。
医者にも、人混みには出るなど言われているので、厳重にマスク
をして、言われた通りタクシーに乗った。

症状はもうほとんど無いが、周りに伝染すなど厳しく言い渡され
ている。

事務所には、黒いスーツを着た所長とジョン太が居た。

「悪いな、無理言って」

今から出発なら、飛行機だろう。

一時間足らずで大阪に着く。こちらと現地の、空港までのアクセ
スを足しても、二時間弱だ。

所長と会うのは久し振りだが、ジョン太は、入院の手続きや、必
要な物を揃えてくれたり、見舞いに来てくれたりしていた。

「ううん、色々迷惑かけてごめん」

大げさなマスクを指差した。

「人前に出る時は、付ける様に言われてて。電話取る時は外すから」
まだ、ちょっと声がおかしい。

「そうか、でもまあ、だいぶ元気そうになったな」

ジョン太は、少し安心した様子で言った。

空いている机の横に、物置から引っぱり出して来たストーブが置いてあって、ヤカンがかかっている。

椅子には、膝掛けとダウンジャケットが掛けてあった。

大げさだけど、変に気が回るのがジョン太らしいなあ…と思った。
入り口が開いて、斑とトリコが二人で入って来た。

二人の様子だと、今から魔界に入るらしい。

鯖丸の姿を見つけて、入り口で止まった。

今日、電話番号に来るのは、聞いていなかったのかも知れない。

事情は知っているらしい斑も、どういう態度を取ればいいかわからないらしく、隣で立ち止まった。

「久し振りだな」

トリコの方から言った。

関西から戻って、二週間ちょっと過ぎている。

まあ、久し振りと言えそうだろう。

「うん」

鯖丸は、うなずいた。

「元気そうで良かった」

「お前は、あんまり元気そうじゃないけど」

「だって、病気だもん、俺」

普段通り軽口をたたいて、マスクをちよつとずらして笑って見せた。

うわ、こいつ強っ。

内心はらはらしていたジョン太は思った。

トリコも、つられて少し笑った。

関西から戻って来てから、トリコが笑っているのを初めて見た。

斑が、手早く準備を整えて、入り口に戻った。

ジョン太と所長も、時計を見て、ドアを出た。

「じゃあ行って来る。後、頼んだぞ」

所長が言った。

「はい、行ってらっしゃい」

そそくさとダウンジャケットを着込んで、膝掛けを腰に巻いた鯖丸は、皆に向かって手を振った。

登場人物紹介（前書き）

割と人数が多いので、人物紹介を入れてみました。
多少のネタバレが含まれます。

（ ）内は魔界名。魔界名、又は本名しか出て来ないキャラクターは、そのまま表記しています。

《 》内はフリガナです。

登場人物紹介

一話 鯖丸 登場人物

武藤玲司^{むとうれいじ}（鯖丸^{さばまる}） ホームレス大学生。貧乏の余り無謀なバイトに応募する。剣道部に在籍。

ジョナサン・T・ウィンチェスター（ジョン太） NMC中四国支所の社員。犬型ハイブリット。魔法は使えないが、素で強い。

所長 NMC中四国支所の所長。

三田村朔美^{みたむらさくみ}（さっちゃん） 依頼者の娘。魔界に家出した為、NMCに搜索と確保を依頼される。

まー君 さっちゃんと連んでいる不良。魔界で女衒の様な事をして
いる。

二話 ジョン太 登場人物

武藤玲司（鯖丸） 貧乏な大学生。バイトだが魔力は異常に高い。

ジョナサン・T・ウィンチェスター（ジョン太） NMC中四国支所の社員。犬型ハイブリット。魔法は使えないが、素で強い。

吉村美津子 通称みっちゃん。ジョン太の嫁。ベテランのナース。名字は違うが、入籍はしているらしい。

吉村拓真 ジョン太の息子。桜下小学校二年四組。達観した小学生。割と美少年。

吉村美織 ジョン太の娘。三歳。椿幼稚園うさぎ組。

所長 NMC中四国支所の所長。元ヤンでレディースの総長だったらしい。

松吉 まつよし 魔界の山間部にある民宿松吉の経営者。縄手山観光協会会長。

ますみちゃん 魔界の村の少女。かまいたちを見たショックで、口が利けなくなっている。

ハザマ 魔界の医者。変な人だが腕はいい。某有名無免許医から名前を取ったと思われるが、医師免許は持っている。

山本弘 鯖丸の友人。ワンゲルに所属。学校より山に居る事が多い。

迫田宗光 さこしたむねみつ 鯖丸の友人。剣道部の同輩。

溝呂木雅之 みぞろぎまさゆき 剣道部の監督で、鯖丸の師匠。

エンマ NMC関西本社社員。火炎系の魔法が得意。

上方ハルオ・ヨシオ かみがた NMC関西本社社員。冷氣系の使い手。本業はお笑い芸人だが、あまり売れてはいない。

斑と平田 まだら NMC関西本社社員。中四国支所から出向という形になっている。スパイダーネットを操る夫婦コンビ。

暁^{あきら} その内出て来るかも知れない予定。

三話 鰐丸 登場人物

武藤玲司（鯖丸） 貧乏な大学生。魔力と食欲が同レベルに高い。
剣道部所属。

ジヨナサン・T・ウィンチェスター（ジョン太） 犬型ハイブリット。
魔法は使えないが、素で強い。元軍人らしい。

暁^{あきら}（鰐丸^{わにまる}） おいしい場面で出て来る鯖丸の別人格。

土方里見^{バラクーダ} NMC中四国支所の所長。元ヤン。色んな意味で男前なおばちゃん。

斉藤さん NMC中四国支所の事務パート。何事にも動じない中高年。

斑と平田 NMC中四国支所社員。本社出向から戻って来た、スパイダーネットを操る夫婦コンビ。

戒能悠木奈^{かいのうゆきな}（サキュバス） 依頼者の娘でターゲット。性的な特殊能力を持つ魔女で、定期的に魔界に家出して、男遊びを繰り返している。

四話 トリコ 登場人物

武藤玲司（鯖丸） 貧乏な大学生。天然ボケ。魔力と食欲が同レベルに高い。意外と性格悪い。

ジョナサン・T・ウィンチェスター（ジョン太） 犬型ハイブリット。魔法は使えないが、素で強い。ツツコミとしての自分に迷いがある。

如月トリコ（トリコ）^{きんぐいんぎ} 政府公認魔道士。ビーストマスターの二つ名を持つ腕利きの魔女。乳はFカップ。

土方里見^{バラクーダ} NMC中四国支所の所長。元ヤン。色んな意味で男前なおばちゃん。

薬師寺祐子（斑） NMC中四国支所社員。夫の平田とコンビを組む魔女。

斉藤さん NMC中四国支所の事務パート。何事にも動じない中高年。

吉村美津子 通称みっちゃん。ジョン太の嫁。ベテランのナース。名字は違うが、入籍はしているらしい。割とケンカっ早い。

吉村拓真 ジョン太の息子。桜下小学校三年二組。得意技はネガティブ絵日記。

吉村美織 ジョン太の娘。四歳。椿幼稚園すもも組。

迫田宗光 鯖丸の友人。剣道部の同輩。普通にいい人。

秋本隆一（トゲ男） 自称鯖丸の永遠のライバル。廣大剣道部二年。すごい男前だが、変な姿に魔法整形している。

めん吉 手打ちうどんめん吉の店主。魔界の情報屋。

雛菊^{ひなぎく} 魔界の観光街にある「くらき屋」の女郎。

溝呂木雅之 剣道部の監督で、鯖丸の師匠。ジョン太とは微妙に友達。

暁^{あきら}（鰐丸） 鯖丸の別人格。ゲイで凶暴だが、頼りになる兄貴。ジョン太に惚れているらしい。

殿 魔界に城を造って住み着いている異界の住人。カラオケ大好き。

如月海斗^{きさらぎかいと}（ハンニバル） 行方不明になっているトリコの夫。

弟子 殿の弟子。

五話 三匹 登場人物

武藤玲司（鯖丸） 貧乏な大学生。最近下ネタ方面に暴走しがちな悪魔超人（下半身が）。この話にR指定が付いたら、たぶんこいつのせいです。

ジョンナサン・T・ウィンチェスター（ジョン太） 犬型ハイブリット。素で強いが魔法は使えない。下ネタに対するツツコミは弱い。

見かけによらずナイーブなおぢちゃん。

如月トリコ（トリコ） 元政府公認魔道士。ビーストマスターの二つ名を持つ腕利きの魔女。鯖丸を悪魔超人に改造してしまった張本人。

如月由樹 きつらぎゆうき トリコと海斗の息子。母親の男遊びもさらっと流す、出来た幼稚園児。

如月海斗 ハンニバル 六年振りに異界から戻って来たトリコの夫。

吉村美津子 通称みっちゃん。ジョン太の嫁。ベテランのナース。自分のダンナを雑種犬だと確信している。

殿 異界から来た魔法使い。弟子との決着を付ける為に魔界に留まっている。趣味はカラオケ。

秋本隆一（トゲ男） 自称ではなく本気で鯖丸のライバルになってしまった、広大剣道部二年の男前。バイトで殿の使いっぱをしている。

迫田宗光 鯖丸の友人。剣道部の同輩。一見普通だが、微妙に変な奴。でもいい人。

山本弘 鯖丸の友人。山が好き。

土方里見 バラクーダ NMC中四国支所の所長。元ヤン。あちこちに色んなコネがある謎の人。

増田耕作（まー君） 魔界で遊んでいる不良少年。殿のカラオケ友

達。ヤンキーのくせにアニカラが得意。

上方ヨシオ NMC関西本社の社員で、お笑い芸人。魔法使いとしては中堅だが、本業ではあまり売れていない。

上方ハルオ NMC関西本社の社員で、お笑い芸人。ヨシオの相方でツツコミ。殿の弟子に重傷を負わされたので、現在入院中。

柱谷真希 エンマ NMC関西本社の社員。火炎系の魔法が得意。

御木元紗理奈 みきもとさりな (サリー) NMC関西本社の社員。エンマのパートナーで元キャバ嬢。自分と接触した人間を消す、ステルス能力の使い手。

佐々原修二 (海老原) NMC関西本社の社長の次に偉い人。マイティーマウスの別名を持つ凄腕の魔法使い。外見は、凄く地味。

浅間龍祥 あさまりゆうしょう (クイックシルバー) 政府公認魔導士関西本部で要職に就いている青年。昔、トリコのパートナーだった。

殿の弟子 異界から来た魔法使い。名前はまだ無い。

暁 (鰐丸) 鯖丸の別人格。ゲイで凶暴だが、根は鯖丸よりいい人かも。

ミツオ 鯖丸の別人格その2。温厚で争い事を好まない常識人。魔界名は考え中。年齢設定は十代半ばの少年。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5178/>

大体三匹ぐらいが斬る!!

2011年3月6日15時40分発行